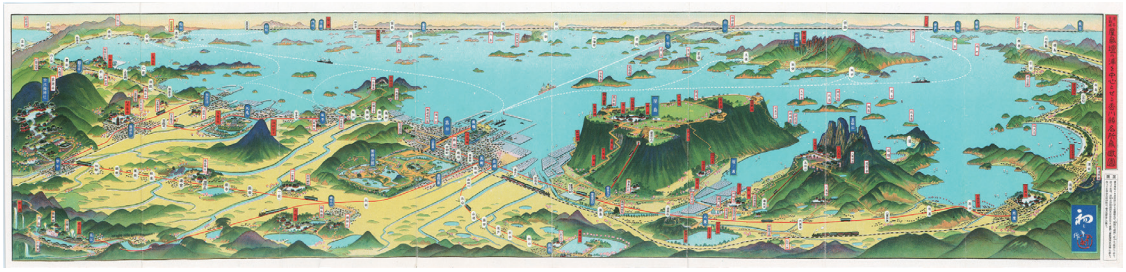
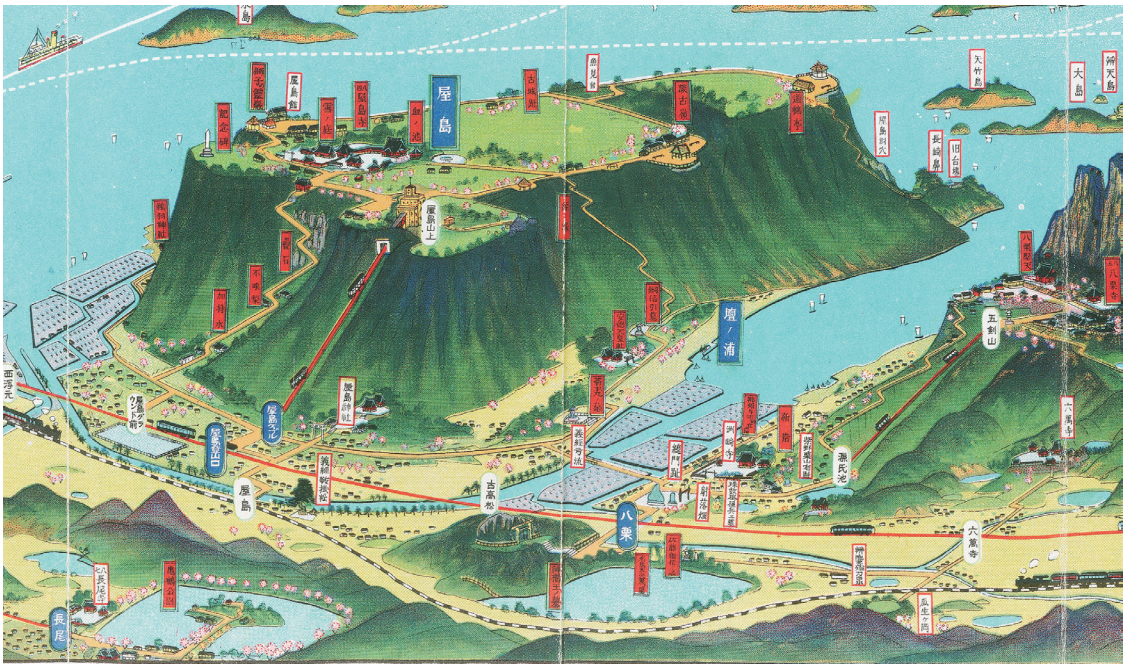
屋島名勝調査報告書

2016 年 3 月

高　　松　　市
京都府公立大学法人

口絵 1 「源平合戦図屏風」
高松市歴史資料館蔵





口絵 2　吉田初三郎『香川県名所交通屋島史蹟鳥瞰図』木村誉扇堂、1930 年
京都府立大学蔵

口絵３　歌川国芳『美盾八競　八嶋夕照』
高松市歴史資料館蔵

口絵４　「海瀬舟路図」（部分）
高松市歴史資料館蔵

口絵 5 『国立公園　屋島の絶勝』（袋）
高松市歴史資料館蔵

口絵 6 『国立公園屋島　讃岐遊覧案内』
（血ノ池茶屋本店森與八）
高松市歴史資料館蔵

口絵 7 『（讃岐屋島名所）〔源平古戦場〕
屋島全景』
京都府立大学蔵

口絵 8 『国立公園屋島百景』
京都府立大学蔵

口絵 9 『（讃岐屋島絶景）屋島談古嶺獅々霊巌ヨリ見タル右ヨリ男木島・
女木島・中央大槌・小槌・左高松方面ヲ望ム』
京都府立大学蔵

口絵 10　海上から眺めた屋島 1（東から）
（撮影日：2015 年 10 月 26 日、撮影：棟田成紹）

口絵 11　海上から眺めた屋島 2（西から）
（撮影日：2015 年 10 月 25 日、撮影：棟田成紹）

屋島名勝調査報告書

例　言

1　本報告書は、高松市が平成 26・27 年度に屋島名勝調査事業として、京都府公立大学法人に委託して実施した屋島の名勝的価値に関する総合的な調査報告書である。

2　屋島名勝調査業務の委託業務期間は下記のとおりである。
　平成 26 年度　平成 26 年 5 月 26 日～平成 27 年 3 月 31 日
　平成 27 年度　平成 27 年 5 月 11 日～平成 28 年 3 月 31 日

3　京都府公立大学法人においては、京都府立大学文学部を中心に調査体制を整備し、調査にあたった。

序

本書は、名勝的価値という観点からみた屋島の位置づけに関する調査成果を報告するものである。

調査は平成 26 年度・27 年度の 2 年間で実施され、以下のような調査体制で資料・文献収集、現地調査、資料分析がなされた。調査メンバーは、各自の分担に従って報告書執筆にも従事した。

上杉和央（代表）	京都府立大学文学部・准教授
東　　昇	京都府立大学文学部・准教授
橘　　セツ	神戸山手大学現代社会学部・教授
川口成人	京都府立大学大学院文学研究科・博士後期課程
島本多敬	同上
井上真美	京都府立大学大学院文学研究科・博士前期課程
川崎雄一郎	同上
宮下　遥	同上
棟田成紹	同上
百瀬ちどり	同上
稲穂将士	同上
山﨑祐紀子	同上
上中理帆	京都府立大学文学部・学部生
佐々木夏妃	（平成 26 年度）京都大学大学院文学研究科・博士前期課程
長谷川奨悟	（平成 26 年度）日本学術振興会特別研究員（PD）
松村祥志	（平成 26 年度）京都府立大学大学院文学研究科・博士前期課程

また、調査に際し、以下の機関に資料閲覧等でお世話になった。記して感謝申し上げる。

愛媛県立図書館、愛媛県歴史文化博物館、王立園芸協会リンドレー図書館、岡山県立図書館、香川県立図書館、香川県立ミュージアム、香川県立文書館、香川大学瀬戸内圏研究センター、香川大学附属図書館、九州大学附属図書館、瀬戸内海歴史民俗資料館、東京大学史料編纂所
（50 音順）

なお周知のように、屋島は記念物のなかの史跡および天然記念物の指定をすでに受けている。天然記念物としての価値については、近年、高松市・香川大学天然記念物屋島調査団編『天然記念物屋島調査報告書』（高松市、2014）が公表された。そこに掲載されている植生の状況や地質のあり方、そして何よりも山容の形成過程に関する最新の調査成果については、本報告書で取り上げる名勝的価値の基盤であると同時に、名勝における自然的な観点からの評価に重なるものである。よって、これら自然的な観点からの評価については先の報告書の成果にゆだね、本書では人文的な観点からの評価を中心に、屋島の名勝的価値について、検討をおこなうことにした。

目　次

口絵
序

総論　屋島像の展開　5

〈資料調査編〉

1　中世史料からみた屋島・屋島合戦イメージ　12
2　屋島寺と遍路　―創建から近世の屋島寺―　24
3　近世・近代の文芸にみる屋島・源平合戦　32
4　近世における屋島の顕彰　43
5　中近世の絵画資料にみえる屋島像　47
6　近世地誌・名所案内記にみえる屋島表現　62
7　近世の紀行文・四国遍路案内記にみる屋島　74
8　絵図・地図に描かれた屋島　85
9　明治前期の屋島、官林と塩田　101
10　近代西欧のまなざしからみた屋島と瀬戸内海　103
11　ガイドブック・リーフレットにみる屋島像　119
12　絵葉書における屋島表現　126
13　屋島点景　―モチーフの「今」はむかし―　133

〈現地調査編〉

14　屋島合戦跡の石造物　149

〈資料編〉

資料編１　歴史資料一覧　181
資料編２　文献一覧　277

※１　〈資料調査編〉の各章で用いる資料に付された番号は、〈資料編１〉の歴史資料一覧の番号である。
※２　〈資料調査編〉の各章においては、主要参考文献のみを掲げた。関連文献については〈資料編２〉の文献一覧を参照いただきたい。

総論　屋島像の展開

文化財としての名勝

文化財保護法が規定する記念物のひとつに名勝がある。それは「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は鑑賞上価値の高いもの」（同法第２条第１項第４号）であり、より具体的な基準については「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指摘基準」（昭和 26 年（1951））に次のように述べられている。

名勝

左に掲げるもののうち我が国のすぐれた国土美として欠くことのできないものであって、その自然的なものにおいては、風致景観の優秀なもの、名所的あるいは学術的価値の高いもの、また人文的なものにおいては、芸術的あるいは学術的価値の高いもの

一　公園、庭園
二　橋梁、築堤
三　花樹、花草、紅葉、緑樹などの叢生する場所
四　鳥獣、魚虫などの棲息する場所
五　岩石、洞穴
六　峡谷、瀑布、渓流、深淵
七　湖沼、湿原、浮島、湧泉
八　砂丘、砂嘴、海浜、島嶼
九　火山、温泉
十　山岳、丘陵、高原、平原、河川
十一　眺望地点

名勝的価値を備えているかを判断する基準としては、まずすぐれた国土美を有するかどうかが問われる。そのうえで自然的な観点としては①風致景観、②名所的価値、③学術的価値のいずれかにおける評価、人文的な観点としては④芸術的価値、⑤学術的価値のいずれかにおける評価が高いことが求められている。屋島については自然的な観点、人文的な観点が、いずれも重要となる。よって①〜⑤をまとめて A 景観美としての屋島、B 歴史文化の源泉としての屋島、C 学術的対象としての屋島、という点での価値の高低を確認していく必要がある。このうち、C については A・B それぞれに関する学術的関心の高さとその持続が問われることになるが、この点については本書に付した「文献一覧」をみれば、常に一定の学術的関心が集まってきたことを確認することができるだろう。その内容は多岐にわたるが、それらをふまえた調査成果については本書の各章で触

れられている。

また当該地の特徴によって 11 の分類が示されているが、文化庁の資料などをみると、実体に即して細分した 19 種類に分類しているようである。その細分のうち、屋島に当てはまるのは「島嶼」「山岳」「展望地点」であろう。

今回の調査成果にもとづけば、この３つの要素のうち、「島嶼」は上記 B と、「山岳」は A、そして「展望地点」は A・B に主に関わるものと言えそうである。よって、以下では、このような関係性を意識しつつ、それぞれの側面から屋島の特徴を簡潔に述べていくことにしたい。ただし、そのような具体的な記述の前に、名勝の定義にもみえた「名所」という語について、その意味を確認することから始めたい。

Ⅰ　名所―共有された地域イメージ

近世地誌である『摂陽群談』（元禄 14 年（1701）刊行）では、名所が「歌名所」と「俗名所」とに区分されて掲載されている（上杉 2004）。「歌名所」とは和歌に詠まれるべき地名、すなわち「歌枕」として知られた場所であり、古代の和歌文化のなかで誕生・定着していったものである。それに対し、「俗名所」は和歌には依らないものの、有名な出来事が起きたことで知られる場所、もしくは物語等の舞台となった場所を指している。もしくは過去の事跡ではなく、現在の状況や事がらによって有名となっている場所であっても「俗名所」となる。「俗名所」という意味での「名所」の用例も中世には確認でき、近世以降の新しい用法というわけではない。いずれにしても、中近世における「名所」には、このような２つの名所観があった。

注意したいのは、「歌名所」も「俗名所」も、その場所イメージが共有されている必要があるという点である。和歌文化に即せば、たとえ「歌枕」を詠み込んだ歌を作ったとしても、その地名に付与された共有イメージをまったく無視した内容であった場合、それは個人ないし歌の評価を貶めてしまう結果となる。

また、これに関わって重要になるのが、「歌名所」も「俗名所」も、現地を訪れないと堪能できないわけでは決してないという点である。むしろ「名所」たらしめている根拠としての和歌や出来事・事がらを深く理解している方が重要であり、それによって場所のイメージが豊かになる（上杉 2015）。

このような特徴を持つために、歴史文化を源泉として創出された共有の場所イメージは、時として、現地の風景とは大きく乖離することがあった。旅が一般的な文化として定着する近世以前においては、現地を知らない者が大半を占めており、乖離はなおさらであった。近世に入り、旅行文化が成熟するにつれ、そのような乖離は徐々に小さくなる――言い換えれば、現地の風景もまた共有イメージの源泉として利用されていくようになる――が、それまでに流布したイメージを用いた文化芸術活動が継続されることもあり、たとえ現地の情報が伝えられても、その溝が完全に埋まることはなかった。その解消は、少なくとも写真技術やマスメディアの発達を待たねばならない。

逆に言えば、近世においても乖離が残る場所ほど、歴史文化を源泉としたイメージの再生産と共有が続いている場所ということになる。

II 「島」としての屋島

２つの名所観という点からみれば、屋島は「俗名所」としての名所であった。（俗）名所たる屋島像を下支えする歴史・文化的なイメージの源泉の候補としては、屋嶋城、屋島寺、屋島合戦が挙げられるだろうが、圧倒的に大きな影響を持ったのは屋島合戦である。屋嶋城は『日本書紀』に記載され、歴史的にはもっとも古い事跡となるが、その後、人々の記憶から忘れられていく。また、本書第２章に示される通り、屋島寺については現在、鑑真や空海などの登場する寺伝がよく知られるが、近世初期には荒廃していたようであり、少なくとも四国八十八所巡礼が盛んになる時代以前に、屋島イメージの源泉として縁起や寺伝が地域外まで広く伝わっていた形跡は乏しい。

それに対して、屋島合戦をめぐっては豊富な文化的営為がなされてきた。ただ本書第１章で指摘されているように、史実としての屋島合戦については同時代資料が少なく、その詳細は分かっていない。巷に流布しているのは、そのような史実としての合戦ではなく、物語化された合戦譚であり、その起源は「平家物語」となる。「平家物語」のなかで、屋島合戦は源平合戦終盤のハイライトとして大きく取り上げられ、佐藤継信討死、那須与一の扇の的、源義経の弓流、藤原景清の錣引など、豊富なエピソードが語り継がれていくようになった。これらのエピソードの中で同時代資料にも登場するのは佐藤継信が合戦で命を落としたというくらいであり、その他についてはその真偽を確かめる術はない。

重要なのは、そのような史実としての評価ではなく、「平家物語」あるいはそれをもとにして生まれた諸芸能・芸術作品を通じて、人々の中に「歴史に残る名勝負」として屋島合戦が刻まれていったことである。実際、長編の「平家物語」のなかから、屋島合戦の諸場面を抜き出して能や歌舞伎といった芸能、小説などの文芸、合戦図屏風や錦絵といった絵画芸術に展開した例は実に多い（本書第１・３・５章）。また、屋島を訪れている旅人の紀行文などにも、必ずと言ってよいほど屋島合戦の話題が盛り込まれている（本書第７章）。源平合戦図屏風が一双で描かれる場合、そこで取り上げられる場面としては一の谷合戦と屋島合戦が抜きんでて多いが（本書第５章）、それだけ「絵になる」エピソードがたくさんあったということかもしれない。

そのようなエピソードの１つに義経率いる源氏が高松・牟礼側から屋島へと渡る場面がある。高松・牟礼と屋島との間にある海／河（現・相引川）に浅い部分があることを知って、馬で渡っていくというものである。「平家物語」やそこから派生した文化の享受者たちは、このエピソードによって、屋島の「島」性を理解することになった。とりわけ、屋島合戦の全体が描かれる絵画芸術などに採用されるとき、視覚イメージをも伴って「島」であることが意識（ないし無意識的に享受）される。これに関して、必ずしも屋島合戦を主題とはしていない近世絵図においても、俯瞰的な構図で屋島が表現される場合、相引川で隔された屋島をとらえ、かつ東側からの視点で山を描き、そこに屋島合戦古跡の情報を添えるものが多くなる（本書第８章）。

注目したいのは、このような「平家物語」およびそこからの派生文化において、屋島は「八嶋」（「八島」）と表現されることが多く、「屋嶋」（「屋島」）いう表現の方がむしろ少ないという点である。現実の山容を知る者にとっては、「屋島」という漢字表記から「屋根の形をしている山だから屋島」という理解をしてしまいがちだが、本来、これは「屋島『山』」と補わないといけないものである。独特の山容と近世以降の干拓の歴史によって、我々は屋島の「島」性に気が付くことが困難となっている。しかし、現地の理解からある程度自由であった近世の「平家物語」系文化の享受者たちは、「八嶋」（「八島」）とそこに付与されるイメージから、適切に「島」性を受け取ることができたのである。

もちろん、その代償としてとでも言おうか、これらの者たちは屋島の「山」性について十分に理解することができないままであった。実際、屋島合戦を描いた近世絵画のなかで、屋島の山容を意識して描いた作品は、地元の者が携わったことが明らかな作品を除けば、一点もない。「平家物語」系の作品によって共有された屋島イメージは、海で活躍した与一らのエピソードに大きく拘束された「島」(「八嶋」)であった。

この点で、松平家の初代高松藩主である松平頼重の事績はこのようなイメージを継続させたものとして大きな意味を持つ(本書第 4 章、現地調査編)。頼重は高松藩主就任直後に、屋島合戦関連古跡の整備に乗り出し、佐藤継信の墓・碑などを建立する。そして生駒期に干拓で埋め立てられてしまった相引川についても、旧跡の保存という点から再び水を入れ、屋島を「島」として復活させたのである。近世のガイドブックには、屋島を語る記述の中で、これら頼重の行為についても触れられることが多く、屋島合戦の「義」や「忠」といった道徳的側面に加え、藩主頼重の「恩」についても屋島イメージに追加されることになった(本書第 6 章)。

さらに頼重は讃岐国八景を歌に詠む中で、屋島を「秋月」として歌った。

八嶋秋月
もろともにあはれはそらにしられけり
屋しまにのこる秋のよの月

ここで読み込まれた源平合戦への追慕と秋・夜・月というモチーフは、その後の屋島を詠んだ文芸作品のなかで共通して取り上げられるようになる(本書第 3 章)。屋島の詠歌ではこれらのモチーフを歌い込むものというイメージが共有されているという点で、屋島は「歌名所」ともなったのである。

Ⅲ 「山」としての屋島

現在、「屋島」と言えば「山」としてイメージされることが多い。実際、近世後期に谷文晁によって日本の名山がまとめられた『日本名山図会』において、屋島山も取り上げられており(本書第 5 章)、その時点からすでに名の知れた山であったことが知られる。

ただし、『日本名山図会』で取り上げられるのは南側からみた屋島、すなわち「屋島富士」とも呼ばれる三角形の山容となる方向からの屋島である。南側からの山容が絵画資料で取り上げられることは少数であり、谷文晁の山に対する個人的な志向性が反映している可能性がある。

全体的にみれば、絵画資料に描かれた屋島の山容としては、西側から眺めた構図が圧倒的に多い。そしてそれは屋島だけを描くのではなく、手前に高松城下や海、船、松といった諸要素を配置し、画面奥に台形の屋島が優美に横たわる構図で描かれることがほとんどである。このような傾向は近現代のガイドブックやリーフレットの表紙などでも採用されており、「屋島の見方、描き方」の作法として定着していた(本書第 5・13 章)。屋島合戦に彩られた「東側からの見方」という点と対比的にとらえれば、「西側からの見方」が臨海都市高松を含みこむピクチャレスクなものであったということもできる。

ピクチャレスクなイメージの中で屋島がとらえられ、それが芸術作品のモチーフとして本格的に利用されるようになるのは、近世後半になってからである。それ以前においても、たとえば『高松城下図屏風』に屋島の山容が描き込まれるといったことはあったが、屋島を主題とした作品ということになれば、その隆盛はやはり近世後半以降となる。今

回の調査のなかでみると、絵画の分野では谷文晁の「山水図・七絶詩」が早く（本書第5章）、詩歌の分野においては、明確に山の形が謳われることは少ないが、船中から屋島を詠んだ細川林谷の漢詩に「元来屋島是家山」とあるのが早いだろうか（本書第3章）。

そして、このような動きは、近代以降により強く表れるようになる。その遠因として西洋人が「瀬戸内海」を発見したことがある（本書第10章）。近代における西洋人の記録に屋島そのものを特記したものは少ないが、瀬戸内海を日本の美の象徴や世界的に見てもすぐれた景勝地であると、その景観美を絶賛するようになった。それまでの日本人には「瀬戸内」としてあたり前の景観でしかなかった世界が、自然美を愛でるピクチャレスクな「瀬戸内海」として創造されたのである。

そして、このような自然美の重視は、昭和2年（1927）の日本新八景の選定や昭和9年の国立公園の指定などにもつながっていく。屋島は日本八景には漏れたものの、日本二十五勝の1つとなった。また周知のように第1回国立公園指定地の1つとなっていく。近代のガイドブック・リーフレットなどをみていくと、この時期あたりから、屋島の自然美が強調される文言が多数現れる（本書第11章）。特に屋島は小豆島と並んで瀬戸内海国立公園の中心的な存在だったこともあり、「内海第一の勝地」などと謳われていく。絵葉書においても、複数枚の絵葉書をセットにして販売する際に「国立公園　屋島の景観」「国立公園　屋島の絶勝」といったタイトルがつけられ、屋島を中心とした景観美が盛んに販売されていくことになる（本書第12章）。

とはいえ、このような西側からの景観美が東側からの歴史認識を圧倒し、屋島合戦イメージが失われてしまったわけではない。ガイドブックやリーフレットにおいて、屋島合戦の古跡は詳細に解説され続け、また絵葉書のモチーフにも屋島合戦は重要な素材として採用され続ける（本書第11・12章）。なかには、西側のピクチャレスクなイメージの中に那須与一の図像などが配されるなど、地理的には錯誤しているデザインも作られていくが（本書第13章）、屋島の歴史イメージがそのような景観美的な見方に加味されているという点で興味深いものである。いずれにしても、歴史物語からの屋島像と景観美からの屋島像は、基本的に東側と西側といったある種の地理的分担をしつつも、共存しながら屋島全体のイメージを高めていくことになった。

Ⅳ　「展望地点」としての屋島

東側＝歴史、西側＝景観といったイメージの源泉に加えて重要となるのが、屋島山上からの風景である。屋島はその立地的特性と山の地形的特性から、標高はそれほど高いわけではないが、広範囲の眺望を得ることができる山となっている。

歴史上、最初に注目されたのは北側――海上側――への展望である。近年、発掘調査によって、その全体像の一部が明らかになりつつある屋嶋城は、白村江の戦い後、唐・新羅側に対する備えとして日本海・瀬戸内海沿岸に造られていった山城の1つである。その立地をみると、海路を進んでくるであろう唐・新羅軍を強く意識したものとなっており、海への眺望が開けた場所が選ばれている。屋嶋城の場合、現在、復元整備がなされている城門跡からは現在よりも内陸まで広がっていた高松湾を、そして北嶺付近からは備讃瀬戸を、広く見渡すことができた。

その後、山上には屋島寺が建立され、信仰の場となっていくが、修行者に加えて一般の者たちが屋島山上に頻繁に上がるようになっていくのは、近世の四国遍路の成立、もしくは旅行文化全般の隆盛以降となる（本書第2章）。多くの参詣者が屋島寺を訪れ、その次の八栗寺に向かう途中で屋島合戦の古跡を巡っていく。山上から屋島合戦古跡全体を眺めての感想などは記されることはなかったが（本書第7章）、先にも挙げた谷文

晁の『日本名山図会』の五剣山は、明らかに屋島の山上ないし山腹から東側を捉えた構図となっており、展望地点としての屋島という側面が確認できる（本書第 5 章）。

展望地点としての屋島イメージが、本格的に取り上げられていくのは、パノラマ的な景観美が社会の中に浸透していく近代になってからである。なかでも山上からのパノラマを映し出す絵葉書は、その象徴的な作品と言ってよいだろう（本書第 12 章）。そこでは東側のパノラマと西側のパノラマ、そして北側のパノラマが作られた。

東側は「談古嶺」からの眺めであり、屋島合戦の各エピソードの古跡が一望された写真である。「談古嶺」という名称がそもそも、屋島合戦談義をする場所という意味であり、村雲尼公（皇族による最初の登山でもあった）によって明治 30 年（1897）に命名された。

西側は「獅子の霊巌」からの眺めである。眼下には香川県を代表する産業であった製塩業の塩田があり、その先には高松市街地と築港を中心とした臨海部、そして穏やかな瀬戸内海が広がる。さまざまな点で海を活かした産業を中心に発展する高松を展望する場所、それが山上西側である。

そして北側は「遊鶴亭」からの眺めである。ここからは多島海とも言われる瀬戸内海の自然美が一望でき、大正 11 年（1922）に登山した摂政宮（後・昭和天皇）がこの地点からの眺めを特に賞賛、さらに大正 12 年には良子女王（後・昭和天皇皇后）も同地を訪れ、この地を「遊鶴亭」と命名している。国立公園の候補地として調査される中にあっても「屋島の溶岩台地は自から見晴台をなし内海の明媚雄大なる風光を展望すべき絶好の地点となって居る」（中越 1929、13 頁）とあり、屋島はその溶岩台地としての特徴に加えて、展望地点として優れていることが解説されている。

このように歴史、産業、自然といった様々な要素が展望できる場所、それが屋島であった。これらの要素は、塩田景観など今では見えなくなったものも一部あるが、基本的には現在もなお屋島から眺めることができるものであり、展望地点としての屋島の価値は変わっていない。

V　名勝的価値からみた屋島像

以上、屋島の名勝的価値を探るにあたり、「島」「山」「展望地点」という視点から、A 景観美としての屋島、B 歴史文化の源泉としての屋島について概観した。結果として浮かび上がったのは、屋島の持つ様々な相貌である。

「島」もしくは B 歴史文化の源泉という点については、当初は実態の屋島とは遊離する中で「名所」として成立したこと、その後、旅行文化や視覚芸術の展開の中で、おもに東側からの視点と結びつく中で屋島合戦が捉えられていったことなどを明らかにした。「山」もしくは A 景観美という点についてみれば、台形ないし「屋根のかたち」と形容される独特のメサ地形が生み出す山容美は、近世になって高松城下との景観的連続性の中で強く意識され始め、おもに西側からの視点から捉えられて描写されるようになったこと、さらに近代に瀬戸内海の自然美が発見される中で賞賛されるようになったことを指摘した。また南側からの「屋島富士」といった三角形の山容に視点が当てられていたことも確認した。そして「展望地点」という点についてみれば、東側＝歴史文化、西側＝都市・産業の発展、北側＝自然美、といった要素を眺める場所としての屋島が位置づけられていたことをとらえた。

このような成果を簡略に示すと図のようになるだろうか。名勝的価値という点からみた屋島の特徴はその多様性にある。中世以来の俗名所、近世後半以降の山容美、そして近代のピクチャレスクな自然美といった、各時代の象徴的な景観のまなざしが、屋島を眺める方向と緩やかに結びついて積層ないし併存していること、そして眺める対象のみならず、屋島自体が歴史の舞台や都市発展、自然美を眺める絶好の地点としてもとらえ

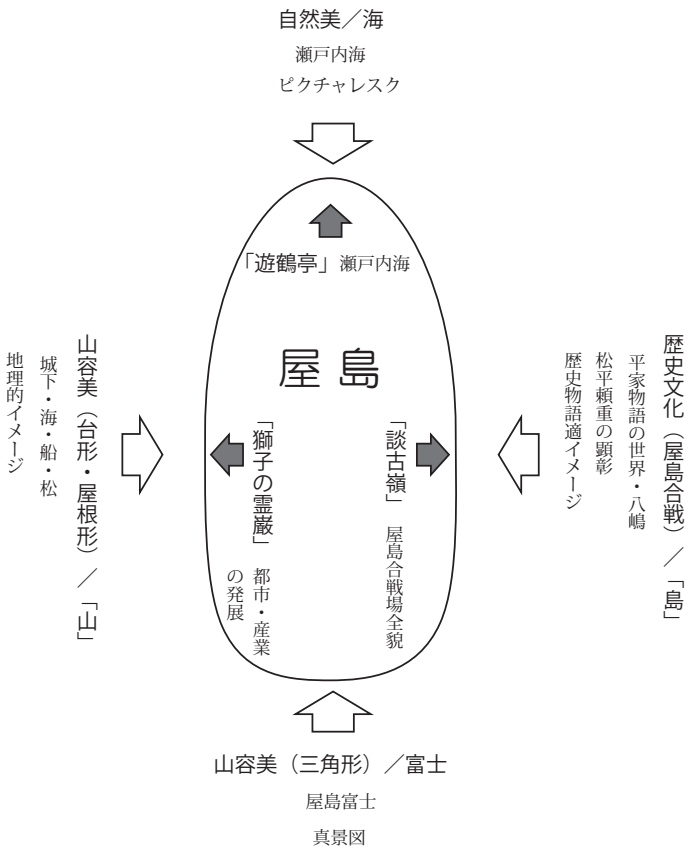


図　屋島の名勝的価値の多様性

られてきたこと、こういった多様な相貌を併せ持つ場所は、日本のなかでもそう多くはないだろう。

本章は、本書各章でとらえられた成果を総合したものであり、概略を示したに過ぎない。また、本調査はあくまでも基礎的な段階のものであり、さらなる追究が不可欠であることは言うまでもない。しかしながら、その屋島の備える基本的な点は指摘することができたのではないかと思う。この成果が高松市のシンボル、屋島の保存･活用に対して、少しでも寄与できるのであれば、望外の喜びである。

〈引用文献〉

上杉和央 2004「17 世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」、地理学評論 77-9
上杉和央 2015「想像世界の歴史地理」、竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房
中越延豊 1929「国立公園候補地概観（四）〔小豆島及屋嶋〕」、国立公園 1-7

※本書各章で取り上げられた各文献を参考としているが、巻末の文献一覧にあるものは省略し、ここでは文献一覧にないもの、もしくは引用したもののみを掲げた。文献一覧を合わせて確認いただきたい。

（担当：上杉和央）

1　中世史料からみた屋島・屋島合戦イメージ

はじめに

現在に至るまで、屋島のイメージを規定している歴史上の事件が、いわゆる源平合戦における「屋島合戦」であることは衆目の一致するところであろう。元暦２年（1185）２月、源義経を大将とする源氏軍が、平氏が都落ち後に拠点を構えていた屋島を奇襲し、勝利を収めたというのが、合戦の概要である。義経郎等佐藤継信の壮絶な最期、那須与一の扇の的、藤原景清の錣引、義経の弓流などのエピソードが知られ、現在も屋島周辺には古戦場の伝説地が多く残されている。

ところが、中世の屋島で起こった出来事、様子を知ることができる確実な史料は、源平合戦期を含めても、さほど多く残されているわけではない。それでは、現在知られる屋島・屋島合戦のイメージはどういった形で形成され、広く受容され、展開していったのであろうか。言うまでもなくそこには、屋島合戦を含む源平合戦を描いた「平家物語」と、それを題材とした絵画・芸能・文芸の広がりが大きな役割を果たしている。そして、屋島合戦が語られ、描かれ、演じられていく過程は、断片的ながら中世の文献史料からも見出すことができるのである。

さて、「平家物語」とそれを題材とする諸作品については、文献史学・美術史・芸能史・国文学・民俗学などでそれぞれ重厚な研究史を有し、屋島合戦について論じたものも多く存在する[1]。本章ではそれらの先学の成果に学びながら、中世における屋島・屋島合戦イメージの形成と展開について述べていきたい。

以下、本章の構成を述べる。まず「Ⅰ　中世史料からみた屋島の概観」では、屋島合戦を含め、中世の屋島で起こった出来事について概観する。次に、「Ⅱ　『平家物語』と屋島・屋島合戦」では「平家物語」諸本における屋島の描かれ方についてみる。「Ⅲ　文献史料にみる屋島関係の絵画・漢詩」では屋島を題材とした絵画・漢詩について言及する。「Ⅳ　中世芸能にみる屋島」では屋島合戦を題材とした能をはじめとする芸能について述べる。「Ⅴ　伝承の中の屋島合戦」では、佐藤継信・那須与一といった屋島合戦で活躍した武将に関する説話・伝承を紹介する。

Ⅰ　中世史料からみた屋島の概観

本節では、中世史料からみえる屋島について概観する[2]。

「はじめに」で述べたように、屋島合戦は現在の屋島イメージを規定する一大事件だったが、このことは同時代史料にどのように記録されているのであろうか。まず都落ちした平氏たちが屋島に移ったことについては、京都の公家である藤原経房（1142-1200）の日記「吉記」から確認することができる。

【史料 1】「吉記」（A002）寿永２年（1183）
11 月 4 日条

四日、甲午、天霽（中略）
平氏在八島逐出鎮西之由注進事
或説云、平氏在讃岐八島、九国輩菊池已下為追討進已出文司関了云々、又安芸志芳脚力到来云、平氏十月廿日一定被逐出鎮西了、事已必然也、可哀々々、又出家人有其数云々、

平氏が「讃岐八島」にあり、「九国輩菊池

已下」がその追討のため、門司関へ出発したことが記されている。「或説云」とある通り、経房は伝聞によってこの情報を入手したのであろう。

次に、九条兼実（1149-1207）の日記「玉葉」の記事にも、平氏が屋島に移ったことを示す記事がある。

【史料 2】「玉葉」（A003）寿永 3 年（1184）2 月 19 日条

十九日、戊寅、天晴（中略）、
此日、中御門大納言被来、伝聞、平氏帰住讃岐八島、其勢三千騎許云々、被渡之首中、於教経者一定現存云々、又維盛卿三十艘許相卒指南海去了云々、又聞、資盛貞能等、為豊後住人等乍生被取了云々、此説、日来雖風聞、人不信受之処、事已実説云々、又聞、重衡卿万事被尋問之間、下官可知天下之由、平氏議定之間令申云々、仍被覈問云、若有通音信事歟云々、申云、其條一切不然、只依為傍若無人、当其仁云々者、

伝聞として、平氏が「讃岐八島」に帰住したとあり、三千騎の軍勢があったとしている。そのほか、平氏一門の動向についての多数の伝聞が記されている。

このように平氏たちが讃岐国屋島に移ったことは、京都の公家たちも伝聞という形で情報を得ていたことがわかる。

そして、元暦 2 年（1185）年 2 月に源義経を大将とする源氏軍が屋島を攻撃する。この屋島合戦が記録されているのは、「玉葉」である。

【史料 3】「玉葉」元暦 2 年 3 月 4 日条

四日、丁亥、天晴、隆職注送追討之間事、自義経許申上状云々、去月十六日解纜、十七日着阿波国、十八日寄屋島、追落凶党了、然而未伐取平家云々、

屋島合戦を終えた義経は朝廷に奏上をおこなっており、その内容が記されている。2 月 16 日に解纜（＝出帆の意）し、同 17 日に阿波国に到着、18 日に屋島にて、凶党を追い落したが、未だ平家は討ち取っていないという。「玉葉」においては、屋島合戦についての記事はこれだけであり、「はじめに」で触れたような多数のエピソードは全く記録されていない。

続いて、鎌倉幕府が編纂した歴史書である「吾妻鑑」を確認する。ここでは、屋島合戦はどのように描かれているだろうか。まず「吾妻鑑」元暦元年（1184）9 月 19 日条には、一の谷合戦後、源氏方の先陣となった橘公業という人物が注進した「平家当国屋島落付御坐捨参源氏御方奉参京都候御家人交名事」として、源氏方についた讃岐国の 14 人の御家人の名前が載せられている。

そして、屋島合戦に関係した記事が続く。以下に列挙しよう。

【史料 4】「吾妻鑑」（A004）元暦 2 年 2 月 16 日・18 日・19 日・22 日・3 月 8 日条

十六日庚午、関東軍兵為追討平氏赴讃岐国、廷尉義経為先陣、今日酉剋解纜、大蔵卿泰経朝臣称可見彼行粧、自昨日到尉旅館、而卿諫云、泰経雖不知兵法、推量之所覃、為大将軍者、未必競一陣歟、先可遣次将哉者、廷尉云、殊有存念、於一陣欲奔命云々、則以進発、尤可謂精兵歟、平家者結陣於両所、前内府以讃岐国屋嶋為城郭、新中納言知盛相具九国官兵、固門司関、以彦嶋定営、相待追討使云々、

十八日壬申、廷尉昨日自渡部欲渡海之処、暴風俄起、舟船多破損、士卒船等一艘而不解纜、爰廷尉云、朝敵追討使暫時逗留、可有其恐、不可顧風波之難云々、仍丑剋、先出船五艘、卯剋着阿波国椿浦〈常行程三ヶ日也、〉則率百五十余騎上陸、召当国住人近藤七親家為仕承、発向屋嶋、於路次桂浦、攻櫻庭介良遠〈散位成良弟〉之処、良遠辞城逐電云々、

十九日癸酉、（中略）又廷尉義経、昨日終夜越阿波国与讃岐之境中山、今日辰剋、到于屋嶋内裏之向浦、焼払牟礼、高松民屋、依之、先帝令出内裏御、前内府又相率一族等、浮海上、廷尉〈著赤地錦直垂、紅下濃鎧、駕黒馬、〉相具田代冠者信綱、金子十郎家忠、同余一近則、伊勢三郎能盛等、馳

向汀、平家又棹船、互発矢石、此間、佐藤三郎兵衛尉継信、同四郎兵衛尉忠信、後藤兵衛尉実基、同養子新兵衛尉基清等、焼失内裏并内府休幕以下舎屋、黒煙聳天、白日蔽光、于時越中二郎兵衛尉盛継、上総五郎兵衛尉忠光〈平氏家人、〉等、下自船而陣宮門前、合戦之間、廷尉家人継信被射取畢、廷尉太悲歎、屈一口衲衣葬千株松本、以秘蔵名馬〈号大夫黒、元院御厩御馬也、行幸供奉時、自仙洞給之、毎向戦場駕之、〉賜件僧、是撫戦士之計也、莫不美談云々、同日、住吉神主津守長盛参洛、経奏聞俑、去十六日、当社行恒例御神楽之間、及子剋、鳴鏑出自第三神殿、指西方行云々、此間奉仕追討御祈、霊験掲焉者歟、

廿二日丙子、梶原平三景時以下東士、以百四十余艘、着屋島磯云、

八日辛卯、源廷尉義経飛脚自西国参着、申云、去月十七日、僅率百五十騎、凌暴風、自渡部解纜、翌日卯剋、着于阿波国、則遂合戦、平家従兵或被誅、或逃亡、仍十九日、廷尉被向屋嶋訖、此使不待其左右馳参、而於播磨国顧後之処、屋嶋方黒煙聳天、合戦已畢、内裏以下焼亡無其疑云々、

「玉葉」に比べると、非常に多くの情報が載せられている。16 日条では解纜が記され、18 日条では阿波への到着までが述べられる。ここで注目しておきたいのが、16 日条にみえる「前内府以讃岐国屋嶋為城郭」という記述である。これによれば、前内府平宗盛が屋島を「城郭」としていたことがわかる。後で触れるが、「延慶本平家物語」（A006）に「屋島ノ浦ハ吉城郭ニテ候ナリ」という記述があることと関わって興味深い。

2 月 19 日条では、屋島合戦当日の様子が記されている。義経が屋島の対岸に位置する牟礼高松の民家を焼き払ったことや、戦いの最中に内裏が焼失したこと、源氏軍と平氏軍のメンバーについても確認することができる。中でも注目したいのが、佐藤継信の戦死が記事にみえることである。これによれば、義経は戦死を大いに哀しんで千株松のもとに葬り、院から下賜され、常に戦場に乗っていた秘蔵の名馬大夫黒を「件僧」に賜ったという。以下、22 日条では、梶原景時が屋島に到着したことが記され、3 月 8 日条では、義経が遣わした飛脚が申した内容が述べられている。飛脚は播磨国で後を顧みた際、屋島方には黒煙が天にそびえており、合戦はすでに終わって内裏以下が焼亡したことは疑いないという。

屋島合戦前後の史料については、「玉葉」「吉記」といった公家の日記に記述がみられるものの、非常に簡潔である[3]。一方「吾妻鑑」は、屋島合戦前後を詳細に記しており、特に平家方を屋島が城郭としたこと、佐藤継信の最期についても言及されていることは注目される。しかしながら、その継信の最期を除くと、現在よく知られているエピソードについては全く記録されていないのである。こうしたエピソードの広まりについては次節以降で論じることとし、屋島合戦以後の屋島についてもみていきたい。

屋島南嶺に位置する屋島寺は、慶長 16 年（1611）の「屋島寺龍厳勧進帳」（A060）によると鑑真が創建し、弘仁年間に空海が千手観音を作り、曼荼羅堂などを建てたとされている。この屋島寺に現在も残る梵鐘（国指定重要文化財、A005）には、貞応 2 年（1223）の銘文で「讃岐国屋島峰千光院」とあり、鎌倉時代には千光院と呼ばれていたことがわかる。屋島寺に関していえば、「西大寺末寺帳」（A015）に「屋島普賢寺」とあり、明徳 2 年（1391）段階では大和国西大寺の末寺だったことが知られる。

建武 2 年（1335）には、屋島は再び戦場となっている。軍記物語ではあるが、同時代に編纂された「太平記」に次のような叙述がみえる。

【史料 5】「太平記」（A013）巻 14「諸国朝敵蜂起事」

カヽル処ニ、十二月十日、讃岐ヨリ高松三郎頼重早馬ヲ立テ京都へ申ケルハ、「足利ヲ一族細川卿律師定禅、去月二十六日当国鷺田庄ニ於テ旗ヲ揚ル処ニ、詫間・香西コレニ與シテ、則三百余騎ニ及ブ、是ニ依テ、頼重時剋ヲ廻ラサズ、退治セシメン為ニ、先ツ矢嶋ノ麓ニ打寄テ国中ノ勢ヲ催ス処ニ、定禅遮テ夜討ヲ致セシ間、頼重等身命ヲ捨

テ防戦フト雖モ、属スル所ノ国勢忽ニ翻テ剰へ御方ヲ射ル間、頼重ガ老父、并ニ一族十四人・郎等三十余人、其場ニ於テ討死仕畢、一陣遂ニ彼ガ為ニ破ラレシ後、藤橘両家・坂東・坂西ノ者共残ル所ナク定禅ニ属スル間、其勢已及三千余騎ニ、近日宇多津ニ於テ兵船ヲ点ジ、備前ノ児嶋ニ上テ已ニ京都ニ責上ント仕候、御用心有ベシ、」トゾ告申ケル、

後醍醐天皇に対し反乱を起こした足利尊氏に呼応し、足利一族の細川定禅が讃岐国鷲田庄で挙兵、讃岐国の詫間氏・香西氏がこれに与同した。これに対し、建武政権に属していた高松三郎頼重は「矢嶋ノ麓」に打ち出でて国中の軍勢を集めたものの、定禅の夜討を受けて頼重老父他一族が討ち死にし敗北したという。

室町時代の記録としては、「兵庫北関入船納帳」（A017）という史料が挙げられる。これは、播磨国兵庫北関における文安２年（1445）正月から同三年正月にかけての入船に対する課税納帳であり、室町時代の流通経済史をみる上で重要な史料として知られている。この史料には北関に入津する船の船籍地・積載品・関料・船頭といった情報が記されている。この中には「方本塩」という記載がみえ、また「方本」を船籍とする船も運航していたことがわかる。方本は潟元のことで、屋島の南麓に位置する地域である。方本からの船は、のべ 11 回兵庫北関に入津しており、運ばれた塩は 6,600 石余という。400 ～ 500 石積の大型船が運航できる重要な港津であったことがこの史料からわかる。

戦国時代の史料としては田中健二氏・藤井洋一氏によって紹介された「さぬきの道者一円日記」（A037）がある。これは永禄８年（1565）に伊勢神宮の御師岡田大夫が、讃岐国の檀那廻りをした時の記録である。屋島の南麓の「かたもとノ里」・西麓の「にしかたもと」も、ともに一円が岡田大夫の檀那となっていたことがわかる。また檀那のなかには「八嶋寺」とあり、先述した屋島寺も檀那となっていた（田中・藤井 1996）。

以上、屋島合戦前後の時期を中心として、中世史料にみえる屋島について概観した。改めてまとめておく。屋島合戦前後の動きについては、「玉葉」「吉記」といった古記録から平氏が屋島に拠点を置いたことがわかるものの、屋島合戦の記録は非常に簡潔なものである。「吾妻鑑」にはそれらに比べると詳細な記事がみえるが、著名なエピソードは佐藤継信の最期を除くとみえていないということを確認しておきたい。一方、屋島合戦以後については、梵鐘や末寺帳からは屋島寺の動向が、「太平記」からは屋島が再び合戦の場となったことがわかる。また室町・戦国期の史料からは屋島の港津としての機能や伊勢信仰の広まりを知ることができる。

Ⅱ　「平家物語」と屋島・屋島合戦

前節で確認したように、屋島合戦前後の史料からは、一部を除いて現在の屋島・屋島合戦イメージにつながる記述を見出すことはできなかった。よって本節ではそのイメージの源泉となっていると考えられる「平家物語」の記述をみていきたい。なお、「平家物語」には読み本系・語り本系の諸本があることが知られているが、諸本によって屋島合戦の記述・構成が異なることが指摘されている（佐伯 1997、松尾 2011 など）。本節では、屋島合戦の描写や各エピソードの構成を確認する。

まず、平氏が屋島に拠点を構えた時の叙述をみてみたい。「延慶本平家物語」（A006）巻８「平家九国ヨリ讃岐国へ落給事」では、讃岐屋島にいた阿波民部成良という人物が、都落ち後に九州に向かったものの現地の武士に追い出されていた平氏の船団を発見し、屋島に迎え入れている。この時、成良は「此屋島ノ浦ハ吉城郭ニテ候ナリ、只此ニ渡セ給ベキナリ」といって平氏に申し入れており、屋島が要害として強調されている。こうした屋島の情報については、語り本系の「覚一本平家物語」に次のような叙述もある。

【史料 6】「覚一本平家物語」（A007）
巻 11「勝浦付大坂越」

あくる十八日の寅の剋に、讃岐国ひけ田といふ所にうちおりて、人馬のいきをぞやすめける。それより丹生屋・白鳥、うちす

ぎゝゝ、八嶋の城へよせ給ふ。又近藤六親家をめして、「八嶋の館の様はいかに」ととひ給へば、「しろしめさねばこそ候へ、無下にあさまに候。塩のひて候時は、陸と嶋の間は馬の腹もつかり候はず」と申せば、「さらばやがてよせよや」とて、高松の在家に火をかけて、八嶋の城へよせ給ふ。

屋島を攻撃するに当たって、義経が阿波の武士近藤親家に屋島の情報を尋ねている場面である。ここでは、「無下にあさまに候。塩のひて候時は、陸と嶋の間は馬の腹もつかり候はず」という記述に注目したい。この描写からは、屋島が陸地と離れた島であり、その間が干潮時は馬の腹もつからないほど、大変浅い海であったことがわかる。近世・近現代に至って、絵画・地図をはじめとする資料に視覚的な情報が付与されるが、中世段階ではこういった屋島の景観をあらわす情報は少ない。「平家物語」からはこうした情報をもうかがうことができる。

屋島合戦記事の内容については、諸本の合戦記事を検討した松尾葦江氏の成果に依ってみていきたい（松尾 2011）。まず、合戦そのものの日時が諸本ごとに異なっている。「屋代本」（A010）「覚一本」では、屋島合戦は 18 日におこなわれたことになっているが、「四部合戦状本」（A009）では 20 日となっている。また「延慶本」「長門本」（A008 ）「源平盛衰記」（A011）では 20 日となっており、21 日に再度合戦がおこなわれている（合戦に至るまでの日時も異なる）。

屋島合戦が 1 日で終わったか 2 日にわたったかという点は大きな違いである。これにより、著名なエピソードの構成も異なっている。例えば「屋代本」「覚一本」は「嗣信最期」→「那須与一」→「錣引」→「弓流」という構成になっているが、「四部合戦状本」では「嗣信最期」の後、志度合戦という別の合戦にて「那須与一」「錣引」「弓流」がおこなわれている。「源平盛衰記」では、「那須与一」→「弓流」→「錣引」→「嗣信最期」という順番である。

エピソードの細部も諸本ごとに異なっていることが知られる。例えば那須与一の実名は、「覚一本」では那須太郎資高の子「与一宗高」だが、「延慶本」では那須太郎資宗の子「余一資高」となっている。またそもそも屋島合戦を描かない「源平闘諍録」もある[4]。

このように、屋島合戦の記述・構成は諸本間で異同の多いことが知られている。佐伯真一氏は、「那須与一」「嗣信最期」「錣引」「弓流」といった屋島合戦の題材が多様であり、一続きの合戦として叙述するのが難しく、矛盾をきたしている箇所があることを指摘し、各々がその矛盾に対処していったために、諸本の異同が生まれたとする。そして義経による奇襲と平氏の海への脱出を描きさえすればよいという自由さと、平氏を長年の根拠地から追い出したという合戦それ自体の歴史的重要性が、内容の豊富さを形成し、後に屋島合戦が様々に語られてゆく原因を作ったとしている（佐伯 1997）。

多くの異同を含むものの、中世段階に成立した「平家物語」では、大枠として屋島合戦に含まれるエピソードは共通する。13 ～ 14 世紀にかけて、「平家物語」を所持・書写・賃借をしている史料や、琵琶法師による語りを示す文献史料が散見されるようになる。こうした「平家物語」の享受の過程で、屋島合戦の諸エピソードも受容され、広く認知されていったものと考えられる。「平家物語」の享受については、膨大な研究が存在するため本章では直接触れないが、屋島合戦に即して一例を挙げておきたい。

【史料 7】「太平記」（A013）巻 33「京軍事」
老母泣々委細ニ返事ヲ書テ申送ケルハ、「古ヨリ今ニ至マデ、武士ノ家ニ生ルヽ人、名ヲ惜テ命ヲ不惜、皆是妻子ニ名残ヲ慕ヒ父母ニ別ヲ悲ムトイヘ共、家ヲ思ヒ嘲ヲ恥ル故ニ惜カルベキ命ヲ捨ル者也、始メ身体髪膚ヲ我ニ受テ残傷ザリシカバ、其孝已ニ顕ヌ、今又身ヲ立道ヲ行テ名ヲ後ノ世ニ揚ルハ、是孝ノ終タルベシ、サレバ今度合戦ニ相構テ身命ヲ軽ジテ先祖ノ名ヲ不可失、是ハ元暦ノ古へ、曩祖那須与一資高ハ、八嶋ノ合戦ノ時扇ヲ射テ名ヲ揚タリシ時ノ母衣也」トテ、薄紅ノ母衣ヲ錦ノ袋ニ入テゾ送リタリケル。

文和 4 年（1355）、足利尊氏方で出陣した那須五郎が戦死を覚悟し母に手紙を送った。

母はそれに答えて「今度合戦ニ相構テ身命ヲ軽ジテ先祖ノ名ヲ不可失」とし「那須与一資高」が「八嶋ノ合戦」に「扇ヲ射テ名ヲ揚タリシ時ノ母衣」を手紙とともに送っている。この「資高」という名前は「延慶本平家物語」にみえる名前であり、「太平記」の作者が「延慶本平家物語」を下敷きにこのエピソードを記したのであろう（山本 2012b）。「太平記」が書かれたとされる南北朝時代には、「平家物語」がかなり享受されていたことを示す一史料である。

以上本節では、先学の成果によりつつ、「平家物語」に描かれた屋島について述べてきた。次節以降では、こうした「平家物語」の享受を前提としつつ、様々な形で屋島・屋島合戦が描かれ、演じられていったことについてみてみたい。

III　文献史料にみる屋島関係の絵画・漢詩

本節では、文献史料にみえる屋島関係の絵画やそれに関連して詠まれた漢詩について取り上げる。絵画そのものの分析については、本書第 5 章に依られたい。

「平家物語」に関する絵画の存在を示す文献史料は、鎌倉時代末期から確認できるが、屋島合戦を明確に描いたことを示すものは、この時期にはみられない。屋島合戦を描いたことがわかる史料としては、次のものが挙げられる。

【史料 8】「看聞日記」（A016）嘉吉元年（1441）4 月 15 日条

一五日、晴、結夏精進写経書初、禁裏御湯目出之由申入、御剣進之、絵五巻被下、〈大仏絵上下『慈恩院』、平家八嶋三巻『喜多院』、〉南都絵也、〈以資任朝臣被召云々、〉詞持経朝臣読之、狂言絵盛賢写之、法楽詠草飛鳥井合点進、今日披講六月ニ延引云々、室町殿依軽服如此、

「看聞日記」は伏見宮貞成親王（1372-1456）の日記である。後花園天皇から貞成親王へ下賜された 5 巻の絵巻の中に「平家八島」を描いた三巻があり、それは「南都絵」で、興福寺の喜多院のものであったという。時代がやや下って、興福寺大乗院門跡の尋尊（1430-1508）の日記「大乗院寺社雑事記」（A022）延徳 3 年（1491）9 月条の絵注文には「八嶋合戦絵三巻　北院」とあり、貞成は観賞後に、南都に返却したものとみられる（麻原 2014）。

同様に屋島合戦の絵巻の存在を示す史料として、次のものがある。

【史料 9】「実隆公記」（A024）永正 6 年（1509）閏 8 月 12 日条

（前略）則参入江殿、心静御雑談、平家物語八嶋絵詞読申之、（後略）

「実隆公記」は三条西実隆（1455-1537）の日記である。ここでは八嶋合戦の場面の詞書を読んだものと考えられる。「実隆公記」からは他に「細川屏風〈平家絵扇流〉」という記述もあり（文明 18 年（1486）5 月 19 日条）、屏風絵の存在も知られる。屏風絵については「蔭凉軒日録」（A020）寛正 4 年（1463）閏 6 月 12 条に「平家屏風」、「梵恕記」永正 5 年（1508）5 月 11・12 日条には、「源平両家ノ画」「源平両家絵、合戦の巻」というものがみえており、これらが屋島合戦を題材としたものかはわからないが、存在が確認される。なお、近世に至ると、屋島合戦に題材をとった屏風絵が朝鮮通信使に送られていたことが指摘されている（星 2013）。

ほかに絵画としては、扇に「平家物語」の一場面を描いた扇面画が挙げられる。これらについては、禅僧たちが扇絵に合わせた賛（漢詩）を著しているのが多数確認でき、中世段階での存在が裏付けられるとともに、絵画と漢詩のつながりもみることができる。以下、史料を列挙しよう。

【史料 10】「梅花無尽蔵」（A027）巻四

取弓判官畫賛二十韻

元暦二載　乙巳支干　正月十八
八嶋某壇　平家油断　詠花餘寒
源氏大将　九郎判官　百騎未満
各擎旗竿　丹生屋戦　被景清瞞
逆潮追北　脱弓波瀾　全非誤落
挑敵窺看　髭截在掌　熊手無端

弸縦沈盡　取得豈難　憶於斯日
名誉般々　佐藤継信　代命忠肝
使能登守　投菊王丸　那須進出
射扇扣鞍　兵船有幾　迷志渡灘
勝負夢脆　推枕耶鄂　国史雖記
畧猶補纂　申楽田楽　琵琶調残
如是英傑　尤堪賛嘆　一張之勢
至今萬安

【史料 11】「翰林五鳳集」（A062）
源九郎落弓図　天隠
萬頃滄波誤落弓、恰如初月掛晴空、忽伸左臂取来看、天下英雄在彀中

【史料 12】「梅溪集」（A045）
扇面執弓判官
天下英雄入彀中、源平得失一張弓、揚鞭壇浦弦聲定、掛在扶桑日本東

【史料 13】「策彦和尚詩集」（A042）
八島戦場
招箭代君堪砕身　源平如若此忠臣　千古功名一麟足　漢有紀信倭継信

【史料 10】は万里集九（1428-？）の詩集「梅花無尽蔵」に収録されたもので、「弓流」「嗣信最期」「那須与一」といった屋島合戦の主要エピソードを多く収録している。注目すべきは、「国史雖記　畧猶補纂　申楽田楽　琵琶調残」という箇所である。「これらのことは、国史にも記してあるが、略してあるのでなおこれを補って記す。このことは申楽や田楽、琵琶の調べにも残されている」と万里集九は詠んでいる。このことから、「弓流」「嗣信最期」「那須与一」のエピソードが当時の「国史」（具体的に何を示すかは不詳）に記されており、また琵琶法師による語りは言うまでもないが、猿楽・田楽の題材としても受容されていることを示している。

【史料 11】は近世初期に以心崇伝（1569-1633）によって編まれた詩集で、詩を詠んだ天隠龍沢（1422-1500）は室町時代の人物。【史料 12】は龍沢の弟子の雪嶺永瑾（1447-1537）の詩集で、いずれも「弓流」を題材としたものである。【史料 13】は策彦周良（1501-1579）の詩集で、「嗣信最期」を題材としている。

また次の詩は注目される。

【史料 14】「月庵酔醒記」（A043）
一　八島合戦之絵　万里賛
射手名人能登守　兵法達者源九郎　春風有恨八嶋浦　狼藉忠信荒菊王

「月庵酔醒記」は古河公方家臣一色直朝（？-1597）の手による説話集で、詩は万里集九のものとして伝えられている。榊原千鶴氏は「松雲本平家物語」（A061）巻 11 の末尾にこの詩とほぼ同じ詩が一休宗純の作として「賛八島合戦」と題して付され、「取弓判官画賛二十韻」もまた記されているということを指摘している（榊原 2000）。「平家物語」の書写過程と、「平家物語」の享受によって生まれた漢詩のつながりを示すものとして興味深い事例といえる。

以上、本節では、「平家物語」の広がりを受けて制作された絵画資料と、扇面画に著された漢詩のうち、屋島合戦を題材としたことを示すものを挙げた。こうした絵画資料や漢詩を受容できた階層は、基本的には支配者層に限定されたものと考えられる。しかしながら、受容した階層の屋島・屋島合戦イメージの形成に大きな役割を果たしたことが推測される。

本節で挙げた史料を含め、絵画資料は『平家物語』だけではなく、幸若舞曲や能をもとにして作成されたことが指摘されている。そこで、次節では芸能関係の史料についてみていきたい。

Ⅳ　中世芸能にみる屋島

本節では、屋島に関係する芸能関係史料についてみていく。

まず、能を取り上げたい。『平家物語』を題材とする能は非常に多いことが知られているが、その中で屋島合戦を題材とした能には「八島」「景清」「熊手判官」「摂待」「継信」「延年那須与一」「屋島寺」といったものが挙げられる（A046 ～ A051、A064）。能は室町時代に入り、観阿弥世阿弥親子のもとで大成し、古記録などに上演記録を多く確認する

ことができる。しかしながら、上演のみを記して演目を記さないものが多く、演目の記載は稀であるとされる（能勢 1938）。ここでは、能勢朝次氏が検出した永享元年（1429）～慶長 7 年（1602）までの演目史料をもとに、上述の屋島合戦を題材としたものを抜き出し、場所・能の名目・演者・演目を表にしてまとめた（表）。なお、演目については原則史料中の表記のままとした。この表をみると、禁裏や将軍御所、聚楽第といった権力者の邸宅、春日大社や本願寺といった寺院で能が演じられていることがわかる。屋島・屋島合戦イメージが広く享受されていく上で、「嗣信最期」や「那須与一」を題材とした能の上演が大きな役割を果たしたといえる。

他の演目に比べて、圧倒的に上演を記録した史料の多い「八島」について触れていきたい。この能は世阿弥作の「申楽談儀」に「道もり、たゞのり、よし常、三ばん、しゆらがゝりにはよき能也」とあるうちの「よし常」が当たるとされている。あらすじは次のようなものである。西国行脚の途中で屋島を訪れた旅の僧と同行が、塩屋で宿を取り、そこの主の老人から、屋島合戦の話を聞く。老人の不審を問うと、老人は自分が義経であることをほのめかして消える。その後、塩屋の男から錣引の話と老人が義経の化身であるということを聞く。そして義経が登場し、修羅道の苦しみと弓流を語る。ここで、屋島の塩屋が舞台となっている点に注意しておきたい。塩屋とは「海水を煮て塩を作る家。塩竈のある粗末な小屋」（『日本国語大事典』）である。先に述べた通り、中世段階から屋島は塩の名産地であった。そうした屋島の情報が、この能「八島」に盛り込まれているものと考えることもできるだろう。

次に幸若舞曲について取り上げる。幸若舞とは 14 ～ 17 世紀に流行した長編の物語を語る芸能で、曲舞とも言った。屋島合戦を題材としたものとしては、「八島」「那須与一」「岡山」などがある（A054 ～ A056）。幸若舞に関係する文献史料としては次のものがある。

【史料 15】「私心記」（A044）永禄 2 年（1559）3 月 4 日条

暮々御番ニ参。於御三間曲舞之本八島一番被読之。相番予茶々丸代公遠朝臣公卿代両人也、

「私心記」は本願寺蓮如の息子実従（1498-1564）の日記である。「曲舞之本八島一番被読之」とあり、幸若舞の語り台本を読み物に転用したことがわかる。これを「舞の本」というが、その存在を知ることができる史料である。

この他、近世に入ってからの芸能として、浄瑠璃や歌舞伎が挙げられる。中世史料ではないが関説する。屋島に関係する浄瑠璃については、本書の巻末にまとめている。これらは、「平家物語」に題材をとったものが多く、先に挙げた能や幸若舞曲を取材したものも含まれる。「嗣信最期」を題材とする近松門左衛門作「津戸三郎」（「門出八島」）（A069）や、「那須与一」を題材とした並木宗助・並木丈助作「那須与一西海硯」（A074）などがある。歌舞伎については、「世界綱目」（A077）という歌舞伎狂言作者の手控え本に「源判官義経」「佐藤三郎次信」「那須与一宗高」ら、屋島合戦に関係した人物が役名として載せられており、屋島合戦を題材とした演目も多く上演された。

ここまでみてきた中世の絵画・芸能は、先述したように主に支配者層を中心に受容されたと想定できる。一方で近世に入って以降、浄瑠璃や歌舞伎、絵画史料でいえば錦絵の登場は、民衆層を対象とした屋島・屋島合戦イメージの広範な定着に大きく寄与したと考えられる。

だが、中世段階においても、民衆層が屋島・屋島合戦イメージの形成に寄与するようなものがなかったわけではない。「多聞院日記」（A033）天正 17 年（1589）7 月 8 日条には、記主の興福寺の学侶英俊が南都の郷民たちの祭礼において、人形などの作り物を見物している。この作り物には「平家物語」に題材をとったものがあり、その中の一つとして「ナスノ与一」が挙げられている。また京都の祇園祭で、応仁・文明の乱以前に運行していた山の一つに「なすの与一山」があったことが「祇園会山鉾事」（A025）という史料から確認できる。中世史料の多くは支配者層に残さ

表　屋島に関する能を示す中世史料

和暦	西暦	月日	場所	名目	演者	表記	出典
寛正 5	1464	4/4	糺河原	勧進猿楽	観世大夫	八嶋	「糺河原勧進猿楽日記」
寛正 6	1465	2/28	院御所	将軍院参	観世大夫	やしま	「親元日記」
寛正 6	1465	9/25	南都一乗院	将軍南都下向	金剛	クマンキリ	「蔭凉軒日録」
文正元	1466	2/25	飯尾之種亭	飯尾之種邸御成	観世大夫	景清	「飯尾宅御成記」
明応 8	1499	2/29	相国寺		摂州優者	奥州佐藤兄弟	「鹿苑日録」
文亀 3	1503	9/19	室町殿御所		観世大夫	八嶋判官	「実隆公記」
永正 2	1505	4/16	粟田口	勧進猿楽	金春大夫	八嶋	「粟田口猿楽記」
永正 11	1514	1 月	南都八幡宮	法楽能	金春大夫	八嶋	「禅鳳申楽談儀」
永正 16	1519	1/26	禁裏		手猿楽	八嶋	「二水記」
天文 5	1536	2/14	春日大社	薪猿楽	十二大夫	八嶋	「中臣祐金記」
天文 8	1539	11/13	六角定頼亭		観世大夫	八嶋	「親俊日記」
天文 9	1540	1/15	石山本願寺		春日大夫	八嶋	「証如上人日記」
天文 10	1541	2/6	石山本願寺		大蔵大夫	八嶋	「証如上人日記」
天文 10	1540	11/28	春日大社	春日若宮祭後日能	金春大夫	八嶋	「多聞院日記」
天文 12	1542	2/11	春日大社	薪能		盲景清	「多聞院日記」
天文 12	1542	2/19	石山本願寺		観世大夫	八嶋	「証如上人日記」
天文 14	1544	3/21	禁裏		小童手猿楽	八島	「言継卿記」
天文 18	1548	1/12	石山本願寺		春日大夫	八嶋	「証如上人日記」
天文 18	1548	2/12	春日大社	薪能	宝生	八嶋	「中臣祐磯記」
天文 23	1553	2/21	石山本願寺	六町中申沙汰		八嶋	「証如上人日記」
永禄 4	1561	3/30	三好義長亭	将軍御成	観世大夫	八島	「三好亭御成記」
永禄 7	1564	10/22	禁裏		手猿楽	八島	「言継卿記」
永禄 8	1565	8/18	葉室在所	神事能	日吉孫四郎	八島	「言継卿記」
永禄 10	1567	6/24	松尾神社	社頭能	八田大夫	八島	「言継卿記」
永禄 11	1568	10/11	将軍亭		観世大夫	八嶋	「信長公記」
天正 4	1576	1/28	禁裏御方御所			八嶋	「言継卿記」
天正 16	1588	2/26	石山本願寺		下間少進	八嶋	「能之留帳」
天正 16	1588	6/1	大谷刑部宅		下間法印 春日大夫	八嶋	「能之留帳」
天正 17	1589	2/18	本願寺		観世大夫	八嶋	「能之留帳」
天正 18	1590	2/5	下間法印宅	太閤小姓衆所望	下間法印	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	1/25	本願寺新門跡		下間法印 春日大夫	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	2/18	本願寺	石田三成御出	下間法印 春日大夫	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	5/17	下間法印宅		法印一族	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	5/24	大谷刑部宅		下間法印・一族・ 春日大夫	八嶋	「能之留帳」
文禄元	1592	11/6	大谷刑部宅		下間法印・一族・ 春日大夫	八嶋	「能之留帳」
文禄 2	1593	4/3	本願寺	豊臣秀次御成	下間法印 春日大夫ら	八嶋	「能之留帳」
文禄 2	1593	4/26	聚楽第		豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」
文禄 2	1593	10/29	聚楽第		豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」
文禄 3	1594	3/3	大和郡山 豊臣秀保亭	豊臣秀次御成	豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」 「駒井日記」
文禄 3	1594	3/4	宇喜多秀家亭	豊臣秀吉御成	観世大夫	八嶋	「駒井日記」
文禄 3	1594	12/8	三州吉田		豊臣秀次	八嶋	「能之留帳」
慶長 4	1599	8/14	興福寺大乗院		金春大夫	八嶋	「多聞院日記」
慶長 5	1600	4/22	禁裏	近衛殿申沙汰	下間法印 虎屋弥兵衛	八島	「能之留帳」

れたものであるが、これらの事例は奈良・京都の民衆がそれぞれ屋島合戦で知られる那須与一を認識していたことを示すとともに、民衆層にも屋島・屋島合戦イメージを認知させる機会になっていたと考えられる。

以上、本節では能・幸若舞曲・浄瑠璃・歌舞伎など、屋島に関係する芸能についてみてきた。本章での検討範囲をやや越えることになってしまったが、中世と近世では、やはり屋島・屋島合戦イメージの主たる受容層が異なっていたのではないかと考えられる。

Ⅴ　伝承の中の屋島合戦

本節では、史料からうかがうことのできる屋島合戦に関する伝承・説話について取り上げる。

「源平屋島檀浦合戦縁起」（屋島寺蔵、A059）、「屋島軍断簡」（A014）、番外曲「屋島寺」（A064）、「月庵酔醒記」（A043）には、屋島の佐藤継信の墓を訪れた僧が、継信の亡霊と和歌の贈答をするという説話が残されている。これらの説話には異同がある。例えば、登場する僧が佐藤継信の末裔である「信空」「空信」（「源平屋島檀浦合戦縁起」・「屋島軍断簡」）、未詳（「屋島寺」）、実在した曹洞宗禅僧である石屋真梁（「月庵酔醒記」）とそれぞれで異なっていることが挙げられる。これについては、多くの研究が存在し、その展開過程についても諸説が存在している（武久 1986・砂川 2001・岩崎 2009・大橋 2010 など）。ここでは、これらの説話の中には、相引川や檀浦といった在地の地名や、佐藤継信の墓の位置が明確に示されたものがあるということ、屋島の佐藤継信の墓を舞台とする説話伝承が中世～近世にかけて形成され、広く流布していたことのみを指摘しておきたい。

一方、佐藤継信については、次のような史料が興味深い。

【史料 15】「佐藤継信・忠信之旗由緒書」（A041）

此継信・忠信両旗ニ為追善法然聖人六字名號書給、右両旗宰相藤原成頼卿子毘沙門堂中納言、法名明禅法印所持給而、洛東禅林寺邊草庵結住給、暦仁元年ニ鎌倉将軍頼経上洛之時、彼明禅庵室入、佛旦御覧有ハ、旗ト見へ而佛旦ニ掛六字名號書、為菩提有之、由来法印ニ問給へハ、右由具ニ語畢、将軍殊勝思食、頼経帰国之後、明禅法印彼ノ両旗鎌倉指越給へハ、将軍不斜而安置ノ給、其後鎌倉住僧玄林和尚ト云有安置之、則弟子代々六世伝之、其以後藤原関白経嗣成恩寺安置、其後因幡堂納、永享六年甲寅年二月十四日因幡堂炎上、其後取出、伝々而義政安置之、其後細川政元所持、同高国安置者也、

天文元年二月十四日　　源義信（花押）

佐藤継信・忠信の旗の由緒書である。両人の追善のために法然が六字名号（南無阿弥陀仏）を書いたことから始まり、藤原成頼の子の明禅法印から、九条頼経、鎌倉の住僧玄林和尚、一条経嗣、足利義政、細川政元・高国と所持者・安置場所が転々としていったことが語られている。天文元年（1532）2 月 14 日の年紀をもつが、この段階ではまだ改元していない。また差出の源義信なる人物についても未詳である。現段階ではこの由緒書に書かれていることが事実かどうかについては疑問である。一方で、屋島合戦で活躍した佐藤継信・忠信の追善供養を法然がおこなったとされている点はどういった意味をもつのか、後考を待ちたい。

このほか、那須与一については多くの伝承が残されている。京都伏見の即成院に残る「即成院縁起」には、那須与一が登場する伝承がある。それは次のようなものである。那須与一宗高が光明院（即成院の前身）に参詣し、戦功を祈願したのち、屋島合戦で扇の的を射抜き、高名を挙げた。与一はその礼に私領を寄進し、その後出家し、上洛して即成院本尊の前で往生を遂げ、その墓碑が現在も残されているという。この縁起については、様々な要素が入り組んで構成されている。瀬田勝哉氏はこの縁起のエピソードが「平家物語」を受けて作成されたものであるということや、伏見宮で催された茶会の勝負の懸物に那須与一「扇の的」の風流の作り物が出品されていることから（「看聞日記」応永 23 年（1416）3 月 1 日条）、当時すでにあっただろう「即成院縁起」の原型を周知していた伏見の人々

にとって、那須与一が特別な存在だったことなどを指摘している（瀬田 2005）。

以上、屋島合戦で活躍した佐藤継信・那須与一に関する伝承・説話について紹介した。明確な形をもった絵画・芸能だけではなく、こういった伝承の存在も、屋島・屋島合戦イメージの広がりを示していると言えるだろう。

おわりに

以上、先学の成果を踏まえつつ、屋島・屋島合戦イメージの形成と展開について見てきた。Ⅰで述べたように、屋島・屋島合戦そのものを記録した同時代史料は少なく、記述も簡潔なものが多い。しかし、Ⅱ以下で述べてきたように、「平家物語」やそれを題材とした絵画・漢詩・芸能・伝承といった様々な形での屋島への言及は、断片的ながら中世史料でも追うことができる。もっともそれらが現実の屋島と無関係に展開したわけではない。「平家物語」でわずかにみられる景観描写、能「八島」の舞台となった塩屋、在地の地名や伝承を盛り込んだ能「屋島寺」の存在などは、そうした現実の屋島とイメージの中の屋島とのつながりの一端を示しているといえるだろう。そして、中世段階では支配者層を中心として受容された屋島・屋島イメージは、近世段階に至り民衆向けの芸能・絵画が登場し、さらには出版文化の展開を経ることによって、民衆層をも捉えた射程をもつようになっていく。また現実の屋島でも高松藩初代藩主松平頼重による顕彰活動がおこなわれるなど、屋島・屋島合戦イメージの定着が図られる。これらの動向については、それぞれ本書の別章を参照されたい。

〈文末脚注〉

1　史料の検索や「平家物語」関係の諸事項については、主に日下・鈴木・出口（2005）、小林編（2007）、大津・日下・佐伯・櫻井編（2010）を参照した。

2　本節で述べる屋島の基本的事項については、平凡社地方資料センター編（1989）の屋島関係部分及び、最新の成果である屋島風土記編纂委員会（2010）に多くを依拠している。

3　このほか、「高野春秋編年輯録」（A012）元暦２年３月 15 日条に、「小松惟盛勾引従者阿波守宗親及二三輩、自屋嶋内裏来奔、受説戒於心蓮上人」という記事がみえ、平維盛が屋島を離れ高野山で受戒したことがわかる。

4　「源平闘諍録」は東国で成立した異本である。山本隆志氏は、屋島合戦・那須与一の場面がないことについて、「関東武士にとっては、那須といえば那須野の那須家であり、那須野は頼朝以来の狩り場なのである。その記憶が強く、与一と扇射は後景に退いてしまっていたのである」としている（山本 2012a、24-25 頁）。

〈主要参考文献〉

麻原美子 2014「『平家物語』屋島合戦譚とその芸能空間をめぐって」、『平家物語世界の創生』勉誠出版

岩崎雅彦 2009「番外謡曲「屋島寺」の周辺」、『能楽演出の歴史的研究』三弥井書店

大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編 2010『平家物語大事典』東京堂出版

大橋直義 2010「「平家物語」の内と外―「異説」をめぐる考察―」、『転形期の歴史叙述―縁起巡礼、その空間と物語―』慶應義塾大学出版会

日下力・鈴木彰・出口久徳 2005『平家物語を知る事典』東京堂出版

小林保治編 2007『平家物語ハンドブック』三省堂出版

佐伯真一 1997「屋島合戦と『八島語り』についての覚書」、『青山学院大学総合研究所人文学研究センター研究叢書』12

榊原千鶴 2000「1600 年前後―軍記物語と扇面画―五山禅僧による軍記物語享受の一端―」、『国文学』45-7

砂川博 2001「番外謡曲「屋島寺」の成立」、『平家物語の形成と琵琶法師』おうふう

瀬田勝哉 2005「伏見即成院の中世―歴史と縁起―」、『武蔵大学人文学会雑誌』36-3

武久堅 1986「合戦譚伝承の一系譜―「屋島軍」の場合―」、『平家物語成立過程考』桜楓社

田中健二・藤井洋一 1996「冠纓神社所蔵永禄八年『さぬきの道者一円日記』（写本）について」、『香川大学教育学部研究報告　第１部』97

能勢朝次 1938「演能曲目考」、『能楽源流考』岩波書店

平凡社地方資料センター編 1989『日本歴史地名大

系 38　香川県の地名』平凡社
星瑞穂 2013「『通航一覧』に見る「贈朝屏風」の画題と外交―「碁盤忠信」を中心に―」、石川透編『中世の物語と絵画』竹林舎
松尾葦江 2011「屋島合戦記事の形成」、千明守編『平家物語の多角的研究―屋代本を拠点として―』ひつじ書房
屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島文化協会
山本隆志 2012a「那須与一と扇の的―平家物語の叙述と構想―」、山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』ミネルヴァ書房
山本隆志 2012b「国家・社会の統合と那須家」、山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』ミネルヴァ書房

（担当：川口成人）

2　屋島寺と遍路
―創建から近世の屋島寺―

はじめに

屋島の山頂に四国八十八ヶ所の第 84 番札所である屋島寺がある。天平勝宝 6 年（754）、屋島の北嶺に鑑真[1]により創建され、弘仁元年（810）に空海により南嶺に寺域が移されたとされている。現在の所在は屋島町大字西潟元字山上であり、宗派は古義真言宗御室派[2]、本尊は千手十一面観音座像である。

宝物としては小松天皇御宸翰、後陽成天皇御宸翰、釈迦像、五劫思惟阿弥陀像、千手観世音銅像、本尊千手観音旧光背、屋島寺本堂再建勧進牒、絹本着色楊柳観音像、屋島一山の図、源平合戦図、熊野権現縁起絵詞、源平合戦図屏風、屋島寺縁起、源平合戦縁起、梵鐘[3]が挙げられる。これらのうち、源平合戦に関するものや縁起などは屋島寺宝物館でみることができる。

本章では、屋島寺の創建から近世にいたるまでの屋島寺の変遷と、遍路や名所・観光地として人が参集していた様子をみていく。

Ⅰ　屋島寺の創建と変遷

1．屋島寺の成り立ち

はじめに屋島寺の創建について触れておきたい。屋島寺蔵「屋島寺縁起」（A001）、「屋島寺龍厳勧進帳」（A060）、澄禅の「四国遍路日記」（C004）によれば、鑑真が来朝時に屋島山に瑞光が立つのをみて、船を海岸に寄せ山を登り、山の形勢を見ているときに老翁が現れた。そして、この山（＝屋島山）は七仏説法の地であるとして、この地を授けるとした。仏法の興隆により患難を救うよう言ったのち、その老翁は忽然と消えた。鑑真はこの地を神秀の地であるとして、一室を築き、普賢菩薩と華厳経をその中に安置してから京都へ赴いたとされている。この一室こそが屋島寺である。その後、孝謙天皇が鑑真に帰依したことにより、鑑真は東大寺大仏殿の西に戒壇院を構え、戒法をおこなった。この時、鑑真が屋島の奇瑞を奏しており、孝謙天皇は詔を出して屋島山を鑑真に授けたのである。鑑真は再度「屋島山」に戻り、弟子の空鉢恵海律師に鉢を一つ与え、普賢堂を北嶺に営ませ、十願王の像を安置し、かつ坊舎を創建して僧徒を居住させた。なお、この空鉢律師については後述する。

このようにして、寺伝では鑑真により創建されたとされている屋島寺であるが、その場所は当時から「屋島山」として認識されていた。

鑑真の弟子、恵海律師の学徳を聞いてその教えを請い、空の一字を受けたのが空海である。嵯峨天皇の代である弘仁元年、空海は再び屋島寺を訪れ、北嶺にあった伽藍を南嶺へと移し、千手観音を本尊として、南面山千光院と号した。そして治安元年（1021）、性純阿闍梨の代から南面山千光院屋島寺と称することとなった。また、村上天皇の代には四天王堂が建立され、その中に四王の像が安置された。

現在、昭和 55 年（1980）度の屋島北嶺の千間堂跡における発掘調査を始めとして、平成 8 年（1996）度から高松市教育委員会が屋島寺周辺で調査を継続的に実施している。平成 10 年度から 13 年度にかけては、屋島北嶺の千間堂跡で調査がおこなわれた。これ

ら発掘調査の成果により[4]、それまで実際に存在したのかどうかが不明であった北嶺の伽藍の存在が明らかになった。発掘された遺物からみて、北嶺に伽藍があったと考えられているのは 10 ～ 11 世紀の間である。12 世紀以降の遺物となると、主に南嶺で見られるようになる。寺伝とは時期が異なるとはいえ、北嶺から南嶺へと伽藍が移ったことが、発掘調査からも示唆されている。

2．屋島寺に残る伝承

屋島寺が人びとから崇敬され、繁栄を迎える転機となったのが、鑑真の弟子である空鉢恵海律師の伝承である。先に記した恵海律師が鑑真から与えられた鉢は鑑真が所持していた衣鉢で、これを恵海律師は空に上げ、沖を漕行する。そして、船に飛んで行っては斎料、つまり食事のための寄進を請うていた。船人たちは飛んできた鉢に驚いて米穀を鉢に投入れ、米を入れた鉢は屋島山頂に飛んで帰ってきたという。このようなことが度々あったことで、人々の崇敬を集め、次第に繁栄するところとなり、42 坊を設けるまでに至ったとされている。しかし、あるとき、漁師が船に飛んできた鉢に魚類を入れたところ、鉢が砕け散り船と共に海底に沈むということがあった。これより屋島寺は衰微したと言われている。

さて、屋島寺にちなんだ伝承は他にもあり、小海基治や清原孝章の話がそれにあたる。小海基治は兵庫寮の官人であり、天徳年中（957-961）、その妻が懐妊後 15 ヶ月間経っても出産しなかったため、屋島寺の西廊に参詣したところ、半月もしない内に痛みもなく石の瓶を産んだ。しばらくしてから、その瓶の中から端正な男子が現れたという。清原孝章は、無実の罪で讃岐国に配流されていた折、安和年間（968-970）に屋島寺に参詣した。その後に夢の中で官吏となり、帰洛を告げた。13 日後、勅命が下り、無事に帰洛したという（松原 1981）。

いずれの伝承においても、どこまで信憑性があるかは判然としないが、これらが屋島寺に一種の特殊性を与えていたことは確かであり、それが信仰を集める起点となった。坊が 42 まで増えたという伝承からも、多くの寄進があったことが推測される。中世においては修行僧による参詣が多く、一般人へ開かれた場所となるのは近世に入ってからであるが、中世では修行空間として、人が参集する場所であったといえよう。

しかし、恵海律師の伝承の中にもあるように、屋島寺は繁栄を迎えたのち、衰微するに至った。衰微していた間の屋島寺については、史料に乏しく詳しく論じることはできないが、次項にて近世における屋島寺の復興について触れたいと思う。

3．屋島寺の復興

近世に至るまでに、屋島寺は大きく衰退していた。慶長 6 年（1601）に住僧であった龍厳は徳川家康の御教書を得て、諸国を勧進して伽藍を修営することになった。この勧進の様子は、先に挙げた「屋島寺龍厳勧進帳」から見てとれる。また、この勧進の際に「源平屋島檀浦合戦縁起」（A059）が製作され（出口 2013）、また「屋島寺縁起絵」（B033）と「屋島合戦図」（B007）も寺の縁起を絵解きで語った可能性が指摘されている（香川県立ミュージアム 2014）。堂宇は非常に廃れた状況にあったようだが、元和 4 年（1618）に落成した。万治年中（1658-1661）には龍盛が堂宇を修繕している。下記に挙げた史料（F005）からわかるように、再建にあたって生駒一正により、屋島寺へ米 300 石が寄進されている。また、このとき米が寄進されただけではなく、人足として 40 人が遣わされていることも注目されよう。

屋嶋寺堂之建立之覚

一　八木三百石遣候、万入用ニ可レ遣之事

一　手伝四十人つゝ国中へわり可レ遣之事

一　材木ハ入次第、財田、綾両所見計可レ遣レ之、猶入用事可レ申候也、

讃岐

三月四日　　一正（花押）

佐藤掃部殿

再建にあたっては、生駒一正は屋島寺領の安堵もおこなっている（F001）。寺領自

図１　『金毘羅参詣名所図会』内「屋島寺」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

体は往古より 25 石であったが、寛永年中（1624-1645）に松平頼重によって 59 石余りが加増された。

（前略）
屋嶋寺領之儀、如＿前々＿高弐拾五石余遣置候者也、
慶長六年　　生駒讃岐守
正月八日　　一正（花押）
屋嶋寺
（返り点は筆者の加筆、旧字は新字に改めた。）

この寺領は明治維新を経て失われ、屋島寺は再び衰退することとなった。しかし、明治 33 年（1900）に屋島保勝会ができ、寺門の経営に尽力したことによって、今日の状況にまで至っている。

さて、以上のような寺領を有し、伽藍が再建された屋島寺であるが、近世においてどのような状態にあったのであろうか。『金毘羅参詣名所図会』（D013・図１）から、その伽藍の様子がうかがえる。本堂（写真１）や大師堂、鐘楼、仁王門（写真２）など、現在にも見られる堂宇が確認できる。17 世紀時点で、屋島寺の復興は充分に進められていたのだろう。また『金毘羅参詣名所図会』には、伽藍内に何人か笠を被った参詣者が見られる。これについては、次節にて詳述することになるが、近世には人々が多く屋島寺に参集していたことがわかるだろう。

II　屋島寺と遍路、観光

１．札所としての屋島寺

（１）　四国八十八ヶ所のはじまり

四国八十八ヶ所の起原・歴史とはいかなるものであろうか。真念の「四国徧禮功徳記」

写真１　屋島寺本堂
（撮影：井上真美）

写真２　屋島寺仁王門
（撮影：井上真美）

写真３　遍路道
（撮影：井上真美）

写真４　八栗寺までの道標
（撮影：井上真美）

写真５　遍路姿の屋島寺参詣者
（撮影：井上真美）

写真６　大師堂とお遍路
（撮影：井上真美）

（A072）の贅録に「遍札所八十八ヶ所とさだめぬるる事、いつれの時、たれの人といふ事さだかならず」と記していることから、その詳細については不明なところが多いとされる。行基や空海、空海の弟子である真済、真如法親王に四国八十八ヶ所開創の伝承があるが、いずれも伝承の域をでないため、開創者を明確にすることは困難である。しかし、四国・讃岐は空海の誕生地であることから、多くの弟子や血縁者を輩出していた（頼富・白木 2001）。また、空海の四国遍路の伝承から、四国以外の場所で弟子となった僧が遍路へと赴いたと考えられる。

上記のようなはじまりであることから、屋島寺が具体的にいつごろから八十八ヶ所に組み込まれたのかは判然としない。しかし、空海が現在の寺域に伽藍を移していることから、屋島寺がその中に組み込まれたことが予測される。つまり、遍路の開創者と考えられることの多い空海とのつながりから、屋島寺は八十八ヶ所の札所に組み込まれたのだろう。

（2） 近世における遍路

近世初期の遍路をうかがうことができる史料として挙げられるのが、先にみた澄禅の「四国遍路日記」である。これは遍路の詳細な記述だけでなく、札所となっている各寺院の寺号、本尊、寺観、縁起なども記されている。

頼富・白木（2001）も取り上げているが、この「四国遍路日記」のなかに当時の遍路の状況として特筆すべき部分が見られる。

> 海部ノ大師堂ニ札ヲ納ム。是ハ辺路屋也。爰ニ辺路札所ノ日記ノ板有リ、各買之也。

この「辺路札所ノ日記」というものが、どのようなものか断言はできないが、頼富らはこれを各人が購入していることから簡単なガイドブックのようなものだとしている。ガイドブックを購入している人物がいることから、当時先達のみではなく一般の人も遍路に赴いていたのだろう。中世では修行僧など、修行を主とする者が多く赴いていた四国八十八ヶ所に、近世初期には一般人も参加していたのである。四国遍路が更に一般の人々に普及するようになるのは、もう少し後のことになるが、徐々にその片鱗が見られる。八十八ヶ所の一つである屋島寺もその例外ではなかっただろう。屋島には中世に比べて多くの人が参詣していたと考えられる。

少し時代を経て、17 世紀後半になるとその様相は更に顕著にみられるようになる。真念の『四国遍路道指南』（D003）のような遍路に赴く人々が持って歩く案内書が出版された。また遍路屋が建ち、標石が設けられたことで四国遍路は一般人にも非常に普及したものとなったのである。現在では、道路が整備され（写真３）、標石も作られており（写真４）、観光気分で札所を参詣しにいくことができる（写真５・６）。そのような一端が近世後期から見られていたのである。

では、先に挙げた『四国遍路道指南』のなかで、屋島寺はどのように記述されているのだろうか。少し長くなってしまうが、屋島寺の一つ前の札所である一宮寺の部分から以下に引用したいと思う。

> 八十三番之一之宮　平地、堂はひがしむき。かゞハ郡一宮村。
> 本堂正観音　立三尺五寸、大師御作。
> 詠歌　さぬき一の宮の御まへにあふぎて
> 神のこゝろをたれかしらゆふ
> 是より屋島寺迄三里。但仏生山へかくるときハ、一宮より屋島寺まで三里半、又高松城下へ行バ、一宮より屋島寺まで四里有也。
> ○かのつの村○大田村、八幡、標石有。○ふせいし村、八まん宮。○まつなわ村、行て大池有、堤を行。○北村、三十番神宮有、過て小川有。○ゑびす村○春日村○かた本村。これより屋島寺十八町、坂、地蔵堂有。
> 八十四番やしま寺　山上、堂はミなミむき。やまだ郡やしま。
> 本尊千手　坐三尺、大師御作。
> あづさ弓やしまの宮にまうでつゝ
> いのりをかけよいさむものゝふ
> 是よりやくりじまて一里有。寺より東坂十丁くだり、ふもとに佐藤次信のはか有。領主より、一丈四方の切石にて壇きづき、其上に五尺の石塔を建立し、碑の銘あり。古の五輪塔も有。後小松

の御宇、崇徳元年四月五日に、奥州より、佐藤氏族のしやもん空信此はかに詣来て回向のまことをつくし、

いたはしや君の命をつぎのふが
印の石は苔ころもきて

とよまれけれバ、そとば動揺して

をしむともよも今迄ハなふがらへじ
身をすてゝこそ名をバ次信

と、はかの中にこゑしけるよし、屋島軍ゑんぎに見えたり。それより先帝・女院行幸の内裏の跡有。この所を壇となづけ、浦を壇の浦となづく。又あい引の汐、にしひがしより汐ミち、南面山のふもとをめぐり、両うミの中辺にて満合、たがひに引なり。此入うミ三町ばかり渡りて、奈須の与市駒立岩有。又いのり石有。其南脇にすさきの堂、本尊正観音、大師御作、其南に惣門、次信射をとさるゝ所有、大夫黒といふなん馬のはかも有。或ハさじきの岡、名切水幷に瓜生山とて、源氏の本陣所あり。其外旧跡かすゝゞ有。惣名はむれ村といふ。右の惣門よりやくりへ十八町行て坂。

案内記として書かれていることもあり、札所と札所の間の距離や標石などの目印も逐一示されていることがわかる。また、遍路の案内書としての機能だけではなく、札所の近くにあるいわゆる観光地となりうる歴史のある名所にも記述が及んでいる。屋島寺の周辺でいえば、佐藤継信の墓や駒立岩、祈り岩、洲崎寺、総門跡や太夫黒の墓など屋島合戦の旧跡が挙げられている。また、このような旧跡は分かりやすい目印にもなったであろう。遍路に来た一般人はこれらの旧跡を札所の間に回りながら、八十八ヶ所を巡っていたのである。また、屋島寺に至る前には高松城下に訪れることも想定されていた。遍路として屋島寺に訪れた人々はそのまま屋島内にある名所も訪れることができるという環境にあったのである。

2．屋島を訪れる人々

さて、近世において屋島を訪れたのは遍路者だけではなかった。最後に、遍路者が遍路の間に見物していた場所へと訪れていたのとは反対に、見物の一環として八十八ヶ所の一つである屋島寺へ訪れた人々の一例をみてみよう。

寛文７年（1667）に俳人である松山玖也が記した紀行文である「小豆嶋紀行」（C005）の中で、松山は見物のために八島（屋島）や檀ノ浦に赴いている。屋島寺については、その創建時の様子から先述したような伝承が記されているほか、「八島」が「屋島」と呼ばれるゆえんにまで記載が及んでいる。以下に屋島に関する部分を引用する。

窟の観音に行てみるに、左の方に淡路島よこおりふしたるに、やまと島はちへにかくれてみへす。かうへをめくらせは、岩屋の瀬戸、明石の戸も見ゆ。阿波の鳴門をめの下に、汐の引田、波の白鳥、志渡、八嶋、壇浦、高松、はるかに西につゝきて、白峯、金毘羅、屏風浦、槌の戸と云も見わたされて、致景筆にうつし詞にのへかたし。遠き国に其名聞ゆる松島、松竈、又鎌倉、金沢のなかめにも、をさゝゝをとるましふ覚ゆ。（中略）

明れは又八島、壇浦なと見んとて出立。

汐のひまをかうかへて、干潟の道一里はかりを歩わたりして、潟本と云江の村に打休て、濁酒なとをきのりて呑。

かたもとや入江の村の新酒ロ

南面山八嶋寺千光院に上る。抑此八島寺は、孝謙帝天平宝字年中、唐龍興寺苾蒭鑑真和尚来朝時、此八島は仙境なりしに、真和師仙人に逢給て、願くは此処を我に譲り給へ。伽藍を建て衆生済度の地となさんと申されしかは、仙人此旨をゆるし畢。即七堂伽藍僧坊四十二宇、年を経すしてなりぬ。本堂五間四面、本尊千手千眼云云。後には此山を御弟子道得に譲給て、鐵鉢一つあたへ給ふ。此鉢みつから往来の客船に飛至て物をこふ。鉢に物満る時は、飛帰て四十二坊を扶持しけるとなり。されと末の世となりて、法力もうすらきけるにや。或時此鉢獵

船に飛至しかは、漁人魚をとりて此鉢に入けるより、飛引叶はすして、寺門僧坊もやうやく破壊しけりとなり。此山昔は八所の鎮守有ける故に八島と云しを、後人此山の屋の棟に似たれはとて、屋島と改けるとなり。其後又嵯峨帝御時空海本堂二王門を一夜に建立ありて、自作の本尊を安置し給ひしより、脇坊纔に三宇残りて、今も猶在之。爰にも縁起宝物なと数多あり。悉見侍れと事多けれは、爰にもらしつ。是よりあないの為、若僧ひとりを先にたてゝ東の方におりもて行に、洲崎堂の跡、内裏屋敷、奈須与一扇射ける所、継信石塔、同石碑なとあり。後小松院御宇至徳元年四月五日、奥州住人佐藤庄司末裔信寶といふ僧、此所に来て此石塔に向て、

痛しや君の命を継信の印の石も苔衣きてとよみたりけれは、石塔内より返し、

おしむともよも今まてはなからへし
身を捨てゝこそ名をもつきのふ

此事処の人語しまゝに記付侍る也。石碑は今は国守より建給ふ。彼教経の弓勢、今おもふもおそろしくて、

今聞も胸ひやす人の矢しま哉

終日此島めくりして、爰かしこの隈ゝゝ残らす見侍るに、（後略）

今は「屋島」と記載される屋島であるが、元は８つの鎮守がある島であることから「八島」と表記されていたという。それを後人が屋島山を「屋の棟に似たり」といったことから「屋島」と改められた。「八島」と表記されていたとき、屋島は島としてのイメージを持っていたのだろう。それが山の形状によって表記が変わったころから、名山にも選出されるような山としての屋島のイメージへと転換していたことが、漢字表記の違いから推測される。しかし、松山の「小豆嶋紀行」をみると、屋島を「此山」「此島」と山・島のどちらでも表現している。屋島寺に参詣するために屋島を登るときは「山」のイメージ、佐藤継信の墓など屋島にいくつかある源平合戦にちなんだ旧跡を巡るときには「島」のイメージを持っていたのだろう。上記引用箇所の下線部「終日此島めくりして」という部分は、その島イメージを反映させた書きようと言えるのではないだろうか。このように、どこへ訪れるかによって異なるイメージを形成していた人物が、近世において存在したことは非常に興味深い点である。

おわりに

さて、以上にみてきたように、屋島・屋島寺は創建から中世までは修行空間として修行僧などが参集する場所であった。近世に入ると遍路の札所として一般人も参集するようになり、屋島合戦の旧跡と合わせて見物のために人々が訪れる名所の一つとなったのである。近代に入り、そのような名所としての側面がどのように継承、もしくは変容したのかについては、本書別章に委ねることにしたい。

〈文末脚注〉

1　寺伝では鑑真の創建とされているが、平成 11 年度の史跡天然記念物屋島の発掘調査によれば、現在発掘された遺物をみるかぎり、鑑真のころまでさかのぼるものは発見されていない。このことから、鑑真を創建とするのは困難であり、鑑真は勧請開山といえよう。

2　明徳２年（1391）９月 28 日の西大寺末寺帳（西大寺文書）に屋島寺の名が見えることから、当時、真言律宗で西大寺の末寺であったことが確認できる。（出口 2013）

3　この梵鐘については、『鎌倉遺文　古文書編　補遺　第２巻』に銘文が挙げられている。

4　「高松市埋蔵文化財調査報告書第 62 集　史跡天然記念物屋島―史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ―」（高松市教育委員会、2003 年）、「高松市埋蔵文化財調査報告書第 107 集　屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　屋島寺」（高松市教育委員会、2007 年）

〈主要参考文献〉

香川県立ミュージアム 2014『空海の足音　四国へんろ展　香川編』香川県立ミュージアム

出口久徳 2013「屋島合戦図屏風を読む―「御堂」イメージを中心に―」、石川透編『中世の物語と絵画』竹林舎

松尾剛次 2013「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開―新発見の中世西大寺末寺帳に

触れつつ―」、『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』10
松原秀明編 1981『日本名所風俗図会 14　四国の巻』角川書店
屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島文化協会
頼富本宏・白木利幸 2001『日文研叢書 23　四国遍路の研究』国際日本文化研究センター

（担当：井上真美）

3　近世・近代の文芸にみる屋島・源平合戦

はじめに

本章では、近世・近代の文芸（漢詩・和歌・俳句・川柳・俚謡）等に詠まれた屋島の景色、屋島寺、源平合戦について紹介する。これらの作品は主に、近世後期「讃岐志」（D021・D022）、大正４年（1915）「讃州府志」（G018）、昭和８年（1933）『讃岐文芸読本』（G011）、昭和15年『木田郡誌』（M021）、昭和39年『新修高松市史』Ⅰ（M024）の「やしま詞花集」に採録されたものである。

Ⅰ　近世の文芸、漢詩と和歌

１．近世の漢詩、源平合戦と秋の月

近世の文芸の最初に紹介するのは、高松初代藩主松平頼重の寛永19年（1642）「麓塵集」（A063）の「讃岐国亀山八景之歌」である。

亀山晴嵐
　かめ山や嶺にあらしのはけしくて
　雲もかすみもいつちゆくらむ
八嶋秋月
　もろともにあはれはそらにしられけり
　屋しまにのこる秋のよの月
香西落鴈
　雲井よりおちくる雁の声きけは
　浦邊の波によるとなくなり
北海帰帆
　あま小舟いてゝも北の海はらに
　柁とりなほしかへる浦なみ
西浜晩鐘
　聞声の色はありけりわきてなほ
　この夕くれの鐘そものうき
男木島夕照
　遠からすまたちかゝらすなかめやれ
　は
　入日さやけき男木のしま山
姥池夜雨
　おり姫や池の蓮の絲をはへて
　こよひは雨にぬれて繰らむ
高松暮雪
　くれかけてふるしら雪のつもるより
　むれ高松もなへてみえつゝ

屋島を秋の月の名所として位置づけつつ、「あはれ」という言葉で、屋島における源平合戦を含み込んでいる。そしてこの頼重の歌に対して岡部拙斎（1593-1655）が答えた漢詩「屋島秋月」がつぎの七言絶句である（『高松藩祖松平頼重伝』（G021）に所収）。岡部拙斎は、播磨生、京都の菅得庵にまなび、水戸藩主徳川頼房に仕え、頼重の侍講となり、佐藤継信碑の銘文も記した。

落木蕭々屋山秋　山光水色溌吟眸
源平矛盾英雄尽　月影空随一釣舟

頼重の歌に答え、屋島の秋の月、源平合戦、そして山の光や釣り船等の景色を加えている。この秋の月と源平合戦は、近世の文芸の一貫したテーマとなる。以下、大まかな編年順であるが、題、作者名、出身、身分、出典を記して、屋島関連の漢詩を分析したい。

①「壇浦懐古」 江村宗珉（1608-1661）、京都生、尼崎藩儒者（「讃州府志」）

漠々風煙落日愁　征鞍吊古下寒洲
沙場自傍青山遶　海水空縈孤島流
万壑崢嶸宮殿尽　長河寂寞甲兵収
潜然相憶旧時涙　況又不堪芦荻秋

②「屋島懐古」 桂山義樹（1679-1749）、幕府儒者、書物奉行（「讃岐志」「讃州府志」「翁嫗夜話」（D008））

開門風浪怒難平　此地曽屯十万兵
金鏑頻飛魚鼈窟　楼船空保鳳凰城
宋帝遺臣迷北極　周王君子尽南征
不知英魂何処所　月明波上夜吹笙

宮車一去帝王州　大海風雲寄冕旒
井底有縁還玉璽　水浜誰復問膠舟
舞姫紈扇随潮落　飛将彫去学月流
那識寒烟蓑草外　幾人曽倚望郷縷

③「登屋島」岡長祐（？ -1767）、高松藩の儒者、記録所総裁（「讃岐志」「讃州府志」）

絶頂登臨北斗齋　石壇人去暮花低
月中風度千林竹　似有簫声帰故渓

④「登屋山」後藤芝山（1721-1782）、高松藩の儒者、藩校講道館初代総裁、柴野栗山の師（「讃州府志」）

登臨日落雨初乾　満目千山霧裡看
回磴欝森盤樹杪　飛泉凄冷泻林端
雲深古寺梵声静　草没残碑月色寒
幽壑時時陰鬼哭　長教遊客涙闌干

⑤「屋島懐古」中村文輔、高松藩の儒者、延享元年（1744）「栗林荘記」（「讃岐志」）

山擁大荒地勢雄　激波相撃折西東
仙鐘遙響鳥声外　帝座忽看蜃気中
一隊旌旗雲出畳　千房棟宇草連空
女牆曽照旧時月　独落江流似学弓

⑥「屋島懐古」那須資明、18 世紀後半の旗本（「讃州府志」）

屋島戦塵元暦年　源軍金鼓震城辺
朱旗欲乱飜雲樹　昼鷁終飛映海天
檀浦浪花随夕散　栗山風月経秋円
猶余平氏轅門跡　鬼哭応知夜雨前

⑦「屋島懐古」松平頼儀（1775-1829）、高松藩 8 代藩主（「讃岐志」「讃州府志」）

宮車一出狩南州　洋海風雲寄冕旒
戦合縦横金鏑乱　城高左右旆旌流
臨営月影懸愁梦　打岸潮声落客舟
遙憶英魂何所処　蒼々暁色星河悠

⑧「屋島懐古」梶原藍渠（1763-1834）、讃岐の商人、後に高松藩士、史家（「讃岐志」「讃州府志」）

先年白日一朝昏　西狩翠華出九閽
八歳天皇何所識　徒成孤注博乾坤

⑨「巌賦所見」後藤漆谷（？ -1831）、高松の商人、文人（「讃岐志」「讃州府志」）

獅巌眺望所人伝　聯杖躋攀半嶺嶺
渓鳥不驚吟客側　風帆欲到酒盃前
数挙春島玻璃海　一刷晩霞金鍍天
元暦乱離誰又説　吾曹公在太平年

⑩「屋山懐古」高尾竹渓（？ -1848）、高松藩の儒者（「讃岐志」）

屋山秋老一寥然　此処戦攻元暦年
水凜血池菁寺外　苔埋碑銘石橋前
風声入樹驚兵走　紅葉映霞訝幟連
岸畔潮流猶有怒　英魂今日在何辺

⑪「屋島懐古」片山沖堂（1816-1888）、讃岐の儒者、史家（「讃州府志」）

落日無光草木悲　行宮何処認荒基
背山前水戦争地　一汴二杭漂白時
英気不磨蹄印石　腥風猶見血成池
独憐黄土埋忠骨　便是南州堕涙碑

⑫「舟中望屋島」細川林谷（1782-1842）
嘉永元年（1848）序「林谷詩鈔」（A081）、讃岐の篆刻家、漢詩人

雲遊霞宿鬢斑々　東走西奔猶未還
莫怪舟中頻願望　元来屋島是家山

作者は、ほとんどが高松関係者で、高松藩主⑦、高松藩・讃岐の儒者③④⑤⑩⑪、商人・文人⑧⑨⑫、その他、他藩・幕府の儒者①②、旗本⑥となる。特に⑥の那須資明は、那須与一につながる家である。那須家は近世一時烏山藩主となったが改易され、元禄 14 年（1701）旗本交代寄合那須衆の筆頭となる家である（工藤編 2008）。那須資明は、和歌や漢詩、絵画等を嗜む文人であり「那須家軍器図」（大田原市那須与一伝承館所蔵）などを作成しており、那須家の歴史に関心が高かった（那須与一伝承館 2010）。ただ漢詩には与一のことは取り上げず、源平合戦全体の描写となっている。

これらの漢詩に共通するのは、すべて源平合戦が詠み込まれていることである。合戦自体を表す、①甲兵、②十万兵、⑥源軍・平氏轅門、②⑥⑦金鏑金鼓、⑨⑩元暦、⑪戦争地をはじめ、安徳天皇や内裏である②帝王、⑤帝座、⑧八歳天皇、①宮殿、②⑦宮車、⑪行宮の言葉がある。また戦死者の悲哀を②⑦⑩英魂、④⑥鬼哭で表現する。屋島合戦の特定の人物や史跡も多く、那須与一について触れる②⑪、佐藤継信碑と思われる④草没残碑、⑩苔埋碑銘、⑪埋忠骨や、血池⑩⑪を含む内容もある。

一方で、松平頼重以来のテーマとなる秋と月、夜については、秋①⑩⑪、月②③④⑤⑥⑦、落日等①④⑨⑪と、これもほぼすべての漢詩に共通する。そして岡部拙斎が付加した波・風・霞・霧・雲等の屋島の景色を構成する要素も、①風煙、④霧、⑥檀浦浪・雲、⑦風雲・潮声、⑩風声・潮流と随所に登場する。また本書第 7 章で紹介した波や風の音から源平合戦を想起する文も、②波上夜吹笙、③簫声等にあり、紀行文との共通性がうかがえる。

屋島の景色に関しても、③絶頂、④回磴欝森盤樹杪、⑤山擁大荒地勢雄、⑨獅巌眺望、聯杖躋攀半嶺嶺など、山と森、獅子霊巌の様子が詠まれ、屋島寺についても④古寺梵声などで表現する。幕末の細川林谷は、「元来屋島は是れ家山」（⑫）と、屋島の形状を述べた漢詩を詠む。

2．近世の和歌

近世の和歌は採録作品が少なく、『讃岐国名勝図会』を補訂発行した『古今讃岐名勝図会』（J012）の、増補項目に「可正桜」がある。可正桜は、屋島寺四天門前の老桜であり、高松藩士松平半左衛門可正が寛文 5 年（1665）に植えた。当時可正が詠んだ和歌として以下の 3 首がある。

此の寺の庭を植ゑおかん
　わが後の世の花がたみなり

花の時人きてもしも問ふならば
　可正桜と名を知らせてよ

空蝉のからはいづこに埋むとも
　名をは屋島の峯に置くなり

3 首目に屋島が詠まれているが、いずれも当時のものか不明であり、「可正桜」に限定された内容である。本格的に屋島が詠まれるのは、備中の国学者藤井高尚（1764-1840）の和歌である。「屋島懐古」と題して、「弓はりの月を屋島の峯に見て、ともの音せし昔をを思ふ」（『木田郡誌』）とある。また「いくさ人ふきし小笛のふる声を、のこす屋島の峰の松風」（『新修高松市史』）がある。いずれも、屋島の月や松風から想起する小笛、源平合戦の史跡など、近世の漢詩と同様の傾向である。藤井高尚の「松屋文後集」によると、高松に来訪し月見をしており、高松からみた屋島の景色を詠む（『讃岐郷土読本』（G013））。

梓弓矢しま遙に見えぬなり
　薄霧なびく月のよはには

うきみるのよるかと月に見えたるは
　磯の松影うつるなりけり

ここでも屋島と弓、月を主に霧や松等の近世の主要なテーマが詠み込まれる。

II　近代の漢詩と和歌

1．近代の漢詩

近代に入り明治前半の漢詩には、近世と同じく源平合戦、秋、月が詠まれている。

「夜過屋島有懐那須與市」水越成章（1849-1933）神戸生、漢詩人（「讃州府志」）

射扇当年跡已空　片帆吹度矢洲風
剰有波心余古影　一痕新月大於弓

「屋島秋月」久保蘿谷、讃岐の漢詩人、片山冲堂門（「讃州府志」）

落木秋寒古戦場　流光空見映僧坊
鷺輿一去無消息　片山依然六百霜

正岡子規は、明治 16 年（1883）松山から上京する際に船で屋島を通過した（「東海紀行」（G017）。この時子規は 16 歳、松山中学を退学し東京へ行く途上であり、俳人として世に出る前である。屋島以外にも一ノ谷の敦盛墓、生田森の源平の古戦場、楠公神社に参詣している。ここでは「八島ヲ前面ニ望ム、是レ義経ノ古戦場ナリ、古ヲ感ジテ作ル」とある。

万里吹来波浪風　追思往事已成空
青山一帯無不見　唯有淡濃烟霧籠

波と風、山、霧等の屋島の風景、源平合戦の直接の記述はないが、往事を思うとの言葉と紀行の内容から推測できる。

2．与謝野夫妻と近代の和歌

明治以降、近代の和歌で特筆すべきは、与謝野鉄幹・晶子夫妻の屋島に関する歌である（菊池寛記念館編 2007）（G031）。昭和 6 年（1931）徳島、香川、愛媛をめぐった夫妻は、10 月 29 日鳴門から自動車で午後屋島に到着した。昭和 4 年に開通したケーブルカーに乗り山頂へ向かい、屋島寺・獅子の霊巌をまわる。このとき夫妻は、明善高等女学校教諭の椎名六郎（後の香川県立図書館長、図書館学）・加藤増夫（歌人、郷土史家）の案内で、山上から源平合戦の説明を受けたとある。このように高松市や保勝会は著名な文人や画家を招いて宣伝をおこなっていた（田井 2014）。

つぎに屋島に関する、与謝野夫妻の和歌をあげる。

与謝野晶子

①山に見ぬ屋島の浦に浮ぶ藻と
　くらべて城の高さの勝る

②地を相し屋島内裏の置かれしを
　思ふ廷尉はさてのちのこと

③木田郡塩を採る日は靡く穂も
　鳴る葉も無くて海に隣す

④屋島なる物見の台の石の窓
　文治二年のきさらぎを置く

⑤源平はいさや波より現はるる
　扇の船のあれかし屋島

⑥屋島浦うす丹の色の塩田も
　若き與一のおもかげとなる

⑦客中の秋の半日あはれなり
　屋島の上をまろく歩みて

⑧屋島村古高松にそこばくの
　けぶりの立ちて讃岐潟晴る

⑨塩田は大槌小槌女木男木の
　浮島のごとたのしまぬかな

⑩竝竝に平家のすゑの隠るなど
　云はぬ屋島の悲しかりけれ

⑪平家ゆゑ名のあはれなるここちして
　遍路と入りし屋島寺かな

与謝野鉄幹

①屋島より見る瀬戸の島ほのぼのと
　みな青雲に浮くけしきかな

②真下なる松の木末の黒くして
　入江ひかりぬ屋島に見れば

③見下ろせる屋島の村の黄なる田も
　平家の貴女の櫛箱に似る

④かしこぞと内裏のあとを屋島より
　指さす方も田の黄なるかな

⑤屋島にて與一を聞けば身に沁みぬ
　我が恃めるも一心なれば

鉄幹に比べて晶子の歌が多く、源平合戦、屋島寺、風景いずれも歌に取り入れている。同じく眼下に広がる塩田や刈り入れ前の黄金色の田についても触れている。また与謝野夫妻を案内した加藤増夫（博揚）は、この時かどうか不明であるが、源平合戦の史跡、菊王丸の墓について歌を詠む。郷土史家でもあった加藤の歴史への視点が感じられる。

稲刈られ菊王丸を葬りし
　積石墓はさむざむと見ゆ

檀の木ふるびて赤き実をもてり
　菊王丸がおくつきどころ

ただこの時期の和歌に詠まれるテーマは、源平合戦の史跡から屋島の風景に変化している。晶子の③⑥⑧⑨は塩田、①⑦と鉄幹の①②は屋島の風景である。

また明治 38 年 11 月 12 日高松市開庁 14 回記念祝典において、屋島山へ楓 800 株が植えられた（『古今讃岐名勝図会』（J012））。その際の小田知周市長の歌は屋島と楓を詠み込む。

今日かかる屋島の山の若楓
　弓手も女手もしけれとそ思ふ

わか楓かかる屋島の山里は
　日あたりもよし生しけるらん

屋島の観光化を進める高松市長の意気込みが伝わりつつ、観光の屋島への変化が見て取れる。明治から戦後にかけての次の歌も、景色を詠むものが多い。

「屋島山上にて」坂正臣（1855-1931）、名古屋生、御歌所歌人（『木田郡誌』）
　ここは何かしこは何と教へられ
　　見やるむかしのたたかひのあと

「屋島山に登りて」猪熊夏樹（1835-1912）、香川生、国学者（『木田郡誌』）
　やしま波沖つ汐路にしほけふり
　　けふるあなたや吉備の遠山

「宇野より船にて高松に渡る」昭和 9 年、尾上柴舟（1876-1957）津山生、国文学者、書家（水甕社編（1968））
　午後深く内海霞む日ぐせなれや
　　蒼茫として遠し屋島は

安宅苔花、戦後徳島の歌人（『新修高松市史』Ⅰ）
　朝もやにつつまれて立つ談古嶺
　　いにしへの話は静かにきけり

安宅苔花の歌には、明治 30 年村雲尼公（九条日浄 1896-1962）が源平合戦の話を聞いて命名した、新しい名所「談古嶺」も詠み込まれる（『木田郡誌』）。また鉄幹の門人である北原白秋（1885-1942）は、「六月五日屋島に来りひた暑し、少女が群に我かこまれぬ」と、源平合戦・屋島の景色もない、観光した自身を詠む歌も登場する。

また和歌ではないが、詩も多く作られており、「平家蟹」古川賢一郎、「屋島にて」河西新太郎等がある（いずれも『新修高松市史』）。近代西欧のまなざしについては本書第 10 章に詳しい。西欧人の詩として、イギリスの詩人エドマンド・ブランデン（1896-1974）「屋島を訪ねて」（1949）には、「まことに長い屋根のように」「強者らが霊鎮まるこの丘」「突如眼前に開く新しい驚き、髣髴の青海原」「ここにもまた土産品や茶店や街路がある」と屋島の形状と源平合戦、屋島の景色、観光が描写される。一方でフランス

の詩人・外交官ポール・クローデル（1868-1955）の「屋島山」は、「屋島山登り来りて、今ぞ見る、蒼海の波浪、大和衣装に織りなせる、光芒の帯の美しさ」とある。屋島合戦等はなく、屋島に登りそこから見える景色の美しさを表す。

3．近代の俳句

近世の俳句はほぼ掲載されておらず、蕉門十哲で美濃の各務支考（1665-1731）の「秋の野も花ともさかで平家蟹」がある。近世の地誌に登場する平家蟹は、近代の和歌・俳句、後述する川柳でも数多く登場する。

南無庵（長尾）真海（1860-1912）、香川
白鳥（『木田郡誌』）
　木枯れの浪に怒るや平家蟹

栢亭（『古今讃岐名勝図会』）
　潮引て見る目も暑し平家蟹

藤乃屋浪好
　いかめしき顔はみゆれと平家がに
　　琴をしらふるてしなやさしも

また近世、満願寺住職令中がまとめた「阿字八景記」の庵治八景「屋島の晴嵐」には、暈峰「能登殿の矢風か沖の春あらし」の句がある（『庵治町史』（M036））。源平合戦の能登殿平教経の矢風と春の嵐のすさまじさを表す。高松側の八景では、松平頼重の「屋島秋月」であったが、庵治側では「屋島の晴嵐」となる。後述する『山家鳥虫歌』でも志度に八島颪が吹くとあるように、地域別の微細な小気候の状況も表現している。

近代の俳句にも『木田郡誌』に、「屋島懐古」としてまとめられるように、源平合戦、秋の月等近世から続くテーマを詠む句もある。

芦江
　矢叫のあとも見えず春の海

久保不如帰（1849-1914）香川
　弓はりの月や屋島のほととぎす

久保不如帰（惣門跡句碑）
　夏草やここにもひとつ髑髏

しかし高浜虚子（1874-1959）を代表とする「ホトトギス」派の多くの俳人の句には、和歌と同じく観光の屋島が詠み込まれていく。虚子のつぎの句も秋の屋島観光である。

　駕寄せの太鼓たたくや草紅葉
　秋の山上り下りの茶店かな
　秋の山日いっぱいに下りけり

登山駕があることから、昭和 4 年の屋島ケーブルより前と判断されるが、駕での上り下り、茶店等、屋島観光の一端が詠まれている。つぎにみるのは香川県内の俳人で、大正 12 年（1923）創刊、香川の地方俳誌「紫苑」で活躍、または昭和 23 年（1948）『ホトトギス同人第二句集』に掲載された人々である。

村尾公羽、香川高瀬、主宰
　鳥わたる屋島の端山にぎやかに

前川舟居　香川、主宰
　雲の峰裏より立ちし屋島かな

森婆羅（1877-1970）香川高瀬
　萩にふれて芒にふれて屋島駕篭

久保五峰、香川
　旗立てて屋島にふるき遍路宿

白川朝帆、香川
　屋島嶺の茶店の落花海へ掃く

平尾春雷、香川
　次の駕すこしおくれし秋の山

三木朱城、香川小豆島
　潰えたる相引川の芦の花

佐々木令山（1899-1966）香川
　裏山は屋島につづく月の庵

そして香川以外の俳人の句である。

小山白猶、徳島ホトトギス会を結成
　屋島駕くらきによせて月の茶屋

青木月斗（1879-1949）大阪満月会を結成
　春潮に乗る大船や壇ノ浦

田中王城（？ -1939）京都生
　短夜や開け放たれる大屋島

前田普羅（1884-1954）東京生
　大空の屋島平に明け易し

酒井黙然（1883-1972）福岡生、愛媛の医者
　落葉掻き北の嶺より現はるる

岩木躑躅（？ -1971）淡路生、接骨医
　麦打つや屋島の山の登り口

山口誓子（1901-1994）京都生、俳人
　晩涼の塩焼くけぶり壇ノ浦

松尾いはほ（1882-1963）京都生、内科学者
　冬雨や平家の話みなかなし

青木月斗、松尾いはほが源平合戦を詠むが、その他は虚子と同じく、駕、茶屋等観光の屋島、和歌と同じく塩田、そして近世から続く秋と月である。

近代においては、和歌・俳句、特に俳句において源平合戦から観光の屋島へと変化していることがわかる。また近世の漢詩に比べて、近代は実際に屋島山に登る、頂上から眺望する視点が多い。これらも駕やケーブルカー等の交通機関の発達による、訪れやすくなった屋島を表す。

III　川柳

川柳は、すべて『讃岐文芸読本』（G011）、『木田郡誌』（M021）掲載のものであり、時代は全く不明である。つぎの「屋島落、壇の浦、那須与一、錣引、弓流し、佐藤継信、平家蟹」の 7 項目 24 首がある。

屋島落
鐵漿壺は積んだかと聞く屋島落
屋島攻め船を漕せる下手講師

壇の浦
壇の浦笏で四五杯盛つて食ひ

那須与一
源氏から大工が出たと慰まれ
玉虫をよけてねらふが要なり
顔見い見いよつ引いてひやうと射る
誉められて与一も鎧しぼるなり
二本目は与一も困る扇かな
要を射られて散り散りになる平家がた

錣引
景清は尻餅四郎はつんのめり
おはぐろにしろと景清船へ投げ
千の手で引くに三保谷気がつかず
錣から切れずば首をひんぬかれ
三保谷の帰りに襟に日が当り

弓流し
義経さん何か落したと能登守
義経の弓はあらめにひつかかり
弁慶に一本借りて弓を取り
弓流す日も鎌倉殿はふところ手

佐藤継信
継信も百に一つはあたらぬ気
胸板をすえて忠義の的に立ち
継信を損にして置くかちいくさ

平家蟹
赤旗の怨霊海を横に這ひ
平家の怨霊打物は鋏なり
平家の怨霊ゆでても赤くなり

いずれの川柳も、源平合戦、特に「平家物語」の名場面をテーマとしている。そして川柳の基本といえる風刺、滑稽を織り交ぜた内容である。

Ⅳ　俚謡・流行歌

１．近世の俚謡・歌

近世の俚謡・歌として、まず明和９年（1772）刊､天中原長常南山編『山家鳥虫歌』（A078）に、つぎの屋島関連の俚謡がある。

志度はよい町西北をうけ、八島颪はそよゝゝと
八島山には大谷小谷、なぜにこなたに子が無いぞ

屋島の景観を詠んだ歌であり、後半は後述する郷土俚謡にも採録される。その他、藩の参勤交代で使用する船の船頭の船歌として、讃岐丸亀藩（『新編香川叢書文藝編』(A087)）、伊予松山藩（『松山市史』史料編２（A084））のものが残る。いずれも「八嶋」「かい揃」の二種類があり､「八嶋」の前半は、讃岐沿岸の屏風浦、崇徳天皇陵、志度などを紹介し、後半は源平合戦を謡い、佐藤継信の話が中心となる。

八嶋と聞はなかゝゝに爰は古しへ源平船となきさのたゝかひに沖は平家の御陣より〇弓箭取は大将乗常続く味方は大友左京木朽原田松浦等船を渚に寄られて陸の敵を待に扨も源氏の御陣より〇数多の武者が見へにける中にとりわけ大将召した装束はなやかに〇赤地の錦のひた（た）れに〇侈緋おどしの鎧めし五枚兜を召れつゝ〇真先かけて見へにける続く兵おふしうの佐藤兄弟次信亀井片岡伊勢駿河むさしかいぞん三保のやも〇しのきをけつりたゝかひし〈エイヤヨ〉エイヤコノ三重△沖にまばらの合引のエイ汐のひかたの荒磯に〇寄せくる浪の音そへて〇ものすさましき段の浦〇心を尽しかんたんし是をいかにとたづね君に御おんの次信も〇名は高松にとゞめ置今は名のみを残し〇かたみの石に蔦衣来て見よエイヤ是もお僧のつらぬ給ひし歌ぞかしおしむとも〇世も今迄はながらへし身を捨てこそ名をば次信と〇よしみも断りけになおしむ弓取はたれもかくこそ有べきと跡をわひしく打詠め

「かい揃」は「八嶋の外も静かにて箱に納むる兜貝、恋を信濃の木曽路貝」と各地の名所を貝にたとえた内容である。屋島は兜によって屋島合戦を想起させる。

２．郷土俚謡、流行歌

その他、郷土俚謡、流行歌として、剣舞節､さのさ節「屋島山」､四季節「屋島の四季」､鴨緑江節､国境警備節「屋島唄」「屋島行進曲」等がある。すべて昭和15年(1930)刊行の『木田郡誌』（M021）採録分であり、近世から戦前にかけて作られたものと考えられる。さのさ節は明治30年（1897）頃、鴨緑江節は大正年間、流行歌として親しまれた（『日本国語大辞典』)。

（１）郷土俚謡

一、屋島壇の浦山ほととぎす
　　啼いて昔をしのばせる
一、屋島山から八栗を見れば
　　山と山とに橋ほしや
一、平家いとしや盛の花よ
　　仇な一夜の風に散る
一、都はなれて浪路が枕
　　千鳥鳴く夜はねむられぬ
一、波の屋島でかりねの夢が
　　さめて驚くときの声
一、昔ながめし雲井の月を
　　今じや屋島の浦で見る
一、見ても見事な屋島の山は
　　根から生えたか浮島か
一、屋島山には不喰の梨よ
　　獅子の霊巌これ不思議
一、屋島山には遊覧電車
　　恋のドライブ・ケーブルカー
一、昔先年屋島の戦
　　今にござんす血の池が
一、饂飩蕎麦切りや屋島の戦
　　駒を早めて切りかかる
一、いとし可愛や継信さんは
　　四国屋島の土となる
一、屋島小坂に鳴く時鳥

声はすれども眼に見えず
一、屋島山から八重垣見れば
痩せた女が三味を弾く
一、屋島山から飛んで来る鳥
銭が無いのに買ふ買ふと
一、屋島八栗の間は壇の浦
根来白峰稚児が嶽
一、蔦は根来に葉は白峰に
花は屋島の嶽に咲く
一、示度で餅搗く屋島でちぎる
播磨灘から杵が出た
一、屋島八栗の間の小娘は
屋島小蔭で色白い
一、屋島山にも大谷小谷
何故にお前さんにお子がない
一、屋島浦生は塩船どころ
沖へ出船の帆が続く
一、思ひだよりに宝笠きせて
屋島壇の浦でうろうろと
一、船は出て行く屋島の沖へ
又と逢ふやら逢へぬやら

（2）流行歌

剣舞節

一、屋島山から眺むれば
安徳天皇や菊王丸
相引勝橘目の下に
惣門柱が北南
洲崎の御堂が西東
登りつめたる五剱山
五剱山より北見れば
庵治の名所や才田屋の
沖には白帆走り船
どんと棹を引き廻し
庵治の港へとろとろと

さのさ節

一、屋島山
古蹟なければ只の山
漢の高祖も秀吉も
天下取らなきゃ只の人
天下取らなきゃ只の人　サノサ

四季節

屋島の四季

（一）春は花見に屋島山
気も浮き浮きと畳石
恋を咲かせた可正桜
可愛い順礼の笠に散る
（二）夏は涼みに屋島山
恋のドライブ心地よく
青葉の風もそよそよと
夜の霊巌懐しや
（三）秋は月見に屋島山
招く薄に誘はれて
昔を偲ぶ古戦場
月に思ひを談古嶺
（四）冬は雪見に屋島山
床しい眺めの銀世界
花を咲かせた相生の
松の風情も美しや

鴨緑江節

一、屋島山世界に誇るアノ公園地
輝く誉はアラ相生のヨイショ
松の緑はヨッコラ千代かけてヨ
栄ゆるマタ町こそ目出度けれ
チョイチョイ
一、名産は塩に薬にマグネシウム
酒の香もよい醤油もよい
国へ土産は屋島焼
源氏餅には平家蟹
一、虫が鳴く秋の眺めは屋島山
登る小径に萩桔梗
風情を添ふる女郎花
其処に古戦場の月がさす
一、雲をしのぐ五剱山下の栗山堂
鍛引きやら弓流し
的射し与一は花の武士
屋島内裏に月がさす

国境警備節

屋島唄

一、此処は日本の二十五勝
海岸屋島は楽々と
登る山路はケーブルカー
一、昔源平の古戦場
那須の与一や継信の
勲をしのぶ談古嶺

屋島行進曲

（一）此処は国立公園地

名勝旧蹟数多く
其名も高い屋島山
（二）周遊ドライブ心地よく
遊覧電車で相引の
川を渡ればケーブルカー
（三）昔を偲ぶ瑠璃宝池
四国霊場の屋島寺
獅子の霊巌談古嶺
（四）眺め見飽かぬ瀬戸の海
墨絵の島々美しく
沖に連る真帆片帆
（五）出船入船賑やかに
浦生港の花と咲く
富田工場の偉大さよ

これまでの文芸作品に登場する、屋島の景観、源平合戦、塩田やケーブルカーの観光等、すべての要素が含まれる。例えば、「屋島壇の浦山ほととぎす」「屋島小坂に鳴く時鳥」にみえるホトトギスは、俳句にも「弓はりの月や屋島のほととぎす」とあったが、実はもっと古い歌にも詠まれる。延宝５年（1677）「玉藻集」（D002）は、屋島の最初に「古今和歌集」の「ほととぎす鳴声きけは別れにし、ふるさとさへそ恋しかりける」の歌がある。現在も香川の県鳥であるほととぎすは、屋島を表す鳥として歌い続けられた。四季節には「秋は月見に屋島山」とあり、近世の漢詩以来の秋の月も継承される。また「屋島行進曲」には、昭和９年指定の国立公園、周遊ドライブ、遊覧電車、ケーブルカー等、当時の観光の諸相が含まれる。大正９年（1920）創業の富田製薬屋島工場も登場する。

Ⅴ　近代の皇族の屋島来訪

近代の文芸からみえてくる観光の屋島への方向性は、特に明治 33 年（1900）以降の皇族の屋島来訪が重要な役割を果たしている。皇族最初の登山は、先述した①明治 30 年村雲尼公で、屋島の合戦の話を聞き「談古嶺」と命名し新しい名所が登場した。続いて②明治 33 年６月小松宮彰仁が、日本赤十字社香川支部総会で来県した際に屋島へ登っている（『木田郡誌』（M021）、以下同）。③明治 36 年 10 月 11 日には皇太子時代の大正天皇が徒歩登山し、不喰梨、獅子の霊巌、談古嶺を来訪し、郡民が記念の「仰之碑」、記念式・記念運動会を開催、つぎの記念日の唱歌を作った。

一、今は昔の明治の世
三十とせ余り、六つの年
今日の此の日に、畏くも
日嗣の御子の、登らせて
海原かけて、国原を
国見せさせし屋島山
二、其いでましを、偲びつつ
あきつ飛びかふ、秋の空
老も若きも、打集ひ
遊ぶ遊びの、楽しきを
いざや歌はん、諸共に
とはに仰がん、屋島山

天皇の来訪から歌が生まれたが、ここには源平合戦、屋島の景観はない。④大正３年（1914）３月 21 日三皇子（皇太子（昭和天皇）・秩父宮・高松宮）、⑤大正５年８月７日賀陽宮恒憲王が屋島、安徳天皇社へ参拝した。⑥大正 11 年 11 月 20 日には摂政宮（昭和天皇）が、陸軍特別大演習で来県、屋島山を徒歩登山し、獅子の霊巌、談古嶺、北嶺に来訪、「御登臨之碑」を設置、その後記念式、記念運動会を実施している。

①大正 12 年５月 11 日久邇宮家（邦彦王・妃・良子・信子王女）一行は、屋島の風景、屋島寺、古戦場を来訪、北嶺にて「遊鶴亭」の命名を行う。⑧大正 14 年４月 19 日李王、⑨同 10 月 17 日朝香宮両女王、⑩同 12 月６日北白川宮大妃が来訪。⑪昭和９年（1934）５月梨本宮守正王は、県設愛国飛行場開場式に出席、ケーブルカーで登山、屋島寺、獅子の霊巌、談古嶺を来訪、南展望台で大川中学校長の源平合戦の講演を聞き「瞰蹟亭」を命名する。⑫昭和 10 年８月 16 日澄宮崇仁親王（三笠宮）は、四国各県の見学の途中、ケーブルカーで登山、談古嶺で丸亀高等女学校長の史跡、多田少佐の戦術上の屋島合戦の講義を聞き、獅子の霊巌で展望した。戦後の⑬昭和 28 年９月第８回国体で屋島陸上競技場を訪問した昭和天皇は「いにしへの

書（ふみ）に名高き屋島見ゆる　広場にきそふ人のたのもし」と、「平家物語」などに名高い屋島と和歌を詠んでいる（『新修高松市史』Ⅱ（M025））。

このように近代の皇族の来訪は、屋島寺、獅子の霊巌など、近世以来の名所を訪れ、徒歩やケーブルカーを利用し、源平合戦の話を聞くなど、近世・近代の紀行文や文芸にもみられた内容といえる。一方で「談古嶺」「遊鶴亭」「瞰蹟亭」の新名所の命名、大正天皇、昭和天皇の来訪時の記念碑建立、記念式、記念運動会の開催、そして記念日唱歌や天皇自らの歌等、新しい文芸も作りだされたといえる。

おわりに

近世・近代の文芸（漢詩・和歌・俳句・川柳・俚謡）などに詠まれた屋島の景色、屋島寺、源平合戦について、作品紹介を中心にまとめた。近世の漢詩では、源平合戦を中心に屋島の景色をテーマとし、和歌では松平頼重の「屋島秋月」以来、秋の月が主要なテーマとなった。近代以降の文芸では、これらのテーマが引き継がれつつ、明治後半の観光の屋島の進展により、特に俳句において源平合戦から観光へと変化していることがわかる。川柳や郷土俚謡等、近世・近代の判別が難しい作品も多いが、ホトトギス派等の新しい潮流の俳句とはテーマが違っていた。これらは漢詩・和歌・俳句・川柳・俚謡、それぞれの性格、目的、成立背景、作者の身分など、検討すべき要素は多い。

また近世の漢詩に比べて、近代は実際に屋島山に登る、頂上から眺望する視点が多い。これらも駕やケーブルカー等の観光に伴う交通機関の発達による、訪れやすくなった屋島を表す。それは近代における皇族の屋島来訪の増加からもいえる。その皇族たちは、源平合戦の史跡を見聞しつつ、新名所を創設し、地域行事の開催のきっかけを作り、唱歌や歌を詠むなど新しい文芸の担い手にもなった。近世の遠くから遠望する屋島、源平合戦の英魂・怨念など近づきがたい屋島から、近代の観光で登山する屋島、親しみやすい屋島へ変化したといえる。

〈主要参考文献〉

菊池寛記念館編 2007、菊池寛記念館 16 回文学展『秋風遍路、四国路の与謝野寛・晶子』菊池寛記念館
工藤寛正編 2008『江戸時代全大名家事典』東京堂書籍
水甕社編 1968『尾上柴舟全詩歌集』短歌新聞社
田井静明 2014「香川県の保勝会の国立公園指定運動と瀬戸内観光の特徴」香川県立東山魁夷せうち美術館『瀬戸内海国立公園指定 80 周年記念事業　美しき日本瀬戸内の風景』
那須与一伝承館 2010『那須家の芸術と学問』
皆吉爽雨等編 1948『ホトトギス同人第二句集』かに書房
『日本人名大辞典』講談社、ジャパンナレッジ版
『日本国語大辞典』小学館、ジャパンナレッジ版

（担当：東　昇）

4　近世における屋島の顕彰

はじめに

本章では、松平氏治世の高松藩における屋島顕彰活動及びその整備事業を中心に、近世において屋島がどのように扱われてきたかについて述べる。高松藩松平氏による統治は初代松平頼重より 11 代の頼聰までの約 230 年にわたる。ここでは特に初代の頼重と 2 代頼常、9 代頼恕の治世における顕彰活動について取りあげる。

Ⅰ　松平頼重の治世

松平頼重は元和 8 年（1622）に水戸藩主徳川頼房の長男として生まれた。その出生については、父である初代水戸藩主徳川頼房が、当時、尾張・紀伊の両家に男子がいないことを憚って、堕胎を命じたが、家臣であった三木仁兵衛之次がひそかに産ませ育てたと伝えられている。寛永 16 年（1639）に常陸国下館 5 万石の領地を拝領し、その後、寛永 19 年に讃岐高松 12 万石を拝領した。その治世では上水道の整備、塩田開発などをおこなったため、頼重という人物は「名君」として描かれる。その後家督を頼常に譲り、元禄 8 年（1695）に死去している。

そのような頼重の治世における屋島の顕彰は高松入封直後から確認できる。「英公日暦」（F010）寛永 19 年 8 月 28 日の条には以下のようにある。

【史料 1 】

一　八月二十八日屋島江被成御座、屋島寺迄（カ）縁起など御聞被成、夫ゟ次信石塔御覧被成、御舩ニ而御帰り

ここでは入封直後の頼重が屋島史跡を巡察する様子が描かれている。またそのおよそ 1 年後には佐藤継信の墓を整備したことが確認できる（写真 1 ）。

その際、岡部拙斎に命じて銘文を作成させたようである。「讃岐国大日記」（D005）の寛永 20 年 5 月の条に銘文とともに、佐藤継信の碑を作るに至った経緯が記載されている。また、「讃岐府誌」（D006）の屋島の項目にも「元暦二年、罹源義経兵火、而悉灰燼矣。兵士佐藤嗣信討死ス。其墳有山麓。寛永中、有刺史之命、建碑録銘」とある。また、整備の経緯は不明であるが、大夫黒の碑も同じ時期に建てられている（写真 2）。裏面には「寛永癸未」とあり、これは寛永 20 年のことであるため、佐藤継信の墓とほぼ同時期に建てられたと推察できる。

さて、先に述べたように、塩田の開発をおこなった頼重であるが、その一方で、旧跡としての相引川を保存することにも力を入れている。もともと相引川は生駒氏治世の寛永 14 年に西嶋八兵衛によって堤が作られ、水田や塩田になり、潮の満ち引きによって陸地が現れるさまが見られなくなってしまったったと伝えられている。

屋島風土記編纂委員会（2010）によると、福岡新橋から木太滑浜海岸、富岡海岸（春日川・新川尻）に堤防を築き、その南側の地域に水田を開発した。また、その際、現在の国道 11 号の前身である下往還道路ができ、その時「相引の瀬」が埋め立てられ塩田が作られたということである。

しかしながら、頼重は正保 4 年（1647）に、

写真１　佐藤継信の墓　（左：表面、右：裏面）

（撮影：棟田成紹）

写真２　太夫黒の碑　（左：表面、右：裏面）

（撮影：棟田成紹）

写真３　総門跡　現地説明板

（撮影：棟田成紹）

写真４　総門跡　標木

（撮影：棟田成紹）

旧跡であるとして、潮の満ち引きによって東西から潮が満ちるように堤を壊したと伝えられている。「翁嫗夜話」（D008）では「（正保）四年夏四月　公命毀屋嶋下交 綏（アイビキ） 堤防而復古存名蹟」とあり、「讃岐国大日記」では「同四年、屋島相引、依生駒氏下知、作隄坡為鹽屋、然今太守、謂古来之名跡、以四月上旬破却隄坡、亦成潮汐之相引」と記述されている。

頼重は名跡としての「相引の瀬」を守るために、生駒氏の治世に作られた塩田を廃止したわけであるが、その代わりに改めて、相引川の北岸から檀ノ浦にかけて塩田を整備している。

また、現地を訪れた際に、牟礼町総門跡にて写真３のような説明板を見つけた。残念ながら根拠となる史料は確認できなかったが、現地では、この標木（写真４）も頼重によるものだとする意識があるようである。

頼重による屋島顕彰は史跡にとどまらない。歌人としても有名であった頼重は、多くの和歌を残している。そのなかで、頼重は「麓塵集」（A063）に次のような句を残している。

【史料２】

屋島秋月

もろともにあはれはそらにしられけり

屋しまにのこる秋のよの月

また、頼重に仕えた儒者岡部拙斎も自身の詩集である『拙斎詩集』（明暦４年刊）に漢詩を残している（『高松藩祖松平頼重伝』（G021）所収）。

【史料３】

屋島秋月

落木蕭々屋島秋　山光水色潑吟眸

源平矛盾英雄尽　月影空随一釣船

II　松平頼常の治世

頼重の次代である頼常の治世は、頼重の時代におこなった土木事業により藩財政が窮乏した時代であった。顕彰事業としては十河順安による太夫黒の碑銘文作成が挙げられるが、この治世においてはそれ以外に確認できた事績はなかった。

梶原（1973）によれば、順安は通称であり、本名は保定といい、頼常によって召し抱えられた儒者である。銘文の作成年代についてははっきりとは判断できないが、屋島寺宝物館の収蔵品の内、元禄16年（1703）に、保定によって作られたとされる太夫黒碑銘文があることが確認できた。

また、藩による顕彰活動は頼常の治世以後、９代頼恕の時代まで見られなくなる。

III　松平頼恕の治世

９代頼恕の治世で注目したいのは、古跡の保存がおこなわれていることである。

【史料４】

一古城跡之義ニ付往古ゟ領主性名迄も相伝、諸記録共相見候程之古城跡之儀ニ付、末代其形残居申候義者勿論之事ニ候処、無弁者共ハ何の心得も無ク右土ヲ取其形変、且寺地ニ在之分者土居等切崩堀等ヲ埋メ、有形ヲ変候様之義も在之哉ニ相聞不埒之至ニ候、自今已後ハ御林ハ勿論百姓自分林又ハ野山等ニ在之分たり共、右石を取幷堀埋候様之義堅ク停止候、尤平地ニ在之分も同様相心得可申候、但御用等ニ而右古城跡ニ石土等取候様之義在之節ハ、其段申出指図ヲ請可候、尤右之場処有形之侭ニ而竹木等生候義幷耕作仕付之義ハ是迄仕来之分ハ不苦候

【史料４】は「高松藩諸達留」（G042）の一部で、木原ほか（1997）によると、この史料は文政11年（1828）に比定されている。この後、頼恕は、天保６年（1835）に雲井御所に碑を建てるのであるが、治世において史跡の保存を明確に示している点で、先に挙げた頼重・頼常とは史跡保護についての視点が異なっているといえよう。

IV　近世後期における屋島

藩によるものではないが、近世後期にも屋島は和歌・漢詩に詠まれている。三千舎桃源は屋島について、次のような和歌と漢詩を

のこしている。

【史料 5】

屋島時雨

軽風惹雨断夕陽　遠擁連山近散塘
千秋兵罷空軍塁　落木蕭々古戦場
吹き迷ふ峯の嵐にさそはれて
そことも波に時雨行くなり
引きちぎる雲のしころや片時雨

三千舎桃源は本名を渡辺桃源といい、安永・天明頃の人物であるとされる。平賀源内と親交があったとされる人物で、志度寺に句碑が残っている。「古戦場」や「引きちぎる」「しころ」などという単語がみられることから、屋島の源平合戦をイメージしながら詠んだものであろう。

中村三蕉も屋島を題材にした漢詩を詠んでいる。

【史料 6】

屋島晩濤

此地曽経源与平　両軍相対決輸贏
波濤打岸秋風晩　尚作当年金皷声

中村三蕉は文化 13 年（1816）丸亀藩士中村弥門の五男として生まれた。嘉永 2 年（1849）に藩校正明館の副助教兼詩文係となり、その後丸亀藩主の侍講などを歴任し、明治 27 年（1894）に没した人物である。これもまた源平合戦について詠んだものである。

先に松平頼重の治世においても和歌や漢詩が詠まれたことに触れたが、本章で挙げた、松平頼重・岡部拙斎・三千舎桃源・中村三蕉の和歌･漢詩はすべて「讃岐景勝詩歌」（G043）に所収されているものである。香川県（1985）によると、「延宝三年序の黒川道祐の『遠碧軒記』によれば、早くもその頃全国に九十八通の八景・十景・十二勝の詩歌があったという。その中に「讃州八島岡部拙斎玄友」とあるのは『拙斎詩集』下巻所収の「讃岐亀山堂八景」であろうか」とあるため、明暦期には風景を評価する観念があり、その中に屋島が含まれていることは、屋島の風景的価値が認められていたからではないだろうか。

おわりに

本章では近世における屋島の顕彰について述べてきた。史跡整備については松平氏の高松入封直後からおこなわれ、特に初代頼重による顕彰行為が主であった。2 代頼常以降は、9 代頼恕まではその動きがみられず、頼恕の治世になって史跡を保存するための制度が整備された。一方、和歌や漢詩においては八景の 1 つとして屋島が詠まれていることを確認できた。

このことから、近世では源平合戦史跡としての屋島と風景的価値を認められた屋島が併存していたといえるだろう。

〈主要参考文献〉

永年会 1973『増補高松藩記』臨川書店
香川県 1985『香川県史　第十五巻　資料編　芸文』四国新聞社
香川県 1987『香川県史　第九巻　資料編　近世史料Ⅰ』四国新聞社
香川県 1989『香川県史　第三巻　通史編　近世Ⅰ』四国新聞社
梶原竹軒 監修 1973『複刻讃岐叢書　改訂増補讃岐人名辞書』藤田書店（初版は 1928）
木原溥幸・丹羽佑一・田中健二・和田仁 編 1997『香川県の歴史』山川出版社
高松市役所 1974『高松市史』名著出版
松平公益会 1964『高松藩祖松平頼重伝』牟禮印刷所
溝渕利博 2013「藩政成立期における藩主の「鵜鷹逍遥」的行為の政治文化史的意義―初代高松藩主松平頼重の藩政における「遊猟」「舟遊」等の位置づけ―」、『（高松大学・高松短期大学）研究紀要』58・59
屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島文化協会

（担当：棟田成紹）

5　中近世の絵画資料にみえる屋島像

はじめに

本章では、中近世に作製された絵画資料から屋島像のバリエーションを確認することを目的とする。

いわゆる「源平合戦」をモチーフとした絵画作品に、屋島周辺を描いた作品は多い。近世に参詣を中心とした旅行文化が定着するまで、そしてそれ以降も、屋島像の源泉の一つに屋島合戦があったことは間違いない。ただ、とりわけ近世中期以降になると、合戦イメージに必ずしも依らない形で屋島が描写される場合もあった。また、作品の作製地によっても、描写イメージに差が生じた。これらの点を具体的に示していくが、その前に、簡単に研究史を概観し、また確認できた資料を整理することから始めたい。

Ⅰ　取り上げる資料と研究史

本章で取り上げるのは、芸術性が追求され、また鑑賞者が想定されて作られている絵画作品である。地理的位置を把握するために描かれた絵図・地図類は含まず、また個人の旅行記の中の挿絵なども含めていない点、了承願いたい。これらの資料については本書内の別章で扱われている。

屋島に関わる絵画資料として今回確認できた作品を巻末の資料一覧表に掲げている。これらは、香川県内およびその周辺地での資料調査のほか、確認しえた利用図録・集成・報告等一覧に挙げたものに収載された画像などを確認するなかで得たものである。このうち、源平合戦を中心に取り上げた主要な資料集としては『平家物語・美の旅』（日本放送協会 1992）、『源平合戦図絵の世界』（高松市歴史資料館 1999）、『源平物語絵セレクション』（神戸市立博物館 1997）、『源平の美学』（サントリー美術館 2002）などを挙げることができるだろう。

形式としては屏風、襖絵、扇面、掛幅などさまざまである。また近世後期に刊行された錦絵も重要だろう。さらには刊行本の挿絵も含まれる。これらのうち、先行研究が充実しているのは屏風絵であり、屋島合戦図屏風ないし源平合戦図屏風全体についての研究は、個別の資料に関する専論や全体の分類に関する総論まで、豊富にある。本章の課題に沿う形で概観しておきたい。

源平合戦図屏風の基礎的類型を提出したのは川本桂子（1984）である。そこでは、源平合戦図には二つのタイプがあり、「平家物語」に描かれる合戦を大観的にとらえる構図を持つ第一類と、個別の有名なシーンを取り出して人物を中心に描く第二類とに分けられること、第一類はさらに構図や描写対象の違いから甲・乙に分けられること、さらに第一類・第二類ともにその起源は室町時代末にさかのぼる可能性が高いことが指摘された。

源平合戦図屏風は、いくつかの合戦がモチーフとなるが、そのなかで屋島合戦図屏風に関して、川本の成果を展開させたのが田沢祐賀（1992）と伊藤悦子（2014）である。いずれも川本の第一類を中心に分析し、田沢は川本の第一類甲種をＡ類として継承する一方、乙種をＢ～Ｄの３類、および「その他」に区分した。また伊藤は屋島合戦図屏風に絞って、その描写内容を基準とした分類をおこない、13 グループを見出している。

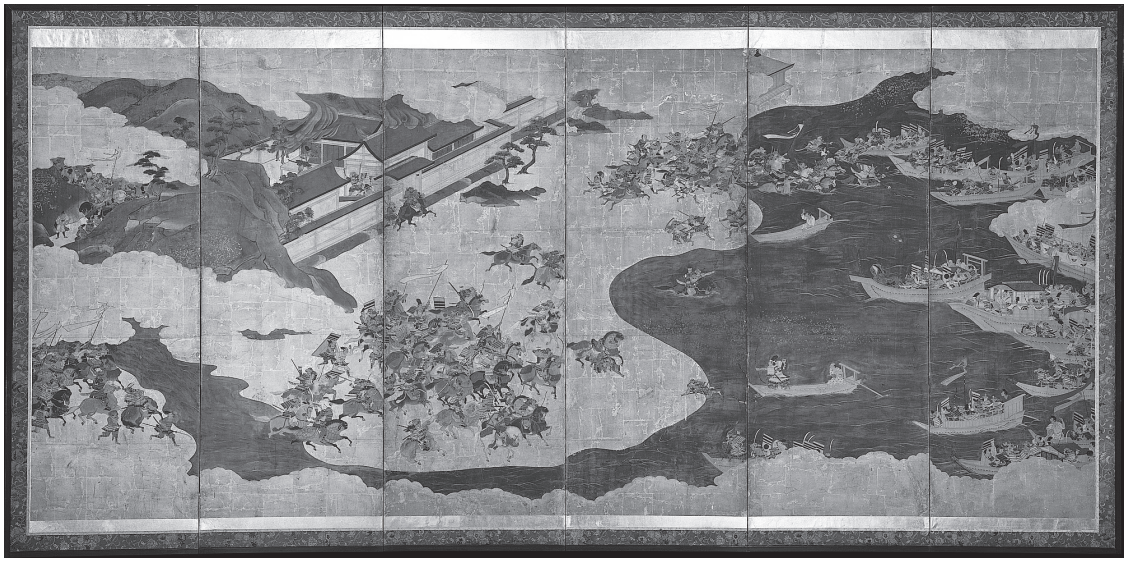


図 1 「一の谷・屋島合戦図屏風」
メトロポリタン美術館蔵

II　屋島合戦図屏風の構図と屋島

先に挙げた屋島合戦図屏風（源平合戦図屏風）の分類は、描かれた内容に焦点を当てて分類されている一方で、屋島の形状についての注目はない。確認の意味も込めて、ここでは屋島の形状や合戦を描く構図に注目してみたい。その際、対象となるのは、全体が俯瞰されている第一類（川本分類）である。最新の伊藤分類ではその中が 13 グループに分けられるが、そのうち、【9】は「独自性の強いもの」、【10】は「その他」となっており、また【11】・【13】グループについては屋島合戦だけではなく、他の合戦との組合せとなっているので、ここではひとまず除外しておきたい。また、ここで取り上げるのは京都や江戸などで活躍していた絵師が描いた作品、もしくはその系譜にあると考えられる作品である。言い換えるならば、屋島についての地理や景観を必ずしも十分には理解しない者たちが構想した源平合戦像である。これらを取り上げるのは、中世から近世にかけての屋島合戦ないし屋島の一般的なイメージが抽出できるからである。

伊藤分類【1】【2】【3】は、大坂越の場面および菊王丸の様子の違いによって分類されているが、構図自体は基本的に同一である。これらに属する作品のなかで、もっとも古い形態を残しているとされている天真寺所蔵「一の谷・屋島合戦図屏風」（B005）や、その同系にあるメトロポリタン美術館蔵「一の谷・屋島合戦図屏風」（B029・図 1）、宇和島伊達保存会蔵「源平合戦図屏風」（狩野興甫作・B014）で、その構図を確認しておくと、川本の指摘にあるように、屋島合戦を描いた左隻は、「平家物語」の流れが画面の左から右に向かって描かれている。ただし、「平家物語」はいくつもの系統があり、その内容・構成に大きな違いがあることが知られるが（松尾 2011 など）、以下のような流れとなるのは、語り本系の「覚一本平家物語」（A007）などである。

すなわち、第六扇の上側では源氏が大坂峠を超えて讃岐に入る姿が、下側では第五扇にかけて高松から屋島へと海を渡る姿が描かれる。第五扇から第三扇の上側にかけてが屋島の描写であり、屋島館（第五扇上～第四扇上）、継信の死（第三扇下）や錣引（第三扇上）がみえる。屋島館などが右上がりの角度を持って描かれており、屋島の汀線も同じような方向を緩やかに示す。第三扇から第一扇までは海上となっており、那須与一（第三扇中）と扇（第二扇中）、弓流（第二扇上）といった場面が描かれ、第一扇は船に乗る平家軍と

図２　「屋島合戦図」
フリア美術館蔵

なっている。この流れは、基本的に他のグループも同じであり、屋島合戦全体を描く絵画イメージの基本構図になっている。

これらの図では基本的には屏風の右上（第一扇上）を北とするような構図で描かれている。大坂越の場面だけが左上（第六扇上）に挿入されているが、その場面だけが金雲と山並で画されおり、場面のみならず地理的な違いも屏風に暗に表現されている。逆に、その他については金雲等で区別されている場所はなく、場面の違いはあっても地理的には同一の場所でおこなわれていることが意識された構図となっている。

そのようななかで屋島の山容についてみると、屋島館の裏側、第五扇から第六扇にかけて表現されている山がそれであることが分かる。しかし、その山は先述した大坂越を画している山と同一であり、またいわゆる山形をした山容が連続しており、頂上部が平坦な屋島独特の山容を表現する意図は全く感じられない。むしろ、ここで強調されているのは、島としての屋島であろう。とりわけ、渡海する場面から連続する画面の中で表現されることが、そのような「島」性を強調させている。

なお、高松市歴史資料館蔵の六曲一隻「源平合戦図屏風」（B065）は、伊藤の検討から漏れているが、大英博物館本と同系統であり、伊藤分類の【2】に該当することが明らかである。

次に、伊藤は分類【4】で７点の作品を挙げている。多くの作品が依ったパターンと言える。フリア美術館蔵「屋島合戦図」（B028・図２）や埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵「一の谷屋島合戦図屏風」（B041）などで確認すると、右がほぼ北、すなわち東側から合戦の地を俯瞰するような構図となっており、【1】～【3】では比較的垂直方向に目線が動く場面配置であったのに対し、【4】では水平方向が強く意識されたものとなっている。

具体的な場面を比較していくと、まず、大坂越の場面がないことが大きな違いとなる。【4】では、代わりに水田と茅葺きの家屋が配置されている。平家物語との関連で見れば、源氏が燃やした在家を表現している可能性があるが、やや意図が読み取りにくい。また、その在家に続く形で第五扇から第三扇にかけて、その上部に館が表現されている点も【1】～【3】とは異なっている。汀付近に屋島館が表現されておらず、その表現がこちらに移動したと考えればよいのだろうか。いずれにしても、これらは金雲で隔てられており、別の場面として表現されている。

次に画面の左下（第六扇下）に目を転じると、ごつごつとした荒々しい岩山が表現されている。位置的にみれば古高松の山となるが、その山容から五剣山と比定したくなる。

図３　「源平合戦図屏風」
高松市歴史資料館蔵

ただし、もしそれが五剣山とした場合、同じく特徴的な山容を持つ屋島については、まったく表現されていない点をうまく説明できない。そして、その意味で【4】も、屋島合戦のイメージのなかで捉えられているのは、山としての屋島ではなく、島としての屋島であることを押さえておきたい。

なお、【7】と分類された一群も、描かれる内容は異なるものの、全体的な構図としては【4】に連なるものである。

伊藤分類【5】は、馬の博物館蔵「平家物語図屏風」（B050）と高松市歴史資料館蔵「源平合戦図屏風」（B039・口絵１および図３）が挙げられている。源氏が阿波国勝浦に到着した場面を第六扇上に表現する。上陸した地点にある屋敷で戦いがおこなわれているが、屋島館は第四扇下に表現されているため、この屋敷が何を示すか不分明である。また第六扇下には在家が燃えているが、これは高松の民家を燃やした場面であろう。

第三・四扇上部に勝利後、休息する源氏軍の様子を描いているのも特徴的である。義経と伊勢三郎義盛だけが起きて見張りをしているが、そこは山の上として表現されている。その山は炎上する屋島館の直上に位置しており、屋島と見まごうが、休息は高松と牟礼の間の野山での場面であり、屋島ではない。全体として、金雲や山で場面が区切られており、屋島館と休息する源氏との間にも確かに金雲がある。

高松市歴史資料館本の場合、構図としては第六扇の上が阿波国、その他の第六扇から第四扇が陸地となり、第三扇に海岸線が位置している。馬の博物館本では第四扇が海岸線となっており、両図の海陸の画面内の比率が異なる。とはいえ、いずれも屋島地域については、基本的に北を上とする構図と言ってよい。

伊藤分類【6】は【5】の一部が描かれているものとされているが、構図という点ではやや異なるものが一つに分類されている。ジェノバ東洋美術館蔵「平家物語　一の谷・屋島合戦図屏風」（B027）は馬の博物館本とよく似た構図を持ち、屋島周辺は北を上とした構図となるが、勝浦上陸の場面が第六扇上に、また岩山が第五扇下に表現される点などが異なる。それに対し、個人像「一の谷・屋島合戦図屏風」（B015）はフリア美術館本と構図は同じで、フリア美術館本で第六扇上の水田表現が、こちらでは源氏の休息に変わっている点が異なる。いずれにしても画面右側が北となる水平的な表現である。

伊藤分類【8】は全体として海岸線での攻防がクローズアップして表現される。構図としては六曲全体を左下から右上に対角線を引き、おおよそ、その左上部分が陸地、右下部分が海というような配分である。山の表現は、金雲と同じく場面の転換のために利用されるが、屋島の地理的特徴が反映されているわけではない。

伊藤分類で【12】とされた東京国立博物館蔵「屋島・壇の浦合戦図屏風」（B049）は、一の谷合戦ではなく、壇の浦合戦と組み合わされ、屋島合戦図が右隻に配置される点が大きく異なる。右隻となったためと思われるが、場面が右から左に流れていく構図になっており、屋島合戦図屏風のなかでは特異な位置を占める作品である。具体的にみれば、第一扇上に勝浦上陸、第二扇上に大坂越がある。第一扇下には高松の在家の焼き払いがあり、第二扇～第三扇中に継信最期の場面がみえる。その下には与一の扇の的が第四扇中にわたって表現される。そして第五扇下では錣引の場面が描かれている。なお、第四～第六扇の上には屋島内裏から海上に逃げ出す平氏の場面があるため、目線としては、屏風の上部に合戦以前の状況が右から左に描かれ、中～下部に合戦の具体的な場面が右から左に配置されていると見た方がよい。いずれにしても、同様の構図を持つ作品は現時点では確認できず、他作品から、ないし他作品への構図の影響関係をたどることはできない。

以上、源平合戦図屏風の類型を確認した。最後に取り上げた「屋島･壇の浦合戦図屏風」のように、特異な位置づけにある作品もあるが、全体を通じてみれば、ひとまず次のような指摘をすることができるだろう。

1：屋島合戦の描写については、南側から東側にかけて、すなわち古高松から牟礼付近に視点を置いたものが基本である。ただし、構図としては南から北をみたような構図から、南東から北西、さらには東から西をみたような構図まで、バリエーションがある。

2：屋島の山容が意識されることはなく、むしろ「島」としての特徴が表現されることが多い。それは源氏の渡河（渡海）場面の描写がある場合に顕著である。

3：山については、金雲と同じく、場面の区切りとして利用されていることが多く、地理的なリアリティが追求されている側面は乏しい。

4：画面の左下に険峻な山容が描かれる場合がある。五剣山と比定できなくはないが、3とあわせて、考えるべきである。

5：物語（「覚一本平家物語」系統）の進行に合わせて、左から右に各場面が配置される。すなわち、屋島へ渡河（渡海）した後、南側から継信最期、扇の的、弓流が順になされていく地理的配置となっている。一部、右から左に配置されていく屏風もあるが、南から北へという点では共通する。実際に合戦がなされた場所との整合性は別として、このようなイメージが流布していった。

もちろん、個別の作品をみると細部に違いがあるため、すべての特徴が当てはまるというわけではないが、屋島合戦図屏風から想起される一般的な屋島合戦ないし屋島のイメージについては、おおよそこのようなものであるとまとめられる。

Ⅲ　切り取られた屋島合戦

前節では屋島合戦の全体が表現された屏風絵を取り上げたが、それ以外にも川本が第二類とした、個別の場面が切り取られて仕立てられたものも多い。本調査ではこれらの資料を網羅的に集めることはしていないが、それでもいくつもの作品が確認できた。屏風としては、たとえば扇の的をモチーフとした個人蔵「那須与一射扇図屏風」（B059）や、弓流と錣引を題材にした馬の博物館蔵「屋島合戦図屏風」（B051）、弓流を描いた高松市歴史資料館蔵「弓流し図屏風」（B099・図4）、一の谷合戦図との一双で屋島合戦では錣引と菊王丸（継信討死）の場面に焦点を当てた同館蔵「源平合戦図屏風」（二曲一双）（B063）、「敦盛最期」と「那須与一」を一隻ごとに描いた滋賀県立琵琶湖文化館蔵「源平合戦図屏風」（B018）がある。これらは、モチーフを大きく表現しており、背景描写などはほとんど見られないか、海岸線や山稜の一般的な表現があるのみで、屋島の実景を伝えるような側面はまったく意識されていない。しかし、屋島合戦のイメージを具体的に伝えていく作品として重要である。そして、そこに「武」、「忠」、「哀」といった精神的な要素も加味さ

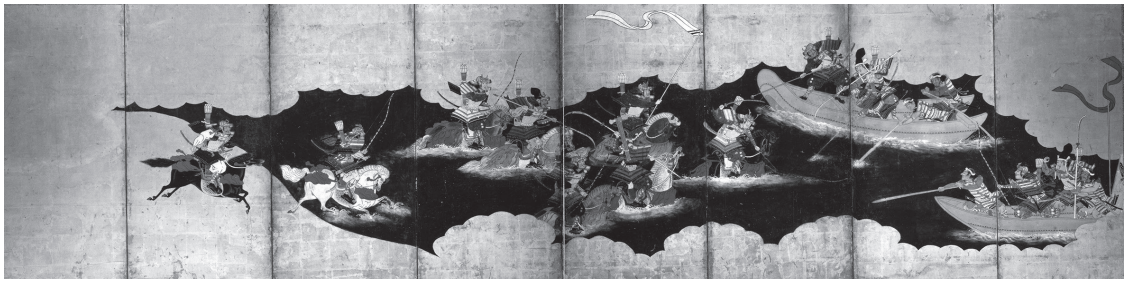


図４　「弓流し図屏風」
高松市歴史資料館蔵

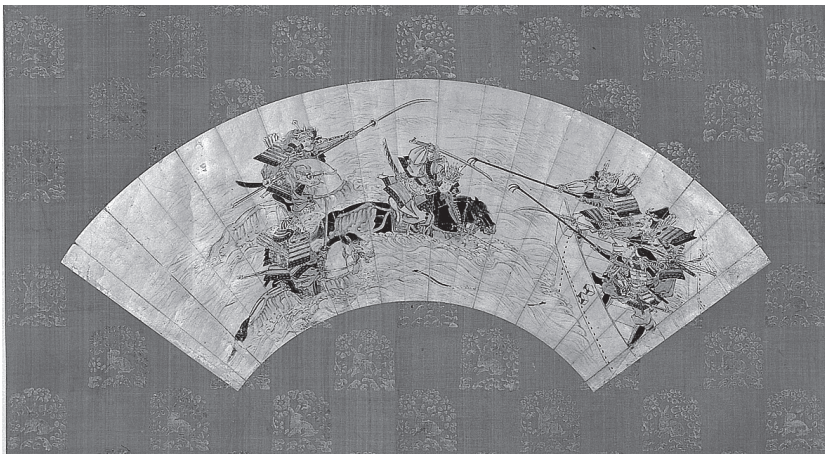


図５　「弓流し図扇面」
高松市歴史資料館蔵

れていることは押さえるべきであろう。

もちろん、これらのモチーフは屏風以外の作品にもみられる。高松市歴史資料館に所蔵される作品で言えば、「那須与一扇の的図」（B056）、「義経弓流の図」（B058）、「弓流し図扇面」（B064・図５）、「那須与一図」（B092）、「弓流し図」（B126）などがある。屏風形式ではあるが「源平合戦扇面貼交屏風」（B098）もここに加えられるだろう。これらに類する作品については、おそらく各地に遺されていると思われる。

このような図と、合戦全体を描いた図にある同一モチーフをみると、構成や表現に共通性がみられる。このような共通性の土台となっているのは、粉本や画帖に採録された各場面の表現だったと思われる。高松市歴史資料館に所蔵される「源平合戦図画帖」（B113）は、絵師たちが源平合戦を描く際に依拠する資料の一つと言える。このような画帖の存在は、屋島（合戦）イメージが連続的に再生産されていたことを示すと同時に、そのような画題を求める動きがあったことをも示している。

切り取られたモチーフの中には、「平家物語」や「源平盛衰記」では詳細に描写されていない場面もある。高松市歴史資料館蔵「牟礼高松図」（土佐光祐筆）（B057）は、義経が牟礼から兵士の様子をみたという別の伝承をモチーフとしたもので、義経にまつわるエピソードがさまざまに流布していたことがうかがえる。同じ題材の作品としては、たとえば茨城県立歴史館蔵「義経図（牟礼高松図）」（B010）、香川県立ミュージアム蔵「義経公牟礼高松之図」（B091）、徳川記念財団蔵「牟礼高松図」（B095）、永青文庫蔵「牟礼高松図鐔」（B055）、高松市歴史資料館蔵「狩野常信筆牟礼高松図」（B016）、「牟礼高松図」（B093）、「牟礼高松図」（B094）などがある。

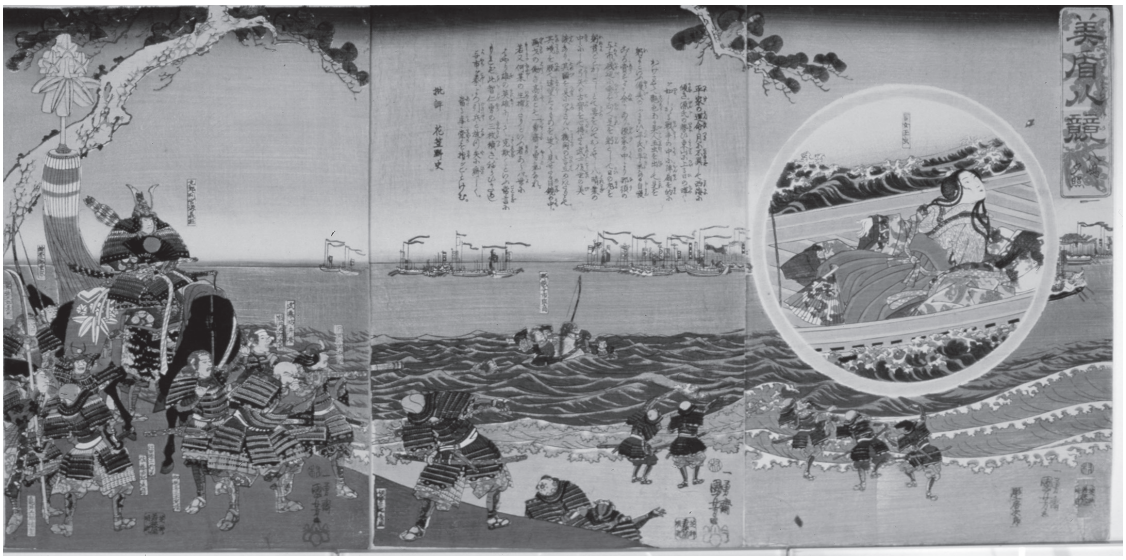


図６　歌川国芳『美盾八競　八嶋夕照』
高松市歴史資料館蔵

永青文庫蔵の作品は刀の鐔の意匠となっており、武術・武芸といった側面から屋島合戦の冒頭にあたるこの伝承をモチーフとしたのだろうか。

Ⅳ　消費されるイメージ

江戸時代、屋島合戦のイメージは、他のさまざまな媒体にも用いられた。その流布ないし消費に関しては、特に出版文化の諸メディアに取り上げられたことが大きい。そのうち、文芸作品および地誌・名所案内記類の動向については、本書第３章および第６章に譲り、ここでは前節からの流れを継ぎつつ、浮世絵（錦絵）のなかでの表現を確認しておきたい。

高松市歴史資料館蔵『美盾八競　八嶋夕照』（B077・口絵３および図６）は、歌川国芳の作品で、那須与一の扇の的の場面を三枚続の錦絵に収めたものである。画面左手前に義経がいる。よって、手前に表現された陸地が屋島ということであろう。場面はまさに扇を打ち抜いた瞬間をとらえており、陸地にいる源氏の兵士の騒ぎ立てる様子が表現されている。また船に乗る「官女玉虫」が遠眼鏡で覗いたかたちでクローズアップされ、射抜かれて舞い落ちる扇を目で追う玉虫の様子が大きく映し出される。この趣向について、本図内に「批評」を寄せた花笠野史は「遠望するものを。近く見せたる目鏡の中。画才の働き。高名こそ。一勇齋が勇気なれ」と歌川国芳の画才を称賛している。

国芳は多彩なモチーフをこなした江戸時代末期を代表する浮世絵師であるが、この「美盾八競」は、蕭湘八景を下敷きとしつつ、著名な題材を用いて八つの「競」（当然「景」と響くものである）を「美盾」、すなわち「見立て」た連作と考えられ、ほかにも平将門を題材とした「高殿落雁」といった作品や、宮本武蔵（無三四）を題材とした「晴嵐」が残されている。この「八嶋夕照」は蕭湘八景の漁村夕照と屋島合戦を組み合わせたものであり、花笠野史が「平家の運命月に不異して西海に傾き」と述べた状況に合わせるかのように、平家の船団の向こうが夕焼けに染まり始めている。その静けさは、手前の源氏の兵士たちがはやし立てる動きをすればするほど、際立つこととなり、また与一付近までは波が立つのに対し、それよりも沖合、平氏の船団付近は静かな水面となっているような対称性も、その効果をうながしている。

ただし、平氏は屋島の東側の海上にいるはずである。そして、屏風絵などで流布したイメージにもとづき源氏が屋島にいるとするならば、平氏の向こう側に夕日は沈まない。また、湾状の地勢であったことを考えれば、

屋島合戦のどの場所からも水平線が赤く染まる場所を眺めることはできなかったはずである。すなわち、このような演出と構図は、地理的な知識との融合というのではなく、国芳の「画才」によって想像／創造された世界なのであり、その世界においてはじめて、平氏の船団は夕焼けを背負うことができたのである。

逆に言えば、瀟湘八景のなかでも「漁村夕照」に屋島合戦を見立て、なかでも扇の的をモチーフとして動と静を表現したところに、この作品の最大のポイントがある。これまでにみてきた「平家物語」の影響が強い屏風絵などの作品には、こういった想像力／創造力は乏しかった。芝居などの文化と密接に結び付きつつ展開した錦絵という文化的営為は、屋島合戦にあらたな視覚イメージを付与したのである。

なお、詩歌の世界では屋島は八景のうちの「秋月」にあてられることが多い。その点と比しても「夕照」にあてたところに本作の特徴がある。

さらに付言すれば、この頃、多くの「見立て」絵が作られ、歴史の題材から派生していった作品――それは風刺的意味合いもあれば、ある種のパロディ的要素もあった――が社会に流布していた。それは、庶民文化に歴史が濃厚に入り込んでいたことを意味する。というのも、派生的な作品を興じるためには、その元となる題材についてのある程度の知識が必要になるからである（上杉 2015a・b）。たとえば、先に示した同じ美盾八競シリーズの「晴嵐」は、平賀梅雪『絵本二島英雄記』（享和３年〔1803〕）などがその元になっているが、その前段には当然、巌流島などを題材とした歌舞伎や浄瑠璃がある。

「八嶋夕照」もまた同じであり、江戸時代中期に歌舞伎や浄瑠璃として盛んに源平合戦が演じられ、また絵本などの読み物に、義経などが登場する作品が多くなるにつれ、「平家物語」を知らずとも、一般民衆の間にある程度の源平合戦のストーリーが知識として共有されるようになっていったのである。もちろん、そのストーリーは源泉たる「平家物語」からは逸脱し、混濁している。そのような混濁状態であったからこそ、より自由な発想での作品が次々と生まれてきたとも言えるだろう。

いずれにしても、この「八嶋夕照」は、そのような庶民文化のなかに屋島合戦というモチーフが確かに根付いていたことをうかがわせる資料として重要である。

ただし、その混濁状態は、時に混線と混乱を招くことも確認しておく必要がある。たとえば同じ国芳の作品であっても『八嶋大合戦』『源平八嶋大合戦』『八嶋大合戦図』（B075・B076・B078）は、「八嶋」というタイトルが含まれるものの、そこに描かれる主たる合戦モチーフは壇ノ浦合戦である。このような状況は、国芳の弟子にあたる月岡芳年の『源平矢嶋大合戦之図』（H002）や『八嶋壇ノ浦合戦義経八艘飛之図』（H003）にもみえる。

この混乱を「檀ノ浦」と「壇ノ浦」という紛らわしい地名によるものと解することもできようが、そのような微細な差異がそもそも情報として入っていたか疑わしく、また一方で地名表記そのものがこの時点で確定していたわけでもないため、このような地名に依存した解釈はひとまず留保しておく方がよい。むしろ、屏風絵などにおいても、一隻内に屋島合戦と壇ノ浦合戦が描かれるものがあったことの方が重要であり、そのような先例からすでに屋島と壇ノ浦が混乱する要素があったとみるべきだろう。もしくは「平家物語」そのものから取材するのではなく、江戸時代に生まれたさまざまな派生物から想像／創造されるのがこれらの錦絵であるとみれば、この時代、源平合戦の終局は、様々なメディアを通じて、「八嶋」という地名とともに、社会に広くイメージされ、消費されていたということになる。

すなわち、この混濁する絵画表現は、「八嶋」によって喚起されるイメージが源平合戦の終盤のハイライト全体となっていたということを示すものと評価できる。歴史的ないし地理的な点からみると誤りという一言で片づけてしまいそうなこれらの作品だが、文化の中に位置づけるならば、社会に広く伝播したがゆえの新たなイメージの想像／創造、そしてまた、それらのさらなる消費という文化的営為を例証するものとしてとらえられる。

Ⅴ　地域で形成されるイメージ

前節までに取り上げたのは、先述のように、讃岐国や屋島の地理や景観についての十分な知識を必ずしも持っていない者たちの作品群である。それに対して、讃岐国ないしその周辺で作製されたと思われる作品も残されている。それらはこれまでに述べた作品群とは異なる特徴を持つ。

その代表的な作品が屋島寺所蔵の「屋島合戦図」（B007）である。本作品は屋島寺の宝物館に展示されており、また平成 15 年（2003）に香川県歴史博物館（現・香川県立ミュージアム）で開催された「源平合戦とその時代」展にも出品された。源平合戦に関する絵画作品には屏風絵が多い中にあって、本作品は軸装されている点が一つの特徴となっている。また、この作品の成立は江戸時代前半の 17 世紀代とされており、源平合戦の絵画資料のなかでも古い作品の一つとして位置づけられる。

こういった点もさることながら、他作品とは全く異なる特徴として挙げられるのが、屋島特有の山容が明瞭に表現されるという、本作品の屋島の描写である。より具体的に見れば、画面の右上に頂上部が平坦で、急崖に続いて緩やかな尾根線となる屋島の特徴的な姿が示されている。そして相引川によって高松・牟礼側と隔された「島」としての屋島についても明確な表現である。また画面右下、屋島と湾をはさんだ反対側には五つの険しい峰が屹立する山が描かれている。これが五剣山であることは言を俟たない。いずれにしても、本作品は屋島およびその周辺地域についての地理的知識を持った人間が関わって作られたことは明らかである。

その上で確認せねばならないのは、屋島合戦の各場面の位置である。というのも、屋島の描き方と同時に、この場面の位置もまた他の作品とは大きく異なっているからである。他の作品にほぼ取り上げられている継信最期の場面は、この「屋島合戦図」にも描かれる。しかし、屋島合戦全体を描く他の作品がその場面を屋島側に描くのに対し、ここでは高松・牟礼側に描かれている。また、那須与一の扇の的の場面についても、他作品が屋島側から海に入った那須与一が描かれるのに対し、本作品の那須与一は高松・牟礼側の海岸線から海に馬を進めた構図となっている。「平家物語」の流れに沿えば、継信の死は屋島側であるのが自然だが、この作品はそのような流布したイメージとは必ずしも一致しない描写となっているのが特徴である。

この点に注目すれば、本作品の作者は屋島の地理については十分に知識を持っている半面、「平家物語」ないし源平合戦絵についての理解がそれほど高いわけではないということになる。これは他の作品群の作者たちの知識のあり方とはちょうど反転した位置にあると言えるだろう。

ただし、個別の場面の表現をみるとその描写は他の作品群の個別の場面とそれほど大きく乖離しているわけではない点にも注意が必要である。先に触れたように、源平合戦の個別の場面については図帖が作製されており、そのような図帖を観ることが可能な絵師たちであれば、そこに描かれた見本をもとに諸場面を一枚のキャンバスに散らすことで合戦を表現することが可能であった。他作品と類似しているということは、「屋島合戦図」の作者も、このような図帖にアクセス可能な位置にいた可能性もあるだろう。

そうなると、既存の諸作品と場面の配置が違うのも、その作法に通じていなかったからではなく、意図的な変更であった可能性が浮かび上がる。このような想定をした場合、重要となるのが、作者が屋島の地理的知識を十分に得ているという点である。つまり、当時の屋島周辺に存在した源平合戦に関する在地の知や顕彰活動をふまえて、「屋島合戦図」の各場面を配置していったという可能性が出てくるのである。

実際、現在の屋島合戦の顕彰地のなかには屋島側ではなく高松・牟礼側に位置するものが多い。これらの顕彰地の歴史は高松藩主、松平頼重（1622-95、藩主期間：1642-73）による史跡整備以前のことはよく分かっておらず、慶長・元和期に無批判にさかのぼらせることは慎む必要があるが、頼重が史跡整備をするにあたって在地の状況を完全に無視したという想定もまたやや無理がある。た

とえば頼重は佐藤継信の墓と顕彰碑の二つを整備しているが、顕彰碑を屋島から八栗にむかうルート上（屋島寺参道）に配したのに対し、墓は高松・牟礼側に設置している。それらの顕彰行為が寛永 20 年（1643）、すなわち、藩主就任の翌年であったことをふまえれば、墓の場所の決定に詳細な歴史検証がなされた可能性は低く、在地に流布する既存の情報に依拠したとしてもおかしくない。

これ以上の推定は屋上屋を重ねるにすぎず、まったく意味がないことだが、再度確認すれば、「屋島合戦図」に描かれる屋島の描写が実景に沿ったものであり、地域の地理に明るい者の手によるものであることは間違いない。あくまでも推論の域を出ないものの、そのような者であれば、当時の在地に広まる屋島合戦に関する情報ないし顕彰行為について何らかの知識があり、それが作品に反映されている可能性を一概に否定することはできないだろう。

別の点から、「屋島合戦図」の作者像をもう少し、追いかけておこう。

「屋島合戦図」には高松側から屋島に向かって浅瀬を渡る牛の姿が描かれている。これは水を渡る赤牛をみて浅瀬の位置を知ったという話に基づいており、それに関する地名として、屋島南側には赤牛崎という地名がある。屋島風土記編纂委員会（2010）が説くように、この赤牛の登場する場面は「平家物語」や「源平盛衰記」にはなく、屋島寺の「源平屋島檀浦合戦縁起」（A059）に掲載される逸話である。この縁起は慶長期に屋島寺再建のための勧進活動に利用するために作られたものとされ、その創作に深く関わるのが屋島寺再建の主導者、龍厳上人であるという。勧進活動は慶長 16 年（1611）からなされているが、この作品には「慶長十七年三月日　屋嶋寺」という奥書があり、まさに勧進活動にともなって作製されたものであることが判明する。

また、「屋島合戦図」と合わせて双幅となる作品に屋島寺蔵「屋島寺縁起絵」（B033）がある。この作品は平成 26 年（2014）に香川県立ミュージアムで開催された「空海の足音　四国へんろ展　香川編」で展示された。図録の解説では、両図とも寺の縁起を絵解きで語った可能性が指摘されており、注目される。「屋島寺縁起絵」が鑑真による創建譚、すなわち古代の屋島を語る装置であるならば、「屋島合戦図」は中世屋島を語る装置であり、双幅で一つの屋島の地域史（むしろ物語であろうか）が表現されていることになる。そこに「源平屋島檀浦合戦縁起」も加えてよいだろう。

これらのことをあわせれば、「屋島合戦図」もまた、屋島寺再建との関係で作られた諸作品の一つであり、その作製に龍厳上人やその周囲の人物が何らかの形で関わっていた可能性を推測することができる。

なお、龍厳上人は元和元年（1615）に京都高雄の高山寺に入山している。「源平屋島檀浦合戦縁起」には、下巻の末尾に別紙が継ぎ足され、そこに「元和第九四月日前住屋嶋後住高雄」という記載を伴って龍厳上人名が記されている。龍厳上人が高雄にて屋島の地理を語ったかどうか、それは不明とせざるを得ないが、少なくとも京都界隈の絵師――源平合戦を描く絵師――にその情報は伝わらなかったということになるだろうか。

もう一点、注目すべき作品として香川県立ミュージアム蔵「高松城下図屏風」（B006）を挙げておきたい。本作品は、江戸時代前半の高松城下を詳細丹念に描いた鳥瞰図で、都市図屏風の代表的な作品としても知られている（金田・上杉 2012）。そして、図の左下に画面外から続いてきた形で屋島が描かれている。北嶺から長崎鼻あたりの形を適切にとらえた描写となっており、城下町の内容と同じく、精緻な表現と評価できる。

ただし、城下町との位置関係という点でみれば、屋島の位置は大きく歪められており、その点での正確さは乏しい。城下や山容に正確さが追及されている点とは正反対の方向性を示す。しかし、逆に言えば、そのような正確さを犠牲にしても屋島を画面内に表現することが優先されていることになる。高松城下を描く際の不可欠な要素として屋島が理解されていたことがうかがえる。

Ⅵ　画題としての山容美

屋島の地理、より具体的にはその山容が

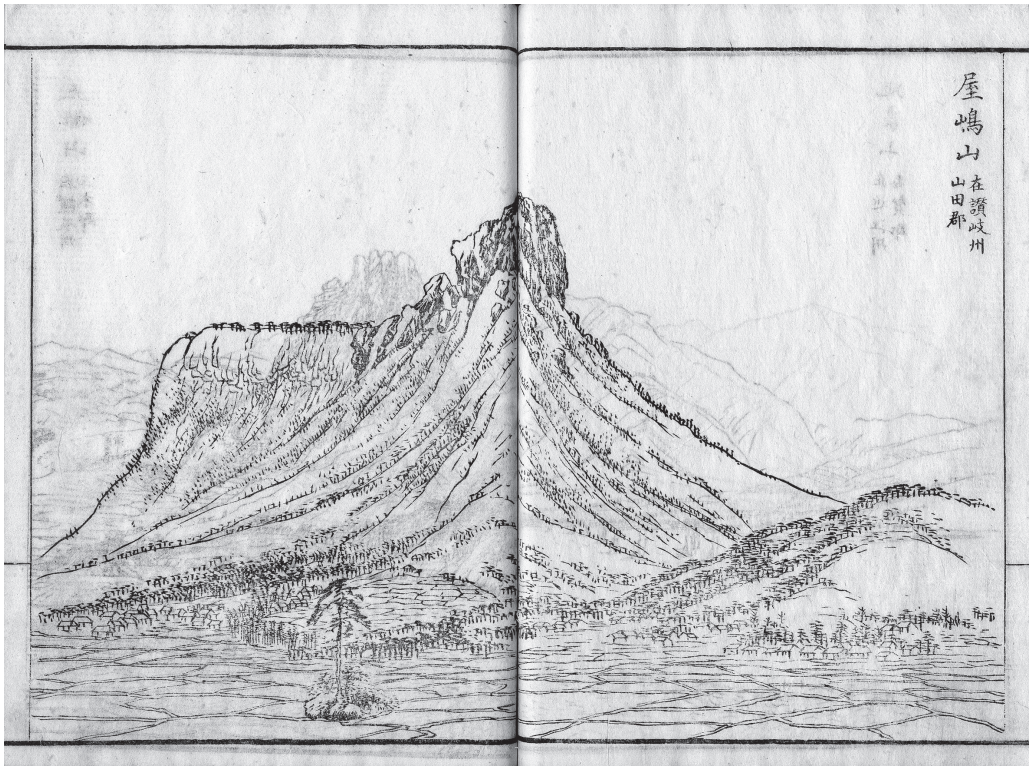


図７　『日本名山図会』所収「屋嶋山」
京都府立大学蔵

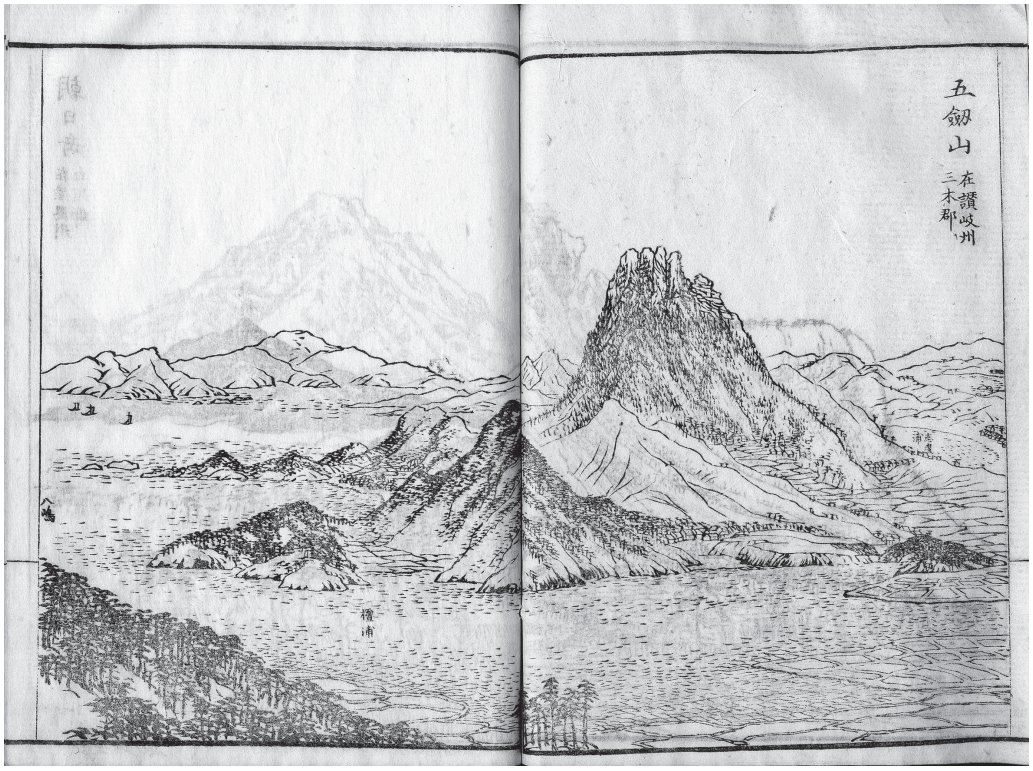


図８　『日本名山図会』所収「五剣山」
京都府立大学蔵

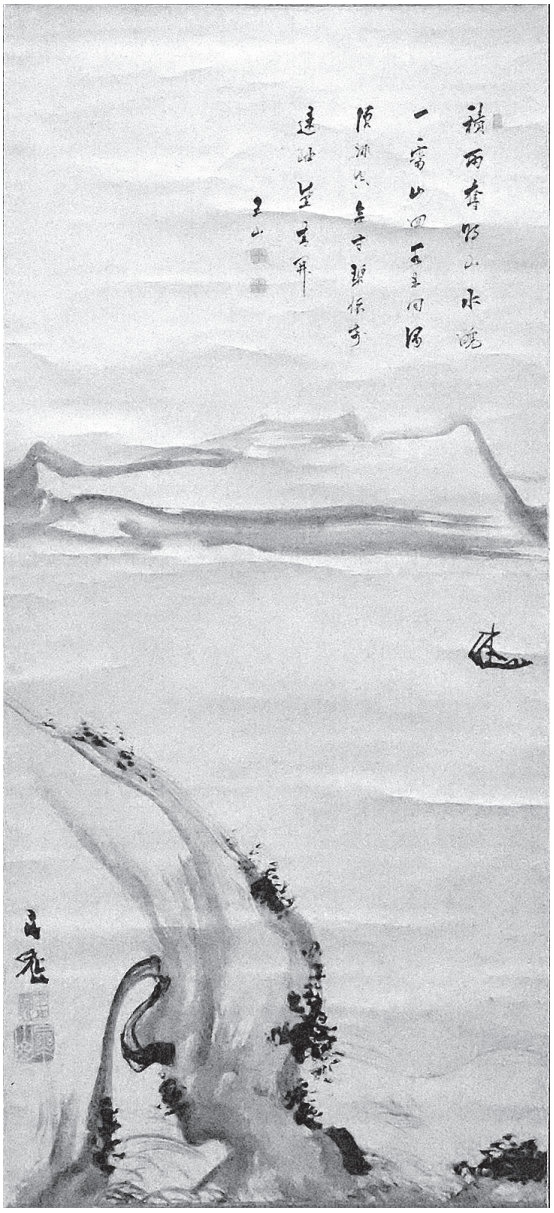


図９　「山水図・七絶詩」
高松市歴史資料館蔵

讃岐国以外の者の手で画題として描かれるようになっていくのは、江戸時代後期以降である。その代表として、谷文晁（1763-1861）の手によって作られた二つの作品をあげておきたい。谷文晁は江戸の南画を代表する人物であり、また真景図を得意とする画家でもあった。日本全国を旅するなかで諸国の山をスケッチしていき、それらを集成した『日本名山図譜』を文化元年（1804）に刊行、後に『日本名山図会』（B074）として改めて刊行したことでも知られる。

二つの作品のうち、一つ目がこの『日本名山図会』に所収される「屋嶋山」（図 7）である。この作品は屋島の真景図として確認できる最初の作品であるが、そこに現れた屋島は、現代の私たちが一般的に想像する屋島――すなわち、頂上が平坦で台形の山容となる屋島――とはまったく異なる三角形の山容、いわゆる「屋島富士」となっている。現在で言えば、鞍掛松付近、もしくは高松琴平電気

鉄道志度線の古高松駅付近から北に相引川を渡って屋島寄りに進んだ付近が視点場となっており、確かにその付近から見れば、頂上部が急崖となった三角形の山容を持つ屋島が現れる。真景図としての最初がこの構図であることは、少々意外にも思われるが、これは谷文晁が山岳のなかでも富士山を特に好んでいたという、文晁個人の感性に影響された視点であることを考慮する必要がある。おそらく文晁が真景図としての山容美を尋ね歩いた時、台形の山容よりも、より富士山の形に近づく三角形の山容に興味をそそられたのだと思われる。

しかし、いずれにしても、まさに真景図にふさわしいリアルな描写がなされている点からみても、またそのような構図の屋島がそれ以前に――またそれ以後にも――描かれていなかった点からみても、文晁が実際に現地を訪れ、スケッチをしたことは疑いない。

それは､同書に掲載された「五剣山」（図 8）の垂直方向に誇張されながらも詳細に描写された山容表現からも、やはり指摘可能である。そして、それと同時に、いわゆる船隠しの小湾が表現されている点やその奥側に見える庵治半島の山並み描写、また画面手前の表現などから判断して、文晁が屋島に実際に登っていた可能性が高いことも指摘できる。

谷文晁が活躍した江戸時代後半にもなると、四国遍路や金毘羅参詣をはじめとした旅が盛んとなり、讃岐国、そして屋島周辺にも多くの人々が訪れるようになった。そのような者たちの目的は寺社参詣であり、またこれまでにも触れてきた源平合戦の故地を見て廻ることであった。そのようななかにあって、谷文晁のような山容美ないし自然美を追求した者も登場し始めたのが、この時期であると言えるだろう。

さて、谷文晁の名前による屋島を描いたと思しき作品は、もう一点が知られる。高松市歴史資料館所蔵「山水図･七絶詩」（B073）である（図 9）。この作品は名山図会の真景図とは異なり、いわゆる山水画である。谷文晁の作品には、弟子の描いた作品も多いことが知られ、真作の判断が難しい人物である。筆者にはその真贋を判断する術も力もないが、先の資料から谷文晁が屋島を訪れていたことは理解される点を確認し、ひとまず本作品についてもその流れで見ておきたい。なお、本作の賛は高松生まれで江戸時代後期の知識人サロンで活躍した漢詩人の菊池五山（1769-1849）による七絶詩である。

本作品の視点場は高松城下町側にある。具体的な場所を探すのは困難であるが、視点場が少し高い位置にあるように思われる点からすれば、高松市街西側の西方寺周辺といったところであろうか。具体的に表現されたのは、①遠景：屋島の山容、②中景：海面と一艘の帆かけ舟、③近景：一本の松、という極めてシンプルな画材である。山・海・舟・松といった素材は山水画にはよく取り上げられるものであり、その組み合わせと言えばそれまでであるが、重要なのは、屋島合戦が繰り広げられた屋島東側ではなく、屋島西側を見通すものだったという点であり、またそれゆえに山容美が強調されているという点である。

管見の限り、単独の絵画作品としてこのような構図が採用されたのは本作品が初めてである。探していけば、これよりも先行する作品の見つかる可能性は高いが、それでも江戸時代後半というところには落ち着くであろう。中世以来、屋島合戦というモチーフが先行的に屋島イメージを形成していた中にあって、江戸時代も後半になると、そのような歴史イメージに加えて、山容美が屋島を表現する要素として登場し、知識人たちの間に広がっていったことを思わせる。

そして実際に、このような西側からみた構図は、これ以降、近現代の屋島描写のなかで大きな位置を占めていくのであり、新たな屋島イメージの核として展開するのである。その点については本書第 13 章を参照していただきたい。

Ⅶ　地理と歴史の融合
～まとめにかえて～

屋島像を構成するイメージには、合戦を中心とした歴史イメージと山容美を中心とした地理イメージとがある。しかし、地域で作成されたわずかな作品例を除き、地理イメージと歴史イメージが融合したことが明らかな絵画作品は、少なくとも江戸時代前期には見

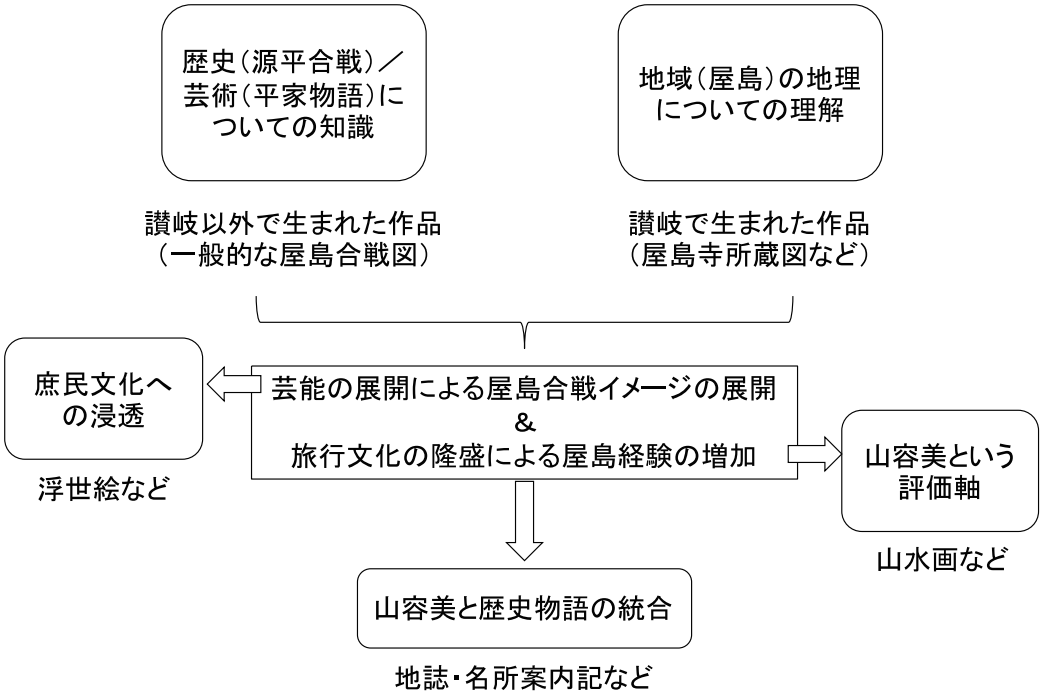


図 10　地理イメージと歴史イメージの融合

られない。江戸時代後期になると、出版文化の隆盛と源平合戦をモチーフとする諸芸能の影響を受けて流布した錦絵が盛んに作られるが、やはり江戸時代前半と同じような傾向を看取できる。逆に谷文晁の作品に顕著なように、山容美という視点から絵画が生み出されていく流れも登場する。一般的に考えられる「絵画」というジャンルにおいては、江戸時代後期になっても基本的に融合は図れていないということになる。

ただし、「絵画」の枠を少し広げてみると、その融合は江戸時代を通じて着実に進んでいた。それが端的に現れるのが地誌・名所案内記のジャンルである。名所案内記のなかには挿絵が充実したものも多くあり、なかでも 18 世紀後半の『都名所図会』にはじまる「名所図会」ものは、詳細な文字情報と現地での観察をもとにした絵画情報とが組み合わされた作品群として知られる。

讃岐国に関しては『金毘羅参詣名所図会』（D013）や『讃岐国名勝図会』（D015・D016）などがあるが、たとえば『讃岐国名勝図会』は「実景」であることが謳われており、実際の景観をもとにした絵画が取り込まれている。そこには「八栗屋島源平古戦場」と題された 5 ページにわたる鳥瞰図があり、地理と歴史が融合した屋島が表現されている。また「継信討死之図」「義経弓流図」および無題ながらも扇の的と鍛引の挿絵も加えられ、具体的な場面の絵画表現についての伝統も引き継がれている。なかにはきわめて近世的な表現がなされた「屋島合戦図」もあるが、少なくともその舞台となる屋島が地理を踏まえて描写されたものであることは間違いない。

これらの分析については本書第 6 章にゆだねるが、本章で論じた源平合戦に関する屏風絵類・錦絵類と、これら名所案内記（名所図会）との関係を簡略に図示して、理解の補助としておきたい（図 10）。

〈主要参考文献〉

伊藤悦子 2014「『源平合戦図屏風』の一考察　―いわゆる『一の谷・屋島合戦図屏風』の分類方法について」、『軍記と語り物』50。

上杉和央 2015a「想像世界の歴史地理」、竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房

上杉和央 2015b「古図のある風景」、小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』創元社

香川県歴史博物館 2003『源平合戦とその時代』香川県歴史博物館

香川県立ミュージアム 2014『空海の足音　四国へんろ展　香川編』香川県立ミュージアム

カタログ編集委員会編 1992『平家物語・美への旅』日本放送協会

川本桂子 1984「『平家物語』に取材した合戦屏風の諸相とその成立について」、『日本屏風絵集成 第 5 巻』、講談社。

金田章裕・上杉和央 2012『日本地図史』吉川弘文館

神戸市立博物館編 1997『源平物語絵セレクション』神戸市スポーツ教育公社

サントリー美術館編 2002『源平の美学』サントリー美術館

高松市歴史資料館編 1999『源平合戦図絵の世界』高松市歴史資料館

田沢祐賀 1992「平家物語　一の谷・屋島合戦図屏風の諸相と展開」、『秘蔵日本美術大観 1　大英博物館 1』講談社

屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島文化協会

（担当：上杉和央）

6　近世地誌・名所案内記にみえる屋島表現

はじめに

本章では近世地誌・名所案内記における屋島関連の記述から、屋島の景観描写と屋島イメージについて検討する。

ここで扱う地誌・名所案内記には作者による見分・旅行の記録をもとに、書物としてまとめられたものがある。こうした事情から、とくに名所案内記において紀行文・日記に近い要素を含む場合があるが、紀行文・日記については本書第 7 章で取り上げられており、関連する地誌・名所案内記の比較分析もおこなわれている。合わせて参照されたい。

Ⅰ　取り上げる史料とその類型

今回取り上げる地誌・名所案内記は表 1 の全 21 点である。近世に成立した屋島に関わる地誌・名所案内記のうち、各種所蔵機関及び刊本資料の調査で確認し得たものを挙げている。主要なものを取り上げたが、屋島に関わる全ての資料を網羅できている訳ではないことを了解されたい。

取り上げた 21 点の資料（以下、各資料は表 1 の通し番号で示す）は、主題・ジャンルに基づき、以下のように大きく 3 つのグループに分けられる。

イ：編年史的書物（1・7・17）
ロ：案内記（5・6・10・11・12）
ハ：名所記・地誌（2・3・4・8・9・13・14・15・16・18・19・20・21）

イは、編年体で讃岐国の歴史・事件を記したもので、ここでは、歴史の観点から讃岐国という地域を叙述した書物としておく。ロは、四国遍路もしくは金毘羅参詣の案内記で、参詣という主題に関連して、札所である屋島寺、あるいは讃岐の名所である屋島周辺を取り上げている。ハは、それら以外の書物が該当し、名所記あるいは地誌の体裁で屋島周辺地域が叙述されている。

成立・出版時期については 21 のみ不明であるが、それを除いてみても 19 世紀以降のものが若干多い。地誌・名所案内記の制作実態を一定程度反映しているものと思われる。また、17 世紀の資料が多い点は、刊本資料に所収されていることに由来している。

Ⅱ　作者・叙述様式の違い

上記のグループ毎に、屋島に関わる地物や歴史がいかなる様式で記されているのかをみていきたい。なお、各資料の書誌情報及び屋島に関連して取り上げられている項目については、表 1 に掲げている。

イのグループの 1 は上代から慶安 4 年（1651）に至る漢文の編年史を、石清尾八幡宮祀官の友安盛員が記したものである。7 は承応 2 年（1653）から享保 6 年（1721）までを同様に漢文で記した編年史で、高松藩士矢野理助継雄とその弟伊八郎が編纂したと伝えられる。17 は上記二書と同じく、享保元年から天保 8 年（1837）の編年史で、香川郡池西村出身の儒学者中山城山が著したものである（香川県編 1941、小山 1989）。

表 1 で確認できるイの資料に挙げられた項目は、歴史書に記述されているか、あるいは編纂者により讃岐国の歴史として取り上げられるべきと認識された、天保 8 年までの

屋島関連の主要な出来事を示しているといえよう。そこで地誌・名所案内記の記述の分析に先立ち、その内容を確認しておきたい。

中世以前については、天智天皇の時期の屋島城築造、鑑真による千光院の建立、安徳天皇の行宮設置や源平合戦など主要なものが取り上げられている。ただ、配流された天皇や屋島寺参詣に訪れた公家・僧侶などについての記述や詠じた詩歌の記述はなく、代わりに貞元２年（977）の官使中臣物部乙嗣が屋島に登山し、屋島寺の前の竹木を伐採しようとしたところ落雷に打たれ死亡したという記事が掲載されている。

江戸時代以降の記事には、佐藤継信碑建立、相引川堤防破却、屋島寺への仏像・図像や仏餉料寄進といた高松藩主松平頼重の事績、また、文化元年（1804）の同じく藩主松平頼儀による屋島南面への東照宮建立が記される。もっぱら高松藩主による屋島寺およびその周辺の整備について記されているが、これは、編纂者がいずれも高松藩に関わりある人物ゆえに、藩主の事績を記述しようとする意図が働いたものと推測される。もっとも、屋島や源平合戦関連史跡をめぐる出来事は、これらの記事に留まるものではなく、実際には記録されなかった動きがあったであろう。

次に、ロのグループの資料のうち、四国遍路の案内記には、貞享４年（1687）に刊行された大坂寺島に住む僧真念による 5、元禄２年（1689）刊行の高野山宝光院の僧寂本による 6 がある。とくに 5 は、近世の四国遍路案内記の嚆矢とされ、17 世紀末に遍路が一般民衆に普及し始め、また、八十八の札所を巡るという形式が定着し始めた当時の趨勢を反映して刊行されたと指摘されている（稲田 2015）。5 はその後も刊行され続け、19 世紀においても増補版の 12 が確認できる。ただ、札所の解説と案内を中心とする四国遍路案内記においては、屋島周辺の記述は旧跡の存在にいくつか触れられる程度で、旧跡自体の詳細な解説は掲載されていない。なお、11 は、阿波国阿南富岡町の豪商河内屋武兵衛の手による遍路巡拝の記録であるが、記述は案内記同様に札所を順次挙げていき、名所図会風の挿図がみられる（小松 2014）。文字情報としては表 1 に挙げた源平合戦関連古跡が書き連ねられているが、「屋嶋寺」の挿図は寺の境内を俯瞰した様子のみが描かれ、周辺一帯や眼下の源平合戦関連古跡は表現されていない。金毘羅参詣の案内記の 10 は大坂船町の今村美景が著し、安永７年（1778）に刊行された航路図と案内記を兼ねた折本である。

最後に、ハのグループの資料であるが、作者は、15・16 が既出の中山城山であるほか、3 の七条宗貞と 8・9 の菊池武賢は高松藩儒、4 の小西可春は延宝の頃には高松藩に仕え、12・13・18・19 の梶原藍渠は高松の豪商で私撰の国史「歴朝要紀」を天保３年に高松藩主に献上し、以後士分に取り立てられた者である（小山 1989）。また、19・20 の刊行に関わった高松藩士の梶原藍水は藍渠の息子で、藍渠の死後、高松藩家老を務めた木村黙老らの支援を受けつつ遺稿を編集している（松原 1981）。これらの名所記・地誌は讃岐国内あるいは高松藩に関わりのある、地域の内部の者により記述されたものである。

一方、2 と 18 は、地域の外からの視点で著述されている。2 の江村宗珉は京都の人で、医師・儒学者の江村専斎の子である。当時尼崎藩主の青山幸成に仕え、寛永 17 年（1640）生駒氏改易時の高松城請取に同行した際の見聞に基づき、2 を執筆した。18 は、幕末期大坂の戯作者で『淡路国名所図会』等を著した暁鐘成による、弘化４年（1847）刊行の名所図会である。18 の執筆にあたって彼は 2 か月程度と短期間ながら絵師同行で現地を取材し、その内容と他の書物の引用を交えて、金毘羅参詣ルート以外の讃岐国の名所についても記述している（松原 1981）。

なお、ハの各資料の叙述様式にはいくつかの違いがある。2 は名所記として対象とする場所毎に記述されるのに対し、3・4 では山川・陵墓・寺院などの分類別となっており、例えば 3 では山川としての屋島と「仏観」としての屋島寺が全く別の箇所で記されている。それ以降の資料については、全て郡別とし、一定の地理的まとまりを単位に叙述するようになっているが、15・16 のように郡別の名勝志と産物等の分類に基づく記述が織り交ぜられた地誌もみられる。また、18・

表１　近世地誌・名所案内記にみえる屋島関連項目

	ID	タイトル	作者	成立時期
1	D005	讃岐国大日記	友安盛員	17 世紀（1651-）
2	D001	讃州歴覧志（『香川県史第 15 巻資料編　芸文』所収）	江村宗珉	1653
3	D006	讃岐府志上・下（『香川叢書　巻二』所収）	七条宗貞	1670-80
4	D002	玉藻集（『香川叢書　巻三』所収）	小西可春	1677
5	D003	四国遍路道指南（真念）（『四国遍路記集』伊予史談会双書所収）	真念	1687
6	D004	四国遍礼霊場記（寂本）（『四国遍路記集』伊予史談会双書所収）	寂本	1689
7	D010	続讃岐国大日記（『香川叢書　巻二』所収）	伝 矢野理助継雄・伊八郎	18 世紀（1721-）
8	D007	翁嫗夜話巻之四	菊池武賢	1745
9	D008	翁嫗夜話巻之四、五	菊池武賢	1745
10	D009	金毘羅参詣海陸記	今村美景謹書、大坂書林吉文字屋市兵衛・柏原屋与左衛門・堺屋忠兵衛	1778
11	D011	四国遍礼名所図会（『四國遍禮名所圖會并近代の御影・霊場写真』所収）	河内屋武兵衛	1800
12	D012	四国偏礼道指南　増補大成	宥弁（真念）、佐々井治郎右衛門刊	1815
13	D021	讃岐志　巻之三	梶原藍渠	19 世紀頃
14	D022	讃岐志　巻之四（『大日本輿地通志』所収）	梶原藍渠	19 世紀頃
15	D018	標註訓点全讃史巻之九・十	中山城山	原著 1828
16	D019	標註訓点全讃史巻之十一・十二	中山城山	原著 1828
17	D017	続々讃岐国大日記（『香川叢書　巻二』所収）	中山城山	1837-
18	D013	金毘羅参詣名所図会 巻之六	暁鐘成	1847
19	D015	讃岐国名勝図会巻之三　三木郡	梶原藍渠・藍水	1854
20	D014・D016	讃岐国名勝図会巻之四　山田郡	梶原藍渠・藍水	1854
21	D020	讃岐名所略記　完	—	近世

注 1：項目立てされず記述されている箇所は、記述内容をもとに筆者が便宜的に項目名を付けて掲出した。
注 2：屋島寺等の大きな項目内に他の地誌等で通常立項されている内容が包摂されている場合は、＜　＞に掲出した。

言及されている項目

屋島城築城／鑑真千光院建立／貞元 2 年官使屋島登山／寿永 2 年安徳帝屋島行宮／源平合戦／寛永 20 年松平頼重佐藤継信碑建立／正保 4 年頼重相引川堤防破却

屋島＜血池＞／安徳帝行宮／佐藤次信墓／壇ノ浦／相引潮／宇竜ガ岡／高松ノ里

屋島城／屋嶋／継信墓／屋嶋寺

承久 3 年土御門院配流時屋嶋御覧／志度浦合戦／屋嶋＜大江忠名和歌、屋島城築城、安徳天皇屋島入りから源平合戦（教経の武勇、継信戦死、錣引伝承、与一伝承）＞／宇龍山／赤牛崎／惣門ノ渚／相引／洲前ノ堂／鉢之廻門／初音と云鼓之事／大森彦七カ太刀の事／鐘（鞍）掛松／獅子の霊巌／宝石・宝池／那須与一駒立石・同祈リ石／馬塚（太夫黒の墓）／屋嶋蝉／幣無太夫／南面山屋嶋寺千手（光）院／「讃岐国御家人」

屋島寺への行程／屋島寺／継信墓／内裏跡／壇の浦／あい引／奈須の与市駒立岩／いのり石／すさきの堂／惣門／大夫黒の墓／さじきの岡／名切水／瓜生山

屋島寺／次信墓／壇の浦／駒立岩／祈岩／洲崎の堂

万治 4 年松平頼重屋島寺千体仏・十一面千手観音像造立等／寛文 13 年頼重屋島寺等への愛染明王・五代虚空蔵図像・仏餉料寄進

佐藤次信墓／太夫黒墓／太夫黒碑銘／至徳元年信空次信墓参／次信間諜者説／射落畠／洲崎寺／立駒石／祈石／大砂子（錣引）／惣門／源氏ヶ峰／瓜生山

屋島寺／不食之梨／阿吽二字・南無阿弥陀仏刻銘／二王門／二天門／櫻樹／大悲閣／獅子霊巌／屋島城／鑑真千光院建立／屋島寺塔頭・頼重寺領寄進／奥村景武「屋島記」／佐藤次信碑文／貞元 2 年官使登山／宝永 7 年巡見使檀ノ浦来訪／享保 2 年巡見使次信墓望見／桂山鶴汀「屋島懐古二首」／黄牛崎／屋島浦海参／平家蟹／長崎鼻／瞽女崎／深井興祖「遊瞽女崎三首」

屋島寺（内裏跡＝壇の浦、那須与市駒立石・祈り石、相引の汐、空信墓参）

屋島寺への行程、屋島寺、矢倉谷、檀浦、佐藤継信墓・佐藤次信石碑、内裏屋敷、安徳天皇社、赤牛崎、大墓、義経鞍掛松、宇龍岡、駒立石、相引汐、須崎観音堂

屋島寺／佐藤継信の墓／須崎の堂／瓜生山

佐藤次信墓／行宮

屋嶋寺／鶴汀桂山義樹三郎左衛門「屋島懐古」／藍渠平景惇「屋嶋懐古」／佐藤次信碑文／宝剣記の本文／源襄公「屋嶋懐古」／高尾養「屋山懐古」／「登屋島」／中村文輔「屋嶋懐古」／勝苟●【草かんむりに間】「巌賦所見」

屋島山

瓜生山／土肥／土屋／湛増／源氏が峰／菜切地蔵／惣門／射落畠／大砂子／屋島／血池／名号石・阿吽石／獅子霊岩／忠名屋敷／駐牛崎／鐘掛松／鞍掛松／祈石／駒立石／相引／壇浦の海鼠

文化元年屋島南辺に東照宮建立／井原荘司盛兼者冢

高松鎮城／相引の潮／屋島寺前札所／不喰梨樹／畳石／石鍾乳／南面山千光院屋島寺＜獅子の嶺巌、仙人窟、鉢ノ淵、血之池＞／屋島山／屋島浦／屋島ノ古城／佐藤次信之碑／安徳天皇社／屋島内裏之古趾／洲嵜ノ堂／惣門之古跡／那須与市宗高祈石／同駒立石／景清●【革偏に固】曳之古址／大胡小橋太水練高名之古址／源義経弓流之古蹟＜小林新吾宗行と越中次郎兵衛盛嗣による錣引＞／黄牛崎／佐藤次信墓（洲崎寺より三丁ほど南に所在）／義経乗馬太夫黒之墳／武例高松柴山（源氏ヶ岡）／瓜生山／鞍掛松／平家蟹／神櫛王之墓／長刀泉／菜切地蔵

佐藤次信墓（王墓に所在）／太夫黒墓／源氏峰／菜切石・地蔵堂／長刀泉／鎌田光政墓／宇龍山／惣門跡／射落畠／祈石／駒立石／洲崎寺／「義経弓流図」・扇の的の図・錣引の図／「八栗屋島源平古戦場」／「平家蟹全図」

海参／鬼面蟹／鞍掛松／屋嶋寺＜奥村景武「屋島記」、国君源襄公（松平頼儀）「屋島懐古」、桂山義樹「仝」、那資明「仝」、中村文輔「仝」、高尾養「仝」、大江忠名・氏宗・可正和歌＞／南泉寺／阿吽二字／名号／不喰梨／畳石／瑠璃宝池／獅子霊巌／北峯（屋島北嶺）／鉢の廻門／屋嶋城跡／相引／屋島焼／檀の浦／安徳天皇社／佐藤次信墓／菊王丸墓／見返橋

屋島寺＜供鉢聖人伝承、安徳帝内裏＜惣門＞、屋島合戦＜継信戦死、駒立石与一伝承＞、継信墳墓＞

19・20 は郡別ないし任意の地域別に配列するが、名所図会の様式で挿図を交えて記述されている。

Ⅲ　地誌・名所案内記に記された／描かれた屋島の景観・イメージ

1．17 世紀の地誌・名所案内記

まず、17 世紀後半に登場した地誌・名所案内記の記述から確認し、近世成立期における屋島の景観描写・イメージをみておきたい。

屋島寺はほぼ全ての地誌・名所案内記に取り上げられ、鑑真の千光院建立、空海による千手観音奉納等の由緒について触れられている。四国遍路案内記の 5 では「あづさ弓やしまの宮にまうでつゝ　いのりをかけよいさむものゝふ」という屋島寺の御詠歌と共に、周辺の源平合戦に関連する史跡が紹介され、「其外旧跡かずゝゞ有」と締めくくられている。四国遍路という文脈においても、屋島寺は源平合戦関連史跡と一体のものとして語られている。ただ、「是は順礼所にはあらずといへども、道すじなるの故にこゝに載侍る」（6）と付記して、札所を巡る一環で立ち寄られる古戦場を紹介する一方、屋島周辺地域そのものを叙述する姿勢からは距離を置いている点は、ほかのグループの地誌・名所案内記とは異なる特徴であろう。

そのような四国遍路案内記においても取り上げられていた源平合戦関連史跡の筆頭は、佐藤継信墓であった。主君に対する忠義を尽くして果てた武士という逸話の内容そのものだけでなく、寛永 19 年（1642）の高松入封後間もない松平頼重による、翌 20 年の顕彰碑建立という出来事も、これ以後の地誌に顕彰碑の碑文が掲載されるなどの影響を伴って、継信墓の存在を強く意識させる要素になったと考えられる。その背景には、すでに 17 世紀後半の 1・3・4 において、高松藩に関わる儒者により「讃岐国太守」（1）の顕彰行為が記し伝えられたことが重要だと考えられる。屋島寺と源平史跡が篤く領主に崇敬される存在であるとの説は、四国遍路案内記の 5 に「領主より、壱丈四方の切石にて壇きづき、其上に五尺の石塔を建立し、碑の銘あり」、6 に「迹を撫、人を思、義の隆なる事、君子の欽む所なり」と記されるように、以後の地誌・名所案内記、そして地域の外の人々の屋島・源平合戦関連史跡に対する認識へも影響を与えたものと思われる。このほか、天皇の行宮跡・檀ノ浦や那須与一伝承に関わる駒立岩・祈り岩が、すでに代表的な源平合戦関連史跡として取り上げられている。

一方、屋島の山容に関する表現については「八栗嶺と相対し山形屋に似る故に之を名とす。或は南面山と号す」（2）、「高きこと数十丈。絶頂平易にして、之望に堂屋の如し。故に屋嶋と名く」（3）と、屋根形の形状に由来してその名を「屋嶋（島）」あるいは南面山とするとの説明が、この段階で確認できる。屋島寺の由緒においては、屋島は鑑真によって「霊地」（3）、「七仏説法の霊区」（4・6）とみなされた場所であった。また、屋島北嶺に「神人」（3）あるいは「空鉢聖人」（4）が住み、食物を乞う空飛ぶ鉢が魚肉により穢れ、海底に沈んだとの伝承記事（4）も、いくつか細部のバリエーションは異なるが、近世を通じてしばしば見出せる。屋島はその地形的特異性を基盤に、これらの縁起・伝承の源となり得る霊地としての性格を帯びた場所と考えられていたようである。

このような地形的特異性、屋島寺の存在と源平合戦の故地という条件が交差する場所として注目されるのが相引川である。相引川は満潮時には左右（東西）から潮がめぐり、干潮時には左右に退くことから「相引」と名付けられたとされ、その地理的特徴から項目を立てて説明されている（2・3・4・5）。また、生駒氏統治時代に「塩屋」とするため築造された堤防を、頼重が正保 4 年（1647）に「古来之名跡」を理由に破却させ、再度「潮汐之相引」とした事績の記述があり（1）、「屋嶋の謡に、あひひきに引汐と謡は此所也」（4）と謡曲に登場する「あひひき」の現地比定の対象にもされている。作者が実際に現地で観察した上に成り立っていたか否かは定かでないが、自然現象の上に、古戦場のイメージと領主の史跡顕彰行為が重ね合わされる場所であり、この段階の地誌・名所案内記における屋島の名勝イメージを体現する場所と評価することができるだろう。

2．18 ～ 19 世紀の動向 1
―地域の内側からの視点―

18 世紀半ば以降、屋島関連の地物に関する記述は全体として充実し項目も増加するようになる。この傾向は、地誌編纂の隆盛と観光用ガイドブック・名所図会の刊行が背景にあったとみられる。前者は対象の地域・場所を内側の視点から、逆に後者は外側の視点からそれぞれ叙述するものであるが、まずは、17 世紀後半から盛んに編まれていた前者について、18 世紀以降の展開をみておきたい。なお、イの編年史的書物には 18 世紀以降の屋島関連記事はほとんど見られないため、ハの資料を主に取り上げることとする。

延享 2 年（1745）成立の 8・9 は郡別に記述された地誌で、8 が三木郡、9 が山田郡を対象とする。8 には牟礼側の源平合戦関連史跡について記されるが、そのなかには既存の洲崎寺や立駒石・祈石などに加えて、射落畠や大砂子（錣引）などこれまで記述されなかった源平合戦関連史跡を見出すことができる。また、9 でも獅子霊巌や産物である海参・平家蟹についての記述がみられ、地域の側からの視点や伝承・由緒に関する知識が、地誌の内容の充実に結び付いていることがわかる。

また、9 には、「儒臣」岡部拙斎による佐藤継信碑の銘、「台朝官儒詩人」桂山鶴汀による漢文「屋島懐古二首」などが記されている。こうした引用は、15 や 20 といった後の時期の地誌にも継承されており、作者の立場ゆえに、高松藩に関わりのある武士・儒者の著作を通じて漢文・漢詩の世界観から屋島の古戦場としての存在や風景が評価されていたとみられる。

15「全讃史」の名山志は、「屋嶋山」について「源平争鹿之所。名迹甚多。古伝曰。有仙人曰馬蘇」と記している。源平合戦の故地であること、そして「仙人」のいたとされる「古伝」を引きつつ霊地としての性格が示されている。ただ、同書の他の山についても霊性に関する記述は多数確認できること、また、「屋嶋山」において屋島寺の縁起については触れられず、空飛ぶ鉢のエピソードまでは言及されていないことから、霊地としての屋島という性格はそれほど強調されていないと考えられる。むしろ、同書において「名山」という分類の中で屋島を他と分かつものは、源平合戦の古戦場だと認識されていることがうかがえる。

16「全讃史」の名勝志は、これ以前の源平合戦関連史跡を継承する一方で、「土肥」「土屋」「湛増」といった源平合戦に従軍した人物に因んだ地名が挙げられるなど、源平合戦を素材に地域の由緒を説明する傾向もみられる。なお、ここでは「相引」の説明には「屋島謡に。相引に引汐と有是なり」と記されており、17 世紀後半に考証の対象として記述されていた相引川のイメージはこの時点でも継承されていることがわかる。

梶原藍渠の遺稿に基づき編まれた 19・20 は江戸時代末期における屋島の景観描写・イメージの集大成といえるが、同じく藍渠の手による 13・14 をもとにしており、両書から引用されている箇所も多いことから（松原 1981）、ここで合わせてみておきたい。19・20 は、高松藩儒らを担い手とする、これまでの地誌における地域の内側の視点からの叙述を受け継いでいる。また、14 の「文苑」の部において、高松藩儒や藩に関わりの深い儒者による漢文・漢詩が多数引用されている点は 20 に継承され、9 で確認された 18 世紀半ば以来の流れを汲んでいる。

ただ、19・20 はそれまでの地域内部からの地誌と異なり、名所図会の体裁で挿図が盛り込まれている。より写実性のある風景描写に加え、源平合戦の個別の場面も具体的に表現されている。19 には「八栗屋島源平古戦場」（図 1）と題した挿図が 5 頁にわたって掲載されており、屋島・八栗に点在する源平合戦関連史跡と、その舞台となった屋島周辺の様子が、一体的な地域的まとまりをもって詳細に描かれている。タイトルの通り「古戦場」を主題として古高松の辺りからパノラマの如く描かれたこの挿図は屋島東麓から檀ノ浦・牟礼を中心にしており、古戦場から外れる屋島西麓や北嶺は構図に入っていない。

同じく屋島周辺の様子を描いた挿図には、20 における「四国八十四番札所屋嶋寺　塔頭南泉寺」「嶺巌眺望」「檀之浦　皇居跡　次信碑　菊王丸墓　洲崎寺　駒立石　祈石」（図 2）がある。「四国八十四番札所屋嶋寺　塔

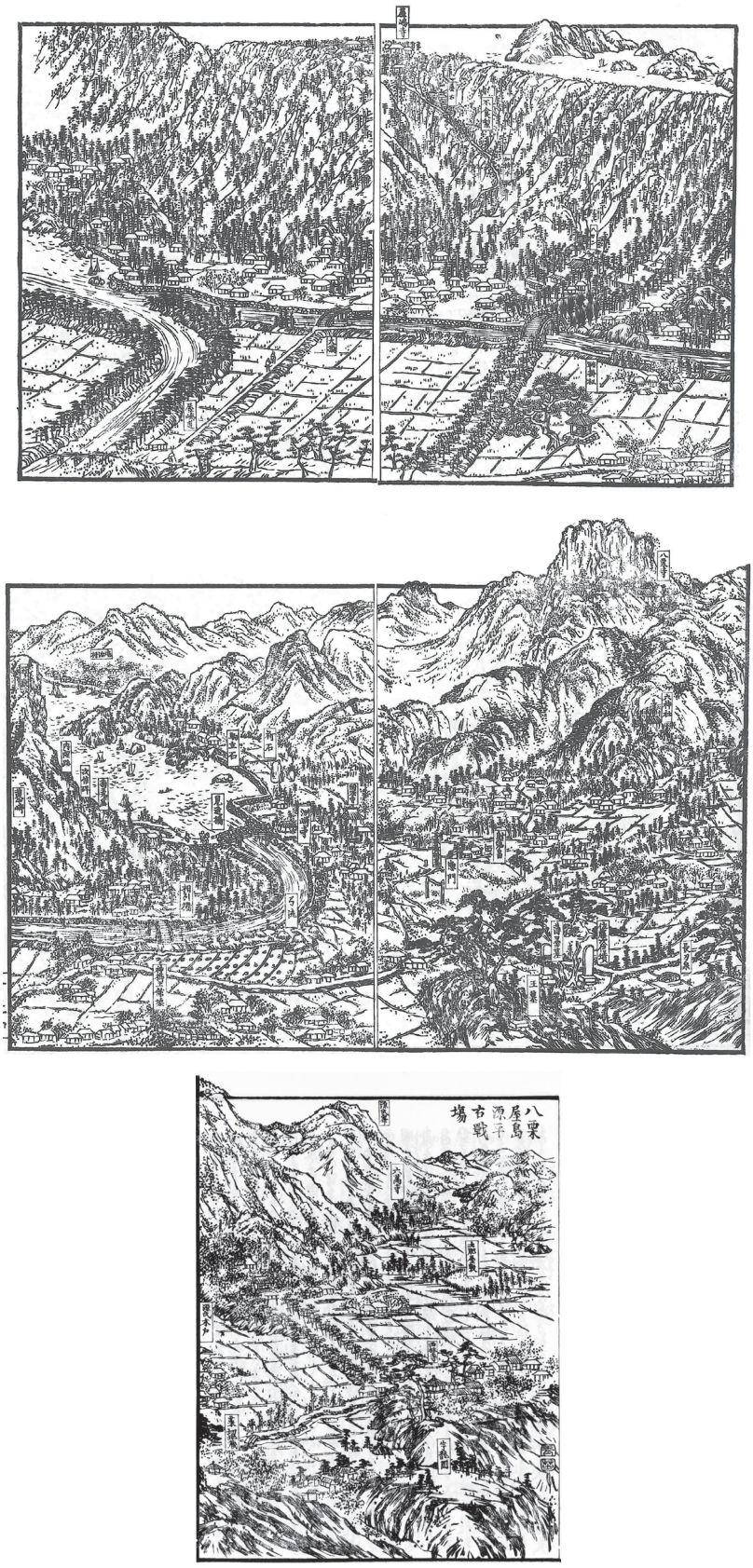


図１「八栗屋島源平古戦場」

出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年

図 2 「檀之浦　皇居跡　次信碑　菊王丸墓　洲崎寺　駒立石　祈石」
出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年

頭南泉寺」は屋島寺境内の俯瞰図で、「嶺巌眺望」は、獅子霊巌から西側を眺望し高松城下と帆船が浮かぶ沖合を描く図である。これらは源平合戦とは関係の薄い挿図で、特に後者は、屋島からの眺望をもって高松城下の繁栄を示唆する意味で、古戦場とは明らかに文脈を異にする表現であろう。一方、「檀之浦　皇居跡　次信碑　菊王丸墓　洲崎寺　駒立石　祈石」は、「八栗屋島源平古戦場」同様の主題をもって源平合戦関連史跡の点在する牟礼・屋島を八栗から俯瞰した図で、背景となる屋島の山容と、主戦場であった檀ノ浦の海面が大きく構図を割いて描き込まれている。

3．18 ～ 19 世紀の動向 2
―地域の外側からの視点―

こうした地誌が盛んに著された同時期に、地域の外部の視点から、屋島はいかにして描かれたのだろうか。ここでは金毘羅参詣を主題とした案内記の 10、名所図会の 18 を取り上げ、屋島に関する記述を確認しておきたい。

大坂を出港して船で丸亀あるいは多度津へ渡り、上陸して象頭山へ向かうのが金毘羅参詣の主要ルートであったが、10 には「讃州の名所八栗屋嶋等見物乃望あらバ大坂にて乗船之節船宿相対して讃州高松へ船をつけさせ道筋所々見物してすぐに金毘羅へ参詣すべし」と記されている。金毘羅船を営業する大坂の多田屋新右衛門の引札にもこのルートと船賃が記載されている（松原 1981）。18 世紀半ば以降の金毘羅参詣の隆盛は讃岐国内の物見遊山の需要をも惹起させ、高松で船を降り八栗・屋島等を巡りながら金毘羅参詣するルートの定着をもたらした。屋島もまたそうした文脈のもとで訪ねられるべき名所となったといえる。

こうした背景に基づく屋島見物は、10 における「屋嶋寺」の項目が、屋島寺と源平合戦関連の史跡・伝承で占められていることから、有名な寺院と源平合戦の古戦場を訪ねる目的でなされていたことがうかがえる。金毘羅参詣を主題とする折本という性格ゆえ、屋島に対して多くの紙面を割いているわけではない。その中で、屋島寺については四国遍路八十四番札所であることと本尊の千手観音について記される。源平合戦に関連しては、「内裏跡を壇の浦といふ」「入海に那須与市駒立石祈の石有」「相引の汐　屋嶋ふもと東西より潮満来ル、干ル時ハ双方へ分ル」といった記述、また、「此所にて嗣信討死といふ」とある「洲崎ノ堂」、「惣門の渚」、「佐藤継信石碑」、「太夫黒の墓」が紹介されている。「駒

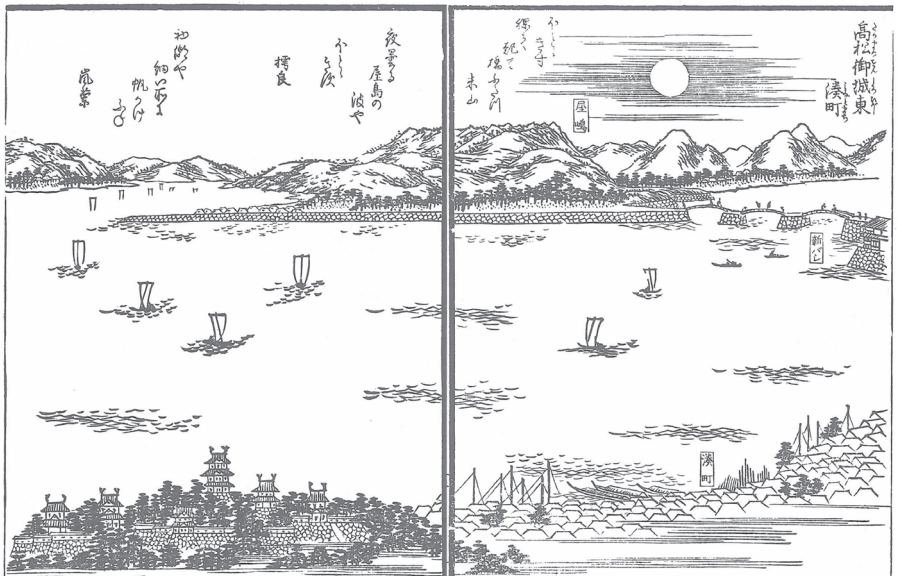


図３　「高松御城東湊町」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

立石祈の石」については玉虫の前と「ある人」の２つの和歌が引用され、また「佐藤継信石碑」に関連して空信の来訪と継信の霊との和歌の掛け合いが掲載されている。代表的な源平合戦関連史跡として挙がっているものは、17 世紀後半の段階を継承している。一方で屋島・屋島寺にまつわる伝承自体よりも、「内裏跡」「石」「墓」など具体的に来訪可能な場所の記述が多く、ガイドブックというメディアの性格も踏まえれば、源平合戦関連史跡ゆかりの場所へ訪れることが、屋島の見物の達成に必要であると認識されていたことが推測される。

その後、19 世紀半ばに刊行された 18 は、金毘羅参詣に伴う讃岐国の名所の来訪という文脈を共にしているが、名所図会という体裁ゆえに、外部者の屋島に対する視点を 10 より充実して叙述できるようになっている。内容は、「日本書紀」を引用した屋島城築造や空海関連の伝承、16 世紀の長宗我部氏讃岐侵攻に関わる古戦場が若干含まれるものの、その他のほとんどが源平合戦関連史跡で、「屋島内裏之古趾」「惣門之古跡」「那須与市宗高祈石」「同駒立石」など随所に、史跡としての解説に加えて、「源平盛衰記」の引用が、ときに８頁に渡るほど多くの紙面を割いて挿入されている。「大胡小橋太水練高名之古址」や、小林新吾宗行と越中次郎兵衛盛嗣による錣引など、代表的な場面以外についても取り上げられており、名所図会に特徴的な考証を織り交ぜ詳細を尽くしたスタイルで、源平古戦場としての屋島一帯が記述されている点が特筆される。反面、地域において信仰されている中小の寺社に関する記述は少なく、10 に見出せる、合戦の舞台としての屋島を訪れる外部者、という作者・読者の性格に対応した叙述となっている。

しかし名所図会特有の多数の写実的な挿図からは、古戦場の史跡としての解説だけに留まらず、屋島の山容や風景自体を評価する姿勢を見出すことができる。「高松鎮城」の項目では高松城下が「風景の勝地」であり、北の女木島・男木島・直島や西・南の山々とともに、東に屋島が眺望できると述べられている。また、「高松御城東湊町」（図３）に、東を眺望した際の屋島の全景が、手前の帆船が浮かぶ海とともに描かれている。高松城下の繁栄と同時に、そこからの屋島の眺望を評価していることがうかがえる。

源平合戦関連史跡の項目では、挿図に史跡の現況やそれらが点在する牟礼・屋島一帯の俯瞰的な様子が描かれている。「屋島山　檀之浦　次信之墓」（図４）は手前に屋島東麓の佐藤継信墓、霞を挟んで奥に、屋島寺や

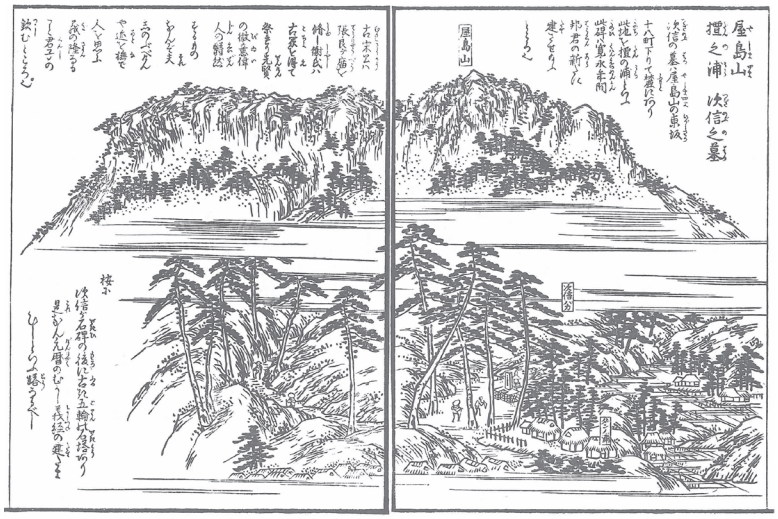


図４　「屋島山　檀之浦　次信之墓」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

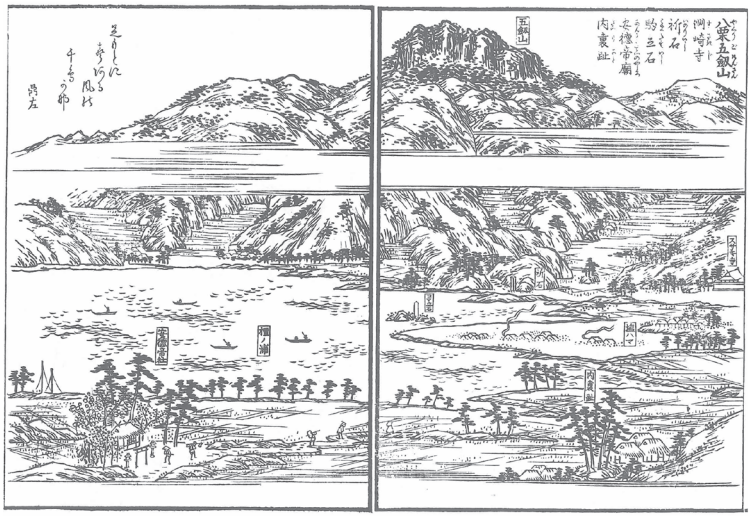


図５　「八栗五剱山」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

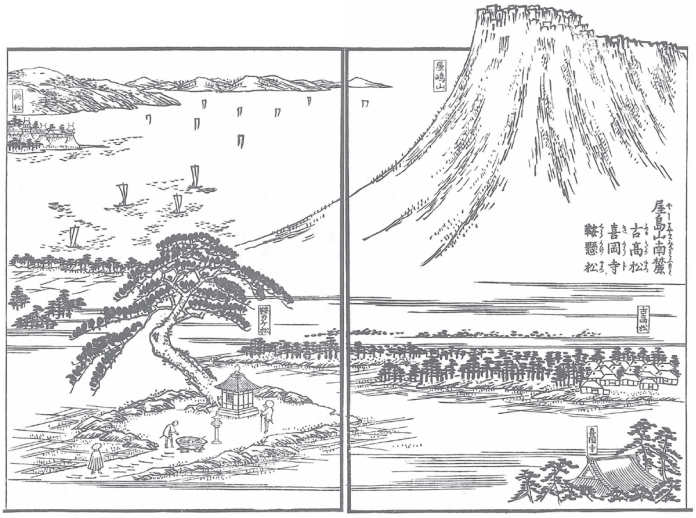


図６　「屋島山南麓　古高松　喜岡寺　鞍掛松」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

史跡を除外し山容のみを描いた「屋島山」のみが配されている。「八栗五剱山」（図 5）は屋島東麓を視点場にして、手前に「安徳帝社」「檀ノ浦」「内裏趾」、中央から右にかけて「コマ立石」「祈石」「スサキ寺」が描き込まれているが、最も印象的な表現は画面中央から奥にかけて大きく描かれた「五剱山」である。そして「屋島山南麓　古高松　喜岡寺鞍掛松」（図 6）では、手前に鞍掛松等の史跡を描きつつ、画面奥右手には屋島南面の形状が印象的に表現され、奥左手には高松とその沖合の帆船が進む様子が描かれている。18 における屋島周辺の現況を描いた挿図は、いずれも山の存在が強調された表現になっているのが特徴である。

ただし、屋島自体についての文字による記述は、山容が「家屋の如し」と評される以上に言及されておらず、挿図も「屋島山」の地名が付されるほかは、史跡の解説や古歌の引用が添えられるのみである。つまり、山やその地勢・植生などを詳細に分析し善し悪しを評価するという段階にはなく、あくまで古戦場の舞台としての屋島が、視覚的に好ましい相貌も備えた山と捉えられていたことに留意する必要があると思われる。歴史に対する考証、現地の実際の風景に対する関心の高まりを背景にして、江戸時代末期の出版物である 18 には、外部者としての立場から数多の古戦場と視覚的に好ましい現在の風景が重なる「名勝」としての屋島が表現されていたといえる。

最後に、18 における屋島周辺の現況を描いた図を、前項で分析した 19・20 の挿図と比較すると、次のような性格の違いを挙げることができる。それは、19・20 における挿図のうち、「八栗屋島源平古戦場」と「檀之浦　皇居跡　次信碑　菊王丸墓　洲崎寺　駒立石　祈石」は、古戦場としての屋島・牟礼一帯を描くことに主眼が置かれているのに対し、18 における「高松御城東湊町」「屋島山檀之浦　次信之墓」「八栗五剱山」「屋島山南麓　古高松　喜岡寺　鞍掛松」の 4 つの挿図は、いずれも（当時における）現在の屋島・牟礼周辺を描くことに力点が置かれていることである。18 における挿図は、「高松御城東湊町」を除いて源平合戦関連史跡が描き込まれているが、いずれも屋島もしくは五剣山の山容自体が強調されている。また、「八栗五剱山」では源平合戦関連史跡の点在するなかに煙が立ち上る「塩ハマ」が表現されているが、製塩中の塩田の様子は古戦場としての表現には相容れないものと思われる。これ

は、19 の「八栗屋島源平古戦場」、20 の「檀之浦　皇居跡　次信碑　菊王丸墓　洲崎寺　駒立石　祈石」において、塩田を示す文字表記がみられず、煙の上がっているような図像もない、いわば塩田が「沈黙」させられた表現とは対照をなしているといえよう。

この違いについて推測を重ねるならば、18 は古戦場としての屋島イメージを前提にして現地をまなざし、文字情報は源平合戦の舞台という文脈で記述されるものの、挿図においては山容など地理的に特徴ある屋島現地の現在の風景が特筆されるべき対象となったと考えられる。一方、19・20 では、屋島という地域に対する内部者の豊富な知識が前提となり、文字情報では知名度の低いものを含めた場所が源平合戦とのゆかりで説明され、挿図においては、地域の外側にある、「源平合戦の古戦場」としての情報にさらに特化した屋島一帯の表現が望まれた可能性がある。

おわりに

本章では、近世の地誌・名所案内記にみえる表現から屋島の景観描写とイメージを検討してきた。その結果、(1) 源平合戦関連史跡の代表的なものは 17 世紀後半に出揃っていたこと、(2) 17 世紀末以降四国遍路や金毘羅参詣を背景に、合戦の舞台として訪れられるべき場所としての屋島が出版された地誌・名所案内記に表現されていたこと、(3) 地域の内側の視点から高松藩に関わりのある儒者を書き手にして成立した名所記・地誌は、高松藩主の史跡顕彰や漢文・漢詩の世界観に基づく屋島への評価を共有していたこと、(4) 地域の内側の視点からの地誌編纂は外部の視点からの案内記の記述にも影響を与えていたことが明らかになった。一方、『讃岐国名勝図会』と『金毘羅参詣名所図会』における文字情報・挿図の表現の比較から推測したように、屋島に対する内部／外部者の視点の違いは、前提となる知識が源平合戦及びその情報源である「平家物語」の類の書物であるか、それとも屋島という地域自体であるか、という相違に通じ、地誌・名所案内記の表現の方向性に差異を与えていた。こうした差異が、名所と認定される場所の拡大や、既存の名所に関するイメージの再構成を生じさせながら、自然地形と古戦場が重なり合う名勝としてのイメージを多様に醸成させていったと考えられる。

〈主要参考文献〉

稲田道彦 2015「訳者まえがき」、真念（稲田道彦訳注）『四国徧禮道指南』講談社
香川県編 1941『香川叢書　第二』香川県
小松勝記 2014「四國遍禮名所圖會解題考察」、同編『四國遍禮名所圖會并近代の御影・霊場写真』金剛頂寺
小山泰弘 1989「地誌・郷土史」、香川県編『香川県史第四巻　通史編　近世Ⅱ』香川県
松原秀明 1981「解説」、同編『日本名所風俗図会 14　四国の巻』角川書店

（担当：島本多敬）

7　近世の紀行文・四国遍路案内記にみる屋島

はじめに

本章では、近世の紀行文や四国遍路案内記に記される屋島、屋島寺・源平合戦の名所を分析し、その特徴をいくつか指摘したい。近世の紀行文をみていくと、主に陸上から屋島を訪れる行程と、海上から眺める行程に大きく 2 分類できる。陸と海では視点も変化していく。そこでまず陸からの視点をⅠ～Ⅲ、海からの視点をⅣにわける。また陸からの視点は数多く存在するので、Ⅰ紀行文、Ⅱ紀行文に関連する地誌、Ⅲ四国遍路の案内記と細分する。いずれも史料を編年して分析することで、屋島を見る視点の変化及び共通性を考えていく。なお近世地誌は、本書第 6 章にて分析されているので、本章では簡略に比較する。

同様の視点で讃岐において、近世以前の名所・史跡がどのように近世史料に記され、変化していくか分析したものに、大山（2006）がある。村民の墓地のなかにあった神櫛王墓は、近世の 4 段階を経て創出されていく過程をあきらかにしている。この神櫛王墓は、後述する佐藤継信の墓・太夫黒の墓という源平合戦の名所にも近接し「王墓」という名で登場する。

なお今回、刊行された史料集を基に調査したため、いずれも近世前期、17 世紀の史料が多く、ついで近世後期となり、近世中期の史料が少ない傾向となった。

Ⅰ　近世の紀行文　陸からの視点

1．寛永 12 年「讃岐下り」

近世における初期の紀行文は、寛永 12 年（1635）頃、生駒家家臣の連歌師岩手宗也による「讃岐下り」（C002）である（香川県教育委員会編 1981）。まず屋島が登場するのは、江戸詰の岩手宗也が大坂から讃岐へ向かう船を探すつぎの場面となる。

> 長さ六ひろはかりなる小船に、人三人乗たるあり。すはや是こそ能登守の乗給ひし八嶋の浦舟よと、とらへてしほりけれは、何こともいさしらぬひのつくし舟そとよ。薩广瀉硫黄か島への御用やとあなどりける程に、
>
> 讃岐人何とてうそをつき弓の
> 屋しまの磯ていられおしやるに

船は小船であり、その状況を源平合戦の能登守平教経が、源氏へ戦を仕掛ける際に飛び乗った船にたとえる。教経は佐藤継信を射落とした武将であり、「平家物語」屋島合戦の重要な人物の一人である。ただ乗船した船は、九州筑紫の船であり、そこから「平家物語」の硫黄島へ流された俊寛を、続く和歌は義経の弓流などを想起している。

その後、船が進まないなかで船頭が島の名を説明しながら、やがて屋島に到着する。

> 船頭殿お顔の色をななをひて、沖にあまたの異名有、沖の小木地の小木ともいふ、をきと云は島の名、其上に舟ははや屋島のま

へゝつんといた、（中略）磯まちかく漕よせて、陸に着てたとり行けるか、洲崎の堂の跡はかなき、次信かしるしの石の苔むして、星霜ふり、哀さなんとしみゝゝと、しるへせしか、其事となく身にしみて、

梓弓やさきにかゝるつき信か
しるしの石も露にかゝりて

そこで洲崎の堂、佐藤継信の墓へ行き、継信を哀れみ歌を詠む。続いて佐藤継信と同じく主君の身代わりになり忠義を尽くした中国漢の武将紀信の故事と比較する内容が続き、つぎのように源平合戦の名所と和歌が続く。

是そいにしへの内裏屋敷の跡なりと教けるをみれは、蓬浅茅生に道絶て、衛士の焼火の影もなく、颯々たる松かせは、朝歌夜絃の声にたたへ、もしほやく烟の斜に立のほるは、椒蘭をたけるかとうたかはれ、鯨波矢さけひの音かとあやしまる。あちきなやはかなや、笹の一夜のかりの御住ゐとはいひなから、玉体をすへさせ給ひし台の、今さらあやしの賤の菜はたけと成しことよと、おもひくるしみて

大内の跡は畠となりぬれは
さすかになをは残しけるかな

まずは内裏屋敷跡、「教けるをみれは」とあることから案内人の存在がうかがえる。そして今見聞している松風や塩焼きの煙から、安徳天皇の内裏があった当時の衛士の焼火や朝歌夜絃の音、合戦の鬨の声や「矢さけひの音」などを想起している。そして屋敷跡が、現在百姓の菜畠になってしまったことを嘆く一方で、菜と名をかけた歌を詠んでいる。

やかて此辺を惣門の渚と申候。されはにや、其程のあれ成塩やの陰に朽残ておはします。見給はましやといひけるほとに、ふりはへて求めれは、けにやさもいひつへき朽木のかふの砂の中の埋木と成て有けるをみて、

朽残る柱はすなの中々に
うつみ門かもなりにけるかな

佳景にいさなはれ、覚えす相引といふ所にいたりぬ。爰を相引と云ことは、弓手よりめてより塩のみち来て、又左右へ相ひきにひくに依てなむといふなり。

松風のしらへと浪の夕汐と
いつれことさら相引の浦

猶此行末、ゆけとも秋のはてしなき名所旧跡の有なれと、かつ後の物たねにも残し給へ

そして朽木となって砂に埋もれる惣門跡、潮の満ち引きから名のついた相引の浦を訪れ歌を詠み、屋島合戦の連歌を完成している。しかし屋島合戦の名所旧跡はまだ数多くあるため、後の物種として残すとまとめている。「讃岐下り」は、「平家物語」を意識した内容であり、その上で現在と過去を比較しながら、さらに合戦を思い無常、哀れさを感じている。

2．寛文７年「小豆島紀行」

寛文７年（1667）、大坂俳壇で活躍した俳人松山玖也の「小豆島紀行」（C005）では、まず小豆島からみた景色に屋島が登場する（香川県教育委員会編 1981）。東は淡路、岩屋、明石、鳴門、「汐の引田、波の白鳥、志渡、八嶋、壇浦、高松」、西は白峯、金毘羅、屏風浦、槌の戸と地名が並ぶ。そして「致景筆にうつし詞にのへかたし」「遠き国に其名聞ゆる松島、松竈、又鎌倉、金沢のなかめにも、をさゝゝをとるましふ覚ゆ」とある。眺めの良さを筆舌に尽くしがたい、日本三景などにもひけをとらないとする。この言葉は、亀山石清尾八幡に詣でた際にも登場し、「致景亦世に越たり、矢くり、屋島、宇龍山なと前に」と絶景と褒め、「綾川に錦ひろくるもみちかな」と一句詠んでいる。

そして「八島、壇浦なと見んとて」高松を発つ。まずはつぎのような屋島寺の描写である。後述する遍路案内記と同様、高松からの行程では、前半が屋島寺、後半が源平合戦の名所という構成となる。

南面山八嶋寺千光院に上る。抑此八島寺は、孝謙帝天平宝字年中、唐龍興寺芯蓼鑑真和尚来朝時、此八島は仙境なりしに、真師仙人に逢給て、願くは此処を我に譲り給へ。伽藍を建て衆生済度の地となさんと申されしかは、仙人此旨をゆるし畢。即七堂

伽藍僧坊四十二宇、年を経すしてなりぬ。本堂五間四面、本尊千手千眼云云。後には此山を御弟子道得に譲給て、鉄鉢一つあたへ給ふ。此鉢みつから往来の客船に飛至て物をこふ。鉢に物満る時は、飛帰て四十二坊を扶持しけるとなり。されと末の世となりて、法力もうすらきけるにや。或時此鉢獵船に飛至しかは、漁人魚をとりて此鉢に入けるより、飛引叶はすして、寺門僧坊もやうやく破壊しけりとなり。此山昔は八所の鎮守有ける故に八島と云しを、後人此山の屋の棟に似たれはとて、屋島と改けるとなり。其後又嵯峨帝御時空海本堂二王門を一夜に建立ありて、自作の本尊を安置し給ひしより、脇坊纔に三宇残りて、今も猶在之。爰にも縁起宝物なと数多あり。悉見侍れと事多けれは、爰にもらしつ。

開基が鑑真であり、屋島沖を通過する際に、仙人から土地を譲り受け寺院を建立、鉢を使って食糧を集める、千手観音を本尊、空海が自作の本尊を安置するなど、いずれも「讃岐国屋島千光院縁起」（「讃岐志」所収、D022）と同じ内容である。しかし独自の記述もあり、食糧を集める鉢に魚を載せたことで効力が消滅し、その後寺院も衰退したとする。また名の由来を、昔は八所の鎮守があるので「八島」であったが、後に「屋の棟」に似ているので「屋島」と改めたとある。名前の由来が登場する初期の文献ではなかろうか。

後半の源平合戦の名所は、「是よりあないの為、若僧ひとりを先にたてゝ」と、屋島寺の若僧の案内で巡っていく。すでに名所を巡ることが定例化しており、案内人が存在していたことがわかる。

東の方におりもて行に、洲崎堂の跡、内裏屋敷、奈須与一扇射ける所、継信石塔、同石碑なとあり。後小松院御宇至徳元年四月五日、奥州住人佐藤庄司末裔信寶といふ僧、此所に来て此石塔に向て、

痛しや君の命を継信の
印の石も苔衣きて

とよみたりけれは、石塔内より返し、

おしむともよも今まてはなからへいし
身を捨てゝこそ名をもつきのふ

此事処の人語しまゝに記付侍る也。石碑は今は国守より建給ふ。彼教経の弓勢、今おもふもおそろしくて、

今聞も胸ひやす人の矢しま哉

屋島寺から東へ降りていき、洲崎堂、内裏屋敷、駒立石、佐藤継信の墓、石碑を巡る。特に佐藤継信の墓では、至徳元年（1384）奥州の佐藤の末裔信寶が石塔を訪ねて歌を詠むと、石塔の中から返歌があったという、土地の住人の語りをそのまま記すとある。この内容は屋島寺所蔵の「源平屋島檀浦合戦縁起」（A059）の最後に登場する話であり、縁起の内容が地域に普及していたといえる。そして寛永 20 年に実施した高松藩主松平頼重の石碑建立が続く。最後に佐藤継信を射落とした平教経の弓を恐れ、屋島を「弓の矢しま」として句を詠んでいる。その後、この多くの名所の案内について疑問を投げかけている。

終日此島めくりして、爰かしこの隈ゝゝ残らす見侍るに、先にしほちの教へし洲崎堂、内裏屋敷、我心にいふかしき所有て、所の古老に委尋侍りしに云く、内裏屋敷は此島の巽の方山の腰に平にて、かつゝゝ広き所あり。惣門渚も此前なり。其柱とて今猶折残りたり。洲崎堂は、武例の前高松の東皆よせての方なり。前に云る所ゝゝ。後の人誤を伝来ると見へたり。継信墓所は後に築たる事なれは、いつくにても難なしと云。盛衰記、平家物語、まひなとの文言を見侍るに、此翁の語る所然へし。今より後、爰に来て見ん人心を付へし。宇龍山、牟礼、高松は、皆屋島山の南、即向ひの方と知へし。今の高松の城は、此名をうつしたるとおもふへし。させる事ならぬを爰に長ゝゝとかける事、我なから心つきなきやうなれと、古き所ゝを見るに、かはかりの事にても、少心を付さらんは無下の事なれは、かく弁記し侍るなり。

月の発句一手あるへき矢島かな
相引や汐のたゝかひ霧の海
波の時雨いくしほ染て赤は崎

名所を見た後に、いぶかしく思った松山玖也は、土地の古老に詳しく尋ねる。すると

内裏屋敷や惣門、洲崎堂、いずれも別の場所であり、継信墓所などは後世のものなので複数あってもおかしくないという。後の人が誤って伝えたものであり、「源平盛衰記」「平家物語」などを見ると、古老の言葉は正しい。今後、現地に来て名所を巡る際には気をつけるよう注意を促し、一般的に古い名所を見る際の注意すべき点であるとも述べる。

「小豆島紀行」では、すでに当時名所を案内する人がおり、またその案内の内容を調べ確認し間違いを正す旅人がいたことがわかる。特に松山玖也は俳人でもあり、句を詠む前提としての名所の場所の重要性を認識していたのかもしれない。

3．宝暦 12 年「壬午紀行」

加賀山中の俳人桃居翁二柳の「壬午紀行」（C006）は、宝暦 12 年（1762）3 月に屋島を訪れている（香川県教育委員会編 1981）。高松から志度へ向かう途中、友人に屋島まで見送ってもらうが、そのまま夜になり翌日友人に屋島を案内された。ただ屋島山に登ることもなく、つぎのように街道途中の佐藤継信の墓、太夫黒の馬塚について記すのみである。

> 高府より志度へ赴く途の傍に、大墓とて小高き処に松すこし村たちたる中に、又佐藤次信の塚あり。その傍に馬塚といふあり。これかの義経より次信に賜りし太夫黒といふ馬を葬りけると也。

つぎに屋島から東へ進み、志度の臨江亭を訪ね高楼に登り、つぎのような景色をみた。

> 名にあふ房前の浦を眼下に望て、致景物としてたらすといふ事なし。東は小串とかいへる山長く運りて、恰も長蛇の臥かことく、八栗山は丑子に峙ちて、波上に五鈷の影をひたす。屋島は八栗の尾上を垣に見越して、隣り真珠島は手をさしのへても取つへし。

志度から見わたす絶景の一つとして、屋島が八栗山の向こうに見えるとあり、ここから屋島は東部志度からも高所に登ると目立つ山であったことがわかる。

II　地誌にみる屋島

1．延宝 5 年「玉藻集」

延宝 5 年（1677）に高松藩士小西可春が編纂した「玉藻集」（D002）は、讃岐の名所古跡の和歌を基本に、寺社の由緒、伝説、物産、伝記や家記などを郡別にまとめたものである（香川県編 1939）。「屋島」の項には古代以来の屋島を詠んだ和歌が記されている。

最初に「古今和歌集」の「ほととぎす鳴声きけは別れにし、ふるさとさへそ恋しかりける」の歌を紹介する。これは読み人知らずとあるが、「古今集古注」に讃岐に配流された大江忠名が屋島にて詠んだものと引用している。また「郷談春歌」の「やしま坂中に鳴ほととぎす声はきけとも目に見えぬ」という古い小謡も関連として記す。屋島のほととぎすは、この後の文芸作品にも登場する。

続いて屋島城設置、源平合戦の概要、最後に那須与一が扇の的を射た際に、平家方女房の玉虫前が詠んだ歌が記される。「屋島」の後、赤牛崎、惣門ノ渚、相引、洲前ノ堂、初音の鼓と源平合戦関連の名所・説話が立項されている。洲前ノ堂では、六万寺関連の歌の後、「小豆島紀行」にも登場した佐藤継信の墓を訪ねた一門佐藤信空の歌が続く。そして注釈として「屋しま寺縁起ニ委」とあり、「源平屋島檀浦合戦縁起」（A059）の出典を記す。その他「鉢之廻門」項では、屋島北嶺に住む仙人空鉢聖人が、飛ぶ鉢を使い食糧を集めていたが、船の魚肉の穢れを受けて海底に沈んだと「小豆島紀行」と同様の内容がある。

「玉藻集」全体の傾向として、歌名所としての屋島を中心に紹介している。屋島寺や源平合戦以外の話も収録し、屋島が仙人の住む仙境空間として認識されていたこともわかる。

2．18 〜 19 世紀の地誌

延享 2 年（1745）山田郡木太村の増田休意が、父正宅の書残したものを増補し、弟で高松藩儒菊池武賢が校合した「翁嫗夜話」（D007・D008）は、讃岐最初のまとまった地誌である（平凡社編 1989）。巻 4「三木郡」には、佐藤次信墓からはじまり、大夫黒

塚、同碑銘、射落畑、洲崎寺、立駒石、祈石、大砂子、惣門、源氏峰、瓜生山、土肥、土屋、長刀泉、六万寺、旦僧、巻５「山田郡」には、屋島寺、不食之梨、名号・畳石、二王門、大悲閣、獅子霊巌、経塚、屋島城、内裏屋敷、島蘇仙人、屋島記、佐藤次信碑文、黄牛崎、長崎鼻、瞽女崎が項目としてあがる（巻５は後欠の可能性あり）。地域で編纂された地誌の特徴として、先述の紀行文より詳しく屋島寺、源平合戦の名所が紹介される。また産物として、屋島浦海参、平家蟹が取り上げられるが、これも地域地誌の特徴といえる。

天保２年（1831）香川郡東池西村出身の儒学者中山城山が編纂した『全讃史』（D018・D019）は「郡郷志」「人物志」「古城志」など分野別の地誌である（平凡社編 1989）。巻 10「古冢志」には佐藤継信墓と大夫黒墓、巻 11「名勝志」に六万寺、瓜生山、土肥、土屋、湛増、源氏か峰、菜切地蔵、惣門、射落畑、大砂子、屋島、血池、名号石、獅子霊岩、忠名屋敷の名所が簡潔に記述される。ただ分野別にまとめているため、屋島の地域のまとまりはない。忠名屋敷は、「玉藻集」に登場した屋島の歌を詠んだ大江忠名の屋敷であり、新たに登場する名所といえる。

嘉永６年（1853）高松町人で後に藩士となる梶原藍渠・藍水親子が編纂した『讃岐国名勝図会』（D015・D016）は大内・寒川・三木・山田・香川５郡（刊行分）の名所旧跡・寺社・風俗全体を範囲とした絵入地誌である（平凡社編 1989）。巻３「三木郡」には、佐藤次信墓からはじまり、大夫黒墓、源氏峰、菜切石、長刀泉、鎌田光政墓、「継信討死之図」（「 」は絵、以下同）、宇龍山、惣門跡、射落畠、祈石、駒立石、「義経弓流図」、「八栗屋島源平古戦場」、洲崎寺、「平家蟹全図」、土肥屋敷、肉醤がある。巻４「山田郡」には、東から鞍掛松、屋島寺、「屋島寺」、「嶺巌眺望」、南泉寺、経塚、名号、不食梨、畳石、瑠璃宝池、獅子霊巌、北峯、鉢の廻門、屋島城跡、「屋島城合戦」、赤牛崎、牛頭天皇社、相引、檀の浦、安徳天皇社、「檀之浦・皇居跡・次信碑・菊王丸墓・洲崎寺・駒立石・祈石」、佐藤次信墓、菊王丸墓がある。

『讃岐国名勝図会』は、これまでの地誌に比べ屋島の史跡・名所の数、内容、画像も含まれ詳細であり、地域側からの地誌としては完成形といえる。それは土産・産物の記載の増加でも明らかで、巻３の肉醤は、「明月記」に屋島の内裏から送られた鯛にて醸すものと記載があり、現在でも烏賊や海老などで作るとあることから産物といえる。そして巻頭には土産として、「陶器屋島西麓、海参屋島浦、鬼面蟹又平家蟹とも云壇浦」とあり、新たに陶器が増加している。

弘化３年（1846）大坂の暁鐘成が編纂した『金毘羅参詣名所図会』（D013）では、巻６に屋島が登場する（平凡社編 1989）。その項目は、相引の潮、屋島寺前札所、弘法大師加持水、梵字石、不食梨樹、「高松御城東湊町」、畳石、石鍾乳、屋島寺、「梵字石加持水」、御影堂、釈迦堂、千体堂、鐘楼、二王門、本坊、獅子之霊巌、仙人窟、鉢ノ淵、血之池、屋島山、屋島ノ浦、屋島ノ古城、「屋島寺」、佐藤次信之碑、安徳天皇社、屋島内裏之古址、「屋島山、檀之浦、次信之墓」、洲崎ノ堂、惣門之古跡、「屋島惣門之趾」、那須與市宗高祈石、同駒立石、「那須宗高扇を射る」、「八栗五剣山、洲崎寺、祈石、駒立石、安徳帝廟、内裏址」、景清鋌曳之古趾、「景清鋌曳」、大胡小橋太水練高名之古趾、「大胡小橋太水練高名」、源義経弓流之古蹟、「義経弓流」「盛嗣宗行が鋌を引切る」、黄牛崎、佐藤次信墓、「次信が霊空信が夢中に歌を返す」、義経乗馬太夫黒之墳、「佐藤次信墓、太夫黒馬墳」、瓜生山、鞍懸松、「屋島山南麓、古高松、喜岡寺、鞍懸松」、平家蟹、長刀泉、菜切地蔵、「〔菜切地蔵〕」、六万寺之旧跡である。

『金毘羅参詣名所図会』は、項目、画像ともに近世地誌のなかで最多である。暁鐘成は、大坂で活躍し、京都、摂津、淡路など各地の名所図会を執筆した人物である。その意味で地域側の視点の地誌ではない。『讃岐国名勝図会』と同じ項目が多いが、「景清鋌曳」「大胡小橋太水練高名」を「平家物語」などから加え、より読者を意識した内容といえる。

Ⅲ　屋島寺と遍路案内記

１．寛永 15 年「空性法親王四国霊場巡行記」

四国遍路の紀行文・案内記のなかで最も

古いのは、寛永 15 年（1638）伊予太宝寺の権少僧正賢明の「空性法親王四国霊場巡行記」（C003）である。賢明は、大覚寺空性法親王（後陽成天皇弟）に随行した。「空性法親王四国霊場巡行記」は、案内記ではなく紀行文であり、文章も七五調を基本として、札所の寺院の記述は簡略で名所旧跡の記事が多い（越智 1981）。屋島寺は記載されていないが、八栗寺への行程につぎのように源平合戦の名所が紹介される。

> 名も高松の殊勝さは、昔に増しぬ要地とぞと、歩み行く夜は白浪の、寄せ来る渚の頭なる。城を左に屋島寺、昔源平争ひを為す趾なれば、空打曇る折節は、矢石響の声震動し、吾が攀ぢ登る頃も猶ほ、松吹風や磯の浪、閧の声かと疑ふも、君の命を継信が、印しの石の側にて、真言陀羅尼回向をば、那須の与市の駒立石、扇の的に八栗寺（後略）

名所としては、佐藤継信の墓、那須与市の駒立石のみであり、風や波の音が矢石や閧の声に聞こえるなど、同時期の「讃岐下り」と同様の描写といえる。

2．承応 2 年「四国遍路日記」

承応 2 年（1653）「四国遍路日記」（C004）は、本格的に屋島寺と源平合戦の名所を紹介した遍路案内記といえる。肥後国球磨郡生、智積院の僧、学頭もつとめた澄禅作であり、内容が豊富で、案内記のなかでも当時の遍路の実態を最もよく伝えるとある（越智 1981）。まず屋島寺に関する由緒を記す。

> 屋島寺　先ヅ当寺ノ開基鑑真和尚也。和尚来朝ノ時此沖ヲ通リ玉フガ、此南ニ異気在トテ此島ニ船ヲ着ケ見玉テ、何様寺院ヲ可建立霊地トテ当島北ノ峰ニ寺ヲ立テ、則南面山ト号玉フ。是本朝律寺ノ最初也。其後南都ニ赴玉テ参内也。扨、当寺ニ鑑真和尚所持ノ衣鉢ヲ留玉フ。此鉢空ニ昇テ沖ヲ漕行船共ニ飛下テ斎料ヲ請、舟人驚テ米穀ヲ入時本山エ飛還。如此スル事度々ナル故ニ真俗此山ヲ崇敬スル間、次第ニ繁昌シテ四十二坊迄在ケルニ、或時此鉢猟師ノ舟ニ飛下ル、舟人周章シテ魚類ヲ此鉢ニ入ルヽ、其時此鉢微塵ニ破テ舟トモニ海底ニ沉ム、今ニ此海ヲ舞崎ト云。此山衰微シテ退転シタリ。其時ノ本堂ノ本尊釈迦ノ像今ニ在リ。其後大師当山ヲ再興シ玉フ時、北ノ峰ハ余リ人里遠シテ還テ化益難成トテ、南ノ峰ニ引玉テ嵯峨ノ天皇ノ勅願寺トシ玉フ。山号ハ如元南面山屋島寺千光院ト号。千手観音ヲ造本堂ニ安置シ玉フ。大門ノ額ヲバ遍照金剛三密行所当都率天内院管門ト書玉フ。然ニ此額ヲ毎夜龍神上テ窺故ニ、此額ヲ掛置タラバ末代ニ寺ノ為ニ悪カルベシトテ、当山智ノ池ノ中島ニ埋セ玉フトナリ。尓来無退転仏法相続シテ在。

開基が鑑真であり、屋島沖を通過する際に霊地として北嶺に寺院を建立した、鉢を使って食糧を集める、千手観音を本尊とするなど「讃岐国屋島千光院縁起」と同じ内容である。しかし鉢の不思議による寺の繁盛と結末、大門の額の由来などは独自の内容といえる。後半は八栗寺へ至る道沿いに、源平合戦の名所を記す。

> 扨、東ノ方エ行テ屏風ヲ立タル様成坂在、爰ヨリ下ハ平家ノ城郭也。五町斗下テ壇ノ浦ニ至、爰ニ安徳天皇ノ内裏ノ旧跡在リ。内裏ノ傍ニ一群ノ松ノ中ニ奥州佐藤次信ノ石塔在、此内裏ハ阿波民部重能ガ力ニテ仮リニ造シ所也。波打ギワニ洲崎ノ堂ノ跡在、佐藤ガ石塔ハ当国主石壇ヲ築石碑ヲ立レタリ、銘細字ニテ不分明。是ヨリ八栗エハ海ノ面六七町斗也。爰ヨリ浦伝ニ南ノ方エ行バ相引ト云所ニ至ル。屋島ヲ中ニシテ両方ヨリ潮一度ニサシ、又引時モ一度ニ引故ニ相引ト云也。源平ノ合戦ノ時分迄ハ干潮ノ時モ人馬ノ歩渡リハ不成シガ、近年浅ク成テ潮タニ引ケレバ跡ハ白砂ニテ歩行自由也。是ヲ渡リテムレ高松ニ至ル。此浜ハ源氏ノ陳場ナリ、義経ノ下知ニテ浜面ニ而陳ヲ取、鹿垣ヲ結テ惣門ヲ構ヘ、其中ヨリ走出ク合戦タルト也。惣門ノ跡トテ柱一本立テ有、其アタリニ射落ト云所在、是ハ次信ガ能登守度（ママ）経ニ矢ニ当テ落シ所ナリ。又波打ギワニ駒立石トテ二間方斗ノ石

在、是ハ那須与一宗高扇ヲ射シ海中ニ馬ヲヲヨガセ、此石ノ上ニ駒ヲ立テ扇ヲ射シ所ナリ。昔ハ水ノ底也シガ、今ハ浅成テ干潮ノ時ハアラワニ見也。是ヨリ未申十町斗ニ次信ガ墓所在。此ハ火送ヲシタル所也。此浜ヨリ廿余町上テ八栗寺ニ至ル。

屋島寺から下り、平家の城郭、檀ノ浦、安徳天皇内裏跡、その近くの佐藤継信の石塔、洲崎堂跡が順番に記される。特に佐藤継信の石塔は、「当国主石壇ヲ築石碑ヲ立レタリ、銘細字ニテ不分明」と、「小豆島紀行」と同様に松平頼重の保全措置を注記する。つぎに相引、源氏の陣場、惣門、駒立石、佐藤継信墓と続く。いずれも源平合戦の際の状況であるが、相引と駒立石は、近年水面が浅くなり干潮時には歩行できたり、石が見えるようになると、当時の状況変化が判明する。「四国遍路日記」は、源平合戦の過去を想起する部分と現実の実態の両方を把握している。

3．貞享 4 年『四国遍路道指南』

貞享 4 年（1687）大坂の高野聖真念の『四国遍路道指南』（D003）は、携帯を意識して小型本で刊行され、増補版が出るなど後世に影響を与えた遍路案内記である。真念は、20 回もの遍路を行い、遍路道標を 200 箇所も建立した（越智 1981）。つぎの『四国遍礼霊場記』への情報提供や、元禄 3 年（1690）に四国霊場関係の功徳話をまとめた『四国遍礼功徳記』を刊行するなど、四国遍路と関わりの深い人物である。

前半は他の寺院と同様に基礎事項が続く。

八十四番やしま寺　山上、堂はミなミむき。やまだ郡やしま。
本尊千手　坐三尺、大師御作。
あずさ弓やしまの宮にまうでつゝいのりをかけよいさむものゝふ

寺の場所、堂の向き、住所、本尊、御詠歌「あずさ弓」の簡潔な情報である。後半には源平合戦の名所巡りとなる。

是よりやくりじまて一里有。寺より東坂十丁くだり、ふもとに佐藤次信のはか有。領主より、壱丈四方の切石にて壇きづき、其上に五尺の石塔を建立し、碑の銘あり。古の五輪塔も有。後小松の御宇、崇徳元年四月五日に、奥州より、佐藤氏族のしやもん空信此はかに詣来て回向のまことをつくし、
いたはしや君の命をつぎのふが印の石は苔ころもきて
とよまれけれバ、そとば動揺して
をしむともよも今迄ハながらへじ身をすてゝこそ名をバ次信
と、はかの中にこゑしけるよし、屋島軍ゑんぎに見えたり。それより先帝・女院行幸の内裏の跡有。この所を壇となづけ、浦を壇の浦となづく。又あい引の汐、にしひがしより汐ミち、南面山のふもとをめぐり、両うミの中辺にて満合、たがひに引なり。此入うミ三町ばかり渡りて、奈須の与市駒立岩有。又いのり石有。其南脇にすさきの堂、本尊正観音、大師御作、其南に惣門。次信射をとさるゝ所有、大夫黒といふなん馬のはかも有。或ハさじきの岡、名切水幷に瓜生山とて、源氏の本陣所あり。其外旧跡かすゝゞ有。惣名はむれ村といふ。右の惣門よりやくりへ十八町行て坂。

「四国遍路日記」と同じく、屋島寺から八栗寺まで源平合戦の名所が並ぶ。説明が詳しいのは、やはり佐藤継信の墓で、松平頼重の保全措置や古い五輪塔の記述がある。加えて「屋島軍ゑんぎ」にある話として、「小豆島日記」「玉藻集」と同じ佐藤空信（すべて名前が違う）の回向とそれに答えた継信霊との対話が続く。「屋島軍ゑんぎ」は、先述した屋島寺所蔵の「源平屋島檀浦合戦縁起」であり、「玉藻集」に続いて出典を記す。屋島寺の説く源平合戦縁起が根拠となり普及している事例といえる。その後、内裏跡、壇の浦、あい引、那須与市駒立岩、祈石、須崎堂、惣門、大夫黒馬墓、さじきの岡、名切水、瓜生山、源氏の本陣と続く。『四国遍路道指南』では、屋島寺の分量を比較してもわかるように、「其外旧跡かすゝゞ有」と数多く源平合戦の名所が採録される。

４．元禄２年『四国遍礼霊場記』

元禄２年、高野山宝光院の寂本の『四国遍礼霊場記』（D004）は、真念から資料提供を受け書かれたもので、本人は実際に遍路に出てはいない。しかし『邪排仏教論』など多くの著書を持つ学僧であり、伝承や功徳話に疑義を呈する文章を載せるなど厳密な編集方針であった（越智 1981）。凡例にも「若幸に縁起ある所はそれによれり。おほくは口づから伝ふるのミなれば、あやしき事ありといへども、其伝ふるまゝに書侍つ」「寺々の縁起書る其人により､臆度私意に引くものあり」とあり、縁起や口伝についての意見を述べる。

本文はこれまでの案内記と同様に前半は屋島寺の縁起、後半が源平合戦の名所巡りであり、屋島寺境内・屋島山、源平合戦の名所の２点の絵が挿入されている。

南面山屋島寺千光院

此寺の濫觴は、孝徳天皇の御宇天平宝字六年十月、大唐楊州の鑑真和尚日本の純淑を聞て来朝の時、船中に於て、邈に此山の瑞光のたつを見て船をよせ登臨ありしに、一老翁鳩の杖をつき、出現していはく、此山は七仏説法の霊区、天仙遊化の砌なりといひ忽然として形ちうせぬ、和尚さてこそ神秀の地なれとて、去事をわすれ、仮に一堂を営み、所持の普賢菩薩の像を置、法華及華厳経の普賢行願品を貽し置んとす、時に二聖・二天・十羅羅刹女出現して種々の霊異をあらはせり、いつはつともはず、五十七ヶ日をぞ歴てさられしとなり。然して風化高く布、招提寺を創て後、仏舎利三粒幷に菩提樹の珠数を送れり。それより五十年をへて、我大師此に至り、千手千眼の大悲の像を、一刻三礼にて作り玉ひて安置し、千手院と称す。

開基鑑真の話は「讃岐国屋島千光院縁起」とほぼ同様である。しかしそれ以降は、弘法大師の千手観音像の安置を採用した以外は全く省かれている。縁起の内容も自ら検討した結果を記述していると思われる。後半の源平合戦の名所巡りも簡略である。

洲崎の堂幷次信墓

屋島寺より東坂十八町下りて麓に次信が墓あり。此墓むかしより五輪の石塔あり、これに付俗に伝ふる物語・歌などあり。遠き比、国の太守より、壱丈四方に切石にて畳み、其上に長五尺の碑を立られたり。むかし宋公は張良の廟を修し、謝氏は古冢を得て祭れり。先賢の微意、偉人の翳然するもの、なんぞそれしのぶべけんや。迹を撫、人を思、義の隆なる事、君子の欽む所なり。凡此地を壇といひ、海浦ちかきによりて壇の浦といふとかや。其東の渚に駒立岩とて奈須の与市の駒を乗上たるとて駒の両足のあとあり。又扇子を射し時祈誓せりとて祈石などいふ石あり。其南の脇に洲崎の堂あり、本尊正観音大師の御作なり。

これまでと同様に佐藤継信の墓の解説が詳しいが、特に松平頼重の保全措置が中心である。そして中国南朝の宋公による張良廟の補修を例に、君子が先賢を欽むことが重要であるとする。これら漢籍からと思われる知識も、他にはない寂本独自といえる。その後、壇の浦、駒立岩、祈岩、洲崎の堂が続く。これらの名所はいずれも絵のなかにも描かれている。最後に「是は順礼所にはあらずといへども、道すじなるの故にこゝに載侍る」と、源平合戦の名所を記述する理由をあげる。信仰に基づく編集を目指す寂本は、巡礼に関係はないが遍路道沿いにある、世によく知られた源平合戦の名所を省略できず、理由を説明したともいえる。

５．19 世紀の案内記､「四国遍礼名所図会」『四国偏礼道指南、増補大成』『方言修行金草鞋』

寛政 12 年（1800）阿波国阿南河内屋武兵衛の「四国遍礼名所図会」は、出版を意図したものではない個人の文書とある（D011）。しかし様式はこれまでの遍路案内記と同じであり、後に遍路を行う人々への案内記といえる。まず屋島寺は、境内図があり、由緒は開基鑑真の話のみ、堂宇、御詠歌など、これまでの案内記と同様の記述である。後半に源平合戦の名所が、矢倉谷から檀浦、佐藤継信墓、佐藤継信石碑、内裏屋敷、安徳天皇社、

赤午崎、大墓（大夫黒墓）、義経鞍掛松、宇龍岡、駒立岩、相引汐、須崎観音堂の順に記される。いずれも詳しい解説はなく、例えば「佐藤継信石碑」は、「道の左にあり、碑名ハ岡部柳（拙ヵ）齋作る」とあるように、地誌や案内記にみえる簡略な定型文である。

文化 12 年（1815）佐々井治郎右衛門が刊行した『四国偏礼道指南　増補大成』（D012）は、貞享 4 年『四国遍路道指南』（真念）の増補版である。開基は鑑真、大師作の千手像、御詠歌は記されるが、大幅に簡略化され、佐藤継信の墓、洲崎の堂、源氏の本陣所のみである。携帯用の案内記として、より厳選された内容といえる。

最後に、遍路の案内記というより滑稽本の一つである、文政 4 年（1821）の十返舎一九『方言修行金草鞋』14 編（A080）を紹介する。まず当時大坂から遍路をおこなうには、1 番霊山寺のある阿波ではなく、讃岐丸亀に上陸し 78 番道場寺から回っていたとあり、その経路をとる。主人公千久良坊・鼻毛延高が丸亀着後すぐの会話に、つぎのような平家の亡霊に関するものがある。

> モシこゝは往昔平家の一門が、土左衛門になつた処さ、それだから今でも幽霊が出て、船を見ると引き倒さうとするそうさ、其所で平家の引倒しといふことは、こゝからはじまつたことださうな。ホンニ折々土左衛門が、火の見櫓へひつかゝるには困ると、龍宮の自身番で小叱をいふといふことだが、これはさうでござりませう

源平合戦による平家の幽霊、平家の引き倒し、竜宮の状況などを記す。これまでの紀行文や遍路案内記と違い、滑稽本独特の読者の関心を考慮した内容である。しかしそれらを望む読者層がいたことや、源平合戦に対する民衆意識の一端がかいまみえる。屋島寺に関しては、つぎのように他の案内記とほぼ同様である。

> 一の宮より仏生山へかけて行く時は、屋島へ三里半、高松御城下へかけて行けば四里なり、千久良坊延高仏生山より、八島坂下口の庵室に、一夜を明す、八十四番八島寺、南面山千光院、大師の作、せんじゆせんがん大悲の本尊なり、御詠歌、梓弓八島の宮に詣でつゝ祈りをかけて勇む武夫
> 夫より東十町下りて、佐藤継信の墓あり、須崎の観音、こゝを過ぎて牟礼村なり

屋島寺の堂の向き、本尊、御詠歌の情報である。源平合戦の名所も佐藤継信の墓、洲崎の堂のみである。最後に「道筋に弓は張ども太平の矢島に霞引くばかりなり」と狂歌が詠まれている。弓を張って戦った源平合戦の面影はなく、太平の現在の屋島には霞が引いていると、現在と過去の変遷を表している。この点は、「讃岐下り」「四国遍路日記」と同様の視点である。

Ⅳ　近世の紀行文　海からの視点

1．外国使節の目、朝鮮通信使

近世における外国使節として、瀬戸内海を往来したのは朝鮮通信使である。12 回の来日の内、最後の文化度は対馬易聘であったため、瀬戸内海を通過していない。通信使は数多くの紀行文を残しているが、慶長 12 年（1607）から宝暦 14 年（1764）の 11 回のなかで、屋島に触れたのは、元和 3 年（1617）李景稷「扶桑録」（C001）の 1 回のみである。8 月 15 日通信使は大坂へ向かう途次、備前国下津井を過ぎたあたりの船から見た景色をつぎのように記している。

> 下津を過ぐ。下津は、備中の属浦也。暫く帆を落とし水を取りて行く。南のかた、塩田島（塩飽島ヵ）・大豆島（大槌島ヵ）・八島を過ぎ、北のかた比比（日比）島・京長老崎（京上臈島）・児島・岡山島を過ぐ。児島は、乃ち美酒を以て日本に名あるの郷にして、岡山は、即ち備前の主将の居る所の地也。

船から見て南に塩田島・大豆島・八島、北に比比島・京長老崎・児島・岡山島を記すが、児島の美酒と岡山藩主の居城の記載があるのみである。当時の主要航路が瀬戸内海の北部沿岸であり、下津井で岡山藩の接待を受

けた通信使には、自然に岡山方面へ関心が向いている。しかし数ある島の内「八島」を取り上げていることから、通信使が屋島に関する既知の情報・知識を持っていたと思われる。同行する対馬藩などの日本側の役人からか、または朝鮮側で普及した情報かいずれかが考えられる。須田（2008）によると、下関の安徳天皇を祀る阿弥陀寺、平家滅亡の物語に関して、通信使ほか朝鮮官人は日本知識として共有していたことをあきらかにしている。源平合戦の主戦場の多い瀬戸内海を通行する通信使には、源平合戦の情報は必要な知識であり、屋島もその一部であった可能性がある。また通信使に同行する対馬藩主宗家は、桓武平氏、壇ノ浦合戦で戦死した平重盛を祖としており、他大名に比べて源平合戦への関心が高かったとも考えられる（東 2014）。

2．船の乗客、遠山景晋・忠直・内藤充真院

文化 2 年（1805）、幕府の使者としてレザノフ来航の処理で長崎へ向かった遠山景晋の「続未曾有記」（C007）も景色の描写である。2 月 14 日備前国牛窓を出航後、「南に讃州、志度の浦、真珠島などは小豆しまに遮れつ、八栗ヶ岳、八島の山は遠く見ゆ、源平合戦の所なり」とある。随筆や日記を数多く残す文人として、短いが源平合戦に触れている。

また阿波国の忠直が、主人木下氏の使いで備中国撫川を訪ねた時の紀行文「撫川の記」（C010）にも、海からの屋島がみられる。文政 10 年（1827）正月 17 日に徳島の眉山を発し、讃岐国観音寺・金毘羅・善通寺などに詣で、21 日丸亀から備前国児嶋下村へ向けて出船、霞の中を進んでいき、そこから見えた景色をつぎのように描写している。

> 先飯の山のけしき、西上人の、讃岐にはこれをや富士と飯の山朝けの煙たゝぬ日もなしと詠し給ひしも哀れ深かりけり、象頭山・獅子山・五岳山、又東の方をミわたせハ、八栗・八嶋なと、かのもかのもにミへわたる、こよなうおもしろく思ふ内、追風さと吹きたりて、またゝく間に下村につきぬれは、名残おしくも口惜しくもおもひつゝ

丸亀に近い飯野山、西に象頭山・獅子山・五岳山、東に八栗・屋島を見て、山々の景色を楽しんでおり、源平合戦に関する記述や和歌はない。

延岡藩主室内藤充真院の「海陸返り咲こと葉の手拍子」（C012）には、元治 2 年（1865）4 月 6 日延岡から江戸へ帰る際の瀬戸内海で「八島だんの浦を遠くに見」るとのみ記す。「平家物語」など古典の教養のある大名の妻であるが、女性の視点なのか源平合戦には触れられていない。

3．海を行く商人と船頭

佐渡国の廻船商人の西国見聞記「海陸道順達日記」（C008）には、文化 10 年 7 月 20 日大坂から淡路島、小豆島を過ぎて丸亀へ進む様子が記される。そして「八くり八嶋なと見へけれハ、古昔源平のたゝかいの事共、口々取々に語りのゝしりけれハ」とある。遠山などとは違い、一般庶民が乗り込む船において、源平合戦を語り合っており、当時、屋島＝源平合戦を連想する共通認識があったといえる。つぎに江戸の人が「やれ見ゆる嶋ハ八くりの八嶋にて、やつとむかしのやわやわのあと」と詠んだ。八栗・屋島の「や」を数多く用いた歌である。

その後、高風に船が揺れ荷物が動くことに対して、船頭が詠んだ歌として、「よく動き物ハくふなりさべる（喋る）なり、心遣ひや乗合の荷ハ」「高砂の浦を追風に帆をあけて、八嶋の磯にはや着にけり」の 2 首が記される。1 首目は客と荷物を詠んでいるが、2 首目は播磨の高砂から追い風に乗り、すばやく屋島へ到着したとある。義経の一ノ谷から屋島への迅速な移動を想起させる内容であり、源平合戦との関連があると考えられる。商人の紀行文においても歌を複数添えており、名所たる屋島の位置づけ、源平合戦を連想する共通認識があったといえる。

「南海瀬戸日記」（「川渡甚太夫一代記」（C011））によると、若狭国の船頭川渡甚太夫は嘉永 3 年（1850）5 月 27 日屋島の前に船を掛けている。瀬戸内海を船で東へ進むなかで、26 日に多度津から四島（与島）に移動するが、そこの浜辺に切石が城のように

積み上げられているのをみて、「八島より別た島か名も四島､あまの塩屋にすぎた石がき」と詠んでいる。八と四と数字にちなんだ歌である。与島のあと大槌・小槌島をへて 27 日昼屋島に至り、源平合戦の「むかしを思いだして」､「ま汐来て打込波のあらけなき、八島の浦の者（物）すごき音」と合戦の様子を詠み込んでいる。

波の音に注目するのは、初期の紀行文「讃岐下り」､案内記｢空性法親王四国霊場巡行記」と同様であり、源平合戦を想起させる契機となっている。また屋島を歌に詠むことは、各階層すべてに共通しており、特に歌の屋島は「八島」が多いといえる。

近世の旅・紀行文の多くを占める陸からの視線では、名所屋島から想起する源平合戦の共通認識として和歌などを詠んでいる。しかし船の旅は、実際に屋島や付近の名所に訪れることはないので、詳細な内容を記すことはなかった。

おわりに

以上、近世の紀行文や四国遍路案内記に記される屋島、屋島合戦の名所を分析したが、明らかになった点を以下にまとめたい。

①ほぼすべての紀行文と案内記に、佐藤継信墓・碑が紹介される。これは「平家物語」屋島合戦の重要な場面であり、義経に対して忠義を尽くした継信を称賛する当時の意識があったと思われる。それに関連して、寛永 20 年（1643）という早い時期に、高松初代藩主松平頼重によって顕彰され、墓所整備の保全措置がとられたことも、旅人の目をとらえたと思われる。

②屋島への視点は、屋島寺、源平合戦の各名所、遠く望む屋島の 3 点があり、陸からの視点では、実際に歩いてたどる屋島寺、源平合戦の名所が多く、海からの視点では、遠く望む屋島、景色としての記述となる。ただ海からの視点でも、商人と船頭の場合のように、望む屋島からの連想で源平合戦を想起しており、全体的に屋島イメージは源平合戦と強く結びついている。

③「讃岐下り」「空性法親王四国霊場巡行記」「南海瀬戸日記」にあるように、源平合戦の想起には風や波の音が矢石や鬨の声に聞こえるなど契機となっている。また過去の源平合戦の時代と現在の近世の状況について比較する描写も多い。「讃岐下り」の内裏屋敷跡が、現在百姓の菜畠になった､「四国遍路日記」の相引と駒立石は、近年水面が浅くなり干潮時には歩行できたり、石が見えるようになるなどの現状認識である。

④屋島寺の由緒、至徳元年の佐藤継信の霊と末裔空信との対話など、屋島寺の作り上げた縁起「讃岐国屋島千光院縁起」「源平屋島檀浦合戦縁起」の影響が大きい。「玉藻集」や『四国遍路道指南』では､出典として明記される一方で､「小豆島紀行」のように土地の住人の語りとして佐藤継信の霊の話を記す場合もある。屋島寺の縁起の内容が土地の語りへと普及していたといえる。

⑤④とも関連するが、源平合戦の各名所を案内人とその内容を考証する旅人がいた。「讃岐下り」では内裏屋敷跡で教えられ､「小豆島紀行」では、屋島寺の僧が案内したが信用せず、土地の古老に尋ね、自ら「平家物語」や「源平盛衰記」で内容を確認していた。

〈主要参考文献〉

越智通敏 1981「解題」､『四国遍路記集』伊予史談会
大山真充 2006「近世における神櫛王墓」､『(香川県歴史博物館）調査研究報告』2
香川県編 1939「解題」､『香川叢書』3、香川県
香川県教育委員会編 1981『新編香川叢書』文藝篇、新編香川叢書刊行企画委員会
須田牧子 2008「朝鮮通信使と安徳天皇」､川合康編『平家物語を読む』吉川弘文館
東　昇 2014『対馬･宗家と安徳天皇陵―「宗家文庫」の新資料―』交隣舎
平凡社編 1989｢香川県の文献解題｣､『香川県の地名』日本歴史地名大系 38、平凡社

（担当：東　昇）

8　絵図・地図に描かれた屋島

はじめに

屋島の地理的特徴に、地質・地形条件を基盤とした独特の形状が挙げられる。本章では、地理情報を主題としたメディアである絵図・地図を素材に、このような形状をもつ屋島が歴史的にどのように認識されていたのかを検討したい。

Ⅰ　分析方法

今回の資料調査で確認し得た近世以降の絵図・地図のうち、屋島の一画のみ描かれているものを除いた 63 点（表 1）について、屋島の図像に限定してその形状・表現のあり方を分析した。時代の内訳は、近世及び近世と推定される資料が 48、近代以降の資料が 15 である。また、図像表現に付記された文字情報についても、必要に応じて適宜検討を加えた。

表 1 の各資料（以下、個別の資料を指定する場合は同表の通し番号を用いる）は概ね年代順に配列しているが、全ての資料に対して厳密な年代推定を行うことはできなかった。あくまでも目安ではあるが、屋島の図像についての大まかな時期的変化を捉えることは可能であろう。

なお、四国遍路絵図については、岩村武勇編『四国遍路の古地図』（出版、1973 年）に依拠して、法量のデータを記載し図像を分析した。また、今回は、存在が周知されている資料であっても調査の都合で対象にできなかったものがある点を了解されたい。

Ⅱ　屋島の図像とその類型

表 1 の絵図・地図資料に描かれた屋島の形状は、台形・楔形、ほぼ実際の地形通りの形（以下、実態形）が一定の数を占め、そのほかの形も若干確認できる（表 2）。また、四国の陸地と屋島がつながって表現されるものも見出せる。そうした図像を「半島状」と呼び、屋島の形状と合わせて用いることにする。以下、それぞれの特徴を確認しておきたい。

1．台形

平坦な山頂をもつ屋島の山容を、横方向から見た様子を描くものである。2・3・4・5・11・17 は国絵図、6・7・13・15・16 は航路図である。

国絵図のうち 2・3・4・5、航路図のうち 6・7（口絵 4 および図 1）・16 は、全て東から見た屋島を表現している。これらは 13 以外全て頂上に屋島寺を描き、屋島東麓に佐藤継信の墓や駒立岩の図像を描き込むものも複数みられる。6・7 のようにきわめて類似する表現の図もあり、絵図の系譜関係に伴いこうした屋島表現が継承されていったことがうかがえる。ちなみに、文政 6 年（1823）の「海瀕舟行日記全」（九州大学附属図書館蔵、C009）に添えられた屋島のラフスケッチ（図 2）も、航路図の屋島表現と類似しており、同様の航路図を参照した可能性を含め、影響を与えていたことがわかる。

一方、国絵図の 11・17（図 3）、航路図の 13・15 は西から見た屋島を描いている。とくに国絵図の 2 つの図の場合、東からの

表１　地図に描かれた屋島のかたち

	ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法（cm）	所蔵館
1	E004	讃岐国絵図	—	1610- 1615 頃	2	未調査	高松市歴史資料館
2	E002	讃岐国絵図	—	原本 1633	2	（写真のみ）	高松市歴史資料館
3	E003	讃岐国絵図	—	1633	2	84.5 × 220.0	高松市歴史資料館
4	E012	讃岐国絵図	—	原本近世	2	（写真のみ）	高松市歴史資料館
5	E013	讃岐国絵図	—	原本近世	2	（写真のみ）	高松市歴史資料館
6	E001	海瀬舟行図下巻	—	1680	2	28.9 × 18.2	神戸市立中央図書館
7	E006	海瀬舟路図	—	1704-	3	未調査	高松市歴史資料館
8	E020	船路之図（『池田家文庫総目録』（1970 年）所収）	—	—	5	59.2 × 266.4	岡山大学池田家文庫
9	E007	日本橋より長崎迄道中記	—	1739 頃	3	54.8 × 1816.2	香川県立ミュージアム
10	E005	改正日本輿地路程全図	長久保赤水、浅野弥兵衛（刊行）	1779	3	未調査	長久保赤水顕彰会
11	E009	讃岐絵図	—	—	4	（写真のみ）	高松市歴史資料館
12	E024	渡海絵図（瀬戸内海航路図）	—	—	4	28.9 × 502.9	香川県立ミュージアム
13	E021	備前近辺海上浦辺図（『池田家文庫総目録』（1970 年）所収）	—	—	5	81.4 × 122.4	岡山大学池田家文庫
14	E022	〔瀬戸内海図〕	—	—	5	未調査	九州大学附属図書館（九州文化史）
15	E019	〔塩飽近海図〕（『池田家文庫総目録』（1970 年）所収）	—	—	5	59.2 × 266.4	岡山大学池田家文庫

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
楔形；東	洲崎堂／赤場崎	山容は南嶺に 1 つ、北嶺に 2 つの峰。
台形；東	—	屋島寺・東麓の堂宇「洲嵜〔ヵ〕」の図像あり。
台形；東	—	屋島寺・洲崎堂・石垣〔ヵ〕の図像あり。
台形；東	—	屋島寺の図像あり。
台形；東	—	2・4 に類似するが屋島寺の図像なし。
台形；東	佐藤次信／那須与一駒立石／タンノ浦／アカハザキ／アイヒキ／惣門ノナキサ／長サキノハナ／平家ノ首実見血ノ池此山上ニアリ磯ゟ十八丁	継信墓・継信碑と駒立岩の図像あり。
台形；東	佐藤次信／那須与市駒タテ石／ダンノ浦／アカバサキ／アイヒキ／惣門ノナギサ／次信ノ墓／長サキノハナ／平家ノ首実見血ノ池此山ノ上ニアリ磯ゟ十八丁	継信墓・石碑と駒立岩の図像あり。表現は 6 に類似。
円形半島状；平面	相引／タンノ浦	—
楔形半島状；西	—	—
円形；平面	—	—
台形；西	惣門	—
楔形半島状；西	—	9 と類似。
台形；西	ウロ／タンノウラ／アイヒキ	—
楔形半島状；東	檀ノ浦	山容はほかの山々とほぼ同様。
台形；西	タンノウラ	—

表１　地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

	ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法（cm）	所蔵館
16	E023	四国北岸絵図	—	—	5	未調査	九州大学附属図書館（九州文化史）
17	E025	讃岐国古絵図	—	—	5	78.6 × 119.5	高松市歴史資料館
18	E016	大阪ヨリ丸亀名勝付讃州金毘羅出船所道中絵図	大坂大和屋弥三郎	原本近世	5	33.0 × 46.1	高松市歴史資料館
19	E017	大阪ヨリ播磨名所讃州金毘羅迄海陸絵図	大坂道頓堀日本橋北詰東御走宿岸沢屋	原本近世	5	36.2 × 54.4	高松市歴史資料館
20	E026	四国寺社名所八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.1）	板本青々堂	—	5	35.6 × 47.8	香川県立ミュージアム
21	E027	四国八十八箇所順拝略図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.2）	—	—	5	38.2 × 53.5	香川県立ミュージアム
22	E028	象頭山参詣道四国寺社名勝八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.3）	金毘羅小坂美玉堂	—	5	35.6 × 47.8	香川県立ミュージアム
23	E029	四国徧礼〔地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収No.4）	—	—	5	38.2 × 53.5	香川県立ミュージアム
24	E030	四国徧礼〔地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.5）	大坂書林柏原屋清右衛門・仝与市版	—	5	40.6 × 53.4	香川県立ミュージアム
25	E031	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.6）	—	—	5	35.0 × 50.2	香川県立ミュージアム
26	E032	四国徧礼絵図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.7）	大坂書林佐々井治郎右衛門刊	—	5	63.4 × 99.0	香川県立ミュージアム
27	E033	四国八拾八ヶ所道案内記百万遍開元（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.8）	板所谷一	—	5	52.9 × 48.9	香川県立ミュージアム
28	E034	四国寺社名勝八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.9）	板本峯右衛門	—	5	36.0 × 67.0	香川県立ミュージアム

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
台形；東	那スノ与市駒立石／佐藤次信／次信碑／サス堂／檀ノ浦／アカハサキ／合引／惣門ノナキサ／ソウ門アトアリ／長サキノ岬	継信墓・継信碑・サス堂・駒立岩の図像あり。
台形；西	レイガン／塩濱／天王／相引／赤ハサキ／檀のウラ／祈石／駒立石／須サキジ／遠見番所／長崎ノ鼻／コゼガハナ	
（集落＋樹木）	—	—
（集落＋樹木）	—	18 に類似。
台形；北西	だんの浦	屋島寺の図像あり。
—	八十四やしま寺	—
—	八十四やしまじ／だんの浦	—
（緑色の樹木表現）	八十四やしまじ	—
台形；東	八十四や嶋寺／相引汐はま	—
—	八十四八嶋寺／つぎのぶ	五輪塔の図像あり。
楕円形；北	屋島寺〔ヵ〕／アイヒキ〔ヵ〕	史蹟や地名記載がみられるが、判読できない。
台形；東	八十四や嶋寺／□□〔相引ヵ〕汐はま	24 と類似。
台形；北西	八十四や嶋寺	屋島寺の図像あり。20 と類似。

表１　地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

	ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法（cm）	所蔵館
29	E035	丸亀ヨリ象頭山四国八十八番寺社名勝（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.10）	板元作壽堂	—	5	35.8 × 47.9	香川県立ミュージアム
30	E036	南海道四国八十八ヶ所順拝図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.11）	—	—	5	34.5 × 47.2	香川県立ミュージアム
31	E037	四国八十八箇所順拝略図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.12）	—	—	5	33.5 × 47.0	香川県立ミュージアム
32	E038	四国八十八箇所徧礼絵図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.13）	—	—	5	35.3 × 52.2	香川県立ミュージアム
33	E039	四国順拝御土産絵図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.14）	—	—	5	36.4 × 48.2	香川県立ミュージアム
34	E040	四国徧礼〔地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.15）	明石寺茶堂	—	5	42.8 × 53.8	香川県立ミュージアム
35	E041	四国徧礼〔地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.16）	虎屋喜代助版	—	5	40.0 × 53.0	香川県立ミュージアム
36	E042	四国徧礼〔地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.17）	—	—	5	38.0 × 53.0	香川県立ミュージアム
37	E043	四国徧礼〔地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.18）	—	—	5	42.7 × 53.9	香川県立ミュージアム
38	E044	四国徧礼〔地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.19）	—	—	5	42.2 × 53.8	香川県立ミュージアム
39	E045	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No20）	明石寺茶堂	—	5	33.4 × 43.7	香川県立ミュージアム
40	E046	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.21）	四十三番札所〔ヵ〕	—	5	36.8 × 48.3	香川県立ミュージアム
41	E047	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.22）	—	—	5	37.8 × 48.5	香川県立ミュージアム

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
—	八十四やしまじ／だんの浦	22 と類似。
—	八十四〔ヵ〕やしま寺	—
—	八十四〔ヵ〕やしま寺	30 と類似。
（樹木表現）	八十四八嶋寺／相引汐濱	—
台形；西	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
台形；東	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
台形；東	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
台形；東	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
台形；東	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
—	八十四や嶋じ	24 と類似。
—	八十四八嶋寺	—
台形；西	八十四や嶋寺／相引汐はま	24 と類似。
台形；西ヵ	八十四や嶋寺／相引汐はま	八栗山の裾が海岸線として屋島とつながっており、西から屋島・八栗を眺望した様に見える。24 と類似。

表１　地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

	ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法（cm）	所蔵館
42	E048	四国八十八箇所順拝略図（讃岐金毘羅沽哉堂刊「金毘羅案内記」口絵、岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.23）	讃岐金毘羅沽哉堂刊	1812	4	19.5 × 27.7	香川県立ミュージアム
43	E049	四国徧礼略図（十返舎一九「四国徧路独案内」挿絵、岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.24）	十返舎一九	1821	4	18.4 × 12.7	香川県立ミュージアム
44	E011	文政七年高松藩藩領絵図（写）	—	—	4	（軸幅）82.0	高松市歴史資料館
45	E015	讃州屋島山并ニ八栗山源平古跡図	馬嶺画	原本近世	4	36.0 × 78.5	高松市歴史資料館
46	E008	〔瀬戸内海航路図〕	—	1864	4	未調査	九州大学附属図書館（九州文化史）
47	E014	松平讃岐守海岸線絵図の内東讃海岸絵図	—	原本近世	4	（写真のみ）	高松市歴史資料館
48	E010	高松藩領絵図	—	—	4	177.5 × 74.4	高松市歴史資料館
49	L006	〔山田郡絵図〕	—	原本明治	6	（写真のみ）	高松市歴史資料館
50	L010	［讃岐瀬戸内 阪出屋島漁場絵図］	—	—	6	104.0 × 142.0	高松市歴史資料館
51	L013	愛媛県管内漁区全図	愛媛県庶務課編輯	1881	6	53 × 109	愛媛県立図書館
52	L012	愛媛県管内地図	愛媛県蔵版、水口臥龍館銅版	1884	6	52 × 109	愛媛県立図書館
53	L001	香川県管内全図	著作者後藤常太郎、発行者中村芳松	1900	6	39.0 × 55.0	香川県立ミュージアム
54	L002	大日本管轄分地図 香川県管内地図 改正新市町村名	著作者後藤常太郎、発行者中村由松・福岡元次郎	1906	6	39.5 × 54.6	香川県立ミュージアム

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
—	八十四やしま寺	—
—	八しま〔ヵ〕	—
楔形半島状；東	船番所／檀ノ浦／長崎のはな	—
台形；南	屋嶌寺／黄牛嵜／内裡アト／ツギノブ碑／キク王丸墓／北方ヤシマミチ／クラカケ松／神櫛王館墟／相引川／弓ナガレ／見返り橋／コマタテ石／イノリ石／大砂子／スサキ堂／惣門／イオチ畠／王墓／薄墨墓／佐藤次信墳／長刀泉／ナギリ地蔵／源氏木戸／ウリフノ丘／土居ヤシキ／源氏峯	鳥瞰図。『讃岐国名勝図会 巻之三』の挿図「八栗屋島源平古戦場」に類似。
楔形半島状；平面	—	—
実態形	遠見在所／長崎のはな	—
実態形	屋嶋寺	「名所旧跡」「古戦場」の凡例はあるが、源平合戦関連史蹟の記述なし。
実態形	屋嶋寺	48 と類似。
楔形半島状；平面	—	山容は他の山々と同じ様式。
実態形	檀ノ浦／長サキハナ	—
実態形	「古城址及陣屋趾」記号／「県社」記号／「郷社」記号／長嵜	25 万 3 千 8 百分の 1 の銅版地形図。
実態形	矢島寺／長嵜	輪郭と地名のみ表現。
実態形	矢島寺／長嵜	輪郭と地名のみ表現。53 と同じ。

表１　地図に描かれた屋島のかたち（つづき）

	ID	資料名	作者・出版社	作成年 出版年	時代	寸法（cm）	所蔵館
55	L003	大日本管轄分地図 香川県管内地図 改正新市町村名	著作者後藤常太郎、発行者中村由松・福岡元次郎	1908	6	39.1 × 53.8	香川県立ミュージアム
56	L004	香川県全図	著作印刷兼発行者日下伊兵衛、発行所和楽路屋、売捌元又間精華堂	1913	6	39.4 × 54.1	香川県立ミュージアム
57	L005	全日本最新名勝名物地図	大阪毎日新聞社発行	1932	6	26.0 × 108.0	香川県立ミュージアム
58	L008	屋島・五剣山	香川県発行	—	6	27.2 × 39.3	香川県立ミュージアム
59	L009	香川県史跡名勝天然記念物分布図	—	—	6	37.6 × 53.2	香川県立ミュージアム
60	L015	沿線案内	高松琴平電鉄	1934-	7	26.8 × 38.0	高松市歴史資料館
61	L016	備讃瀬戸及び備後灘海路図	—	—	7	75.8 × 108.0	香川県立ミュージアム
62	L011	高松市屋島地區全圖	—	—	8	118.5 × 76.5	高松市歴史資料館
63	L017	高松市屋島地区全図	—	—	8	119.0 × 77.0	高松市歴史資料館

注１：「屋島の形状」は、山容表現が無い場合（　）に示した。
注２：「関連する文字情報」は、通常記される地名は除外した。

屋島の形；向き	関連する文字情報	備考
実態形	矢島寺／長嵜	輪郭と地名のみ表現。53 と同じ。
実態形	矢島寺／長崎／檀ノ浦	輪郭と地名のみ表現。
実態形半島状	「屋島」（日本二十五勝の表記）／屋島寺	古戦場の地図記号あり。八栗山と一体になっている。
実態形	長崎鼻／砲台阯／遊鶴亭／櫓丘／屋島古城阯／談古嶺／屋島寺／獅子霊巌／畳石／不喰梨／加持水／佐藤継信墓／安徳天皇社／菊王丸ノ墓／赤牛崎／相引川／駒立岩／大砂子／祈岩／洲崎寺／義経弓流し／総門／射落畠／神櫛王墓／太夫黒墓／継信墓／宇龍ヶ丘／源氏峰／船隠／義経鞍掛松	図中に「源軍ノ進路」「源平合戦当時ノ海岸想像線」あり。
実態形半島状	屋島ケーブル	輪郭と地名のみ表現。
実態形半島状（表）／実態形（裏）	【表】屋島寺／屋島ケーブル／檀ノ浦／船隠 【裏】長崎／遊鶴亭／屋島洞穴／千門堂跡／談古嶺／櫓ヶ丘／古城跡／屋島寺／血ノ池／相生松／仁王門／可正桜／行啓記念碑／雪ノ庭／獅子ノ霊巌／瞰跡亭／不喰梨／葉の松／加持水／屋島ケーブル／八幡宮／屋島神社／鞍掛松／菊王丸墓／佐藤継信引墓／安徳帝行宮跡／船隠／相引川／駒立岩／祈岩／大砂子／洲崎寺／射落畠／神櫛王墓／佐藤継信墓／大夫黒墓	屋島ケーブルの路線図あり。
実態形	長崎鼻／壇ノ浦	—
実態形	遊鶴亭／談古嶺／獅子ノ霊巌／屋島寺／東照宮	5 千分 1 地形図。
実態形	遊鶴亭／談古嶺／獅子ノ霊巌／屋島寺／東照宮	5 千分 1 地形図。 62 と同じ。

表 2　屋島図像の形状一覧

	台形	楔形	実態形	円形	楕円形	地形表現無し	小計
島	23	1	13	1	1	—	39
半島状	0	6	4	1	0	—	11
計	23	7	17	2	1	14	64

注 1：「地形表現無し」には、屋島寺や集落や樹木のみを示したものが含まれている。
注 2：表 1 の資料 60 は表面・裏面の地図の両方カウントしたため、資料点数の合計 63 点と一致しない。

視点の図と比べて低平で、南北方向に伸びた島として表現されている。西からの視点では、佐藤継信の墓などの源平合戦関連史跡が裏側になってしまい、それらを表現するという点で不利なように思われるが、23 の場合は文字による注記で史跡を多数示している。

上記以外では、今回取り上げた四国遍路絵図のうち半数近い 11 点で、台形に描かれた屋島の図像を確認できた。この 11 点は二つのグループに分けられる。一つは 20・28 の 2 点で、「八十四やしまじ」という札所表示の背景として、前者はやや北西の方向から屋島を眺めたように描かれているものである。もう一つはそれ以外の、24 をはじめとする 9 点であり、「八十四屋島寺」と細長い楕円の囲みで記された背後に屋島の山容を描くものである。ただ、その表現の細部は異なっており、例えば、24 や 27 のように山容右肩が下がり北嶺と判断できるもの（東からの屋島）もあれば、33・40 のように山の左肩がなだらかに下がり、こちらが北嶺のように見えるもの（西からの屋島）もある。また、41 のように屋島の左上（北西）に描かれる五剣山の裾が海岸線のように延長して引かれ、屋島と接続し、西から屋島と奥の五剣山を眺めたように見える図となっているものも見受けられる。これは、24 と同系統の四国遍路絵図が、同一の板木を使用しているのではなく、同じ様式を流用して別々に開板し印刷・刊行されたために起ったものと推測される。開板に際し屋島の図像がそれぞれ書き直された結果、同一系統の絵図に異なる視点からの屋島像が混在することになったと考えられる。

なお、今回分析した資料においては、台形の屋島像は全て島として描かれており、また、近世資料にのみそうした表現を確認している。

2．楔形

北の先端に向かって細くなっていく形状の屋島の図像を楔形とした。これに該当する図は 7 点である。このうち国絵図の 1（図 4）は、島としての屋島を楔形に描くものの、山容については北嶺・南嶺間の谷を強調しつつ全体的に西から見た台形として描いている。この図は、景観年代が慶長 15 年（1610）から元和元年（1615）と推定されている（田中 2010・2012）。近世初期の国絵図に屋島を台形に描くものが多い傾向と合致すると思われる。

逆に、楔形に表される屋島のほとんどは、四国の陸地とつながった半島状に描かれていることに注目しておきたい。享保 19 年（1734）頃の景観を描いていると推定されている 9（図 5、香川県立ミュージアム　館蔵品データベース「日本橋より長崎迄道中記（江戸から長崎迄街道図）」）と、それに類似した表現の、近世後期の海陸道中図の 12（香川県立ミュージアム　館蔵品データベース「渡海絵図（瀬戸内海航路図）」）では、屋島は北西に向かって突堤のような姿をなしている。また、文政 7 年の絵図を原図とするという 44 や、近代初期と思われる漁区を図示した 50（図 6）のように、まっすぐ伸びて楔形をなすものも確認できる。さらに、14（図 7）のように、山頂はほかの山々と同様ながら、北西方向に向かって伸びる山裾の長さで屋島を表現する図もみられた。これらは航路図や漁区に関する図のように、海からの視点で描かれるものが多い。屋島を北側から望んだ場

合、南から突き出して伸びる半島のように見えたために、こうした表現がとられた可能性が考えられる。

3．実態形

楔形に似るが、測量の実施あるいは測量図を参照することにより地形の屈曲がより実態に近く表現され、われわれが近代以降の地図学的図法において「正確」とみなしているような輪郭の屋島像が登場する。これを先に触れた通り「実態形」と呼ぶことにしたい。地形的に正確な屋島の形状は、幕末頃の海岸絵図と思われる 47、幕末から明治初期と推測される 48（図 8）・49 以降、近代地図において確認できる。絵図・地図における屋島の図像に関して、近世は台形が主流であったとするならば、近代は実態形がそれに取って代わったといえる。なお付言すれば、その後台形の屋島は、リーフレットなど、科学的正確性を求められない場面において、モチーフとして多用されることになるものと思われる（本書第 11 章参照）。

香川県と合併していた時代（明治 9 年［1876］～明治 21 年［1888］）に、愛媛県蔵版として刊行された銅版地形図の 51・52（図 9）、香川県全図の 53・54・55、高松市合併後の屋島地区の地形図 62・63 など、公的機関の関わる地図の多くで実態形が採用されている。戦前に香川県が発行した源平合戦の考証図である 58 では、実態形の屋島とその一帯に、「源軍ノ進路」と源平合戦関連史跡、「屋島古城阯」や長崎の鼻の「砲台阯」、遊鶴亭などが付記されている。

実態形においても屋島が半島状に描かれる場合がある。史跡名勝天然記念物分布図の 59（図 10）、高松琴平電鉄による沿線案内である 60 の表面掲載の図は、いずれも広域の地図で、屋島ケーブルを含む路線図が描かれており、屋島が島であることを感じさせない図像となっている。

4．その他の屋島表現

屋島の形状には、上記のほかに円形や楕円形の表現が確認できた。長久保赤水作の日本図で、安永 8 年（1779）に初版が刊行された 10 では、屋島はやや不整形な円形の島として描かれている。この図は刊行年（版）が同じながら摺が異なり、地形の表現や地名等の情報が補訂されていることが知られているが（馬場 2001）、今回は初版の初摺とされる図のみ確認している。同じく不整形な円形の図像は、半島状に描かれた航路図の 8 でも確認している。

四国遍路絵図の 26 では、南北に長く伸びた楕円形の屋島が描かれている。島の形としては平面ながら、山は南に頂上を向けて描かれている。この山容表現は、特定の場所からの眺めというよりも、むしろ山が存在することを示す記号として表現されているように思われる。

なお、森下（1993）には、鎌田共済会郷土博物館所蔵の国絵図の図像が掲載されており、今回調査出来なかった資料で屋島がどのように表現されているのかを知ることができた。その中には、年代不明ながら不整形な楕円形の屋島を描く国絵図や、元治 2 年（1865）に高松藩から朝廷に提出されたとある、実態形の屋島が描かれた国絵図の存在が確認できる。同様に、御厨（2005）に掲載されている鎌田共済会郷土博物館蔵の「慶長四国図」の写真から、同図に描かれた不整形な楕円形の屋島図像を見ることができた。

ここまで屋島の形状を中心にみてきたが、一方で対象とした絵図・地図のなかには、屋島の地形表現がないものもみられた。例えば、金毘羅参詣における航路を鳥瞰図として描いた 18・19 では、隣に描かれる五剣山とは対照的に、屋島は山容が描かれず、樹木と集落の記号的表現のみ示される。また、四国遍路絵図では、樹木と思われる表現のみを屋島付近に描くもの、あるいは屋島寺の表示はあるが屋島は一切描いていないものも複数存在していた。

おわりに

主要な資料を中心に、近世以降の絵図・地図における屋島の図像を検討してきた。その結果、①近世の絵図・地図において、屋島は東からの視点で台形に描かれることが多く、

若干の源平合戦関連史跡も図像として描き込まれていたこと、②形状としては楔形が台形に次ぎ、特に海からの視点で描かれた図に、屋島が楔形半島状に描かれる傾向がみられたこと、③幕末以降、測量（図）の普及とともに、実際の地形とほぼ同様の形状の屋島の図像が台形の図像に取って代わったこと、などが明らかになった。特に①・②は、近世の絵図・地図において、屋島の特徴的な形状が一定程度、パターン化されて認識・表現されていたことを示すものと思われる。

〈主要参考文献・Web〉

岩村武勇編 1973『四国遍路の古地図』出版
田中健二 2010「続　生駒時代・高松城下周辺の地形について」、『香川県立文書館紀要』14
田中健二 2012「生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿―海岸線と国境の峠道を中心に―」、『香川県立文書館紀要』16
馬場章 2001「地図の書誌学―長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合」、黒田日出男・M. E. ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会
御厨義道 2005「讃岐国　海に面した溜め池王国讃岐の姿」、国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房
森下友子 1993「鎌田共済会郷土博物館所蔵の讃岐国絵図」、『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』2
香川県立ミュージアム　館蔵品データベース　http://jmapps.ne.jp/kpm/（2015 年 12 月 26 日最終閲覧）

（担当：島本多敬）

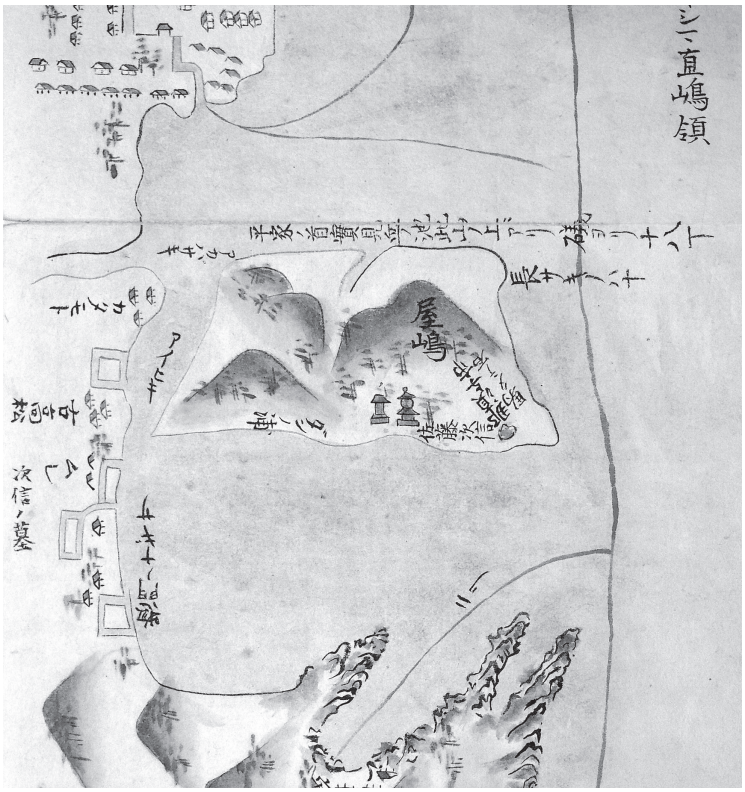


図 1　海瀬舟路図
所蔵：高松市歴史資料館

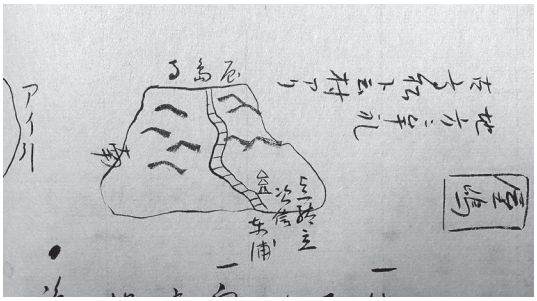


図 2　海瀬舟行日記全
所蔵：九州大学附属図書館（九州文化史）

図 5　日本橋より長崎迄道中記
所蔵：香川県立ミュージアム

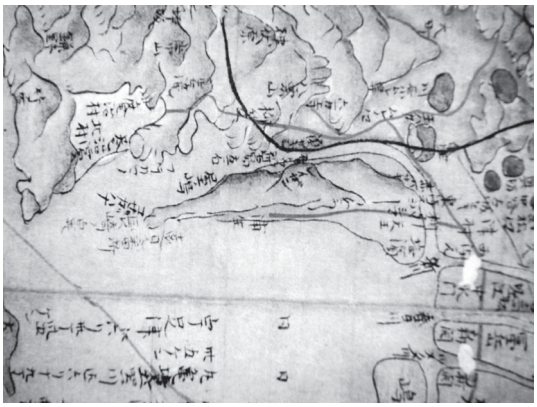


図 3　讃岐国古絵図
所蔵：高松市歴史資料館

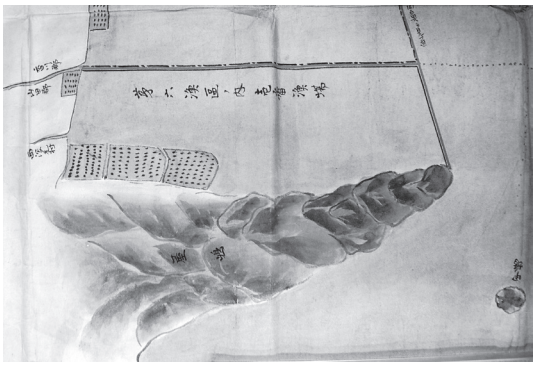


図 6　［讃岐瀬戸内 阪出屋島漁場絵図］
所蔵：高松市歴史資料館

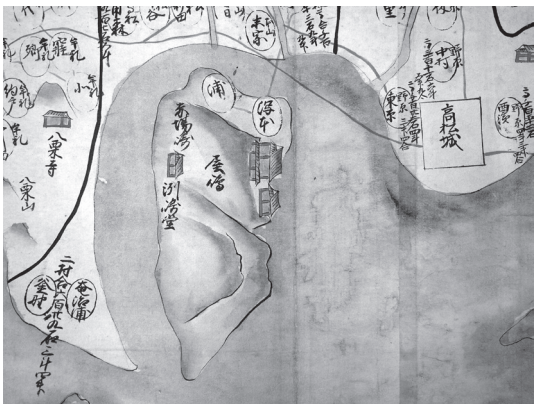


図 4　讃岐国絵図
所蔵：高松市歴史資料館

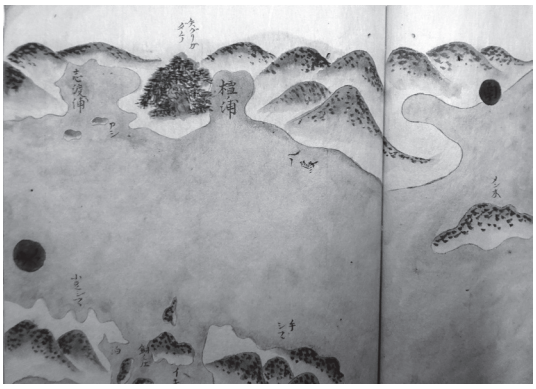


図 7　〔瀬戸内海図〕
所蔵：九州大学附属図書館（九州文化史）

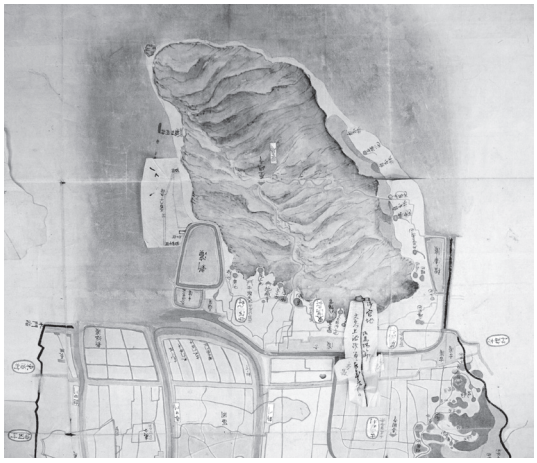


図 8　高松藩領絵図

所蔵：高松市歴史資料館

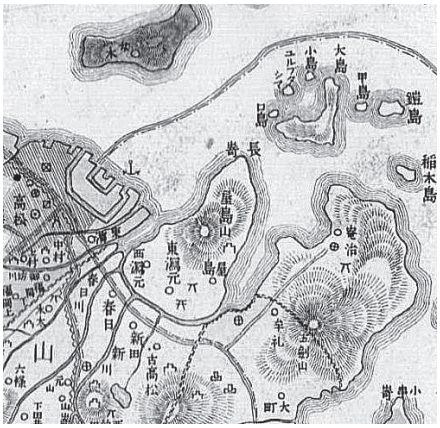


図 9　愛媛県管内地図

所蔵：愛媛県立図書館

図 10　香川県史跡名勝天然記念物分布図

所蔵：香川県立ミュージアム

9　明治前期の屋島、官林と塩田

「愛媛県行政資料」

香川県は、明治９年（1876）８月愛媛県に合併され、同 21 年 12 月分離して再置された。そのため明治９～ 21 年の行政文書は愛媛県が保管していた。ほとんどの文書は再置の際に香川県に引き継がれたが、一部愛媛県立図書館に現存する。いずれも部分的な史料であり、全貌がわかるものではないが、そのなかから屋島に関連する史料を紹介し、明治前期の屋島の実態の一端をみていきたい。

１．明治９年「県政事務引継書」（M002 ～ M 005）

明治９年香川県が愛媛県に合併される際の事務引継書である。以下４件の文書に屋島が登場する。

１「旧香川県地理関係之事務引継書類綴込」
42 号山田郡屋島村農松岡唯八同村字壇ノ浦官林立木盗伐之件　壱通
右ハ現品追徴所刑相成、則別紙ノ通リ盗伐木預リ証書相添え、裁判所ヨリ通知致候ニ付、公ノ入札払下処分ニ可致積リニ有之候
４号潟元村官有塩田関係書類

○屋島村にあった檀ノ浦官林の立木盗伐に関する書類であるが、本文は存在しない。

２「演説書」
一民有塩田ノ義ハ、荒地起返損地等無之時ハ貢塩ニ増減無之、右金納相場ノ義、各郡及塩飽島ニ於テハ、山田郡西潟元村ノ製塩相場ヲ用ヒ、小豆島直島ノ二島ニ於テハ小豆島ノ内草加部村ノ相場相用ヒ、右二ヶ所共該年一月ヨリ十二月迄平均相場取調、其筋エ稟議ノ上、収入取斗候、委曲ハ地租収納帳并相場書綴込等ニテ御承知有之度候

○香川県の民有塩田の金納相場は、屋島の麓に広がる西潟元村の製塩相場と小豆島の相場の各平均を用いていた。

３「官林調査提要録」旧香川県第三課　「官林調査手続書」
一屋島山ノ内壇ノ浦五十間浦生当表藤目官林、従前ハ屋島山ノ字無之、現山ハ屋島山ヲ分裂シタル官林ニ付、此字ノ上江屋島山ノ内ノ五字ヲ冠シ候積
附り同山ハ名区ニ付禁伐林ト見認候得共、全山ノ内民林介り、右官林而已禁伐ノ名ヲ下シ候テモ不都合ニ付禁伐ニハ被据サルノ積
一同山ノ内字西峰官林根据帳ニ有之現地江当り候所、本官林無之出会ノ二副戸長江推問ノ所、藤目官林江被加江有之旨申出判然不致ニ付、藤目官林江相加り候事由被糺申出候様及口達置有之申立次第査定ノ積

○屋島山には檀ノ浦・五十間・浦生・当表・藤目官林があり、名区＝名所なので禁伐林としたいが、民有林があるので禁伐林にできないとある。官林と名所の関係が判明する史料である。

表１　明治 10 年代「指令本書」にみる屋島件名一覧

年　代	文　書　名
明治 14 年	124 号山田郡屋島村海面寄洲埋立地所反別之儀ニ付上申
明治 15 年	116 号山田郡屋島村官林内黒石堀採開坑願之義ニ付副申
明治 16 年	147 号山田郡屋島官林仝上（下草刈採）伺
	6 号山田郡東潟元村屋島神社へ官有社地無代下渡伺
	11 号山田郡西潟元村塩田税金額訂正上申
	69 号山田郡西潟元村塩田払下伺
明治 17 年	51 号山田郡屋島村官林内黒石堀取年継伺
	54 号山田郡屋島村官林内黒石堀採年継伺
	94 号山田郡屋島村石場総代落葉採取伺
	126 号山田郡西潟元村総代下草払下願ニ付伺
	156 号山田郡西潟元村官有塩田税金伺
	163 号山田郡屋島村字藤目下草払下伺
	6 号山田郡西潟元村屋島官林赤土堀採伺
	76 号山田郡東潟元村下草払下伺
	127 号山田郡屋島村外二ヶ村官林落葉採取伺

4「地理科収入金仕訳書」旧香川県

金参拾六円五銭四厘　是ハ山田郡西潟元村屋島村官林土石落葉下草代料、明治七年分収入ノ趣ヲ以、昨八年再置県ノ砌、旧名東県ヨリ現金引継相成、直ニ上納可取計ノ筈、然ルニ主任ノ者誤テ八年分代料ノ名義ニシテ大蔵省へ上納致シ、〈本省上納方ノ順序ハ一昨七年分未納ノ姿ニ相成居候へトモ、其実七年分ノ収入金ヲ以八年分上納致シ有之、尤両年トモ金員ニ増減ハ無之、全ク前後ノ順序ヲ失シ候ノミ〉、其後本年ニ至り八年分代料頭書ノ通、該村ヨリ納来候故、夫是取糺ノ末前条ノ次第事実判然極テ不都合ニハ候へトモ、両年分更ニ納替ノ手続可相立ノ積りニ候処、今般廃合ニ際シ候ニ付、此上可然御上申有之度候　（〈　〉は割書）

○西潟元村・屋島村の官林の土石落葉下草代を徴収していた。大蔵省への上納の手続きについての文書。

２．明治 11・14 ～ 17 年「指令本書」（M007 ～M 011）

愛媛県時代の各案件に対して、県が指令を出した文書を綴っており、綴じられた原文書は香川県に返却され、愛媛県分の文書と全体の目次のみ現存する。各年の目次の件名を表 1 にまとめた。

○「県政事務引継書」にもあった西潟元村の官有塩田、官林の落葉採取、下草払の他、官林内の黒石堀取り、屋島寺や猿田彦神社の境内樹木伐採、屋島神社への官有社地下げ渡しに関する伺がある。

〈謝辞〉
本史料の調査に関しては、柚山俊夫氏にご教示いただき大変お世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。

（担当：東　昇）

10　近代西欧のまなざしからみた屋島と瀬戸内海

はじめに

本章では、幕末、明治、大正期にかけて来日した西欧人がどのように屋島と瀬戸内海を経験し、その体験を紀行文に記述したのかを整理して分析する。来日した多くの西欧人は船舶を移動手段として、長崎・下関方面から兵庫（神戸）を経て目的地･神奈川（横浜）へと行くルートの一部、あるいはその逆方向のルートをたどって航行する船の上からの視点で瀬戸内海の海域を経験した。

いま、ここで瀬戸内海と記したが、現在、瀬戸内海と定義される広い海域をひとまとまりの海域として認識する視点自体が、日本にはもともとなく、次に紹介する先行研究でも指摘されているように、近代初期に来日した西欧人たちの発見であった。西欧人たちは下関から兵庫（神戸）港あるいは大坂（大阪）港に至るまでの広い海域を、いわゆる the Inland Sea（内海）と認識して、紀行文に記述している。

本章のはじめにお断りしないといけないが、実は、船舶で瀬戸内海を航行する西欧人の屋島についての記述・描写の層は極めて薄くて少ない。いっぽう、近代に来日した西欧人の多くは the Inland Sea ＝瀬戸内の海域を船で航行し、その景観について観察し、あらゆる賛辞をもって記述している。そこで本章では、幕末、明治、大正期へと時代を経るごとに変化する来日西欧人の the Inland Sea ＝瀬戸内海についての記述を追いつつ、数少ないながら西欧人の捉えた屋島像について紹介する。近代西欧人が抱く屋島のイメージは、屋島が立地する the Inland Sea ＝瀬戸内海のイメージと密接につながっている。このような西欧人の瀬戸内海・屋島へのまなざしが、どのように屋島の名勝的価値の創造に関して、かかわっているのかについて考察して本章の結びとする。

Ⅰ　先行研究と扱う資料

近代になって来日した西欧人の視点によって捉えられた瀬戸内海像について考察した先行研究として、最も重要なものは西田正憲の『瀬戸内海の発見：意味の風景から視覚の風景へ』（1999）である。西田は、本書の中で「欧米人が見た風景」として 1 章を書き起こし、「瀬戸内海を賞賛した外国人の紀行文等」の一覧表を掲載しているが、本章で扱う資料もこの一覧と重なっている文献もある（西田 1999：74-75）。

西田は、西欧人たちは、瀬戸内海の海域について正確な地図から得られる情報をもとに、それをひとつのまとまった海域だと認識し、「内海 inland sea」と「多島海 archipelago」という 2 つの地理的概念で海域を捉えたと分析する。そのうえで、来日した西欧人たちは瀬戸内の自然景の地形・地質・地被を科学的に捉え、光・色彩・空気を捉え、人文景・生活景を捉え、楽園を投影し、それを海上移動する船舶からの動的水平景からなるシークエンス景として捉え、瀬戸内海を豊かな語彙で、絶賛したと説明する。西田は、来日した西欧人の風景の見方として特徴づけられるような視覚で捉える近代的風景観が、明治後期には日本人にも影響を与え、従来の歌枕や名所旧跡で捉えられた伝統的な意味の風景から視覚で捉えられる自然景と人文

景などについて記述する近代的風景へと日本人の瀬戸内海観が再編されたと指摘する（西田 1999）。

本章で扱う来日西欧人の紀行文などの資料は、幕末、明治、大正期に来日した西欧人の記録である。幕末、1854 年（嘉永 7）に徳川幕府は日米和親条約をアメリカと締結し、そして 1858 年（安政 5）にアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと修好通商条約を締結し、230 年にわたる鎖国政策を転換した。日本の開国にともない幕末には、西欧人が徐々に日本を訪れるようになる。

開国後は外交関係者が来日するようになり、明治維新後は近代化を推進するために日本政府に雇われたお雇い外国人など、仕事やビジネスを目的に日本を訪れる西欧人がほとんどであった。1870 年代の後半になると、観光目的で来日する西欧人が増加した。かれらは世界一周観光旅行の立ち寄り先の一つに日本を選んだ世界漫遊観光旅行者 Globe Trotters であった。かれらの多くは、長崎から神奈川（横浜）へと向かう途中で、または逆のルートで瀬戸内海を船で航行する機会を得て、瀬戸内海の風景を絶賛する。世界漫遊観光旅行者にとっての瀬戸内海での船舶の上での経験は、日本滞在のハイライトでもあった。

さらに、20 世紀を迎えると、瀬戸内海を船舶で航行して、高松から上陸して屋島を訪れて記述する西欧人も現れる。海を航行する船上からの視点だけではなく、高松から上陸し、屋島寺を訪れて記述する陸の視点を獲得する西欧人の事例については、本章では、1922 年（大正 11）に屋島を訪れた英国エドワード皇太子一行の公式記録の紀行文を紹介する。

II　来日西欧人たちによる The Inland Sea の呼称

先行研究でも指摘されているが、現在、日本人が当たり前として使用している瀬戸内海という用語は、明治時代に西欧人が使用していた英語 the Inland Sea の翻訳語として出発した概念であった（西田 1999）。瀬戸とは、文字通りには陸地が迫り急流をなす狭い海峡部のことで、多くの島々からなる海域である瀬戸内海には多くの瀬戸があり、海であるが、河川のように流れる特有の景観をつくりだしていた。近世の日本人は、灘の連続として、瀬戸内の海域を認識していた。灘とは広い海のことである。

アンベールは、スイスの外交団の一員として幕末の 1863 年に来日した。かれの著した紀行文では瀬戸内海の海域について、地中海と比較しながら説明している。

> 地中海が、一方において、ジブラルタル海峡で大西洋と連絡しており、他方において、紅海でインド洋と連絡しているとすれば、日本の内海は、一方、関門海峡または下関でシナ海と連絡し、他方九州と四国の間の豊後水道によって、そしてまた、ニッポン島と四国の間の紀伊水道によって太平洋と連絡しているわけである。（N006）

さらにアンベールは内海について、「日本の内海は、時によって、周防灘または周防の海と書かれていることがある。」と、周防灘に代表させて内海を捉えることもあるとのべる。さらに下関から大阪まで続く内海を、近世の日本ではいくつかの灘にわけて把握することを、再び地中海に比べながら紹介する。

> ヨーロッパの地中海が、数個の海域に分けられているように、日本人も、自分の内海を五つの部分に分け、それぞれの部分を領有する州の名前をつけている。すなわち、周防灘、伊予灘、備後灘、アリマ灘（播磨灘）、和泉灘がそれである。（N006）

アンベールが、内海を全体で統一して把握するよりも灘に分けて捉える近世日本の認識を紹介した幕末の 1863 年（文久 3）から、28 年後の 1891 年（明治 24）に刊行された英文のガイドブックによる the Inland Sea の定義を次に紹介しよう。

日本に長期滞在している日本研究者チェンバレンとメイソンによって 1891 年にロンドンのジョン・マレー社と横浜のケリー・アンド・ウォルシュ社から併せて刊行された英文日本ガイドブック *A Handbook for Travellers*

in Japan, 3rd Edition（J001）では、3版にして初めて日本全国がカバーされ、瀬戸内海と四国が Route 50 The Inland Sea and the Chief Towns on or Near its Shores として紹介された。Route 50 には、高松は含まれているが、屋島は記されていない。

A Handbook for Travellers in Japan は Inland Sea の呼称についてそれに対応する日本語が存在しないことを指摘している。

> Another puzzle to the European visitor, to whom the Inland Sea has become a household word, is the fact that the Japanese themselves have no corresponding name in common use. The term Seto no uchi (lit. 'within the channels') is mere invention of modern chart-makers, intended to translate the English name.［ヨーロッパからの訪問者が謎だと思うのは、the Inland Sea の呼称はヨーロッパ人が使っている言葉で、それに相当する日本語は実のところ存在しない。「瀬戸の内」（文字通りには「海峡の中」）は、ただ現代の海図製作者が発明した語で、英語の用語の翻訳にすぎない］（J001: p. 358）
> （［ ］内は本章担当者による訳。以下同）

いっぽう、ウォルター・ウェストンは、1888 年（明治 21）に来日したキリスト教英国聖公会の神戸教区の牧師であり、1895 年（明治 28）まで日本滞在した。かれは登山に造詣が深く日本アルプスの名付け親で有名である。ウェストンは、*A Wayfarer in Unfamiliar Japan*『ウェストンの明治見聞記 知られざる日本を旅して』（N022）では瀬戸内海について 1 章を費やしてその魅力を語っている。

> 瀬戸内海の魅力は、そこに住んでいる日本人よりも、西洋人の旅行者を一層惹きつけるようだ。不思議なことに日本の文学に瀬戸内海の魅力を賛美したものが全く見られないばかりでなく、実際に世間の人々はここに名前をつけなかったのだ。日本の地図に現在使われている名称は、西洋人の作家や地図製作者が名づけた通り、海峡の内側を「瀬戸内」、内陸の海を「内海」として、そのまま日本語に直したものに過ぎない。西の入口にある下関海峡と東の出口にある明石海峡の景観は、当然受けるべき賞賛を受けてきた。一方、全長 250 マイルに及ぶ瀬戸内海の南北の沿岸の美しい景色の中でも、宮島や須磨のような個々の風景は、貴重な真珠のように高い評価を得ている。（N022: p. 116）

先行研究（西田 1999、橋爪 2014）も指摘するが、本書の記述は チェンバレンとメイソンによる 1891 年刊行のマレー社の *A Handbook for Travellers in Japan*, 3rd Edition の記述と重複する。ウェストンは、このハンドブック第 3 版の情報提供者、執筆者のうちの一人でもある。

先に紹介した *A Handbook for Travellers in Japan*, 3rd Edition には瀬戸内海地方の地図が Western Japan and the Inland Sea と題されてハンドブックに添付されている（図 1）。この地図には、1891 年時点の最新の鉄道路線や主要な都市名が記載されているが、屋島の位置には地名は記されていない。この地図は 1891 年に刊行されたのだが、廃藩置県後の最新の県名が記されず、旧国名（四国では、Sanuki、Iyo、Tosa、Awa）が記載されている。The Inland Sea は、多くの灘から構成されていることがこの地図をみると理解できる。地図に記されているのは、海域を西から東へ Suwo Nada（周防灘）、Bungo Nada（豊後灘）、Iyo Nada（伊予灘）、Bingo Nada（備後灘）、Mishima Nada（三島灘）、Harima Nada（播磨灘）、Izumi Nada（和泉灘）である。幕末にアンベールも紹介したように、近世の日本人は、これらの灘の連続としてこの海域を把握していた。*A Handbook for Travellers in Japan* のこの地図を参照すれば 1891 年以降に来日した観光客は、The Inland Sea は東西南の海峡部によって守られ、多くの灘の連続から構成される内海であり、無数の島々がちりばめられたような多島海であることが視覚的にも理解できる。

図 1　Western Japan and the Inland Sea と題する瀬戸内海地方の地図
A Handbook for Travellers in Japan, 3rd Edition（1891）（J001）所収

III　幕末に来日した西欧人の「奥の水路 'inner passage'」（Alcock, 1863）としての「いわゆる内海 'the so-called Inland Sea'」（Veitch, 1860）と屋島のイメージ

近世の鎖国時代は、長崎出島のオランダ商館長に随行して可能となる江戸参府の途上で、瀬戸内海を航行し、紀行文を著して瀬戸内海の風景を愛でたフィッセルやシーボルトなどの記録がある（N001・N017）。シーボルトは、内海の船の上から望める本州・四国の沿岸や多くの島々にみられる陸地について「温和な島国の気候と千年にわたる努力が、これを野趣のあふれたロマンチックな庭園に作り変えた。…常緑の葉をもった樹木の多数の種類、ことにスギ、マツなどのすばらしい松柏類は日本の特長ある植物であり、早く花を開く樹木や灌木はこの地方に常春の外観を与えている」（N017：p.367）と植生を観察し、庭園のような瀬戸内海の風景を絶賛した。

しかしながら、幕末、幕府に開国をもとめて外交交渉に訪れた西欧人たちには、瀬戸内海は、先に訪れたシーボルトのような人びとの記録から「描写を超えるような美しい光景 the scenery as beautiful beyond description」（N002）だという評判は届いていたが、瀬戸内海の航行は容易にはかなわなかった。幕府は、幕末の政治情勢を考慮して、西欧人には外交や軍などの政府関係者にのみ通行許可と水先案内人などの手配を行った。そのため瀬戸内海の航行は条件がそろわないとなかなかかなわず、秘境のような海域だとの認識を幕末に来日した西欧人は持った。

ここでは、そのような条件を満たし 1860 年前後に瀬戸内海を航行した 3 人の英国人――ラザフォード・オールコック、ロバート・フォーチュン、ジョン・グールド・ヴィーチ――の記録をみよう。

オールコックは、初代英国公使であり、1861 年（文久元）6 月 11 日に下関を発って、3 日後の 6 月 14 日の正午に兵庫沖に到着した英国艦リングダヴ号（H.M.S. Ringdove）の航海の経験について、1863 年（文久 3）に

刊行した『大君の都 *Capital of Tycoon*』(N004)に記している。ちなみにオールコックは、同紀行文のなかで、このときが初めての瀬戸内海航行ではないと記している。

ロバート・フォーチュンとジョン・グールド・ヴィーチは、両者とも英国の植物専門家でプラント・コレクターである。かれらは、日本開国とともに来日し、英国にて商業的価値のある植物を日本で収集して英国の園芸植物マーケットに流通させるために、初代英国公使オールコックをたよって来日した。オールコックも、植物学には造詣が深く、オールコックの『大君の都』の巻末の日本の植生についての記述はヴィーチの情報提供によったことが明記される。

ロバート・フォーチュンは、1860 年（万延元）12 月 17 日に横浜を出港して、12 月 20 日に因島、21 日に周防灘へと抜ける航海を、英国人のダンダス船長が操る汽船イングランド号にて行ったことを、1863 年に刊行された『幕末日本探訪記：江戸と北京 *Yedo and Peking*』(N003) に記述している。フォーチュンは、瀬戸内海の航行は、軍や政府関係の船に限り許可制であったことが特に記されており、「ダンダス船長と船客はしばしば耳にしていた内海の絶景をしきりに見たがっていたので」徳川将軍から英国女王陛下への贈物をイングランド号は運搬しているとの理由で特別に瀬戸内海の航行を許可されたことが記される。この汽船イングランド号にはフォーチュンとともにヴィーチも乗船しており、両者の採集した植物で甲板は壮観だとの記述がある。

ヴィーチは、英国の園芸雑誌 *The Gardener's Chronicle and Agricultural Gazette* に 1860 年から 1862 年（文久 2）にわたって書簡形式の紀行文を連載した。そこには 1860 年 8 月 22 日付けで、長崎から神奈川への行程で瀬戸内海を通過する記述がある。瀬戸内海については「いわゆる内海 the so-called Inland Sea」(N002) と記述され、かれは開国後ヨーロッパの船で航行を許された 4 番目の船 the Berenice 号に乗船したことを誇らしげに語る。

これら 3 人の記述に共通するのは、正確な地理的知識と植生の記述に特に注意を払った記述をしていること、さらにピクチャレスクな審美眼によって瀬戸内海が記述されていることである。ピクチャレスクは、19 世紀の英国で議論されていた新しい審美眼である。ピクチャレスクとは美（beautiful）と崇高美（サブライム sublime）の中間に位置するとされる。英国の美学者ウヴェデイル・プライス Uvedale Price によると、ピクチャレスクとは「荒々しさ、複雑さ、不規則性を特徴とする小規模な風景で鋭い対照と多様なる色合いに満ちたもの」だと定義される。ピクチャレスクとは、文字通りには「絵画美」であるが、その絵画とは、クロード・ロラン Claude Lorrain が描いたような、神秘的で、聖書や神話などの舞台になりそうな「心たのしい恐怖感」(川崎 1991：p.83) をさそうような絵画のことであり、英国ではこのようなピクチャレスクな審美眼を共有する造園法で庭園が新しくつくられていた。

オールコックは「下関―瀬戸内海と兵庫への航海」(N004：pp.356-372) として、1 章をあてており「この内海（一般に内海といわれているが、内海というのはあまり正確な名づけ方ではない）は、長さがおよそ 250 マイルで、大坂湾まで延び、わずかの岩と無数の島が点在している。幅はもっとも広いところで 50 マイルばかりであろう」(N004) と地理的情報について述べる。

さらにその美しさの評判について「これまでにこの内海を通行した少数のヨーロッパ人は、一様に、景色の素晴らしい美しさを熱狂的にのべていた。The few European who had hitherto taken this inner passage had generally given very glowing descriptions of the surpassing beauty of the scenery.（下線筆者）」(N004：pp.356-357) と語る。英文表現を見ると瀬戸内海を「この奥の水路 this inner passage」と日本の奥にある秘境のように捉えている。

オールコックじしんも、ピクチャレスクな視点から、次のように瀬戸内海の美について評価している。

> 多くの地方の景色はきわめて美しい。たとえ壮大ではないとしても、野性味や美しさをよくたもっている。In many parts, no

doubt, it is exceedingly picturesque, and if never grand, neither is it ever altogether tame, or devoid of beauty.（下線筆者）一般に、日本の土地の特徴となっているすばらしいゆたかさと肥沃さは欠けているが、この点にかんしてさえ、もうこれ以上は望むものがないほどにめぐまれた土地もある。平戸と九州のあいだの水道（平戸瀬戸）は、問題なくひじょうに美しい。(N004： p.369)

「運転がしっかりしておれば、蒸気船には本当の危険はないが、一見したところではひじょうに危険なように見えるので、その風景にいっそう興味が加わる」(N004：p.369)

とピクチャレスクな視点の特徴のひとつである「心たのしい恐怖感」(川崎 1991) のスリルをオールコックは味わっている。

水道の中央には、ほとんど水面すれすれに裸岩があって、大きな船がやっと通れるだけの道を開けている。水は早い勢いで泡立ち、渦を巻きつつこの岩をすぎて流れる。沿岸には、間違いなく火山であった証拠を見せている山々がある。山々はそのふもとから頂上までたかくそびえ立ち、さきにかかげたさし絵（周防灘）からもわかるように、ときたま完全な円錐形をなしているものがある。(N004：pp.369-370)。

フォーチュンも瀬戸内海について、播磨灘で「…このあたりの海の風光は、船が進むに連れて絶えず移り変わる」(N003) とパノラマの風景を記述する。植生や地質の科学的な記述とともに、

…農地としては豊沃でなくても、眺望の主眼は、奇異で空想的な丘や谷間、峨々たる岩石など、それらの人工を加えない野生のままの自然の風景にある。賛美した入江に沿った町や村に相対して、われわれ少人数の一行の一人ならず、この美しい「内海」の海岸に日向ぼこでもしながらこの海辺に住み、そし「林間の隠者」となって、そのような風景の中で余生を送りたいと、口をそろえて言う。(N003)

とピクチャレスクな審美眼により瀬戸内海を記述した。

さらにオールコックは、「兵庫付近 Near Hiogo」というタイトルの挿絵を紀行文『大君の都』に掲載している。この挿絵には、屋島と五剣山とおぼしき山容が描かれ、手前にはピクチャレスクな和船が描かれている。この挿絵について次のようにオールコックは記述する（図 2)。

兵庫に近づくと、大変奇妙な山が見えてくる。その山は、1200 フィートほどのたかさで、平たいテーブル状をなしていて、そこから急に四方へ向けて山が低くなっている。When approaching near Hiogo a very singular view presents itself in a hill some twelve hundred feet high, which forms a flat table abruptly ending on all sides. (N004： 中 p.370 ／ (Chapter5) p.101)

オールコックは屋島とみられる山の特徴を「1,200 フィートほどのたかさで、平たいテーブル状」だとメサ地形を描写しているが、かれは屋島という山の名前の固有名詞は一切語っていない。おそらくオールコックは、屋島という山の名前を知らなかったのであろう。屋島の地理的位置は、挿絵のタイトルである「兵庫付近」であるとはとてもいえないが、下関方面から兵庫までの長い航海の道程を考えると、たしかに、兵庫方面に向かって航行すると終盤近くにさしかかったときに、南方の四国側の沿岸に、男木島と女木島を手前に屋島と五剣山を望む景色を目の前にみることができる。屋島という山の名前を知らなくても、その特徴ある山容と地形はオールコックの目をひきつけて、和船の航行する前景もくわえて画題となり、ピクチャレスクな挿絵として紀行文に添付された。オールコックの『大君の都』（英文版）には、挿絵は G.Pearson によって彫られたと明記されている。

図２　Near Hiogo と題される屋島が描写される挿絵
『大君の都』（N004）所収

IV　世界漫遊観光旅行者の Inland Sea の経験：1870 年代から 20 世紀初頭

ここで紹介するのは、主として 1870 年代から来日するようになった世界漫遊観光旅行者の Inland Sea の経験である。かれらの鑑賞の視点は、航行する船上からのシークエンス景（動的水平景）に特徴づけられる。以下に Inland Sea の内海と多島海の風景、かれらの地理的知識、ピクチャレスクな視点からの記述を時代順に紹介する。

最もはやく来日した世界漫遊旅行者のうちのひとりが、女性旅行家 Anna D'Aguilar である。彼女は幕末の 1862 年（文久 2）6 月に下関から横浜まで、蒸気船セントルイス号にて瀬戸内海を航行した。彼女は地理的には周防灘から東が内海だと理解している。

> We were now in the Suonada, or inland sea, which, in fact, as we continued our sail over its transparant waters, resembled a ″succession of lovely lakes,″ one opening into the other. (N005: p. 228)

彼女は、穏やかな海を船で航行しながら内海を「すてきな湖の連なり」と捉えている。

ドイツの地理学者リヒトホーフェンは、日本経由で中国旅行に出発する。1868 年（慶応 4）8 月 31 日、神戸を出発し、9 月 1 日瀬戸内海を航行し、2 日に下関に到着する。かれは「内海の航行は素敵」と絶え間なく変化する内海を「深く分岐した入江や、突端や、岬や、無数の島々…山脈の植物は大抵カルフォルニア海岸地域風の背の低い灌木で、そのから岩がのぞいている」（N009）と記す。屋島とおぼしき地形の記述はないが、四国については以下のように記述している。

> 目に見えるすべての岩、特に島の麓にあるそれは花崗岩の様に思はれる。が、四国には火山とおぼしき圓錐形の山が見え、その二、三のものは 750 米の高さに迄達してい

る。個々の山脈の姿態は絵に書いた様である。側面傾度 60 度のピラミッド型、反った線を持つ鮫歯型、花崗岩の圓い圓錐型が沢山ある。四国の奥の方には非常に高い山脈の輪郭が認められるが、それらは 1200 米乃至 1500 米はあるに違ひない。僅かばかりでも平地があるところ、特に渓谷の出口の所には、きまって村落があり、數々多くの家や樹木や寺院などが見られる。土地は臺地状に耕され、米田よりは玉葱畑が多い。(N009)

さらに、内海について、このように広い地域にわたって幸福と繁栄の見られる優美な風景は世界的にもあまりなく「世界で最も魅力のある場所の一つとして高い評判をかち得」(N009) ると評価し、「この状態が今後も長く続かん事を私は祈る」(N009) と結ぶ。

次に紹介するのはオーストリア・ハンガリー帝国の外交官ヒューブナーの紀行文である。かれは、1871 年 (明治 4)、世界一周旅行の寄港地として来日し、1871 年 9 月 29 日瀬戸内海を航行する。

ニューヨーク丸は朝の 3 時に (兵庫を) 出港し、程なくして瀬戸内海に入った。日の出に私は甲板にいた。両側に円錐形の島々が姿を現わした。南には四国の高い峰々が広がっている…ニューヨーク丸は、時速 10 海里の規定の速度で航行を続けた。名状し難い絶景の故、当然のことながら名高い風景の一つ一つを成すものは、絶えず同じ内容だった。今日は鏡のような海が、代わる代わる湖のようになったり、河のようになったりした。いたるところに無数の休火山が有り、大洋の波に似て円くなった岩塊が側面に並んでいた。岩塊には、密生した植物群落が覆っていた。峡谷の側面には雛壇式に整地され、段々畑となっており、岩山の尾根はさまざまな樹木で飾られていた。幹の間から、空が見えるので、峰々と比べると樹木は、巨人が林立しているようにみえるのだった。とはいえ、曇って、湿気のある大気のプリズムを通して眺めると、峰々は、遠くにあって、非常に高いようだった。奇妙奇抜な光学的効果というものので、これで、日本の絵画の納得のいく奇怪さのいくつかの説明がつく。我々に往々にして奇怪に思えるものは、自然の忠実な再現にすぎないのだ。(N008)

ヒューブナーは、以上のように植生などの科学的な自然観察と芸術の融合したところのピクチャレスクなまなざしで瀬戸内海を見ていた。

アメリカ南北戦争で活躍したグラント将軍も瀬戸内海を訪れている。グラント将軍の随行員ヤングが記述した記録によると、一行は 1879 年 (明治 12) 6 月に長崎に到着し、そこから神戸へ向かうが、コレラ蔓延のために神戸には上陸せずに瀬戸内海を次のように記す。

われわれは五日間ほど、電報やジャーナリストたちにわずらわされることもなく、どこに目を向けても古の絵や絵のように美しい文明に取り囲まれながら、その美景とロマンスで有名な内海を航行したのである。(N010 : p. 58)

マスコミに追われる有名人グラント将軍にとっては、瀬戸内海は癒やしと美しいものに囲まれた隠れ家であった。

次に、客船の乗客ではなく、瀬戸内海に航行する船の乗組員の視点で、瀬戸内海を記述した『ウィル船長回想録』(N023) を紹介する。ジョン・バクスター・ウィルはスコットランド出身で、明治初期の日本やアジア各地で活躍した船乗りであった。かれは、瀬戸内海で働いていた 1872 年 (明治 5) ごろの出来事として、外輪船オレゴニア号にデンマーク人のフラム船長のもとで航海士として乗船したときのエピソードを話す。

ある夜、瀬戸内海を進んでいた時のことだ。我々は北側の航路を取ることにしていた。私は丁度、この時当直で甲板にいた。船長は船首部にいて、自分の思うままに操舵の指図をしていた。船が変針点にさしかかっても、船長はそこで直角に針路を転じず、そのまま三原湾に向かって船を直進させていった。そこで私は叫んだ。「航路を

外れたぞ。このままだと、すぐ陸に乗り上げてしまうぞ」船長は夢から覚めたように、飛びあがり「船を止めろ。全速後進！投錨用意！」と叫んだ。しかし私は「その必要なし。今夜は視界良好だ。そして左舷船尾には十分余裕がある。船首が航路の方向をさすまで、舵柄を左舷にとれ。それから航路はそのままに真っ直ぐ進め」とやってしまった。(N023：pp. 169-170)。

このエピソードは、回想録に記されたものであり、多少の誇張や自慢もあると思われるが、瀬戸内海で活躍した西欧人船乗りの視点から見た瀬戸内海の記述である。

英国人ノリス Knollys, H. による *Sketches of Life in Japan*（N011：1887）には、ノリスが長崎から神戸へ向かう途上に経験した瀬戸内海が綴られる。内海の名声について far-famed, land-locked expanse of waters called the Inland Sea と述べて、絶えず変化する自然の美を視覚的に捉えて記述している。ピクチャレスクな和船 the picturesque native boat が静かな水面に点在し、緑の肥沃な耕作されている土地について語る。1880 年代後期には「文明の印である電柱 telegraph poles」が沿岸部に連なって見える光景が観察されている。

メアリー・フレーザーは、東京に英国公使として赴任する夫とともに 1889 年（明治 22）に来日した。来日直後の 1889 年 4 月長崎から東京までヴェロナ号で航行した。途中で通過した瀬戸内は日本の初印象をつくり、公使夫人としての日本での生活の決意が以下のように記述される。

今はもう瀬戸内にきております。私はすでにこの国の核心にふれたようです。その美しさや遠さの本質そのものをみたようです。あるいはこの国が、自分をこれで判断してほしいと願って示すようなものとすでにむかいあったようなのです。初めのいく日かは靄がたちこめ、波もかなりたかかったのですが、夢の光景がつぎつぎたちあらわれるにつれ、靄は一枚一枚巻き上がって遠ざかりました。一刻一刻の眺めがあまりうつくしいものですから、直前まで見ていた景色が遠ざかっても、悔やむのを忘れてしまうのです。私はいろいろなものを見てきましたが、松の木に縁取られた日本の山々ほど、ひとつひとつがこの世ならぬ美しさをたたえているものはありません。曲線や突起のある、繊細でしかも大胆な表情。それらは西洋の山にはないものです。頂にはかならず一群の松がなごやかに並び、靄が涙のしずくをたらす暗緑色の小枝や、強い日ざしを受けて輝く金銅色の太枝を張り出しているのです。(N024：p. 31)

シドモアによる *Jinrikisha Days in Japan*『シドモア日本紀行：明治の人力車ツアー』(N012) は、1891 年 (明治 24) に刊行された。シドモアの初来日は 1884 年（明治 17）であり、瀬戸内海を 6 回航行したことがあると記す。瀬戸内海を「魅惑的水域 enchanted waters」と述べ、次のように景色を愛でる。

夜明けから夕暮れまで陰影の多い景色が広がり、穏やかな海辺を通過していくと、丘や島が次々と配列を変えながら歓迎してくれます。南アラスカの海岸は、よく瀬戸内海に比較されますが、アラスカ水路の狭い海峡、野性的峡谷、山壁は、この理想郷と双子の兄弟にはなれません。陸地に囲まれた瀬戸内海は、長さ 200 マイル［320 キロ］に及ぶ広大な湖となり、島々を豊富に浮かべ不均等な海岸線に守られています。鮮やかな緑に包まれた鋸状の山脈は、夢のような無風状態を乱すに足る野性味を帯びています。青々とした島がグループとなり、水路はどこも広く平らで、人間の営みと開墾達成の印がどの風景の中にもあります。(N012)

1890 年代に来日した世界漫遊観光旅行者の多くは、チェンバレンとメイソンが 1891 年に刊行した英文日本ガイドブック *A Handbook for Travellers in Japan*, 3rd Edition を持参していた。本書では、瀬戸内海の変化に富むピクチャレスクな風景について次のように紹介される。

for the traveller the smoothness

> of the water and the continuously varying and picturesque scenery are an unfailing source of pleasure and comfort throughout its entire length. (J001)

1891 年当時には、瀬戸内海の定期船として Japan Mail Steamship Company's Steamer が神戸から下関まで就航していることがハンドブックでは紹介されている。

ベッカースティス一家は、キリスト教英国聖公会の司祭の一家である。一家の娘メアリーが紀行文 *Japan We Saw It*（N013）を著した。著者の兄は 1886 年（明治 19）から日本に牧師として赴任し、父(英国エクセター教区主教)、母、兄とともに 1891 年に日本旅行を行った。11 月に神戸から瀬戸内海を経由して九州へ出かける。日本郵船会社の蒸気船 The Kobe Maru に乗船する。船長はイギリス人 Captain Haswell であった。彼女たち一家は、瀬戸内海では美しい景色を愛でるために一日中甲板で過ごし、数百の島を通り過ぎ、数分ごとに変化する島の見え方 , 多数の小舟の様子を楽しんだことが記述される。

> We steamed past hundreds of curious, cone-shaped islands, due to volcanic action, some of which were very bare, and others covered with vegetation, and cultivated to the very summit with rice fields. The constant change of our course revealed every few minutes new intersections of these islands and of the mountain ranges of the mainland, and we could often see three or four lines of distance. (N013)

モラエスは、ポルトガル人の外交官・ジャーナリスト・作家で、1899 年（明治 32）から 1929 年（昭和 4）に日本に滞在し、徳島にて没した。1902 年（明治 35）から 1913 年（大正 2）までポルトガルの新聞に日本の印象記を執筆した。かれは「瀬戸内海、インランド・シイ、これだけで、充分、日の出の帝国を定義できるだろう」（N025：p.105）と幻想的な美しい日本の風景が瀬戸内海の描写に凝縮していると評価し、楽園を投影する。「乗りこんだ船は長崎をあとに下関海峡を縫って航行し、イギリス人がインランド・シイと呼んでいる瀬戸内海―楽園にも似た風景に驚嘆するあまり、歩行する陸地そっくりの幻想をおこすあの比類のない内海―」（N025：p.102）。多島海のイメージをもって「船が本州、九州、四国の島島を縫って進むとき、海水を浴びている無数の小島が散在するので、少しも陸地を見失わないで、しょっちゅう沿岸のなぎさ近くを航行する」（N025：p.105）と瀬戸内海を描写する。沿岸の耕作地を庭園のように捉えて次のように描写する。

> 稲田、野菜園、丹念に耕作した畑が、どこまでも陸地になってつづいている庭園に似た外観を与えている。そこここに楽しく村落が群がっていて、清潔でつやつやした小さい木造家屋が玩具のようにこみあっている。(N025：p. 106)

ヤングハズバンドは軍人であり、休暇で 1891 年に日本旅行をして *On Short Leave to Japan*（N014）を 1894 年（明治 27）に著している。かれは下関から神戸へと船で瀬戸内海を航行した。著者が乗船した船の船長から聞いた話として、船長が 45 回瀬戸内海を航行したうち晴れていたのは 2 回だけだったというエピソードが語られている。内海で島が多い海をいかに安全に航行するのかという水先案内の技術の難しさについて、シンガポールなどの他の海域と比較しながら語られる。瀬戸内海は、ピクチャレスクの特徴のひとつである「心たのしい恐怖感」（川崎 1991）に彩られた場所であった。内海は「大きな湖 a huge lake」（N014）のようと記述され、イタリアやスイスの湖水と比較される。

キリスト教英国聖公会の司祭（Canon of Durham）トリストラムは、*Rambles in Japan, the Land of Rising Sun*（N016）を著した。本書の序文によると、彼は瀬戸内海を 4 回航行（2 回神戸→下関、1 回下関→神戸、1 回大阪→四国）した。かれは日本には布教活動の視察のために訪れ広く旅をする。かれは瀬戸内海について美しさと素敵さにおいて匹敵

するものは世界にないと述べる。海岸風景において世界的に名声のある場所の要素がすべて瀬戸内海に備わっているとして次のように説明する。

> Let traveller recall the finest bits of coast scenery he can recollect---the Bay of Naples in spring, Wemyss Bay on a summer's morning, a trip round the Isle of Wight, threading the islands of Denmark's Sounds, the luxuriance of the Sumatran coast, the windings of the coral islets of Bermuda---recall whichever of them you please, wait but an hour or two--- and you will match it in the Inland sea. (N016)

コジェンスキーは、ボヘミアの教育総監であり、世界一周旅行（1893-1894）の途中で日本を訪問した。1893 年（明治 26）10 月に神戸からエンプレス・オブ・インディア号（カナディアン・カンパニー）に乗船し、瀬戸内海を通り、上海までの船旅を行った。瀬戸内海の航行には 17 時間かかった。

> 私たちは英文の地図でジャパニーズ・インランド・シー（Japanese Inland Sea）と呼ばれている海を巡航することになる。日本では瀬戸内海と呼ばれている。ここの航行は容易ではない。多くの入江と暗礁と火山島がある。島の間の水路はとても狭く、航行するのは迷路のなかを進むに等しい。船が挫傷するような場所もたくさんあったが、あらゆる危険な個所に用意周到に灯台が設置され、最大クラスの船の航行も可能となった。おかげで、船客は素晴らしい眺めを楽しめる。(N015: p308)

英国人の作家キプリングは長崎から神戸まで、P. and O. Steamer に乗船して瀬戸内海を航行した。*From Sea to Sea*（N018）は、このときの世界旅行の紀行文である。かれは内海を通過するためには蒸気船で 20 時間かかる船旅だと記す。かれは内海を「大きな湖 a huge lake」（N018）だと捉え、その中を通過する旅であり、あらゆる大きさの多数の島々が目に入ってくると、内海と多島海の風景を描写する。この自然の美しさに満ちた瀬戸内海のルートを通るために、キプリングはクック旅行社に 100 ルピーの追加料金を支払ったと記述する。どのような空のもとでも、紫、アンバー、グレー、緑、黒と多様に移りゆく島々の美しさを見るためには、かれは支払った値段の 5 倍は価値があったと評価する。甲板には、ツーリストたちがこの景色を眺めるために出てきていて、かれらの感嘆の声が絶えないと観察した。

E.M. ダヌタンはベルギー公使夫人として 14 年間日本に滞在し 1905 年（明治 38）に滞在記を刊行した。彼女は尾道から宮島に船で行楽したおりに観察した瀬戸内海の経験を次のように記す。

> 美しい春の天気に恵まれて、瀬戸内海の魅惑的な景色の中で一日を過した者でなければ、私たちに微笑み語りかけてくる大自然のあくまで落ち着いた安らかさを、本当に実感できないに違いない。こうして過した時間のすばらしさは筆舌につくし難く、決して忘れることができないほどであった。(N019：p. 366)

お雇い外国人で東京帝国大学の動物学教授モースの瀬戸内海の経験を、滞在記『日本その日その日』（N020）にみてみよう。モースは神戸を出発して長崎まで、瀬戸内海を夜に航行した。瀬戸内海の名声について「ここは世界で最も美しい航路の一とされている」と述べる。また、夜の汽船の航行について、次のように描写する。

> 夜甲板へ出て見たら、汽船は多数の漁船の傍を通っていた。…（漁夫たちは）貝殻の笛を吹き、燈火が無いので彼等は鉋屑を燃やしたが、それは海面のあちらこちらで気まぐれに輝くのであった。闇は測知し得ず、笛を吹き鳴らすことと、火光を仄めかすこととは、汽船が漁船と並行する迄続けられ、そこで一つ一つ、火は消え、騒ぎがやむ。かくの如くにして前面には、ここかしこに、この沢山の笛の奇妙な騒音と、燃え上がる火とがあり、後方には音も聞こえねば、火

も見えぬ。まるで、汽船がそれ等を呑み込んで了ったかのごとくであった。(N020)

以上にみたのは、1860 年代から 20 世紀初頭にわたる世界漫遊旅行者の Inland Sea の経験である。かれらは、Inland Sea を内海と多島海の風景として、海峡、河川、湖のなかをすべるように進み、方向転換するたびに多くの島々と沿岸の生活から生み出された耕作地や集落などの風景に見守られながら航行した。海上から観察する沿岸の陸地の人びとの営みについて、耕作地に庭園、村落に楽園、電柱と電線の列に文明などを投影して記述した。瀬戸内海を兵庫（神戸）から下関まで通過するのに、1860 年代には、2 日から 3 日程度かかっていたのにたいして 20 世紀初頭には、わずか 17 時間から 20 時間で通過する快適な船旅となった。この頃には、日本でも鉄道網が備わり、大阪から下関までの一部は鉄道の旅も選択できるようになっている。英国人作家キプリングが、追加料金を払ってまで、鉄道ではなく瀬戸内海の船旅を選択したことが語られるが、キプリングの時代には、わずか 20 時間で名高い瀬戸内海を通過する船旅のアトラクションを購入したようなものであり、ツーリストは甲板にでて寸分を惜しんで感嘆の声をあげながら瀬戸内海の風景を鑑賞した。安全な瀬戸内海航行のためには、水先案内人の技術は必須であるが、島々の間を次々と縫うように航行するスリルを感じた西欧人もいた。時代が、20 世紀に近づくにつれ、観光のまなざしで、ピクチャレスクな視点を駆使して瀬戸内海を描写した。この頃には、幕末にあった瀬戸内海の秘境性のイメージはまったく消え去っている。瀬戸内海は、「奥の水路 'inner passage'」（N004）ではなく表の主要航路となっている。このように瀬戸内海を絶賛した、来日西欧人であったが、かれらは、瀬戸内海を航行する船の上から屋島を認識して記述することはなかった。次に紹介するのは、1922 年（大正 11）に来日した英国人の貴賓エドワード皇太子の屋島訪問である。

V　英国エドワード皇太子の屋島訪問：1922 年（大正 11）5 月 6 日

"The Prince of Wales' Eastern Book: A Pictorial Record of the Voyages of H.M.S. "Renown" 1921-1922"（N021）は、英国皇太子エドワード一行の御召艦レナウン号による東方歴訪の公式記録の紀行文である。この公式記録の紀行文の語り手は、Sir Percival Phillips とされる。エドワード皇太子一行は、御召艦レナウン号 H.M.S. "Renown" に乗船して 1921 年（大正 10）10 月 26 日に英国ポーツマス港を出港して、ジブラルタル、スエズ、インド、日本へと東方向へ 8 ヶ月間かけて 41,000 マイルにわたって海と陸地の旅をした。かれらはインドで 4 ヶ月、日本で 1 ヶ月すごし、各地を歴訪した。日本を最終目的地として、鹿児島を 1922 年 5 月 9 日に出港して帰途につき、1922 年 6 月 20 日にプリマスへ帰港した。

エドワード皇太子一行は、1922 年 5 月 6 日朝に神戸を出港して瀬戸内海を航行した。公式記録の紀行文によると瀬戸内海の船旅はまだ西欧の進歩が届いていない田舎の日本 Rural Japan を観察できる最後の機会だと捉えている。

> The voyage through the Inland Sea gave his Royal Highness a last look at rural Japan, and at places yet untouched by Western "progress." (N021)

皇太子一行は、瀬戸内海を航行するために日本の新しい蒸気船 Keifuku Maru を借りきった。Keifuku Maru は下関と釜山のあいだの郵船として建造された客船で、造船所のもとを離れたばかりの新船だと説明される。船には、とくに皇太子と随行員のために特別に誂えた船室が用意された。「皇太子の部屋は生花であふれ、興味深い盆栽 curious dwarf trees が飾られ、籠のなかの鳴鳥が囀っていた。通常の客船スタッフの代わりに、英国王室の随行員がお供をした。客船というよりは豪華なプライベート・ヨットのようであった」と船室の様子が描写される。

図３　“The Prince walking into the village of Jashima”
The Prince of Wales' Eastern Book（N021）所収

瀬戸内海の航海については「驚きの連続であった The Inland Sea yielded one surprise another」（N021）と語られる。随行員の公式記録の紀行文では、瀬戸内海の地形や風景の描写はほとんどされず、どのように日本の人びとが、皇太子一行を歓迎したのかが詳細に語られる。歓迎の様子は、岸にいる村人が皇太子の乗船している船に向かって、あるいは、地元の漁船が蒸気船に近づける限り近づき、日本と英国の旗をふって皇太子にお辞儀をして挨拶をしたと紀行文に語られる。さらに、どの顔もみな笑顔であったと記される。小学校に通う子どもたち、女性、男性、農民、漁民たちは、何マイルも離れた遠い村からも Keifuku Maru を見に来た。さらに、その歓迎は、高松に当日の午後に上陸してからも、行く先々で続いたと記録される。この歓迎ぶりについて、東京のような都市近郊では通常のこととうけとれるが、高松のような離れた地方 this remote locality では、全く予期せぬことであったと記される。皇太子一行は、高松では松平卿の接待をうけ、栗林公園と屋島を訪れる。

公式記録の紀行文には、the Central News 社によって撮影された多くの写真が掲載されているが、屋島村での人びとの歓迎の様子は、“The Prince walking into the village of Jashima” と題する写真をみると理解できる（図 3）。写真には屋島の山容のシルエットを背景にして、日本と英国の国旗を手に持って振る人々に歓迎されるエドワード皇太子一行が写されている。写真の撮影場所は、屋島小学校の前辺りの道であろうか。松平氏はこの半日の歓迎のために、道路整備などに合計 10,000 ポンド以上使用したと公式紀行文には記述されている。

> Count Matsudaira spent more than £10,000 in preparing for this half-day visit of the Prince, a fifth of which was devoted to building a special road to the top of the hill called Yashima,

図４　“The Prince experiences a ride in a KAGO-an ancient form of conveyance, Takamatsu”
The Prince of Wales' Eastern Book（N021）所収

near the town. (N021)

1922 年当時は、屋島山頂までのケーブルカーやドライブウェイはまだ整備されていなかった。皇太子一行は、栗林公園から屋島の麓までは、車で移動した。その後の３マイルの登山道の道のりは、駕籠に乗り人力にたよって移動した。

“The Prince experiences a ride in a KAGO-an ancient form of conveyance, Takamatsu” と題する皇太子が駕籠に乗りポーズを取った写真が公式紀行文には掲載されている（図 4）。

Then motoring to the foot of Yashima, he encountered another three mile strip of cheering humanity strung along the way. It overflowed into the green rice-fields and even reached the lower branches of roadside trees. (N021)

このようにして皇太子一行は山頂の屋島寺にたどりつき、歴史的興味のつきない場所として屋島を紹介された。屋島の源平合戦における、船隠などのエピソードや源義経の勝利という結果について説明を受けた。

This is a place of great historical interest, the Taira clan having taken refuge here before the battle in which they were finally exterminated by Yoshitsune, the famous general of the Minamoto clan in 1185. A Buddhist temple on the summit contains many relics of the battle, and the priests were waiting to exhibit them to the Prince. (N021)

エドワード皇太子は、おそらく屋島の源平合戦図などの展示物を指し示されながら屋島寺住職から歴史的説明を受けたのであろうが、皇太子じしんは、この合戦物語を芸術と

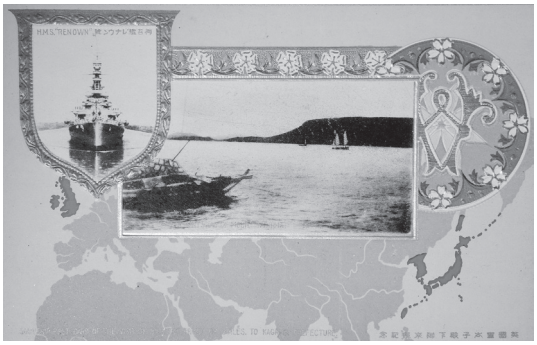


図 5 『英国皇太子殿下啓行記念　屋島山遠景 御召艦レナウン号』（I047）
香川県立ミュージアム蔵

して味わうことができたのだろうか。この公式記録の紀行文からは、明らかにはされない。さらに、この公式紀行文から、欠落しているのは、屋島山頂からの眺望についての記述である。これに限らず、公式記録の本紀行文には、日本の地元の人びとの英国皇太子歓迎の描写を通した人びとの営みに関わるような人文景については豊かに記述されるが、自然景についてはほとんど記述されていない。

屋島寺を訪問した当日の夜、エドワード皇太子一行は松平氏の邸宅に招待されディナーをもてなされた。一行は能と日英の旗のデザインのあわさった衣装をまとった 12 人のゲイシャの踊りを観劇し、Banzai のコーラスとともに提灯行列と花火の歓迎を受けた。次の朝には、再び瀬戸内海を経て、次の訪問地、宮島へと向かった。

この英国エドワード皇太子の屋島訪問について、日本側の資料として『英国皇太子殿下啓行記念　屋島山遠景 御召艦レナウン号』（I047）と題する記念絵葉書がある（図 5）。この絵葉書はユーラシア大陸の西の島国・英国と東の島国・日本が赤く彩色された地図を背景として、中央に 2 枚の写真が配されている。横長の長方形にカットされた右側の写真の中には海上から見た屋島の山容が描かれており、この写真の左方にある海上に重なるように配置された写真には御召艦レナウン号が写っている。実際には、エドワード皇太子一行が神戸を出港し瀬戸内海を航行し高松まで乗船したのは、公式紀行文に記されているように日本の蒸気船 Keifuku Maru であった。したがって、御召艦レナウン号は、瀬戸内海を航行していないし、この図像のように屋島山遠景とのコンビネーションで実際に写真を写すことはあり得ない。皇太子一行が瀬戸内海を航行するためには、御召艦レナウン号よりも、コンパクトなプライベート・ヨットのような日本の蒸気船 Keifuku Maru のほうが、都合がよかったのであろう。しかしながら、この「英国皇太子殿下啓行記念」の絵葉書では、エドワード皇太子の東方歴訪の航海の象徴である「御召艦レナウン号」の雄姿と「屋島山遠景」を組み合わせることによって実際にはあり得ない図像を巧みに創りあげた。

エドワード皇太子一行は、引き続き鹿児島まで日本の蒸気船 Keifuku Maru にて航行し、鹿児島で「御召艦レナウン号」に乗り換えて、英国への帰途についた。

この公式記録の紀行文で、印象的なことは、紀行文でも驚きを持って語られ、また、屋島村の “The Prince walking into the village of Jashima” の写真をみても理解できるように、エドワード皇太子を歓迎する地元の日本人たちの歓迎ぶりである。写真をみると、屋島村では、welcome と記し、両国の国旗で飾る門までつくっていた。エドワード皇太子一行が屋島を訪れた同じ年（1922 年）に摂政宮（のちの昭和天皇）も屋島に登った。大正時代を通じて日本の皇族による屋島訪問が多くみられた（本書第 3 章 V 参照）。エドワード皇太子を歓迎するときにみられた整然とした熱烈さには、度重なる賓客の来訪を歓迎するために動員され、旗振りなどの身振りをすることに慣れていた地元の人びとの姿がみえる。

おわりに
―屋島・瀬戸内海をめぐる近代西欧のまなざしと名勝的価値の想像／創造に向けて―

1913 年（大正 2）に、森田惣吉は、屋島についてのガイドブック『屋嶋めぐり』（J006）緒言を「世界海上の一大公園なりと外人の賛美せる瀬戸内海の風景をして一層絶景ならしむるものは屋島なりとす」と書きは

じめている。「外人」＝西欧人が、「世界海上の一大公園」と評価する瀬戸内海のうち、もっとも眺望が絶景なのが、屋島であるとしている。森田は、屋島からの展望を「最も良好なる位置と最も適当なる海抜」のなせるわざとほめたたえている。

西欧人は、近世のシーボルトをはじめ、幕末の外交関係者、明治・大正期に来日した世界漫遊観光旅行者たち、さらに、英国エドワード皇太子のような貴賓客は、瀬戸内海を、森田が形容するように「世界海上の一大公園」としてほめたたえたのは間違いない。先に見たように西欧人たちは、正確な地理的知識と地質・植生などの科学的な観察の視点で、瀬戸内海の風景をピクチャレスクな自然庭園のように記述した。しかしながら、西欧人の瀬戸内海の記述は、海上の船からの視点が主流だった。

1922年（大正11）に屋島を訪れた英国エドワード皇太子は、山上にある屋島寺まで登る機会をもって源平合戦の歴史物語について説明を受けたが、絶景だとされる山上からの眺望については公式記録には記述が見当たらない。山上からの絶景を鑑賞する西欧人の記述は、エドマンド・ブランデン（G040）、ポール・クローデルまで待たねばならない（本書第3章Ⅱ参照）。

瀬戸内海国立公園は、1934年（昭和9）に制定された。同年に日本人Akimoto Shunkichi（秋元俊吉）は、英文の日本観光ガイドブック *The Lure of Japan*（J015）を鉄道省（Boad of Tourist Industry Japanese Government Railways）から刊行した。そこには英語文化圏の西欧人観光客に訴える西欧人のまなざしを意識した日本の魅力が記述されている。瀬戸内海＝Inland Seaについては、日本の地中海It is rightly called the Mediterranean of Japanと紹介している。急速に近代化する日本のなかでも伝統的な日本の生活がみられる場所として瀬戸内海が紹介される。ガイドブックでは四国は瀬戸内海に面していて、風景が美しく国立公園に含まれることが強調されている。そのなかで、とくに屋島については、12世紀の源平古戦場であったという歴史的側面が紹介されている。

> The Island of Shikoku may stand quite on its own, but that scenic part, facing the Inland Sea, is included in the Park, especially Yashima where the famous bloody battle was fought between Taira and Minamoto clans in the 12th century.（J015：p.187）

ただし、興味深いことに、このガイドブックには屋島の地形の特徴や山上からの展望については何も記述されていない。これは、英国エドワード皇太子の紀行文には屋島からの絶景が記述されなかったことと呼応するかのようであるが、疑問が残る。

森田の『屋嶋めぐり』やAkimotoの *The Lure of Japan* には、本章で概観した西欧人のまなざしを意識して、同時に日本人に訴える屋島の普遍的な魅力を創出しようという実践がみえるようだ。これは名勝的価値において評価される自然景観と人文景観の融合の試みと重なるとも考えられないであろうか。

〈主要参考文献〉

川崎寿彦 1991『楽園のイングランド：パラダイスのパラダイム』河出書房新社
橘　セツ 2009「19世紀後半に日本を訪れた西欧人の旅行記」、神田孝治編『観光の空間：視点とアプローチ』ナカニシヤ出版
西田正憲 1999『瀬戸内海の発見：意味の風景から視覚の風景へ』中央公論新社
橋爪紳也 2014『瀬戸内海モダニズム周遊』芸術新聞社

（担当：橘セツ）

11　ガイドブック・リーフレットにみる屋島像

はじめに

近世に引き続き、多くの観光客が訪れ、全国的にも著名な観光地として成長した近現代の屋島においては、種々の観光情報がガイドブックやリーフレットの形態で提供された。そして、それらには観光地としての「名勝屋島」の姿がはっきり映し出されている。この章では、これらの屋島に関するガイドブック・リーフレットに掲載された記述や図像をもとに、近現代における屋島像の変化をとらえることにする。なお、観光情報が掲載された紙媒体の刊行物の中でも、冊子の形態をとるものをガイドブック、一枚の用紙に印刷されたものをリーフレットとして取り扱う。

Ⅰ　ガイドブック・リーフレットの記述にみる屋島

この節では、屋島に関する記述があるガイドブック・リーフレットのうち、時代ごとに特徴的なものを例に挙げながら、近現代における屋島像がどの様な変化をとげ、人々からどの様に認識されていたのかを時代を追ってみていく。

1．明治・大正期

この時期から、既にいくつかのガイドブック・リーフレット類が出されている。

古いものでは明治 31 年（1898）出版の『屋島名勝手引草』（J002・J003）というガイドブックがあり、屋島付近一帯の名所が紹介されている。紹介されている名所は屋島からの眺望に関するものと歴史に関係するものの 2 種類に大別される。眺望については屋島山上から見た高松市街方面や談古嶺からの景色のスケッチが掲載され、その見事さを伝えている。歴史に関係する名所のうち最も多いのは源平合戦に関係する名所であるが、他にも屋島寺や不喰梨など空海に関するものや可正桜などの高松藩に関係するものも含まれる。

また、当該期のガイドブックとしては、『八栗屋島』（J005）、『屋嶋めぐり』（J006 ～ J010・J021）、『讃岐案内』（J004）も発行されている。この三つのガイドブックでも『屋島名勝手引草』同様、屋島からの眺望や歴史に関わる名所が紹介されていて、特に『讃岐案内』では屋島に関する史料紹介にページを割いている。

この中でも大正 2 年（1913）に出版された『屋嶋めぐり』（J006）では、表紙に源平古戦場の文字と兜のイラストが（図 1）、裏表紙には源氏・平氏の家紋や平家蟹、扇の的などが掲載され（図 2）、源平合戦の古戦場のイメージが強調されている。また、この『屋嶋めぐり』は屋島登山道やその付近の名所を網羅しているため、眺望や歴史に関する名所だけではなく、特産品や高松市街地についての記述も掲載される。この他には、紹介される名所に仰之碑や東宮殿下御やすみ所などの大正天皇ゆかりの地があり、当時の社会状況をよく反映していると考えられる。

リーフレットとしては、『讃岐名勝案内』（K001）がある。これは表題の通り、讃岐地域の名所を写真で紹介したリーフレットである。表紙は高松城のイラストで、背景に台形状の屋島が描かれる。掲載されている写真は金刀比羅宮、高松築港、栗林公園、屋島、寒

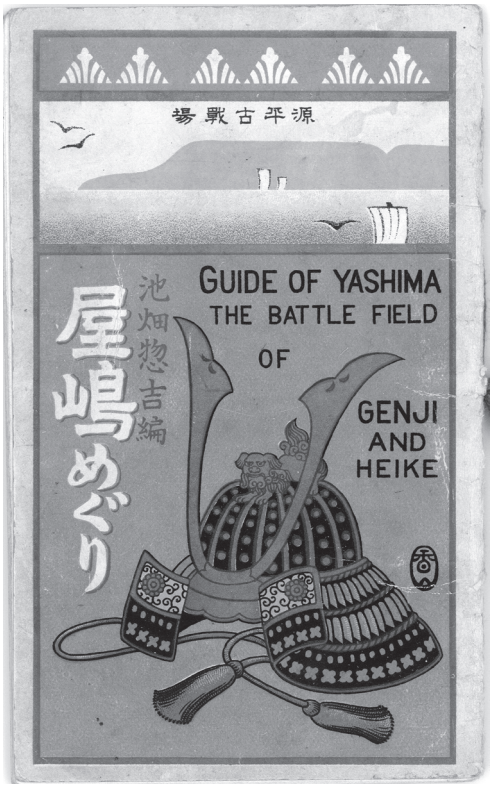


図１　『屋嶋めぐり』表紙
京都府立大学蔵

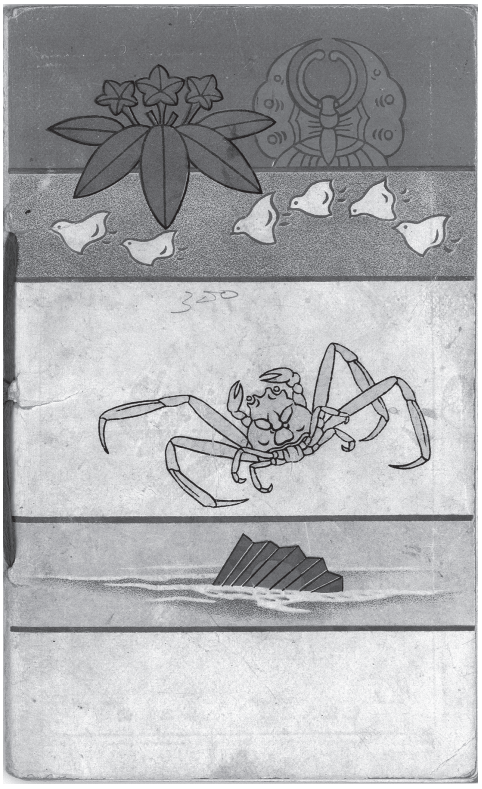


図２　『屋嶋めぐり』裏表紙
京都府立大学蔵

霞渓である。屋島の写真は印刷がはっきりしないため内容はわからないものの、「源平古戦場屋嶋」とタイトルが付けられていることから、源平合戦ゆかりの地というイメージが強いことがわかる。またこのリーフレットには金刀比羅宮の拝観券が付属しており、使用期限から明治 40 年（1907）頃に配布されていたことがわかる（本書第 13 章参照）。

この時期の資料からは、当時、屋島が眺望と歴史の名所として売り出されていたことが良くわかる。特に眺望に関しては『屋嶋めぐり』の冒頭に「世界海上の一大公園なりと外人の賛美せる瀬戸内海の風景をして一層絶景ならしむるものは屋島なりとす」とあるように、国外からも一定の評価を得ていたことがうかがえる。また、源平合戦ゆかりの地であるというイメージは広く浸透していたことがその記述や表紙のイラストなどからも伝わってくる。

２．昭和（戦前）期

昭和初期は全国的に観光が注目されていた時期でもあり、昭和２年（1927）におこなわれた日本新八景の選定は地元の観光業発展を期待し、熱狂的な盛り上がりを見せたとされる（白幡 1992）。この時、屋島は八景には選ばれなかったものの、同時に選定された日本二十五勝の一つとして選定されている。その際、屋島は海岸の部として選定された。その後屋島は昭和９年（1934）に国の史蹟天然紀念物及び瀬戸内海国立公園に指定される。その背景には、昭和の初め頃から香川県国立公園協会などによる指定を目指した運動があった。国立公園指定後に発行されたほとんどのリーフレットやガイドブックにおいては、国立公園に関する記述がみられ、中でも屋島は「瀬戸内海國立公園の王座」、「内海第一の勝地」などと謳われ、瀬戸内海国立公園内において、特に際だった存在として売り出

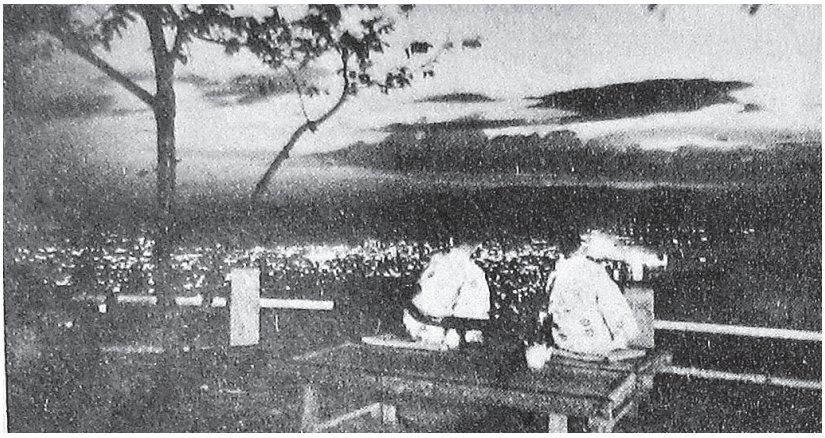


図３　『四国　屋島案内』より高松夜景
高松市歴史資料館蔵

されていた（本書第 13 章参照）。

また昭和 4 年（1929）には、屋島ケーブルカーが開通した。その後、平成 16 年（2004）に廃止されるまでの間、屋島ケーブルカーが屋島山上への交通機関として広く紹介されることになる。そしてこの時期に作られた観光客向けリーフレットに関しては、大阪商船株式会社や屋島登山鉄道など、交通関連企業が製作、配布したものがいくつか見られる。これらのリーフレットでは自らの交通機関の案内と共に、付近一帯の名所の紹介を載せる形式が多く、比較的広い範囲を扱うことが多い。この中で屋島は金刀比羅宮や栗林公園などと並ぶ著名な観光地の一つとして取り扱われる。

大阪商船株式会社が発行した『讃岐遊覧案内』（K009）では、自社の大阪－高松－多度津航路の定期便を利用した讃岐巡りの日帰り旅行プランを提示している。このプランの中で屋島は中心的な位置を占め、屋島寺や談古嶺、遊鶴亭など屋島山上の名所がプランに組み込まれ、歴史的な情緒や屋島山上からの眺望をその見どころとして提示している。

また、この時期、香川県観光課・香川県観光協会発行の『讃岐案内』（K012）や屋島町役場発行の『観光の屋島』（K007）など、自治体が製作したリーフレットもみられる。『観光の屋島』では屋島の見どころとして、史跡、風光、天然記念物、神社仏閣、産業などを挙げている。風光の項では、談古嶺や獅子の霊巌、遊鶴亭、瞰蹟亭が取り上げられ、特に談古嶺、遊鶴亭、獅子の霊巌を屋島の三大絶景としている。また談古嶺と瞰蹟亭からの景色は源平合戦と関連付けて説明されている。

同時期のガイドブックとしては、昭和 5 年（1930）香川県が発行した『讃岐　風光と産業』（J013）がある。本文中では 4 ページを割いて屋島の概要と談古嶺からの写真、屋島北嶺の写真が掲載される。

この時期のガイドブック・リーフレットの様相をみるに、全国的な観光業の盛行の流れにのり、自治体と交通関連の企業が中心となって、屋島を含めた香川県内の観光を盛り上げていこうとする動きがよく表れている。そして、中でも瀬戸内海国立公園の指定が観光地としての屋島の価値を押し上げる契機となっている。また明治・大正期は屋島とその周囲を取り上げたものが多いのにくらべ、香川県内や四国全域など、より広い範囲を対象とした観光情報が掲載される。

３．昭和（戦後）期

戦後、復興と観光の復活を目指す高松市では昭和 24 年（1949）に観光高松大博覧会を開催する。一方、香川県は従来の観光地の整備を進めると共に、新しい観光地を生み出すため、観光地 50 景の選定をおこない、その後昭和 37 年（1962）には県議会で「観光県宣言」を議決するなど、観光施策を進めていった。

この時期のリーフレットを見ていくと、

それまでにない新しい記述がみられるようになる。例えば屋島山上からの風景に新しく夜景が加わる。『四国　屋島案内』（K030）では屋島山から見た高松の夜景の写真が掲載されている（図 3）。他にはケーブルカーの乗務員による案内や屋島盆踊大会などのイベントの紹介、屋島の伝説などが新しい見どころの一つとして強調されている。

また、以前から見られる、源平合戦に関する記述にも変化がおこる。これまで、源平合戦に関する情報は、主に歴史的な意味合いで扱われ、屋島近辺の史跡や談古嶺からの景色が引き合いに出されていたが、『四国　屋島案内』では扇の的や弓流など、「平家物語」のエピソードは歴史ではなく、物語の項目で紹介される。その際、引き合いに出されたのは文楽における錣引の歌詞である。

この時期、屋島における交通機関にも大きな変化がみられた。昭和 36 年（1961）の屋島ドライブウェイの開通である。『瀬戸内海国立公園 " 屋島 " ご案内』（K029）は屋島ドライブウェイの運営会社のリーフレットであり、この会社では屋島山上での売店や食堂を経営したり、屋島の東斜面にオリーブ園を経営したりしていたことがわかる。この屋島ドライブウェイの開通は、屋島観光に自家用の自動車を用いるという新しい観光形態が一般化するきっかけともいえる出来事であった。

この様に、戦後における屋島では、観光客誘致に向け、新たな観光資源開発に力を入れていたことがわかる。特にこの時期は太平洋戦争が終わり高度経済成長をむかえ、社会が大きく変わった時代でもあり、それまでの屋島観に加え、新たな価値づけをおこなおうとした当時の人々の様子が伝わってくる。

II　地図と図像から見る観光地「屋島」

前節では、主にガイドブック・リーフレットの記述を中心にみてきたが、この節ではガイドブックに用いられる地図と図像から、屋島が人々にどのように認識されていたのかをみていく。

1．地図

ガイドブック・リーフレットの多くには地図が付属している。特に観光情報の提示を目的とするガイドブック・リーフレットでは、単なる地形だけでなく、主要な観光地や観光ルートの情報を盛り込んだ地図が掲載される。

中でも多用される形式は鳥瞰図である。ガイドブックではあまり見られないが、リーフレットでは鳥瞰図を掲載するものが多く、バリエーションも複数ある。まず、鳥瞰図で描かれる範囲についてみていくと、範囲はガイドブック・リーフレットの内容に左右され、屋島とその周辺のみを描いたものから、香川県全域が入るもの、広いものでは高知県や愛媛県の一部も含まれるような鳥瞰図が用いられる場合もある（図 4）。また鳥瞰図の視点は、屋島の南東から描くものや、高松市街地の南方から見たもの、瀬戸内海側から見たものがある。珍しいものだと太平洋側から高知県越しに香川県を描くものもある。

では、これらの鳥瞰図で屋島はどのように描かれるかというと、多くは北嶺と南嶺のそれぞれの山頂部が平坦な山として描かれている。そして山上には屋島寺や遊鶴亭、獅子の霊巌などの観光スポットが描かれる。ここで描かれる屋島は通常、写真などで表現される真横からみた台形のシルエットとは異なる印象になる。また鳥瞰図の作者は不明のものが多いが、作者がわかるものに吉田初三郎作のものが挙げられる（口絵 2 ・図 5）。

これらの鳥瞰図の利点としては、立体的に観光地の場所や交通機関の配置が表現されているため、直感的に現地の地理情報を理解することができ、旅先で行動を考える際に有効であると考えられる。また、鳥瞰図では実際の地形を無視して、主要な観光地を大きくデフォルメして描くことが可能であるため、観光地だけをピックアップして紹介することができ、観光地案内用の地図として有効であったと考えられる。

鳥瞰図に似た形式のものには、談古嶺からの風景に源平合戦に関連する史跡等の場所を示した図がある（図 6）。これは実際に史跡を見て歩くというよりは、実際の談古嶺からの風景とこの図を照らし合わせて、風景を

図４　『屋島』所収「四国観光案内図」
高松市歴史資料館蔵

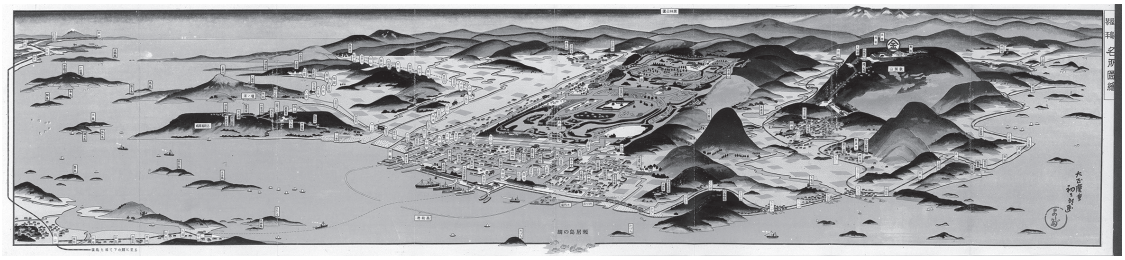


図５　『史蹟要覧高松屋島琴平御案内』
京都府立大学蔵

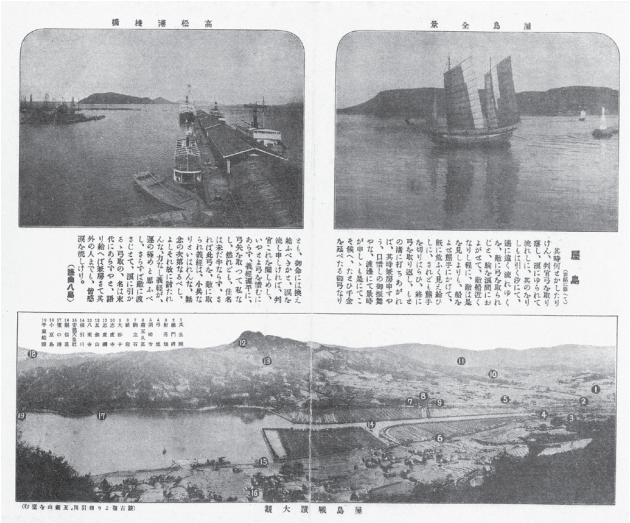


図６　『香川県名所交通屋島史蹟鳥瞰図』
京都府立大学蔵

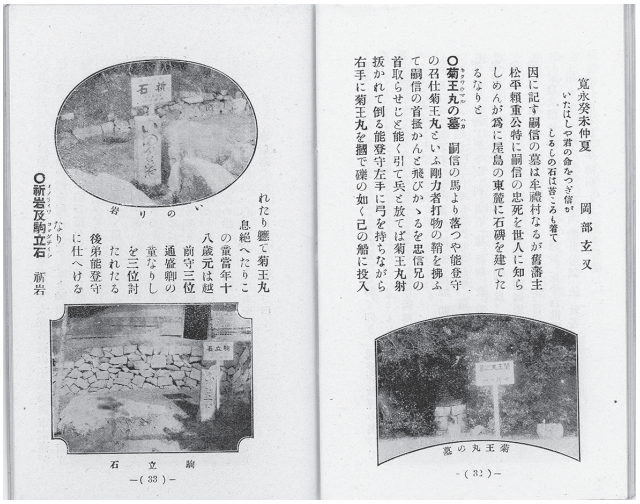


図７　『屋嶋めぐり』（J007）より
京都府立大学蔵

楽しむためのものであると考えられ、鳥瞰図とは異なる使用方法が想定される。

２．図像

ガイドブック・リーフレットに掲載された図像からも、当時の「名勝屋島」のどのような点に価値を見出していたのかがわかる。ここでは、絵葉書の構図を中心に、ガイドブック・リーフレットに用いられた図像を分類しながら検討する（なお、分類の詳細は本書第12章を参照されたい）。

まず、表紙に用いられる図像を見ていくと、屋島が写される、または描かれるものは全て構図１の西側から見た屋島である。次にガイドブックに掲載される写真を見ていくと、最も多くの写真が掲載されていたのが『屋嶋めぐり』である（図７）。ここで掲載されているのは、構図７と８に該当する図像が多い。ガイドブックはページ数が多いこともあり、丁寧に屋島とその周辺の観光地を紹介することが多く、屋島の全景や風景の写真よりも、観光地ごとの個別の写真が多くなる。また、絵葉書用の分類には当てはまらない、屋島合戦の様子を描いた絵や塩田などの屋島周辺の様子、お土産などの写真が掲載される場合も少なくない。

一方、リーフレットに掲載される写真をみていくと、表紙に用いられる図像はガイドブックと同じく、構図１が圧倒的に多く（図8）、その他は構図２の東からの屋島と構図３の獅子の霊巌からの景色が表紙に用いられる場合がそれぞれ１点のみである。表紙以外に掲載される写真では、構図１～５に該当する風景に関する図像が多くなる。中でも構図５の談古嶺から見た源平古戦場はパノラマ写真で掲載されることが多く、その他の構図より目立つ場合が多い。一方、構図８の屋島山上にはない源平史跡の図像は非常に少ない。このような偏りがみられるのは、紙面の限られるリーフレットにおいては、代表的な構図の写真を数点のみ使用する場合が多いためであると考えられる。その意味で、表紙に多用される構図１は代表的な屋島の構図といえるだろう。

リーフレット用の図像で特異なものは『四国　屋島案内』に掲載される写真で、他のリーフレットとは異なり、観光を楽しむ女性の姿を映した写真が多用される。他のガイドブック・リーフレットの写真でも人物が写りこんでいるものはいくつか見られるが、人物がメインで、なおかつ表情まではっきり読み取れるような写真を中心に掲載したものはこの資料のみである。これは楽しそうに観光する姿の写真を掲載することで観光地としての屋島のイメージアップを図ろうとしたものと考え

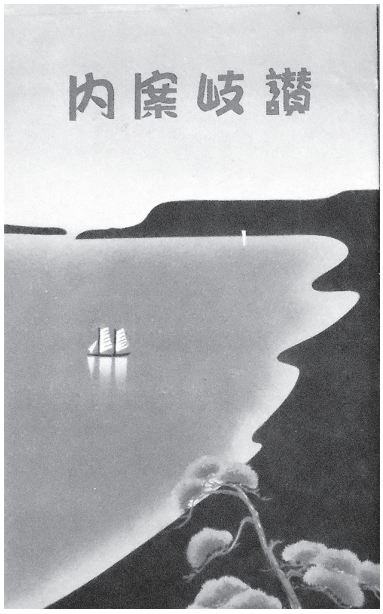


図８　『讃岐案内』表紙
香川県立ミュージアム蔵

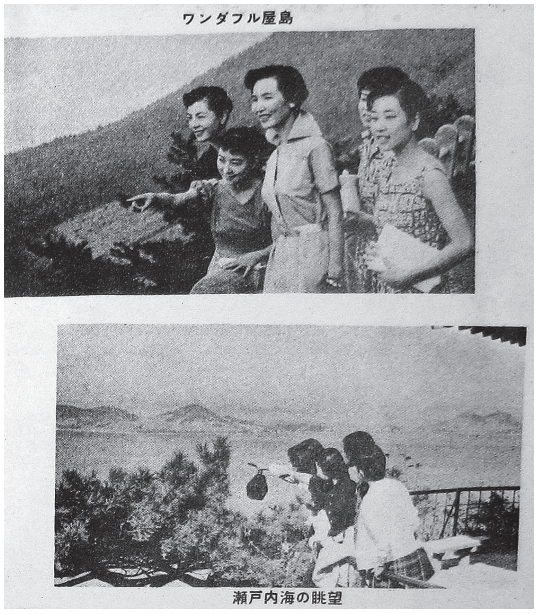


図９　観光を楽しむ女性（『四国 屋島案内』より）
高松市歴史資料館蔵

られる（図 9）。

この他に、ガイドブックとリーフレットには共通して源平合戦の図像が用いられ、特に扇の的を題材にした図像は表紙にも多用されるなど、屋島のイメージを決定づける重要な要素といえる。

まとめ

リーフレットの記述と図像の二つの観点からの検討結果として以下の事柄を指摘することができる。

まず一つ目は、時代と共に移り変わる観光地屋島の姿である。明治・大正期においてはその歴史と眺望を売りにした屋島とその周辺が「名勝屋島」として認識されていたが、その後昭和に入ると、瀬戸内海国立公園の設立や史蹟天然紀念物への指定を通して、より広い四国、または日本というエリアの中でも歴史ある著名な観光地の一つとして屋島が認識されるようになる。そして戦後、社会が大きく変化する中で起こった、夜景という新たな眺望や屋島で開かれる様々なイベントなど新たな価値の付加、歴史から物語への源平合戦の意味合いの変化など、時代に合わせて移り変わっていった「名勝屋島」の姿がはっきりと読み取れる。

次に二つ目は、近現代の観光地屋島を作り上げた当時の人々の営みである。ガイドブック・リーフレットでは、屋島を含む観光プランの提示や、現地の様子を明快に理解させるための鳥瞰図や代表的な構図の使用など、屋島観光をより良いものにしようとする意識が読み取れる。また、自治体発行のガイドブック・リーフレットの存在からは、屋島を地域を挙げて売り出そうとする、地元の人々の意志がみてとれる。

このようにして、時代の変化とそれに応じた様々な人々の営みの中で近現代における屋島像ができ上がっていったのだろう。

〈主要参考文献〉

香川県 1988『香川県史　第六巻　近代Ⅱ』香川県
香川県 1989『香川県史　第七巻　現代』香川県
白幡洋三郎 1992「日本八景の誕生　昭和初期の日本人の風景観」、『環境イメージ論　人間環境の重層的景観』弘文堂

（担当：川崎雄一郎）

12　絵葉書における屋島表現

はじめに

本章では絵葉書の数量的な把握を通じて、屋島の名勝的価値がいかに表現されているかについて考察する。屋島のイメージとして我々が思い浮かべるものは、南嶺と北嶺の二つの台形からなる姿や、手前に松を配し長崎の鼻を強調した姿か、あるいは山上からの風景か、と様々なものがある。絵葉書にはそのような屋島の価値の多様性が表現されているといえるだろう。そこで絵葉書を分析し、そのイメージの特徴について考察することとする。

Ⅰ　構図の分類について

まずは分類するにあたって、基準となる構図を選定しておきたい。検討対象とする構図は以下の通りである。

構図１：屋島を西側から東へ向いて撮影（描写）した構図（図 1）
構図２：屋島を東側から西へ向いて撮影（描写）した構図（口絵 7 および図 2）
構図３：屋島山上獅子の霊巌から高松市街を撮影（描写）した構図（図 3）
構図４：屋島山上遊鶴亭から瀬戸内海を撮影（描写）した構図（図 4）
構図５：屋島山上談古嶺から五剣山・庵治港船隠方面を撮影（描写）した構図（口絵 9 および図 5）
構図６：屋島を南側から撮影した構図（図 6）
構図７：その他屋島の展望地点や奇岩、屋島寺を写したもの（図 7）
構図８：屋島山上にない、源平合戦に関する史跡（口絵 8 および図 8）

構図１については屋島の南嶺と北嶺がともに写っているものである。今の高松港の辺り、あるいは高松港よりも西へ移動した地点から撮影されたと考えられる構図である（写真 1）。

構図２については、現在の城岬公園付近から撮影されたものである（写真 2）。長崎の鼻が強調され、屋島の北嶺の端のみを写したものである。また、その他のパターンとして庵治港付近から撮影されたものもある（写真 3）。

構図３は山上から高松市街を望むものである。ここからの構図では絵葉書を 2 枚分使用したパノラマ写真になっているものもある（写真 4・図 9）。

構図４は、屋島の北嶺にある遊鶴亭から北を望んだ風景である（写真 5）。これもパノラマ写真となることがある。また、長崎の鼻から撮影・描写したものもここに含める。

構図５は五剣山、庵治港、小豆島などが写った、あるいは描かれたものである。これは眼下に映る湾も一緒に写される（写真 6）。構図 3、構図 4 と同様にパノラマ写真になることがある。

構図６は「屋島富士」と呼ばれるものである。これは屋島を主題として写したものである。また、屋島神社やケーブルカーなどの背景に屋島南嶺が写っている場合もここに含めている（写真７）。

構図７は屋島山上の展望地点や史跡を写

図１　構図１の例
〔屋島ヲ高松港ヨリ望ム〕
高松市歴史資料館蔵

図３　構図３の例
（讃岐屋島名所）屋島獅子霊巌より高松港を望む
京都府立大学蔵

図２　構図２の例
（讃岐屋島名所）〔源平古戦場〕屋島全景
京都府立大学蔵

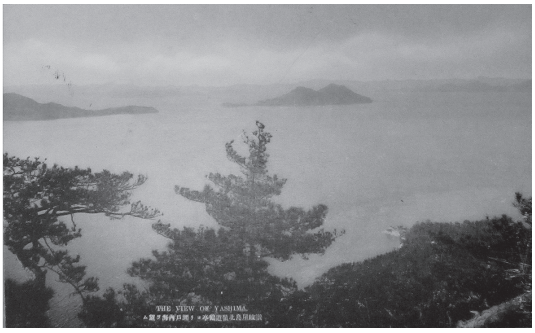


図４　構図４の例
讃岐屋島北嶺遊鶴亭ヨリ瀬戸内海ヲ望ム
高松市歴史資料館蔵

図５　構図５の例
（讃岐屋島名所）屋島談古嶺ヨリ〔源平古戦場〕壇之浦五剣山・雪景・源氏峯及志度湾遠望
京都府立大学蔵

図６　構図６の例
（讃岐屋島名所）屋島富士
京都府立大学蔵

図８　構図８の例
国立公園屋島百景
京都府立大学蔵

図７　構図７の例
（讃岐屋島名所）獅子霊巌展望台
京都府立大学蔵

図９　（讃岐屋島絶景）屋島談古嶺獅々霊巌ヨリ見タル右ヨリ男木島・
女木島・中央大槌・小槌・左高松方面ヲ望ム
京都府立大学蔵

写真１　西側からみた屋島
（撮影：棟田成紹）

写真２　東側からみた屋島
（撮影：棟田成紹）

写真３　庵治港からみた屋島
（撮影：棟田成紹）

写真４　獅々の霊巌よりみた景色
（撮影：棟田成紹）

写真５　遊鶴亭よりみた景色
（撮影：棟田成紹）

写真６　　談古嶺よりみた景色
（撮影：棟田成紹）

写真７　屋島神社と屋島
（撮影：棟田成紹）

写真８　屋島の展望台（獅々の霊巌）
（撮影：棟田成紹）

したものである（写真 8）。屋島寺や血の池、遊鶴亭、談古嶺、獅子の霊巌、畳石、屋島神社などを写したものである。展望地点を写す場合は風景が主題となるのではないため、ここに分類した。

構図 8 は源平合戦の史跡を写したものである。屋島山上にある血の池等の関連史跡についてはここには含めていない。麓にある佐藤継信の墓や太夫黒の墓、祈り岩や駒立岩などがここに含まれている。

II　分類と考察

以上をふまえて検討に移りたい。調査にあたって収集した絵葉書の中で、構図 1 ～ 8 に当てはまらないものについては対象から除外した。その結果、検討対象とした絵葉書は 479 点である。当てはまるものを構図 1 ～ 8 に分類したところ以下のようになった。

構図 1：30 点
構図 2：34 点
構図 3：54 点
構図 4：41 点
構図 5：67 点
構図 6：26 点
構図 7：158 点
構図 8：115 点

構図 1 ～ 8 の点数の合計が、検討対象とした絵葉書の点数と対応していないのは、図 8 のように、1 つの絵葉書に複数の写真が掲載される場合があるためである。

構図 7 の点数が一番多く、158 点となっている。構図 7 に含まれる主なものとしては屋島寺、血の池、獅子の霊巌、談古嶺、遊鶴亭である。獅子の霊巌については展望台を主題としたものも含まれている。この点については、写真や絵の対象となる地点が多いため、総点数としては多くなったと考えられる。また、構図 8 についても同様で、佐藤継信の墓、太夫黒の墓、弓流、祈り岩、駒立岩など、対象となる地点が多いためである。

また、一番数の少なかった構図 6 についても、「屋島富士」という表現がみられることから東西からの視点のみではなく、南からの視点にも価値が認められていたのだろう。

このような分類結果の中で、注目しておきたいのは構図 1 ～ 8 の中で、数が極端に少ないものが見られなかったことである。これは屋島が、「源平合戦の史跡としての屋島」という点のみに価値が発揮されるものではなくなっていることの表れであり、屋島の地形に対してその価値が見いだされていたことの表れだと考える。つまり、「源平合戦史跡としての屋島」と「風景や威容に価値が見いだされた屋島」が併存しているのである。

III　時期ごとの特徴

次に構図 1 ～ 8 について、その時期ごとの特徴についてみてみたい。

戦前の絵葉書について、絵葉書の年代は宛名面の様式で分類でき、明治 33 年（1900）から明治 40 年までを第 1 期、明治 40 年から大正 7 年（1918）までを第 2 期、大正 7 年から昭和 8 年（1933）までを第 3 期、昭和 8 年から昭和 20 年までを第 4 期と区別できる（松田 2012）。

この区分に基づいて、今回収集した絵葉書を第 1 期～第 4 期と現代に区分したところ、第 3 期のものがほとんどとなり、次いで多かったものが第 4 期のものとなった。その次に多かったのは、戦後のものとなった。

一方、第 1 期のものはなく、第 2 期のものも数点確認できる程度であった。ただし、あくまでも今回確認した絵葉書に限られるため、第 1 期の絵葉書も作成されていた可能性は否定できない。

注目したい点としては、第 3 期の時点ですでに屋島全景を写した構図 1、構図 2 が確認されることである。屋島の全景を風景美として捉える風潮は、少なくとも第 3 期の始まりからすでに存在していたことになる。そして構図 1 、構図 2 の絵葉書は第 4 期や戦後のものにも引き続いて確認できることから、全景の風景美という視点は維持され続けたことがうかがえる。

また、絵葉書の数が第 3 期に集中している点について、これは昭和 2 年に屋島登山鉄道株式会社が設立されたこと、昭和 7 年に屋島の史跡保存や風致の保存を目的として

屋島保勝会ができたことなど、この時期に屋島に関する観光施策がなされていることも関わっていると考えられる。この後、昭和9年3月に瀬戸内海国立公園として国立公園に指定され、同年11月に史蹟天然紀念物に指定されることになる。国立公園や史蹟天然紀念物については第4期に属すが、その前段に積極的な運動が展開されたことがこれらに結実していることは言うまでもない。

Ⅳ　組物の検討

屋島に関する絵葉書には、1枚ずつ売られていたのではなく、「屋島二十景」「屋島二十五景」「屋島百景」「屋島百二十五景」といったように、組物として売られていたものがある。

たとえば第4期に刊行された『屋島名勝二十五景』（I018）は25枚の絵葉書からなる。うち、屋島に関係する絵葉書は24枚である。構図1が1点、構図3が1点、構図4が3点、構図5が2点、構図6が1点、構図7が4点、構図8が12点である。

第3期に属する『源平古戦場屋島百廿景』（I057）は29枚からなり、そのうち12枚が屋島に関係する。なお、これらの絵はがきには、構図8のように複数の図像が載せられている。その図像ごとに構図を確認すると、構図1が2点、構図2が2点、構図3が2点、構図4が3点、構図5が1点、構図6が2点、構図7が7点、構図8が2点である。

「屋島○○景」と題されるもの以外にも組物はある。第3期の『〔屋島名所〕』（I015）は16枚の絵葉書からなる。構図2が1点、構図3が1点、構図4が1点、構図5が3点、構図6が1点、構図7が5点、構図8が4点である。

組物の絵葉書の中には、屋島がまったく採用されていないものもある。『屋島寺　宝物絵葉書』（I050）のように、屋島寺の宝物に特化したもの、『瀬戸内海に於ける源平の合戦』（I063）のように「平家物語」の逸話を絵画化したものなどである。

これらのことから考えられることとしては、特定のテーマがない限りは、屋島のイメージは複合的にえがかれるということである。組物の状態で確認できるものが少ないこともあり、断言することはできないが、少なくとも「屋島○○景」と題する組物では、複合的にえがかれているようである。

おわりに

絵葉書の構図を数量的に把握した結果、極端に数の少ない構図があるわけではないことがわかった。このことから、屋島の価値は、特定のものによるものではなく、複合的なものであり、屋島山上からの眺望や源平合戦史跡、そして屋島自体が価値あるものとして扱われていたと考えることができる。また、それらに価値を見出す傾向は、戦後に形成されたものではなく、昭和初期の段階からすでにみられたことが明らかとなった。

〈主要参考文献〉

松田法子 2012 『絵葉書の別府』左右社
屋島風土記編纂委員会 2010 『屋島風土記』屋島文化協会

（担当：棟田成紹）

13　屋島点景
―モチーフの「今」はむかし―

Ⅰ　江戸時代の「名勝屋島」点景

屋島は、親しみやすい風景のなかにある。屋島山上、さらにその周りでは常に人々の活発な活動と往来が交差する。それゆえに屋島の卓越した自然の造形と人文的な情景を表現するため、人々は「点景」を添え、様々な媒体で発信する。そしてその繰り返されてきたイメージの積み重ねは、広く受容・共有され、定着してきたのである。

近代という時代のなか、屋島は伝統的な名所から近代的な観光地へと展開していく。本章の目的は、屋島に添えられた自然的、人文的な「点景」を追いながら、「屋島らしさ」に対する人々の意識と表現の関係を辿ることである。周りの事物との関係性が、その風景的価値を決めることもある。気が付くと副次的な事物が意識の中心として残り、受け止める側の心象によれば、いつのまにか主題たるモチーフとしての存在感を獲得しているという現象もまま起こり得る。

江戸時代末の屋島の風景は、『金毘羅参詣名所図会』と『讃岐国名勝図会』に趣向を凝らした挿図があり、文章とともに当時の認識をつぶさに観ることができる。本書第６・７章で述べられているとおり、『金毘羅参詣名所図会』は弘化４年（1847）、『讃岐国名勝図会』は嘉永７年（1854）とほぼ同時期の刊行である。前者の著者は後に各地の名所図会を手掛ける売れっ子作家となる大坂の暁鐘成、後者の著者は地元高松の碩学、梶原藍渠景惇らと、対照的な経歴をもつ人物の「屋島観」を比較できる点でも興味深い。

図１～図４は、『金毘羅参詣名所図会』巻之六から掲出したものである。図１「高松御城東湊町」は、地に高松城とその東に広がる湊町、天に屋島の南面と新橋、その間に帆かけ船が浮かぶ湾という構図である。もちろん現実にはこのような風景を目にすることはできないが、二つの視点から見た風景を合成し、月影を添えて風情ある湊を演出している。

図２「屋島山南麓　古高松　喜岡寺　鞍懸松」は、左下にひときわ枝ぶりの立派な鞍掛松、右上に版面を突き破って聳える荒々しい屋島南嶺の山容を強調する。その間隙は左上に高松城と帆かけ船、右下は松林に囲まれる古高松である。鞍掛松の方には三度笠に合羽の旅人が向かう。

図３「屋島山　檀ノ浦　次信之墓」は、下半分に松林に囲まれる檀ノ浦（集落）と継信の墓（石塔）、霞を隔てて上半分が屋島山南面の構図である。継信の石塔の周りに生える松を大きく描き、その間を屋島寺に向かう人がみえる。

図４「八栗五剱山」は、檀ノ浦の浜辺に沿って安徳天皇社、内裏跡、駒立岩、洲崎寺、祈り岩などの旧跡が点在し、塩浜には煙がたなびいている。その間を縫うように、笠を被った人が、屋島寺から次の札所の八栗寺へ向かうようすが描かれる。霞の上は、威風堂々の五剣山である。

同じ順で『讃岐国名勝図会』の挿絵をみてみよう。図５は「高松城海上より眺望」である。たなびく霞と松の中に、石垣に囲まれて聳える立派な天守が描かれる。３重５階の唐造りの構造や、唐破風・千鳥破風のようすなどが実写され、本丸・二の丸・三の丸・北の丸の隅櫓を配して高松城の広大さを表現している。左下に高松藩の「〇」旗印の帆が

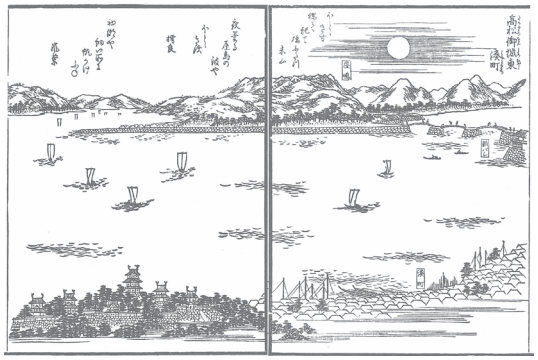


図１　「高松御城東湊町」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

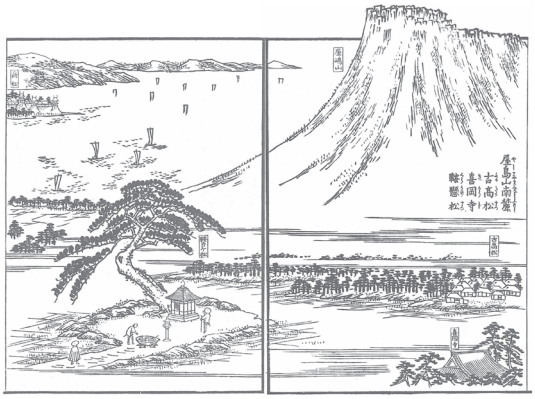


図２　「屋島山南麓　古高松　喜岡寺　鞍懸松」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

のぞき、海に面した城の風情を添える。『金毘羅参詣名所図会』が、南の陸から高松城をランドマーク的にシンプルに描くのとは対照的である。

図６は、図５に続く高松城東「其二　湊町川口蛭子社」の風景である。東の隅櫓から入り込む堀と、東浜の賑わいが描かれ、藩船や商用船がひしめきながら往来する活気が伝わってくる。左上の新橋から東向こうは田畑や塩田が広がる郊外である。

図７は、図６から続く新橋を渡った「八丁堤　沖松嶋」の風景である。東浜の町から屋島南嶺を望み、鋭く突き立つ五剣山の峰を遠望する。

そこに近づけば、いよいよ屋島の戦いの古戦場で、物語と伝承の世界が繰り広げられる。『金毘羅参詣名所図会』では、見開き頁で那須与一が平家方の掲げる的を射落とす場面を載せるが、『讃岐国名勝図会』では、図８のように見開き頁を３分割して三つの場面とし､「義経弓流図」を主場面に配置している。

図９は、『讃岐国名勝図会』巻之三にある連続する５葉のうち４葉をつないで復元した｢八栗屋島源平古戦場｣の大パノラマである。

図９の左半分は、相引川と新川の合流点の東を通る屋島道と、そこから山上の屋島寺へ上る参詣道を描く。杖をもつ遍路と思しき姿がみえる。その東の麓には「八マン」の社殿があり、両側を植栽で整備された広い参詣道につづいて、相引川に大きな太鼓橋が架かっている。参詣道の傍には、立派な枝ぶりの鞍掛松と小さなお堂がある。

図９の右半分は、屋島神社の参詣道を左に見てさらに進み、相引橋へさしかかる風景である。相引橋の左手は屋島南嶺の急斜面に「内裏跡」「次信碑」「菊王丸墓」、右手には相引川の川岸の「弓流」「須崎寺」、五剣山の麓にかけて「惣門」「佐藤次信墳」「源氏木戸」などの史跡・伝承地が点在する。相引川の河口に架かる｢見返橋｣から北に海を臨んで､｢駒立岩」「祈岩」も描かれている。あたかも旅人となった読者が、「源平合戦絵巻」の世界に迷いこむかのような構成である。

『讃岐国名勝図会』をめくって巻之六では、思いもかけない屋島の風景が目にとびこんでくる。図 10 の「西方寺山より東方眺望」と題された場面では、高台の松の下でござを敷き、遠くは小豆島、屋島全景、点々と浮かぶ帆かけ船、そして高松城下の町並みを指さし、弁当を広げてのどかな田園風景を楽しむ男二人がいる。屋島の風景を知り尽くした地元目線ならではの名場面である。

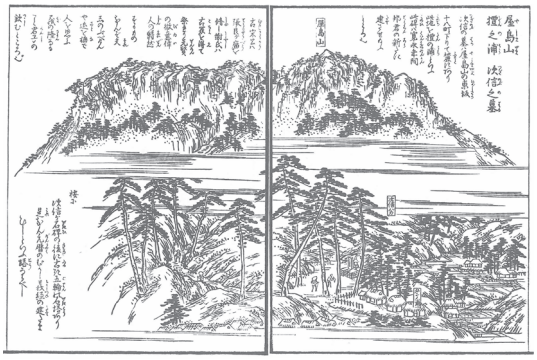


図３　「屋島山　檀ノ浦　次信之墓」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

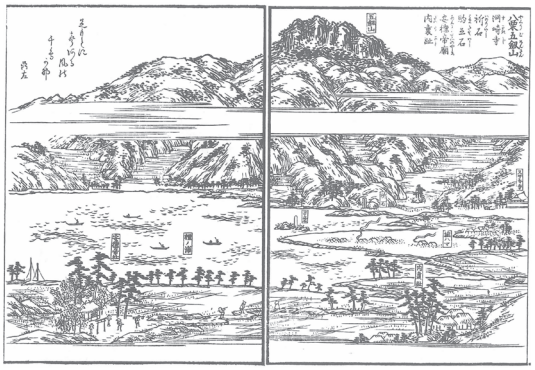


図４　「八栗五剱山」
出典：『金毘羅参詣名所図会』臨川書店、1998 年

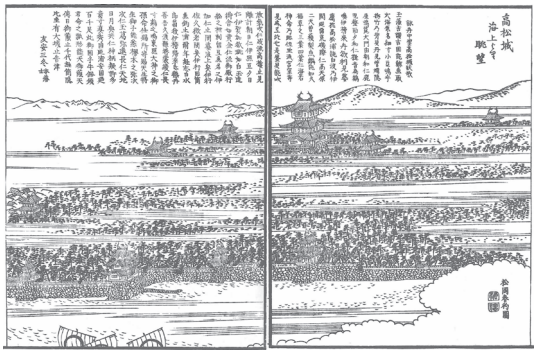


図５　「高松城海上より眺望」
出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年

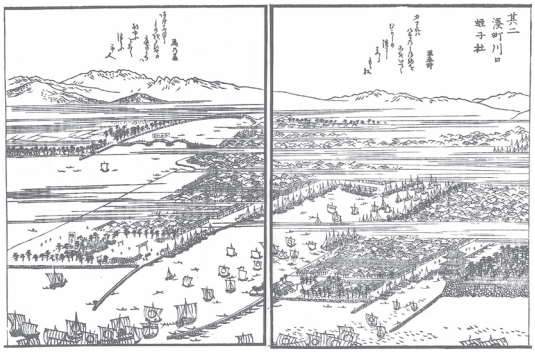


図６　「其二　湊町川口蛭子社」
出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年

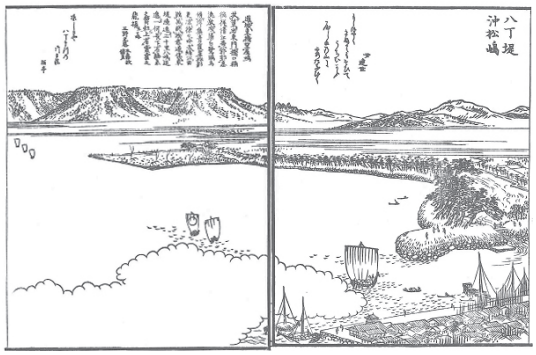


図７　「八丁堤　沖松嶋」
出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年

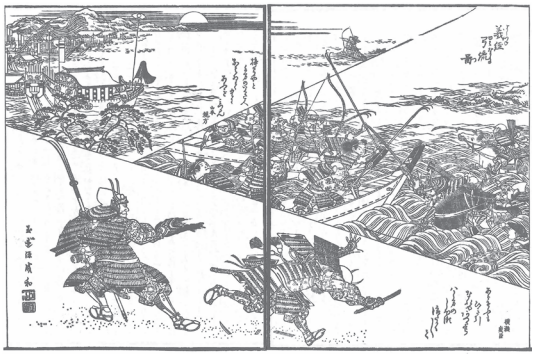
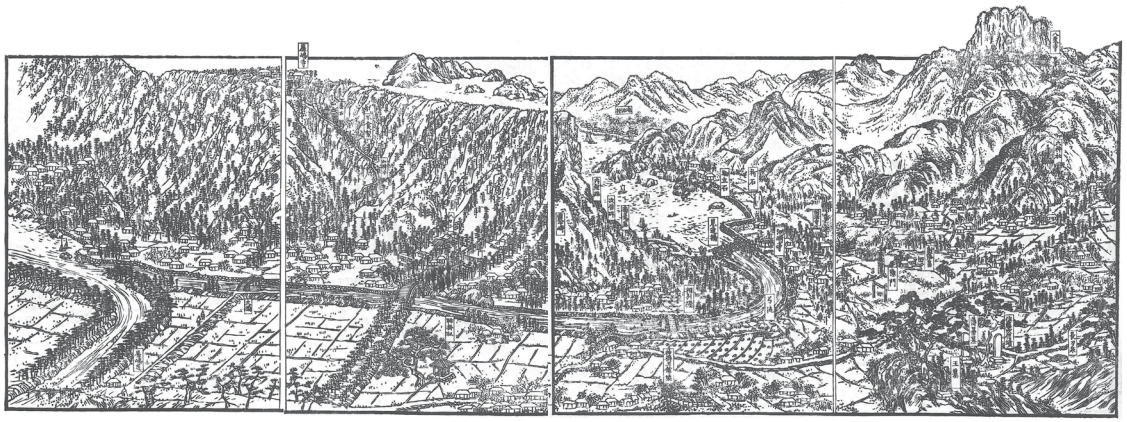
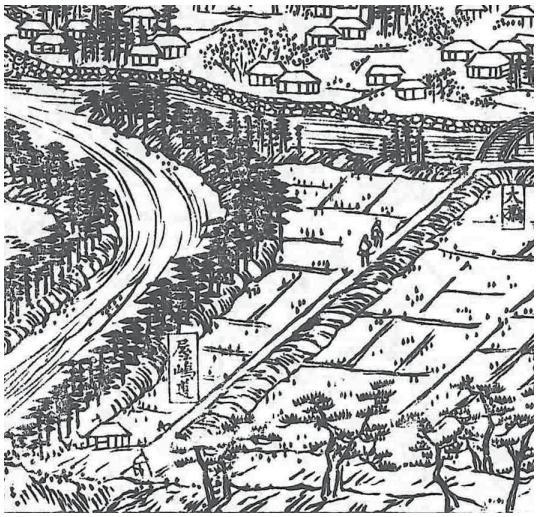
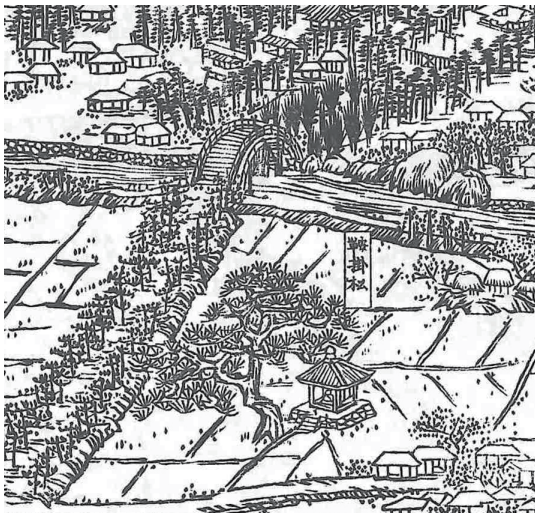


図８　「義経弓流図」
出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年







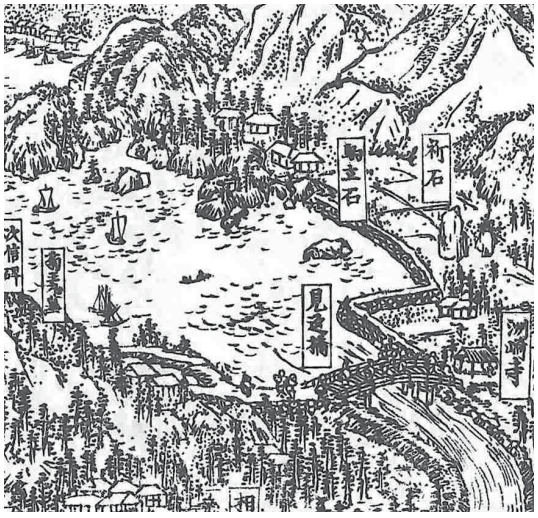


図 9 「八栗屋島源平古戦場」

出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年

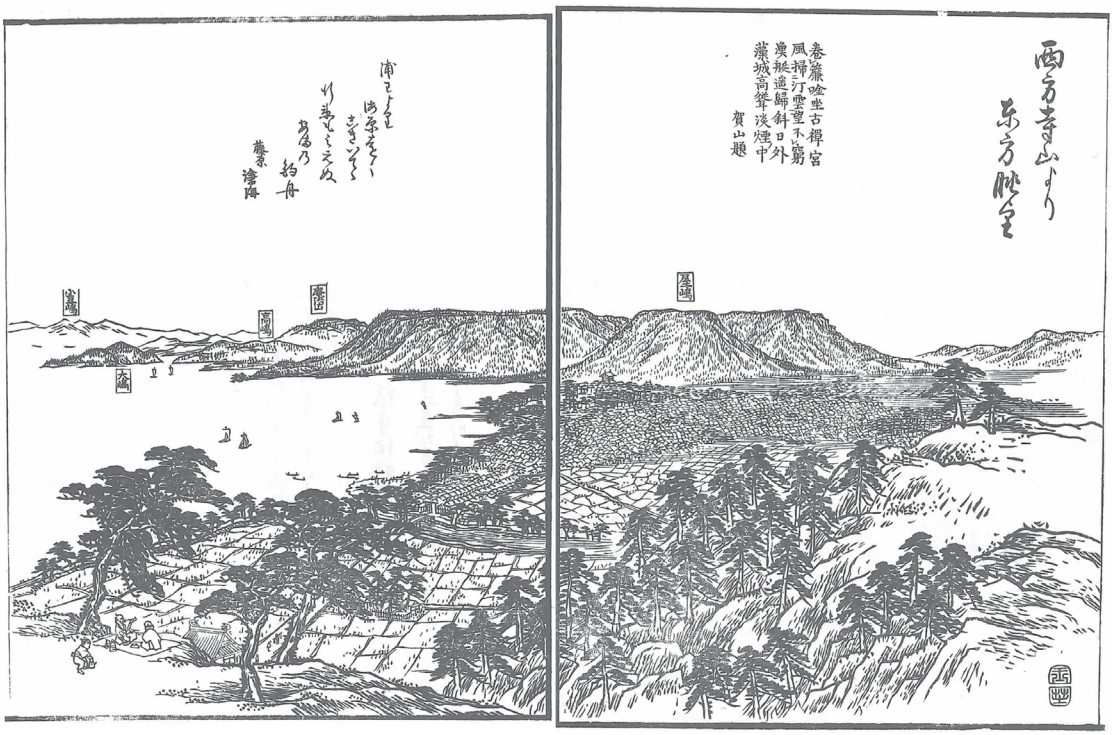


図 10 「西方寺山より東方眺望」
出典：『讃岐国名勝図会　前編』臨川書店、1999 年

II　新しい発信媒体と屋島イメージ

明治に入ると、『金毘羅参詣名所図会』や『讃岐国名勝図会』が描いた風景は、写真や新しい印刷技術により、絵葉書やリーフレットという媒体で盛んに発信されるようになる。いずれも簡潔で印象的な内容にするため、さまざまな工夫が凝らされる。ここでは、その顔となって発信された「袋」や「表紙」のデザインに着目してみよう。

図 11・図 12 は、戦前・戦後の絵葉書の「袋」を並べたものである。戦前のものは屋島を西の方向からみて、長崎の鼻を入れた特徴あるシルエットで表現するものが多い。それに組み合わせるのは、松と船、高松城、それに源平合戦を象徴する弓、兜、平氏の家紋（蝶）、源氏の家紋（笹竜胆）である。図 11 ①（口絵 5）の『国立公園屋島の絶勝』（I025）の袋裏には、屋島のシルエットと「屋島保勝会、屋島遊覧記念」のスタンプがある。

高松城は、明治初期から改変が進み、城郭建物は老朽化を理由にほとんどが取り壊され、明治 17 年（1884）には天守もなくなった。ここに描かれる城郭風の建物は、わずかに残った月見櫓や艮櫓をデザインして、古城のイメージを挿入している。

戦後になると、過去のモチーフだけにとらわれないデザインが導入される。図 12 ③『やしま』（I073）は、高松観光協会が発行したもので、台形の屋島と寝そべる若い女性の組み合わせである。そこに那須与一の扇の的を立てるという奇抜さで、さすがに源平合戦は根強い。図 12 ⑤『瀬戸内海国立公園屋島パーク』（I079）は、絵葉書がカラー写真の時代となったころのもので、東南方向から塩田の名残りがみえる屋島をとらえている。

図 13 ～図 16 はリーフレットの表紙を並べたものである。絵葉書と同様、屋島のシルエットに松、船、高松城、源平合戦のモチー

フが組み合わされる。

図 13 ①『讃岐名勝案内』（K001）は、金毘羅宮拝観券（明治 40 年 4 月 1 日～ 5 月 21 日）と、「津ヨリ高松ヲ経テ琴平行海陸時間略表」「讃岐物産」が添えられ、裏に型取フレームで、金刀比羅宮・高松築港・栗林公園・源平古戦場屋島・寒霞渓の写真が印刷されている。

図 13 ②（K008）は、昭和 2 年（1927）発行の森田惣吉編『屋島案内』である。森田惣吉は、大正 2 年（1913）に『屋島めぐり』と題する小冊子を編集・執筆した人物で、笹竜胆、蝶、波千鳥、平家蟹を組み合わせるこのリーフレットは、その『屋島めぐり』の裏表紙と共通する。

図 13 ③『国立公園屋島讃岐遊覧案内』（口絵 6）は、屋島の血ノ池茶屋本店森與八が発行したものである。西からみた屋島のシルエットとともに、那須与一と平氏方の扇の的という名場面が大きく描かれる。裏面にあるカラーの大パノラマ図「源平古戦場讃岐名所図会」の欄外には、「屋島山上遊覧道順」として、「１屋島寺　２血ノ池（屋島寺の境内にあり）　３靈厳　４談古嶺」と添えられている。

図 14 ①『観光の屋島』（K007）は、屋島町役場発行で、表に図 12 ①の絵葉書袋とほぼ同じ「屋島保勝会、屋島遊覧記念」のスタンプが押されている。字体は異なるものの、上半分の屋島のシルエット、下半分のカモメが舞う海は同じ図柄で、中央に「昭和 14.10.29」の日付がある。派手さはないが、屋島の地勢、史跡の屋島、風光の屋島、天然記念物の屋島、神社仏閣、製塩業と梶原景山、交通、屋島の土産品といった項目がしっかり記され、地誌的な内容が網羅されている点で貴重である。なお屋島町は昭和 15 年に高松市と合併した。

図 14 ②『屋島遊覧電車御案内』（K013）は、四国水力電気株式会社発行で、志度までの駅名と沿線の名所を案内しているので、表紙のイラストに五剣山が入っている。極彩色の地図には、観光地だけではなく、高松市の市街地や公共施設などがくわしく盛り込まれているので、資料としてもおもしろい。

図 15 ①（K003）は、昭和 5 年に刊行された吉田初三郎鳥瞰図（口絵 2）の表紙「義経弓流の図」である。初三郎はこの「絵に添えて一筆」で、「余の屋島を描く既に三回、而も悉く創業期の作に属す」と述懐している。

図 15 ②（K014）も初三郎の鳥瞰図（本書第 11 章図 5）の表紙で、那須与一を中心として、蝶の切り抜きに屋島と高松城、メクリは青海波と松を散りばめ、鳥瞰図には「大正広重　初三郎画」と添える。発行人は高松市玉藻町の頼富庄蔵である。

図 15 ③『讃岐遊覧御案内』（K016）は、図 15 ②と同じ頼富庄蔵の発行である。高松城、船、カモメといったお決まりのモチーフを組み合わせている。時期は屋島ケーブル開設後で、メクリに栗林公園を覗かせる凝った構図である。南を上にした屋島と金比羅宮を結ぶ沿線の極彩色の鳥瞰図があるのも珍しい。

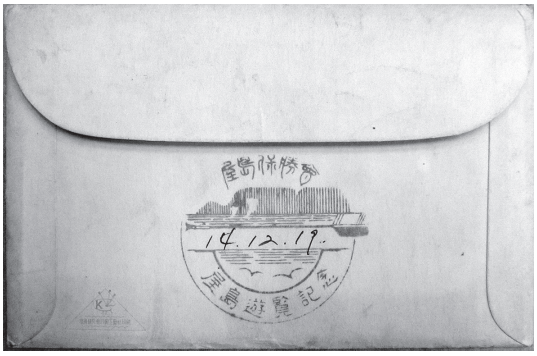
図 15 ④『屋島』（K025）は、那須与一を手前に大きく描き、背景の屋島は東からみたシルエットである。年代はわからないが、地図の横書きタイトルが左から右となっているので、戦後間もないころのものであろう。

図 16 ①『観光さぬき』（K017）は、高松市桟橋町の大川自動車株式会社が発行したバスによる観光案内である。枝ぶりの良い松の間を望遠レンズで屋島を見るようなデザインである。

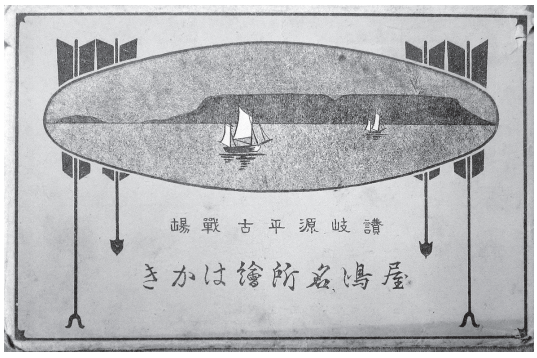
図 16 ②の『国際観光都市高松』（K032）は、高松市役所観光課・高松観光協会・高松市設観光案内所が発行したものである。木々の間から屋島のシルエットを望み、手前にビルや建物が建ち並ぶ現代的な都市像を描いたもので、左端に高松城を入れる。

高松市は昭和 5 年（1930）、全国に先駆けて「勝地紹介係」を設置し、昭和 11 年にこれを「観光課」とした。「高松観光協会」はそれに合わせ、観光課と連携して観光事業の拡大を図るために設立されたものである。

図 16 ③『屋島』（K025）は、高松市屋島中町の屋島登山鉄道が発行した、オールカラーの豪華版である。このころにはカラー写真や合成技術の進歩で、まるでイラストを描くような写真が登場する。屋島を背景にガイドがにこやかに案内するのは、屋島東側の写真と、赤旗・白旗の武者や馬が波しぶきをあげる源平合戦である。



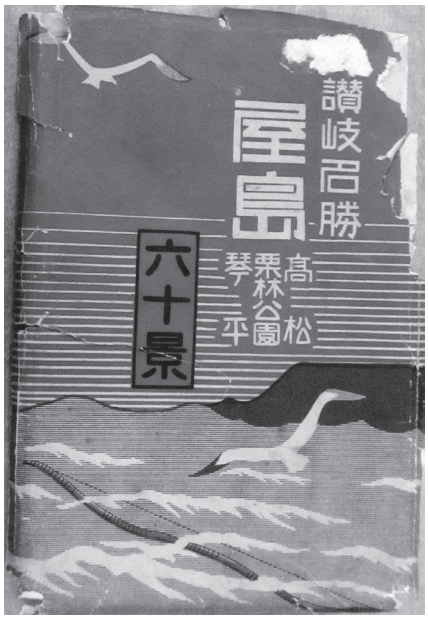
① 『国立公園屋島の絶勝』（I025）
高松市歴史資料館蔵



② 『屋島名所絵はかき』（I006）
高松市歴史資料館蔵

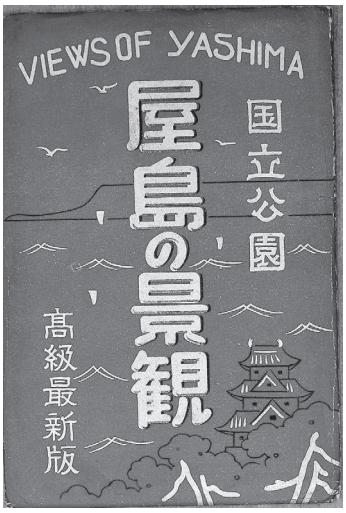
③ 『源平古戦場屋島絵端書』（I067）
高松市歴史資料館蔵

④ 『讃岐源平古戦場　屋島名所絵葉書』（I008）
高松市歴史資料館蔵



⑤ 『讃岐名勝屋島』（I042）
高松市歴史資料館蔵

図 11　絵葉書の表袋（1）



① 『国立公園屋島の景観』（I027）
高松市歴史資料館蔵

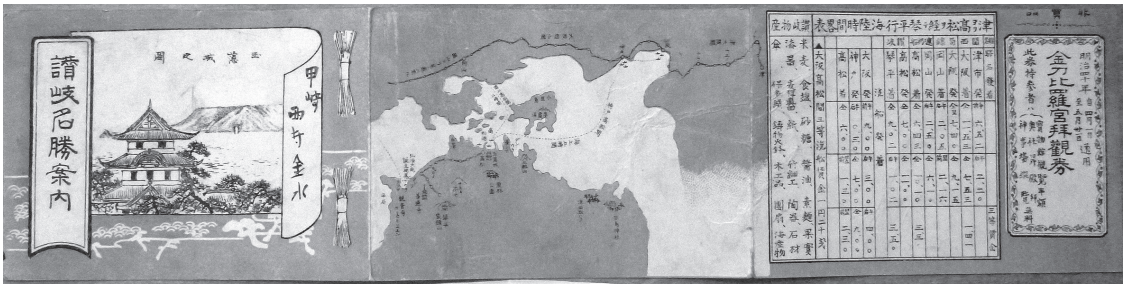
② 『高松名勝絵はかき』（I030）
香川県立ミュージアム蔵

③ 『やしま』（I073）
高松市歴史資料館蔵

④ 『国立公園屋島名勝』（I024）
高松市歴史資料館蔵

⑤ 『瀬戸内海国立公園　屋島パーク』（I079）
高松市歴史資料館蔵

図 12　絵葉書の表袋（2）

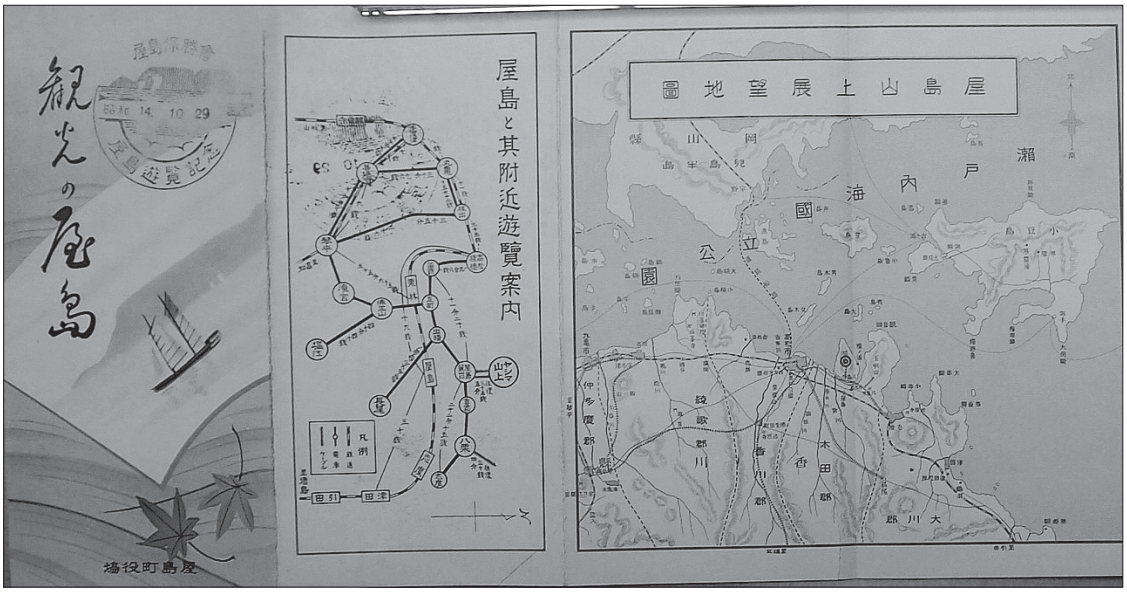


① 『讃岐名勝案内』（K001） 高松市歴史資料館蔵

② 『屋島案内』（K008） 京都府立大学蔵

③ 『国立公園屋島讃岐遊覧案内』
（K021）
高松市歴史資料館蔵

図 13　リーフレットの表紙（1）



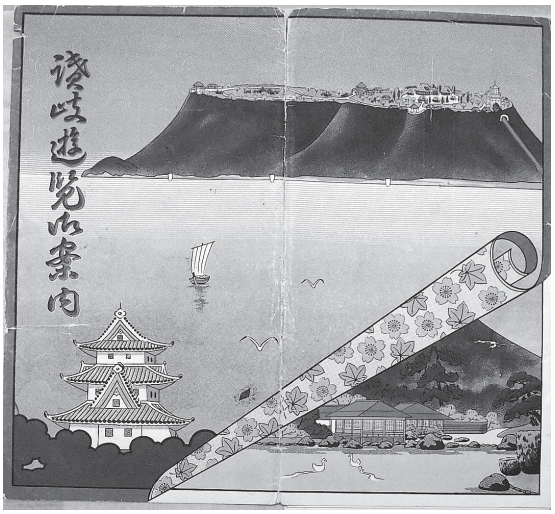
① 『観光の屋島』（K007）部分　香川県立ミュージアム蔵

② 『屋島遊覧電車御案内』（K013）部分　香川県立ミュージアム蔵

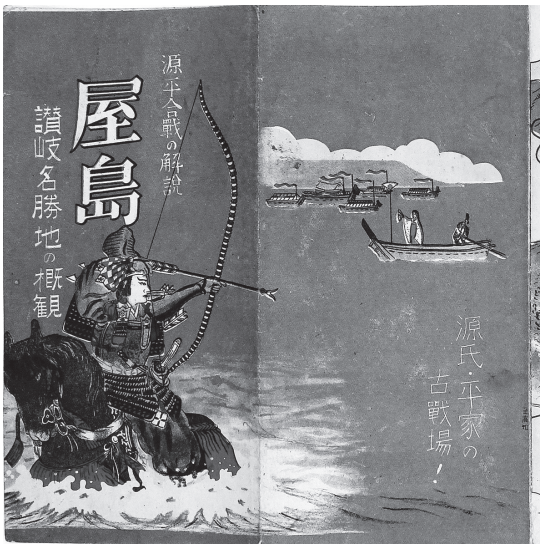
図 14　リーフレットの表紙（2）

① 『香川県名所交通屋島史跡鳥瞰図』（K003）
京都府立大学蔵

② 『史蹟要覧高松屋島琴平御案内』（K014）
京都府立大学蔵

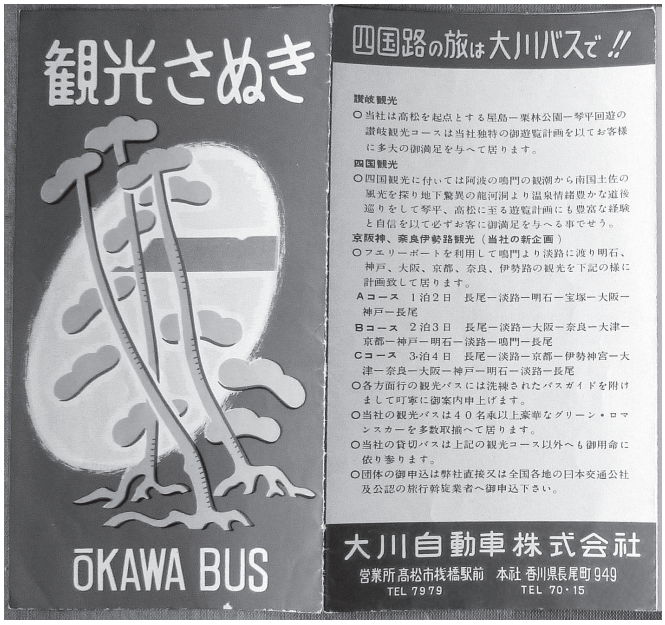


③ 『讃岐遊覧御案内』（K016）
香川県立ミュージアム蔵

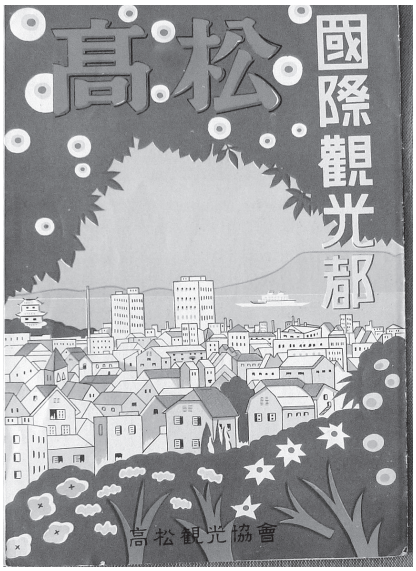


④ 『屋島』（K025）
高松市歴史資料館蔵

図 15　リーフレットの表紙（3）

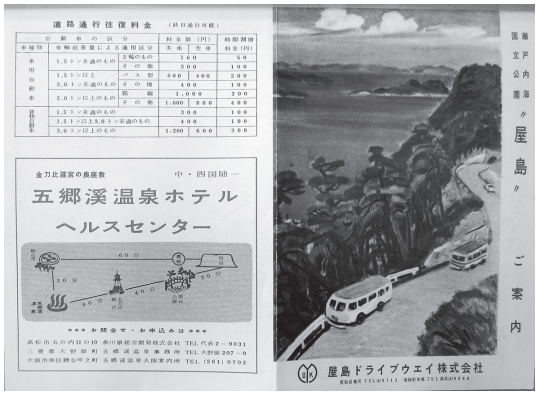


① 『観光さぬき』（K017）
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵



② 『国際観光都市高松』（K032）
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

③ 『屋島』（K025）
高松市歴史資料館蔵



④ 『瀬戸内海国立公園屋島ご案内』（K029）
高松市歴史資料館蔵

図16　リーフレットの表紙（4）

図 16 ④『瀬戸内海国立公園屋島ご案内』（K029）は、昭和 36 年に開通した屋島ドライブウェイ株式会社が発行したものである。内側に印刷した鳥瞰図は、戦後に高松市が制作した屋島山上屏風の構図である。

Ⅲ　変わる時代、重なる名勝

高松の政治・経済・文化の基盤であった高松藩は、明治維新のなかで朝敵とされ、城は開城し、明治 17 年（1884）には天守も取り壊された。このような新しい時代のなかで、名勝屋島の保勝を図り、国立公園指定へ向けた新たな活動が展開していく。モダンな趣向を凝らし、美しくデザインされた絵葉書の袋やリーフレットの表紙からは、その時代の雰囲気と、新しい時代を切り拓こうとする人々の熱気が伝わってくる。

明治 30 年代には屋島保勝会の活動が始まっていたようで、この時期の設立は全国的にも十指に入る早さである。当時の関係者が風致保護や外国人観光客の誘致など、先見性をもって臨んだといわれている。この屋島保勝会は、昭和 14 年（1939）ごろまで活動していたことが、スタンプのある絵葉書やリーフレットの存在から確認できる。

大正 8 年（1919）の史蹟名勝天然紀念物保存法が施行されたころになると、香川県が屋島の公園計画を策定し、高松築港の改修や新桟橋の建設なども行われた（図 17）。大正から昭和初期にかけて、日本各地で産業振興や観光客誘致を目的にした博覧会が開催されるようになり、高松では昭和 3 年、高松港第 3 期工事の竣工と高松市庁舎の落成を記念して、高松市が主催する「全国産業博覧会」が開催された（図 18）。会場となったのは高松城跡。これを契機に屋島を中心とする観光振興に弾みがついた。翌年、「瀬戸内海国立公園期成同盟会」が結成され、熱烈な運動がおこなわれた。そして紆余曲折を経て、昭和 9 年に国立公園第 1 号となり、屋島は史蹟及び天然紀念物として文化財の指定もうけた。

この間の事情は、森裕壱（本名森広一）の『観光回顧三十年』（森 1968）にくわしい。森は全国産業博覧会宣伝部主任、高松市観光課長、高松観光協会常任理事などを歴任した人物である。図 19 は高松観光協会が発行した昭和 12 年創刊の雑誌『観光の高松』（発行者森広一）である。創刊号を飾ったのは、栗林公園の松、高松城、そして屋島とその周辺の島々である。

こののち戦局は厳しくなり、ついに昭和

図 17 「大正 11 年桟橋起工式飾船」（I003）
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

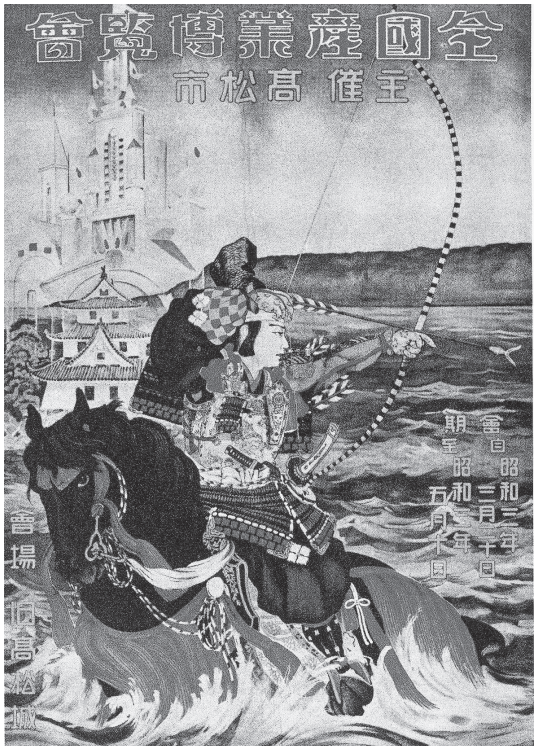


図 18　昭和 3 年「全国産業博覧会」
ポスター（O006）
高松市歴史資料館蔵

図 20　昭和 24 年「観光高松大博覧会」
ポスター（O010）
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

図 19　高松観光協会『観光の高松』（J018）
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

図 21　都市化が進む高松
「高松市遠景」（I081）　個人蔵

20 年 7 月 6 日、高松市街は空襲により焦土と化した。戦後間もない昭和 24 年には「観光高松大博覧会」が開催された。戦災をうけた高松城跡は使えなかったようで、会場は中央グランドと栗林公園となっている。ポスターのモチーフは、昭和 3 年開催の博覧会と同じ、屋島をバックにした那須与一である（図 20）。このあと発行されるリーフレットも、しばらくは屋島のシルエットと松、高松城との組み合わせが引き継がれる。

これら伝統的な松や船のモチーフが消えていくのは、1960 年代の高度経済成長期になってからである。都市開発、海岸の埋め立てなどで（図 21）、人々の記憶からかつての風景が徐々に遠のいていくのを、モチーフの変化から感じることができる。

写真 1 は朝日に浮かび上がる屋島と五剣山である。不思議な形をした山容は、何もなくてもそれだけで美しく神秘的である。屋島は『金毘羅参詣名所図会』や『讃岐国名勝図会』に丹念に描かれているように、一見シンプルな形にみえながら、実は方向によって多彩な表情が現れる。西面は高松城と湊の活気、南面は屋島寺を仰ぐ霊気があり、そして東面の直線的な嶺・険しい山肌と五剣山に囲まれた深い入江は、時を超えて日常から隔絶した伝承と物語の舞台となる。

「今」はむかしとなったにもかかわらず、伝承や物語にたたずむ旅人や遍路、松のまにまに帆かけ船が行き交う青い海と空、そして瀬戸内海と溶け込んだ高松城と湊町の賑わいの残影を、人はその場に立って追想することができる。時代や社会の大きな変化のなかにあっても、「今」この時の新しい「屋島らしさ」を再発見することができるのである。

写真１　海からみた屋島と五剣山
（撮影：百瀬ちどり）

〈主要参考文献〉

白幡洋三郎編 1999『新・瀬戸内海シリーズ２　瀬戸内海の文化と環境』社団法人瀬戸内海環境保全協会

田井静明 2014「香川県の保勝会の国立公園指定運動と瀬戸内観光の特徴」、香川県立東山魁夷せとうち美術館『瀬戸内海国立公園指定80周年記念事業　美しき日本瀬戸内の風景』

高松市 2014『史跡　高松城跡』高松市

高松市歴史資料館 1993『高松市歴史資料館常設展示図録』高松市歴史資料館

高松市歴史資料館 2014『史跡・天然記念物屋島指定80周年記念企画展　屋島―シンボリックな大地に刻まれた歴史―』高松市歴史資料館

橋爪紳也 2014『瀬戸内海モダニズム周遊』芸術新聞社

森裕壱 1968『観光回顧三十年　観光一筋の道標』森観光事業研究所

屋島風土記編纂委員会編 2010『屋島風土記』屋島文化協会

（担当：百瀬ちどり）

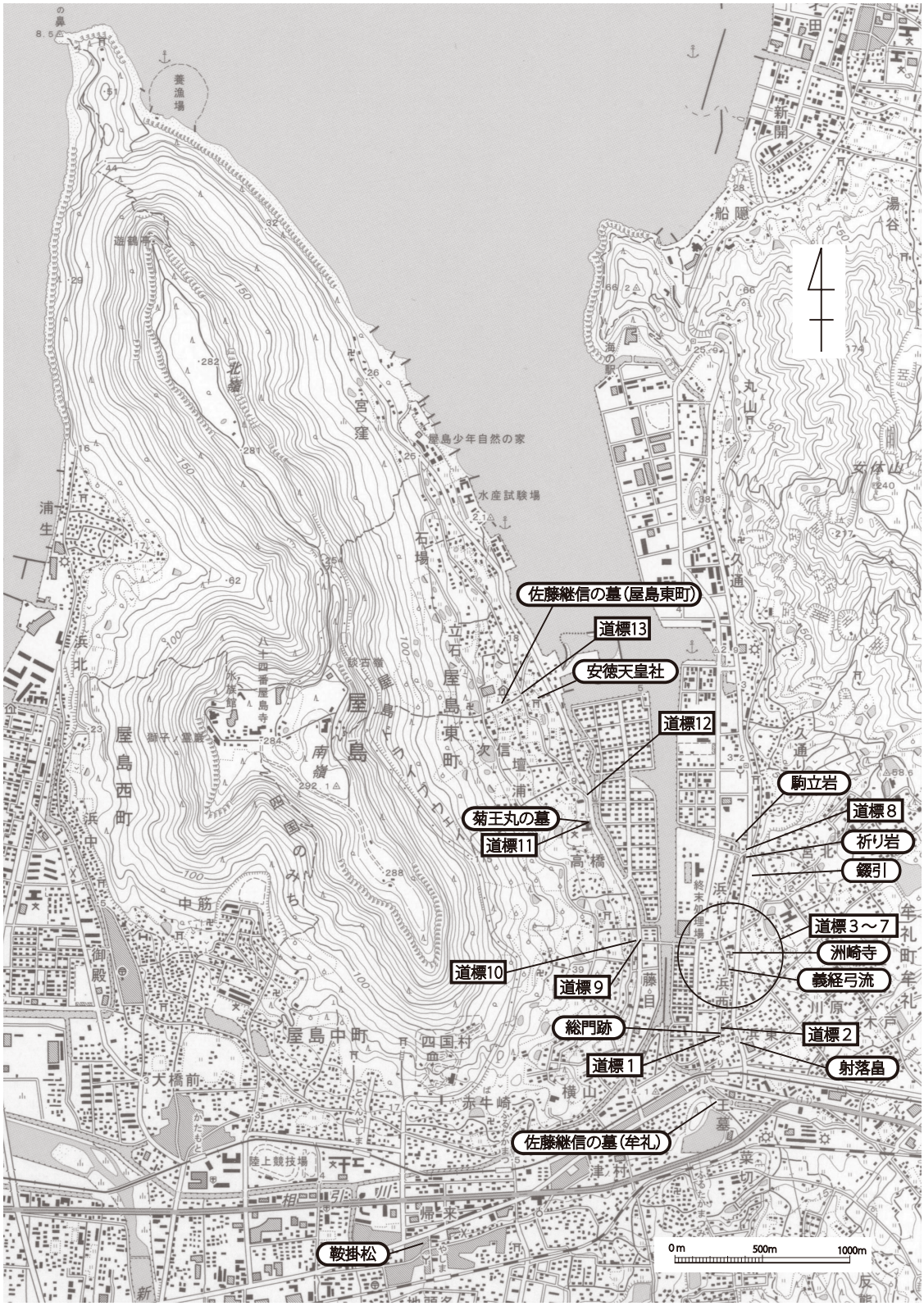
14　屋島合戦跡の石造物

元暦 2 年（1185）2 月におこったいわゆる屋島合戦については、文芸作品を通じて、その後、人口に広く膾炙するところとなった。それは、史実そのものというよりも、源義経や那須与一、佐藤継信といった者たちの誇張されたエピソードに焦点があてられた物語であり、だからこそ、人々の中にさまざまな思いを想起させるものとなった。そして、それは現地に赴いてみようという思いにつながったり、またその地を記念しようという行為にもつながっていったのである。そこに現れた屋島は、過去のイメージと密接に結びついたものであり、「名所」の成り立ちを典型的に示すものであった。

ここでは、2015 年 8・9 月の 4 日間に実施した屋島合戦跡地の現地調査にもとづき、現地に建立された石造物について報告する。それは、現地に置かれた石造物が名所の形成や維持に大きな役割を果たしていると考えられるからである。実際、江戸時代の資料のなかには、合戦跡に立っている石造物について言及するものもあり、当地を訪れた人々の印象に刻まれたことが分かる。

調査の関係上、今回は石造物に刻まれた碑文の翻刻に主眼を置くことにし、石造物本体の大きさや材質については割愛することにした。また、碑文のない石造物については、今回、調査対象外としている。なお、写真は調査者たちの撮影である。

調査風景


佐藤継信の墓（屋島東町）
道標13
安徳天皇社
道標12
駒立岩
菊王丸の墓
道標11
道標8
祈り岩
錣引
道標３～７
洲崎寺
義経弓流
道標10
道標９
総門跡
道標２
道標１
射落畠
佐藤継信の墓（牟礼）
鞍掛松
0m
500m
1000m

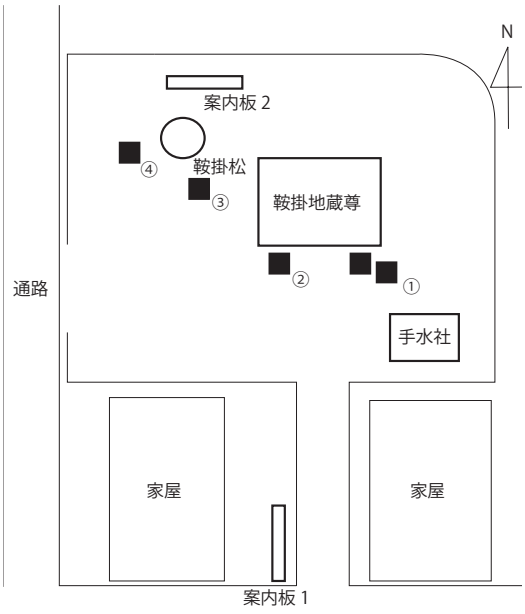
調査地一覧

鞍掛松

概要

所在地は高松市高松町。寿永 4 年（1185）に平家追討の命を受けた源義経は阿波国勝浦（徳島県小松島市）から大坂峠を越えて讃岐に入った。現在の鞍掛松の地は、その際に義経が松に鞍をかけて休息したといわれている。なお、この鞍掛松前の広場の中央には「鞍掛松地蔵尊」という地蔵堂がある。（担当：稲穂将士）

配置と碑文



千代かけて
今にのこれる
　鞍掛の松
　「木田郡誌より」
　二〇〇三年三月建立

石造物①

石造物②

①［正面］
　明治廿三年
　　三月
　心洗
　　東潟元
　　願主横平

②［正面］
　三ツ池
　　日下［　　］

③［正面］
　義経鞍掛松
〔背面〕
　香川県国立公園協会

④［正面］
　勇将の
その名と共に

石造物③

石造物④

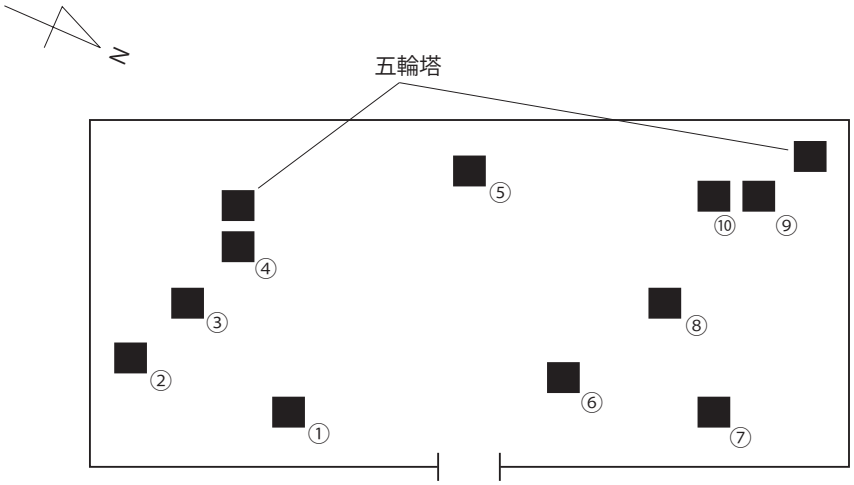
佐藤継信の墓（牟礼）

概要

所在地は牟礼町牟礼。源平合戦の際に、義経の身代わりとなり戦死した佐藤継信の墓である。寛永 20 年（1643）に初代高松藩主である松平頼重が新しく標石を建てた。その後、昭和6年（1931）5 月に継信三十世の孫である佐藤信古がこの墓地に大改修を加えた。この時に燈籠一対などが立てられている。

また、墓域内の右奥に太夫黒の墓がある。太夫黒は義経が後白河法皇から賜った馬であり、太夫黒が倒れたのちに、ここに埋めたといわれている。（担当：井上真美）

配置と碑文



道路

①
［正面］燈籠一對
　　嗣信三十世孫
　　佐藤信古建
　　昭和九年五月
［左側面］木村嘉市刻

石造物①

石造物②

②
［正面］奉燈
［右側面］本縣小豆郡豊吉
　　工事設計請負木村嘉一
［背面］昭和六年五月建

③
［正面上部］佐藤継信墓道碑
［正面］　佐藤継信墓道碑　　従四位勲四等香川縣知事林董撰幷書

神櫛廟之下堺古樹者為佐藤三郎継信君墓地在讃州三木郡牟禮里大夫黒之冢隣馬行人過謁墓皆」為流涙世傳以為南海墮涙碑按史治承四年八月源二位頼朝起兵伊豆尋入下總庶弟五位義経時在陸奥依」藤原秀衡乃潜出平泉館赴而應之秀衡遣君與弟四郎君諱忠信追而従之君兄弟秀衡外族也遂俱事五位與」鎌田盛政光政並稱四天王屋島之役平教経勁弓長箭連擬五位麾下騎士□屏當焉教経射斃十餘人君暨光」政亦中其矢四郎君扶君歸營五位監而視之加首於膝問所欲言君曰至自出陸奥委身於公今日代公而死則」垂名于竹帛亦可謂榮矣但憾不賭公殄滅世讐耳言畢而絶年二十八實文治元年二月也五位痛惜不能措講」志度寺僧覺阿厚葬君暨光政於牟禮林中飾所愛駿馬大夫黒以為賻秀衡所嘗驌也董以明治二十一年十二」月知事香川縣事越三月禴于家廟始行香君墓墓石高五尺有奇題曰佐藤嗣信之墓寛永二十年五月高松城主」讃岐守松平頼重公所重修云屋島八栗二山之間海陸數里源平二氏當所相攻戦而二氏興亡之機一繫于是」役則平氏顕貴為其主狗難者盖亦多矣而七百載之下古墳纍々其人不可復辨焉君乃源氏一臣隷耳而名與」兆域永不相堕俾後人敬之如生餘愛猶及所賻之馬表其死所以傳胡然乎我竊知其所由来矣五位之逃京師」匿吉野山也山僧攻之事急将自盡四郎君曰臣兄継信代公而死今日臣亦當代公而死五位不許固請而聽乃」易甲而擐射戦禦敵以脱五位時文治元年十一月也明年入京師潜索五位所在九月糟谷有季以兵圍其舎四」郎君與従士二人俱力力闘而死年二十六君之父諱元治為信夫荘司文治五年七月二位撃陸奥藤原秀衡以其」舎五位也荘司君與叔父河邊高経暨伊賀良目重高拒伊達郡石那阪為藤原為宗所襲而敗遂親信十八人」冒陣而没且夫源氏家世宣力王室積攻伐之勞固非一日也而一旦與平氏構難父子相繼僇死廟鬼殆将不血」食天報施之倒若是其惨也則人心之閔之亦有甚焉當是之時五位自任興復之責西殲平氏於檀浦俾二位得」坐成其志然而有功不録訴寃不諒遂誅夷子衣川古今皆深為五位傷焉呂尚父有言曰愛其人者兼其屋之烏」況君則五位之所最親愛而闔門前後皆為五位効節之烈乎哉是其義之感人心獨所以深且遠也耳先是邑人」相謀将勒石墓側以詳君之事至是囑董撰之記盖以董係君之裔也抑平氏家亦世承将卒之任與源氏並護王」室而至于清盛勃興至太政大臣乃檀張威福脅持上下者二十餘年以私榮於一門神人所厭棄抔土未乾而子」孫殄夷覆滅之跡人莫肯弔者可不哀哉烏虐人臣而欲負其君者苟有監於君墓則亦将知所懼」

明治二十二年三月

［背面］　柴野新八

發　岡坂政五郎

起　山田徳三郎

人　谷本亮太

小西祁作次

石工

和泉百造

石造物③

石造物④

石造物⑤

④
［正面］佐藤次信墓
［背面］寛永癸未仲夏　上浣建之

⑤
［正面上部］佐藤氏念祖碑
［正面］佐藤氏念祖碑　正二位勲一等公爵　徳川家達篆額
皇朝国体尊厳人民忠義自古勤王死節者不可勝数然天運循環治有淑否道有顕晦故王化衰而覇政興覇政廃而皇権復王覇興衰之間往々有昏迷失操守者惟豪傑卓異之士処変秉宜移忠所事而存先王遺風乎千載之下以及皇権之復使世有所感奮興起焉加佐藤兵衛尉豈非其人邪宜哉天之降鑑永祚其胤以有今日也君諱嗣信其系出自鎮守府将軍藤原秀郷秀郷裔基治以佐藤氏焉為陸奥信夫荘司娶其族清綱女於押領使秀衡為従姑生二子長即君也荘司智略通兵法君與弟忠信皆驍勇善騎射源義経至陸奥倚秀衡荘司聞而見之深相結納迨其赴援于兄頼朝軍意欲偕行以疾辞薦二氏代己臨発誡曰汝委質郎君之死靡也僉対曰謹奉教義経亦信任之其在京師與故将鎌田政家子盛政光政並奏為兵衛尉称四天王屋島之役敵将平教経請與義経挑戦義経欲聴之教経素以善射聞君諫曰教経偏裨耳非大将敵也且彼巧詐恐有変臣請代而行乃佯称義経馳進矢中其胸而墜教経従者進欲斫之忠信而仆之扶負帰営義経泫然枕首于膝問所欲言時君気息幾絶聞其声張目曰臣奉父命事君今代君而死復何憾所憾者未見君亡敵耳終不起実後鳥羽帝元暦二年二月十九日年二十八後二年忠信亦為義経死難于京師義経連喪兄弟悼惜不已其避頼朝而再至陸奥也首訪佐藤氏弔慰家人為修冥福于平泉中尊寺又築塚于其香火院祭之今飯阪医王寺両碑即是兄弟妻亦孝貞善事舅姑義経之来姑追思二子不禁遂寝疾二婦胥謀佯為雄装擐甲執薙刀夜見姑曰願安之二児凱旋在此姑大喜疾稍愈今磐城斎川甲冑堂像即是頼朝之平奥羽荘司年七十輔秀衡子泰衡奮戦而死頼朝欲夷其族然以州人欽尚佐藤氏恐民心不服特命君遺孤祐信承祖仍食旧邑其後転徙者再至九世正信後亀山帝天授中徙出羽中山城子正利応永中兵乱失邑卒匿于農居庄内餅山正利十一世孫彦十郎移宮曽根墾

其地家富而望隆光格帝時有益信者為君二十七世孫好学能和歌陰有勤王志曽孫信古明治朝選為衆議院議員今為貴族院議員益信又有外従清河正明世與佐藤氏為昏媾幼而従益信恒聴君屋島戦状以自励孝明帝時以敵愾著死于国事識者以為有所承也頃者信古以譜乗来東京告曰遠祖墓地遐路阻久曠掃展走将往而修之敢以銘請嗚呼予讃人也曩屢過君墓下見阡道荒廃不治心竊哀之今者接其子孫儼存屹為故国望微其請固将録而伝之按譜乗君為義経死傾慮尽力以身代難不唯止于一時遇合感激意気寔奉父命然也是其忠孝智勇操之卓決非尋常武夫所企及惜乎史伝闕而不載雖載亦失事実世寡和者於是拠焉而敘述之且為溯沿前後徴其源流所由如此君墓本在屋島東南武例林中乃義経所葬也但年久傾壊地又僻鄙人跡罕至正保中高松藩主松平英公為移今処建石表之信古既修道阡買傍民家拡壖垣置掌墓可謂念祖聿修其庶幾者也歟乃系之以銘曰

山岳可崩　河海可填　惟道不変　忠孝万年　無謂時異　無謂事遷　秉彝好徳　乃見斯賢　屋山之麓　讃海之浜　鬱々佳域　久而益堅　誰修之者　自汝裔孫　銘以告世　忠孝万年

昭和六年五月　　讃岐　牧野　謙撰
羽前　宮島大八書
三十世孫　信古謹建

⑥

［正面］佐藤兵衛尉嗣信之墓
［背面］昭和六年七月　三十世孫佐藤信古謹建
［左側面］木村嘉市刻

石造物⑥

⑦

［正面］燈籠一對
嗣信三十世孫
佐藤信古建
昭和九年五月
［左側面］木村嘉市刻

石造物⑦

⑧

［正面］鎌田兵衛尉疑塚碑

源廷尉義經有四臣曰鎌田盛政光政曰佐藤嗣信忠信皆各兄弟也以勇武聞廷尉竝奏爲兵衛尉稱四天王元暦之役從攻平氏于屋島光政與嗣信同日戰死廷尉悼惜俱厚禮葬諸武例林中後正保中高松藩改葬嗣信表之光政則墳塋泯然至今無恤嗚呼均是忠也爲其主死而後世顯晦之殊如是何歟今茲佐藤氏裔信古修其祖墓阡聞而悲惋欲索而表之搜訪累月不獲也會見有二石塔竝立阡上相距十餘弓其一有墓後其一少屏而左有老松其大蔽牛當前不見就而諦視則其形相同皆爲五層崇五尺許圍稱之蒼苔蒙被大抵爲數百年外物信古以爲形色之同吾所索者無乃是耶疑以傳疑待于後人不亦可手於是請予文以問世蓋兩墓改葬時亦俱移之第嗣信代廷尉死後世喧稱光政史載有缺人或不知是其所以致顯晦之殊也耳予既哀光政之不幸又喜信古之高誼也乃爲叙其梗概俾刻于石以待後之君子考覈而定之

昭和六年五月
讃岐　　牧野　謙撰
讃岐　　入谷　暘書
羽前　　佐藤信古建
木村嘉市鐫

⑨
［正面］大夫黒馬埋處
［背面］寛永癸未仲夏上浣建之

⑩
［正面］大夫黒供養之碑
［背面］　　謹書千厩長藤野光男
　　出生地岩手県千厩町
昭和六十三年十月十九日建立　千厩農協墓参田
　　石材千厩産加工佐々木章

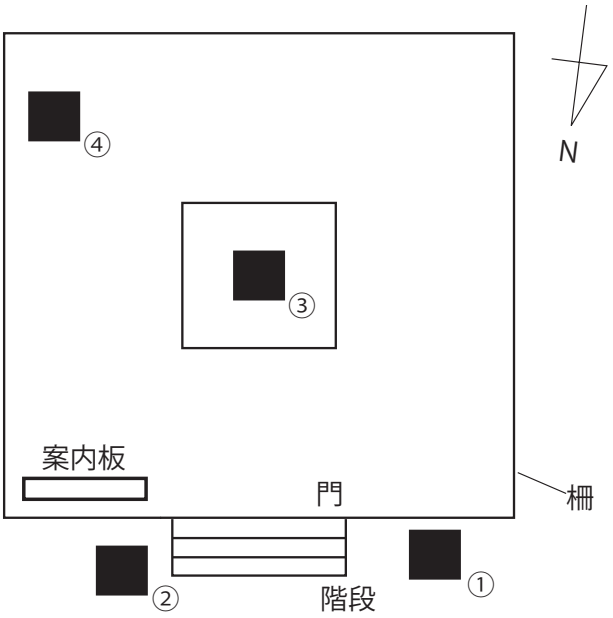
石造物⑨（右）・石造物⑩（左）

射落畠

概要

所在地は高松市牟礼町牟礼浜西。寿永 4 年（1185）2 月 19 日に源氏の武将である佐藤継信が源義経の身代わりとなり、平家の武将平教経に射落とされ、戦死したとされる場所。昭和 6 年（1931）におこなわれた継信墓の大修築と共に「射落畠碑」と、「遠祖君乗馬薄墨碑」が建立された。（担当：稲穂将士）

配置と碑文



①

［正面］佐藤継信顕彰碑

この地は源義経の四天王の一人佐藤継信戦死の場所である 継信は鎮守府将軍藤原秀郷の後裔にして藤原秀衡に従う 継信は若くして智略兵法に通じ 豪勇の名を知られる 源義経陸奥に来て秀衡の批（ママ）護をうけ後頼朝挙兵を援けるため都に上るに際し 父の命により継信 忠信の兄弟もこれに従う 連戦して平家を追い屋島壇ノ浦にいたり 敵将平教経の挑戦をうけ 義経の身代わりとして戦死 時に年二十八才

継信は みちのくいで湯の里飯坂大鳥城の出身であり 源平八〇〇年祭と当クラブ結成二十周年を記念してこの碑を建立するものである

昭和六十年四月十八日

（ライオンズクラブ団体章）福島飯坂ライオンズクラブ

②

［正面］

牟礼町指定文化財〔史跡〕

源平屋島合戦古戦場

［右側面］

（牟礼町章）牟礼町

［左側面］

〈歴史をめくる／散歩道〉（牟礼町章）牟礼町

③
［表面］
〈佐藤兵衛尉／嗣信戦死処〉 射落畠碑
［左側面］
木村嘉市刻
［背面］
射落畠碑
是為遠祖兵衛尉君戦死処其死也元暦之役代源延尉戦中矢落馬事詳国史其処也本瀬海後世墾為田園俗謂」之射落畠今茲信古修祖塋因購焉而建表又繞以蓮池為界池凡一百二十五坪謹紀弗諼也
昭和六年五月　　三十世孫羽前佐藤信古謹撰

④
［正面］
遠祖君乗馬薄墨碑
曩訪遠祖君戦跡之時鑿地獲馬骨而其歯八倶存焉験之大抵六七百年者物按家乗遠祖君所常騎名薄墨宇治一谷屋島諸役皆従之遂與君拝命当時戦中未及收瘞蓋即是也嗚呼馬之死也古有弊帷裹尸之恤此在通常尚然矣況其與人一心成大功者哉又況其従我祖宗而同死生者哉予安得不惻然乃為改葬而表之云
昭和六年五月
羽前　佐藤信古撰
木村嘉市鐫

石造物①

石造物②

石造物③

石造物④

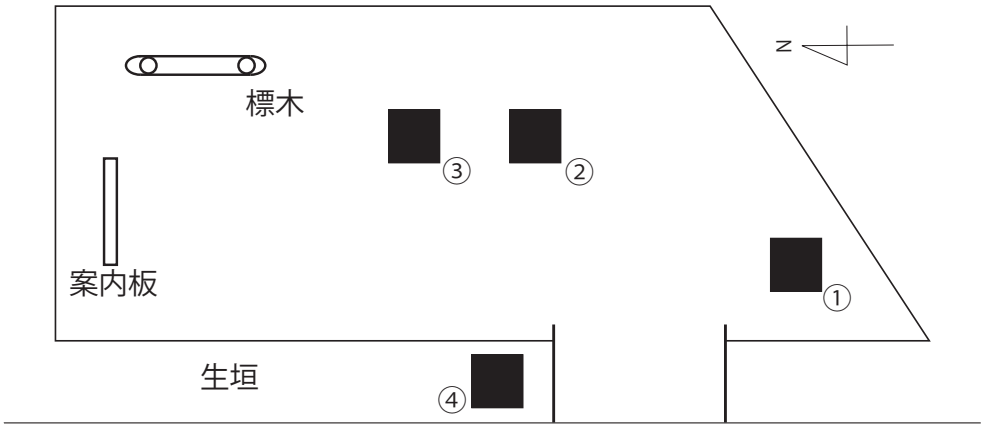
総門跡

概説

所在地は高松市牟礼町牟礼。寿永２年（1183）９月、平氏が門を構えて、海辺の防衛に備えた、その遺構である。

当時この付近は海浜であったようであり、門を作り源氏軍に対する防衛地点としたようである。現地案内板によると、史跡内の標木は高松藩主松平頼重の建てたものである。（担当：棟田成紹）

配置と碑文



道路

①総門碑

［表］

源平合戦總門碑

源平合戦總門碑記

是為　安徳天皇六萬寺行宮北柵門遺跡里人相傳稱曰總門因又名其里也按壽永二年九月平氏奉　天皇于讃岐以牟禮六萬寺為　行宮（據六萬／寺縁起）文治元年二月二十日源義経来襲　行宮縦火於牟禮高松平氏大驚擧族艤舟于總門渚而避既而知源軍寡單返棹迫門海陸交射日暝交綏義経（雨冠に呉）平軍夜襲籌于門者徹明平軍謀夜襲不果翌日平軍奪門而上不利乃奉　御舩于志度遂遷西海云（據源平／盛衰記）予聲門舊瀕海湊可知也而今厪存遺構于田里雞犬之間滄桑之變可驚也乃恐歴年益久口碑亦泯史蹟竟至無可徵焉故里人之乞記也不辞而識之又表出村畔地名係戰蹟者并諗諸来者云

安徳天皇六萬寺行宮遺蹟　　東南　十三町
佐藤嗣信墓及名馬大夫驅家　　正南　二　町
那須宗高射扇處祈石及駒立石　距門　正北　五　町
雨龍岡　源義経陣趾　　東南　四　町
洲崎　洲崎堂今稱洲崎寺　　正北　二　町

明治三十有六年龍集癸卯三月初一日

陸軍大将従二位勲一等功二級伯爵野津道貫　題額

高松　欣堂小史黒木安雄撰并書

［裏］
明治卅六年三月着手
明治卅八年三月竣工
牟礼保勝會建之
義捐土地者坪井太吉
石工和泉喜代次

②
［表］
夏草や
ここにもひとつ
髑髏
不如帰庵不如帰
［裏］
蕉風会々員建之
山田柳隣
岡阪里松
大高春峰
中村梨軒
間島翠流
岡内竒方
井上羽谷
淺田可笑
林　冠岳
槙塚相潮
坪井美城波
伏見□風
岡阪里郎
伏見柳里
明治四十二年三月

③
［表］
お遍路の
行きつつ
髪を
束ねけり
五峰
［裏］
句碑建之
昭和四十三年一月吉日
原石寄附者　漆原栄三郎
三好利三郎
発起人　坪井一枚
斉木孝子
中尾とみえ
世話人　夏目麦良
國方きいち
稲垣黄雨
藤井白汀
東石秋草
坪井金子
井上美子
後援　牟礼閑週句会
紫苑発行所
屋島発行所

④
［正面］
牟礼町指定文化財〔史跡〕
源平屋島合戦古戦場
［右側面］
（牟礼町章）牟礼町
［左側面］
〈歴史をめくる／散歩道〉（牟礼町章）牟礼町

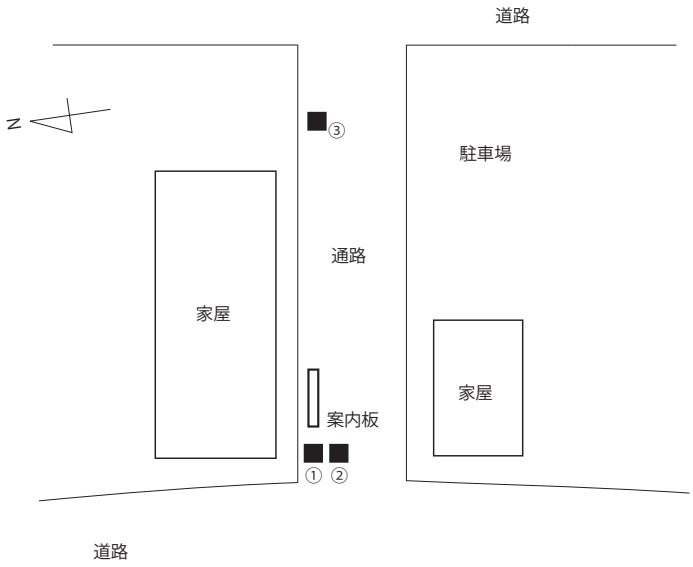
総門跡全体

義経弓流

概要

所在地は牟礼町牟礼。義経弓流とは「平家物語」で描かれる屋島合戦において挿入される逸話である。源義経が海上で戦ううちに、弓を落としてしまう。義経はこれを平家方にとられまいと落とした弓を鞭で掻き寄せて引き揚げたという。平家方に拾われることで、「義経の弓は弱い弓」と笑い物になるのを恐れたとされる。（担当：川口成人）

配置と碑文



①
［正面］
義経弓流シ
［左側面］
香川県国立公園協会

②
［正面］
牟礼町指定文化財〔史跡〕
源平屋島合戦古戦場
［右側面］
牟礼町
［左側面］
〈歴史をめくる／散歩道〉（牟礼町章）
牟礼町

③
［正面］
源平合戦史跡
祈り岩　五〇〇米
駒立岩　五〇〇米
［左側面］
源平合戦史跡
義経弓流し跡　四〇米
［後面］
源平屋島合戦八〇〇年祭
準備実行委員会
昭和五十六年三月建立

石造物①（左）・石造物②（右）

洲崎寺

概要

洲崎寺は高松市牟礼に位置する高野山真言宗の寺院である。大同年間に空海により創建されたとされる。源平合戦や長宗我部氏の侵攻などの戦火を受けるも、元禄 12 年（1699）に再建され現在に至る。源平合戦の際、焼け落ちた本堂の扉に佐藤継信の遺体を乗せて運んだという伝承が残り、継信の菩提寺とされる。境内には「四国遍路の父」と呼ばれる江戸時代の僧、真念の墓がある。讃岐三十三観音霊場第二番である。

現地の状況

寺域は塀で囲まれ、南側に出入口が 2 箇所ある。東側の出入口から境内に入ると左手に石造観音菩薩坐像、右手に寺の概要についての説明板が設置されている。説明板の裏には大型の五輪塔がある。また出入口前には「歴史をめくる散歩道　源平屋島合戦古戦場」の石柱があり、写し絵ラリーのチェックポイントになっている。

境内の東側に大型の建築物を含む多数の建築物が配置され、前方には屋島の戦いをイメージした庭がある。庭の向かいに塀には源平合戦屋島・檀ノ浦の戦いの解説やエピソードを紹介した説明板が設置される。説明板は西から「源平合戦屋島・檀ノ浦の戦い」、「合戦のあらまし」、「源平屋島合戦絵図」、「佐藤継信の討死」、「那須与一扇の的」、「景清の錣引き」、「義経の弓流し」。

境内の西側には本堂など小型の建築物が配置される。境内の北西隅は塀によって区画され、内部は墓地になっている。本堂の前方には一組の石燈籠が設置され、右前方には香川の保存木であるイチョウが生えている。イチョウの近くに保存木であることを示す石柱も設置されている。本堂西側の堂の前方は石燈籠が 3 基、石柱が 1 組設置される。石燈籠は碑文から寛文 5 年～ 12 年（1665-1672）に建てられたものであることが分かる。石柱には「鳴鳳在樹　白駒食場」と彫られている。また本堂の南側には鐘楼がある。鐘楼の南西には道標があり下半部が埋まっているものの、八栗の文字が読み取れる。

境内西側の塀に沿って北から南へ、真念墓、石造地蔵菩薩立像、石造僧形坐像が並ぶ。真念の墓には説明板が設置されており、墓石を囲う玉垣には真念の業績と四国八十八霊場の全てが刻まれている。石造地蔵菩薩立像は碑文から建立が寛政 9 年（1797）であることが分かる。前方には小型の銅製の地蔵菩薩立像がある。

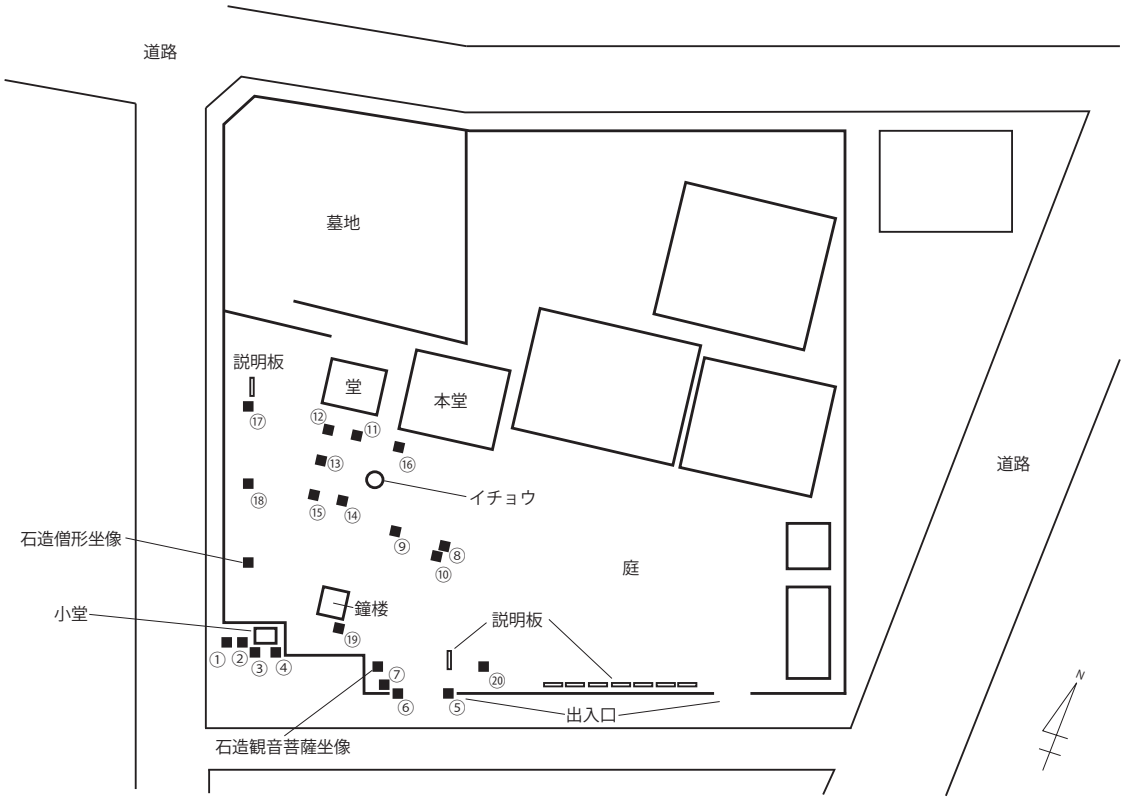
寺域を囲む塀の南西の角は一段内側に凹んでおり塀の外側に、開明小学校跡石碑と洲崎堂と書かれた石柱、小堂が配置されている。小堂には石仏が安置される。また小堂の前には庵治・牟礼二十四輩霊場の第十八番であること示す石碑や彌陀如来と彫られた石碑がある。

（担当：川崎雄一郎）

石造物①

石造物②

配置と碑文



①開明小学校跡
［正面］　開明小学校跡
［背面］　村制百周年記念　牟礼町
　　平成二年四月吉日建之

②洲崎堂石碑
［正面］　源平合戦古跡　洲崎堂
［右側面］　弘法大師御下
　　本尊観世音大士
　　納経所
［背面］　　旹
　　天保六未星　仲春吉良日
　　紫野千代助建立之

③庵治・牟礼二十四輩霊場石碑
※小堂の右前方に設置される。
［正面］　輩　第十八番

④彌陀如来石碑
［正面］　彌陀如来

⑤門柱（東）
［正面］　高野山真言宗洲崎寺
［背面］　髙野山真言宗管長大僧正龍
　　瑞書

石造物③

石造物④

石造物⑨

石造物⑧

⑥門柱（西）
［背面］　昭和四十年春日建之現住俊慧代
施工者牟礼町久通り
有限會社伏見石材工業所
代表者伏見新吉

⑦塀裏石銘板
［正面］　昭和五十九年八月吉日
寄贈　山田松繁
山田　明
山田　要

⑧本堂前石燈籠（1）
［正面］　常夜燈
［左側面］　六月吉祥日
［右側面］　文化五戊辰
［背面］　具一切功徳
慈照視衆生

石造物⑫

石造物⑪

⑨本堂前石燈籠（2）
［正面］　常夜燈
［左側面］　六月吉祥日
［右側面］　文化五戊辰
［背面］　福聚海無量
是故應頂禮

⑩本堂前石灯籠前石碑
［正面］　平成二年吉日
西国第五番
天野義元

石造物⑬

⑪西側堂前石燈籠（1）
［正面］　奉燈
［左側面］　九月吉良日
［右側面］　寛政九巳年

⑫西側堂前石燈籠（2）
［正面］　奉燈
［左側面］　寛政十二年申歳
［右側面］　九月吉良日

⑬西側堂前石燈籠（3）
［正面］　奉燈
［左側面］　十月吉良日
［右側面］　寛政五丑年

［背面］　現主
　　中村武雄

⑭西側堂前石柱（1）
［正面］　鳴鳳在樹
［背面］　十月吉日謹立　南濱古濱氏
　　子中

⑮西側堂前石柱（2）
［正面］　白駒食場
［背面］　昭和八癸酉年

石造物⑮

石造物⑭

⑯香川の保存木石柱
［正面］　香川の保存木　香川県
［右側面］　洲崎寺のイチョウ
［背面］　第十九号　昭和五十三年指
　　定

⑰真念墓
［正面］　大□祢眞念□□□

石造物⑰

⑱石造地蔵菩薩立像基礎
［正面］　寛政九巳歳十二吉日
［左側面］　山田善蔵

⑲鐘楼南道標
〔正面〕　八栗□
　　是ヨリ十八□

⑳五輪塔
［正面］　（梵字6字）奉修加持土砂秘
　　法為法界整霊追資
［左側面］　（梵字4字）六大無（得）常
　　（瑜）四種曼（荼）（后）
［右側面］　（梵字5字）三密加持速疾顕
　　重々帝（網）（后）（即）身
［背面］　（梵字13字）施主敬白
※（ ）内は異体字

石造物⑲

錣引

概説

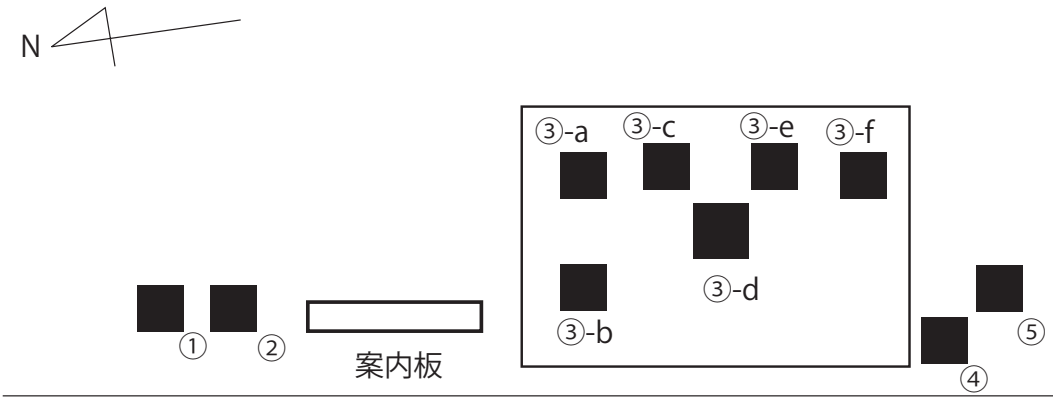
牟礼町牟礼に所在し、駒立岩から南東方向へ徒歩で約 150m 離れた県道 36 号東側に、伝承について示した一画が位置する。この場所に高松市教育委員会が設置した案内板には、太刀を折られ敗走する源氏方の美尾屋十郎の兜を，平家方の悪七郎兵衛景清が熊手で引っ掛け，兜の錣を引きちぎったとされる錣引伝承の解説が記されている。

同地には向かって左（北）から、石製の標柱（①）、灯籠を模した石造物（②）、案内板を挟んで祠（③）が並び、その右（南）側には、石積みの祠の基礎に立て掛けられた石柱（④）とその横に直立する別の石柱（⑤）が確認できた。④を除き、これらのものはいずれも西面し県道側を向いている。

祠は、内側向かって左側壁面の記載から、平成 17 年（2005）の再建と知られる。祠の左側支柱の銘にある通り、内部には 18 世紀の年代をもつ地蔵が祀られている。また、同じく祀られている観音は、西国三十三所の遷し霊場の信仰対象となっている。祠を管理している住民によれば、地蔵は県道拡張に際し、祈り岩の東向い周辺にあったものを集めて祀ったものである。

献花や清掃などの手入れがされている様子が確認でき、この場所が現在も信仰に関わる場所とされていることがわかる。（担当：島本多敬）

配置と碑文



県道 36 号

全体写真

① 石柱
［正面（西）］
牟礼町指定文化財［史跡］
源平屋島合戦古戦場
［左側面］
〈歴史をめくる／散歩道〉（牟礼町章）牟礼町
［右側面］
（牟礼町章）牟礼町

③ 祠
［正面（西）右側支柱］
第六番〈庵礼西国三十三観音十一面千手千眼観自在菩薩〉

［正面左側支柱］
右地蔵菩薩 明和三丙戌九月二十四日
左地蔵菩薩 享保十四酉正月廿四日
右やくり道
［祠内側左壁面］
平成十七年五月吉日
再建 谷本英雄

a地蔵板碑
［正面（西）］
享保十四酉正月廿四日
やくり
右 へんろ道

c板碑
［正面（西）］
［ ］
［ ］童子

d観音板碑
［正面（西）］
千手観音 （千手観音像） 屋嶋寺〔右から横書き〕
［正面台座部］
谷本フサ

f地蔵板碑
［正面（西）］
明和三丙戌年
九月二十四日

④ 石板
［表］
平成二年吉日
西国第六番
［裏］ハサマ 矢野

⑤ 石柱
［正面（西）］
〈庵治／西国〉 六番札所」施主谷本家

祠（③）

石造物③ - a

石造物③ - c

石造物③ - d

石造物③ - f

祈り岩

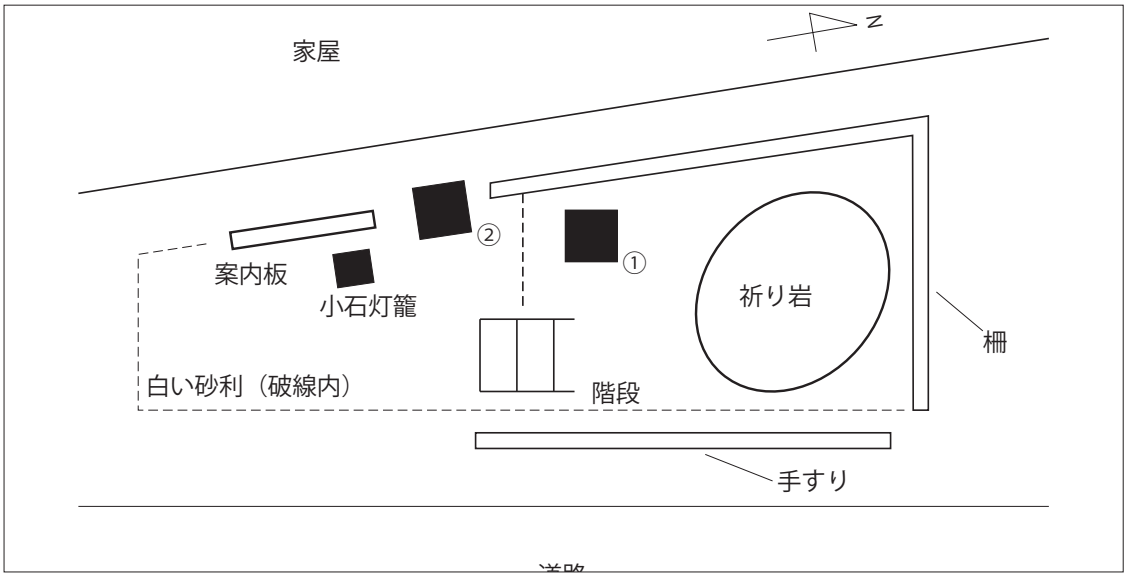
概要

駒立岩から与一橋まで引き返し、東に進むと祈り岩に到着した。

源平屋島合戦八百年祭準備実行委員会が設置している案内板によれば、源平合戦の時、那須与一が扇の的を射る際、この岩のところで「南無八幡大菩薩、わけても私の生まれた国の神明日光権現、宇都宮那須大明神、願わくばあの扇の真中を射させ給え」と祈ったと伝えられたことから、祈り岩と呼ばれているという。また、「いのり岩」の字は、松平頼重の家臣である箕輪野六の書であると伝えられているという。

祈り岩は、道路より数十センチほど下にあり、階段で降りることができる。階段を降りてすぐ左横には「いの里岩」と刻まれた石造物があり、正面に祈り岩がある。祈り岩の上には、お賽銭がいくらか供えてあった。階段を降りた場所は、柵で囲まれており、人が 1 人入れるようなたいへん小さな空間で、祈り岩の前には白い砂利が敷き詰められていた。住宅の敷地内と見間違うような目立たない場所にあるため、注意しないと見落としてしまうだろう。（担当：山﨑祐紀子）

配置と碑文



①
［正面］いの里岩

②
［正面］
牟礼町指定文化財〔史跡〕
源平屋島合戦古戦場
［右側面］
（牟礼町章）牟礼町
［左側面］
〈歴史をめくる／散歩道〉（牟礼町章）牟礼町

祈り岩全景

駒立岩

概要

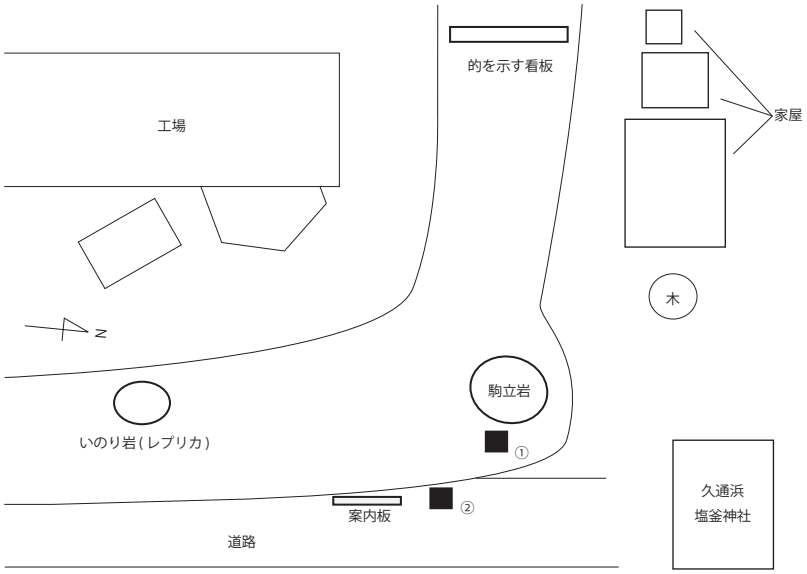
与一公園から北に進み、与一橋を超えたところにある案内板に従い、さらに 50 メートルほど進むと、駒立岩に到着した。途中に、レプリカのいのり岩があった。

高松市教育委員会が設置している案内板によれば、源平合戦の時、那須与一が祈り岩で神明に祈願を終え、海中にあったこの岩まで駒を進め、波に揺れ動く船の扇の的を射落としたことから駒立岩といわれているという。扇の的は水門の方向であり、潮が満ちると岩は水中に沈んでしまうとあった。

我々が調査に訪れた際は、潮が引いていたため、階段から駒立岩に降りることができた。駒立岩のすぐ隣には、「古ま立石」と刻まれた石造物があった。また、扇の的があったとされる水門の方向には、小舟の上に扇を的にして立つ平氏の女性の姿が描かれた看板が設置されていた。

そのほか、駒立岩の北東には、久通浜塩釜神社という鳥居と社殿からなる小さな神社があるが、関連は不明である。（担当：山﨑祐紀子）

配置と碑文



①
［正面］古ま立岩

②
［正面］牟礼町指定文化財〔史跡〕
源平屋島合戦古戦場
［右側面］（牟礼町章）牟礼町
［左側面］〈歴史をめくる／散歩道〉
（牟礼町章）牟礼町

駒立岩全景

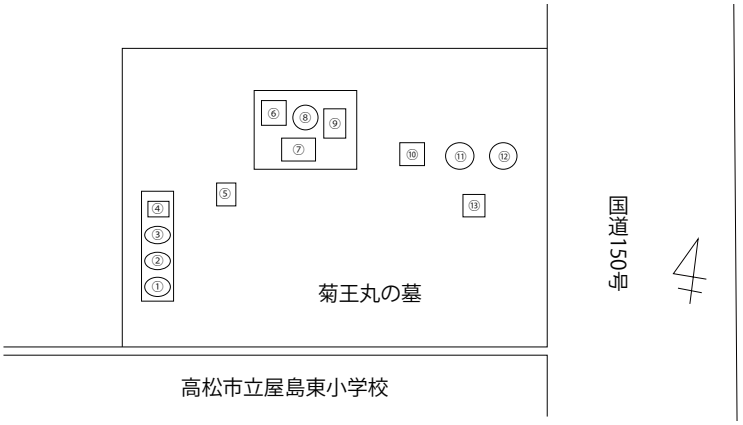
菊王丸の墓

概要

所在地は屋島東町、屋島東小学校の北東角に隣接する一画にある。同所に設置された案内板によれば、菊王丸は佐藤継信の首を討ち取ろうとして、継信の弟忠信に弓で射抜かれて死に、平教経によってこの地に埋葬されたとされている。

一画には、史跡「義経弓流し」と同形式の「菊王丸墓」と記された石柱が建ち、道標や墓石、手水鉢等が集積している。（担当：上中理帆・島本多敬）

配置と碑文



①
［正面］ 寛政六寅十一月二十四日
□□二十□

②
［正面］ □歳酉正月廿四日
［ ］

④
［正面］（梵字）平家一族内律禅尼灵
［左側面］ 山口甚太郎 建之
鈴木ユキ
［右側面］ 治承四年五月十四日

⑤
［正面］ 菊王丸墓
［背面］ 香川縣國立公園協會

⑩
［正面］ 薬師如［ ］
［右側面］ 益田□

⑬
［正面］ 右やくり
三十丁

菊王丸の墓全景

石造物⑬

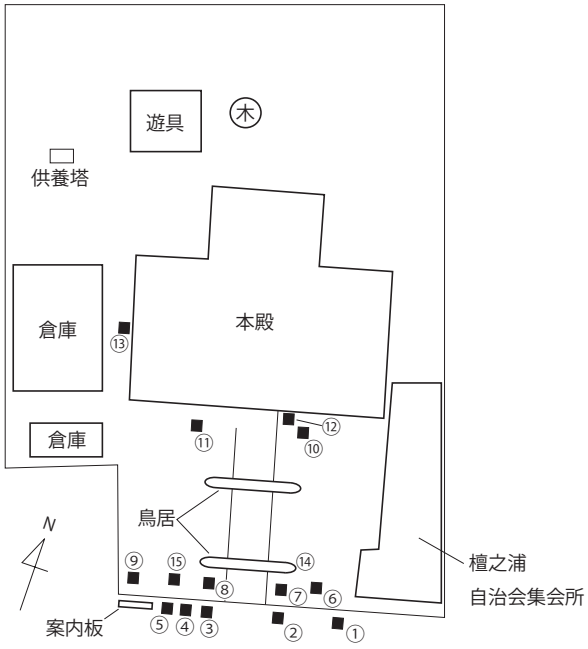
安徳天皇社

概要

所在地は高松市屋島東町。寿永 2 年（1183）に平宗盛が安徳天皇を奉じて一の谷から屋島に来た際に、行宮とした場所である、とされるところに建立された神社である。神社のすぐそばに屋島、東に八栗の山が見える。

現在は神社の境内に地域の自治会や遊具などが設置されており、地域に密着した神社になっている。また、源平合戦に関する慰霊碑もある。（担当：棟田成紹）

配置と碑文



①
［正面］ 支那事変記念
壇ノ浦養豚組合

②
［正面］ 遐邇壱體
［裏面］ 木田郡屋島山上獅子霊巌
元屋島村仲石場
尾原音吉三男
尾原文造

③
［正面］ 率賓帰王
［裏面］ 大正十三年立善　木田郡木太村字
新開
元屋島村仲石場
藤岡久助長男
藤岡平八

④
［正面］ 昭和五十七年三月二十五日
浩宮徳仁親王殿下御成所
［裏面］ 記念碑建立協賛者名
渥美正博　藤岡一郎　浅井　隆
磯淵泰男　藤岡昭一　多島敏博
岩村勝夫　藤岡正善　徳住敬二
大吉　力　藤岡保夫　中村弥市
木村和夫　藤岡正則　藤川　渡
久米秀俊　溝川克彦　矢野丁代
桑田輝雄　宮宇地季忠　藪下　茂
高橋健一　宮本兼一
多島良夫　山田定弘
谷本真治　山田周一
谷本正美　村井清徳

⑤
［正面］ 大正五年八月七日
賀陽宮殿下御成所

石造物②（右）・③（左）

⑥
［正面］ 水
［右側面］ 明治卅四年
　　正月立之
　　石場
　　施主藤田虎次郎

⑦
屋島山上　獅子之霊巌
尾原文進　昭和二年一月

⑧
世話人
　松本徳造
　本村
　藤岡巳之蔵

⑨
［正面］ 天照皇大神
［右奥面］ 埴安媛命
［左奥面］ 倉稲祀命
［右手前］ 太巳貴命
［左手前］ 少祓名命
［右奥面台座部分］
　石工アジ
　小田□□
　［　判読不能箇所多数　］

⑩
［正面］ 御神燈
［背面］ 文化十酉十二月吉日
［台座部正面］ 嘉平
　　保作
　　熊蔵
［台座右側面］ 権二郎
　　擧三兵衛
　　金蔵
［左側面］ 七蔵
　　幸蔵
　　長﨑
　　俣治郎

⑪
［　判読不能　］

⑫
［正面］ イヨ温泉郡一河原町　渡□太平
［右側面］ 明治廿年九月

⑬
［墓石正面］ 妙法　光親公
［墓石左側面］
　元暦元年七月十五日
　昭和五十四年七月十五日
　奉修築屋島壇之浦
　初代先祖光親公之墓
　大場家三十代本家当主清
　　次男登
　　三男裕
　　幸子
　大場家三十代分家当主恒則
　　洋子
　　恵美
　発願主　分家二十九代重則
　　フサノ
［左石柱正面］
　大場光親公墓
［左石柱裏面］
　二十九代の孫　大場三郎
　昭和二十五年十月修築畢

⑭
［鳥居右柱］ 壇之浦　松本良象
　　大坂　　西垣外ツヤエ
　　世話人　木村林五郎
［鳥居左柱］ 昭和十三年拾月建之

⑮
［正面］ 百度石
［右側面］ 昭和九年十月立之
　　施主藤岡喜三郎

石造物⑪

石造物⑩

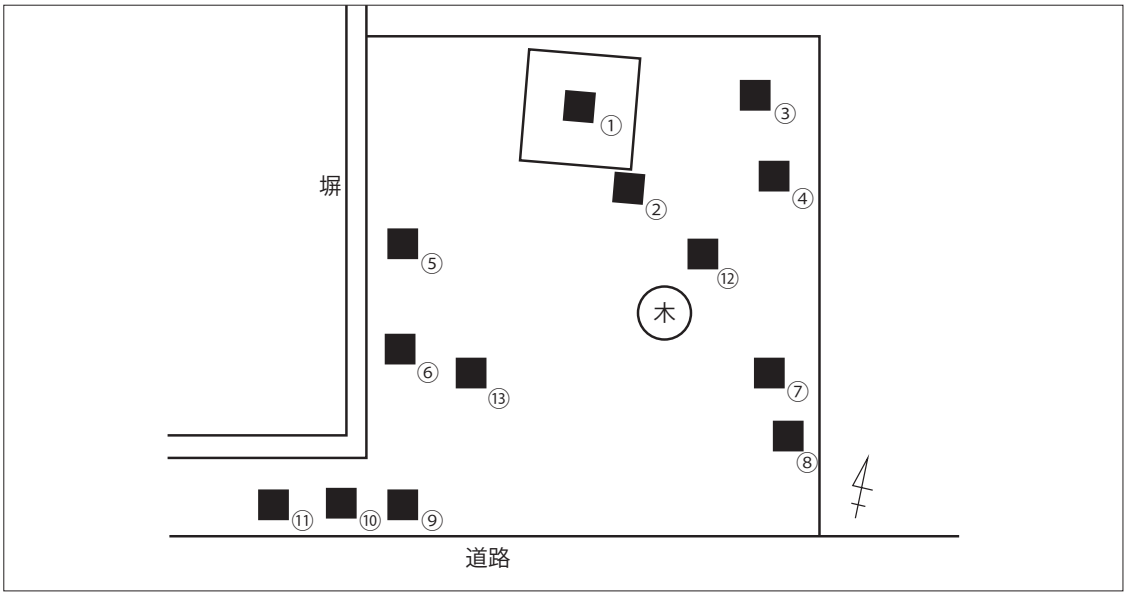
佐藤継信の墓（屋島東町）

概要

所在地は高松市屋島東町。源平合戦で、義経の身代わりとなり戦死した佐藤継信を称えた碑である。寛永時代に高松藩主松平頼重が屋島寺と八栗寺を結ぶ遍路道の傍らに建立した。

継信の碑の周囲には太平洋戦争で戦死した軍人の墓や地蔵があり、忠義の象徴である継信の顕彰地に「英霊」を祀ろうとした様子がうかがえる。（担当：上中理帆）

配置と碑文



①

継信碑石

［正面］維年壬午之夏我　君受封讃州的為維城肋確乎其忠貞眞可所観焉一日講武之」暇泛蘭漿飛彩鷁呉歌越唱消搖屋島偶覧佐藤次信戦死跡茲乃命下吏刋貞石」建新碑表義旌貞於乎君之用意也深矣哉至矣哉次信決死于元暦之昔而御」恩于寛永之兮□其幸矣哉万命余作碑銘遂書如左曽若渠系譜誕辰載暦日月」事跡操行奮記所載前史所傳歴歴焉章章焉胡贅餘言」於皇次信兮于濱危之場酬恩致死兮百世誰曰不剛遇籃當錯兮顕千□」之雄□識定□壮兮誠依教養有常尤可稱者兮維夫在将之良建碑刋石」遺烈山高水長寛永癸未仲夏上浣渉於髙松之城下

未

［背面］石大工　井川大坂仕打出植左衛門

※背後に五輪塔あり。

②

［正面］佐藤継信墓

［背面］香川縣国立公園協會

③

［正面］勲八等

故陸軍歩兵上等兵　鍋坂虎夫墓

石造物①・②

功七級
［背面］父　鍋坂又五郎　建之
母　　オク
［左側面］昭和十二年夏支那事変起ルヤ安南」部隊ニ属シテ呉淞ニ上陸（カ）九月五日宝」山城附近ノ戦ニ壮烈ナル戦死ヲ遂グ」法名釋忠純信士　享年二十三才

④
［正面］　　従六位
故海軍少佐　勲五等　木村軍平之墓
功五級
［背面］三月吉日　父　政成
母　タネ　建之
［右側面］昭和二十年八月十七日
智海院軍功慧平居士霊
行年二十七才
［左側面］昭和十七年三月二日神戸高等商船学校を卒業三月二十五日海軍予備機関少尉に任ぜられ五月」二十九日充員召集をうけ六月十五日正八位に叙せらる七月十日扶桑乗組仝十八年一月十五日」さんとす丸に乗組四月一日第三十一警備附となる四月十五日興嶺丸乗組九月五日デング熱」の疑により第百三海軍病院に入院九月十八日退院十一月一日海軍中尉に任ぜらる仝十九年二」月一日従七位に叙せらる九月十日第三十一特別根據附に補せらる十月五日海軍大尉に任」ぜらる十二月一日第三南遣壮隊参謀長の命をうけ服務正七位に叙せらる仝二十年八月十七日」比島方面で悪性マラリヤの為戦没海軍少佐に任ぜらる従六位に叙せられ功五級金鵄勲章を賜い勲五等雙光旭日章を受けらる

⑤
［正面］故　陸軍　勲七等
小原小五郎之墓
伍長　旭日章
［背面］昭和四十四年三月吉日
小原マツ　建之
［左側面］（梵字）南岳院忠純理達居士
昭和二十年七月二十四日比島マニラ」方面にて戦死す
行年三十才

⑥
［正面］故海軍　上等兵曹
鍋坂正重之墓
勲八等
［右側面］本覺院釋正諦信士
［背面］昭和二十六年二月　父　春吉
母　イト　建之
［左側面］昭和十二年一月佐世保海兵団ニ入団仝年六月出雲ニ乗組ヲ命ゼラレ砲術員トシテ動務」中海軍砲術検定ニ三等本兵ノ身ヲ以て艦隊随一ノ成績ヲ収メ表彰セラル同七月支那事」変勃發スルヤ上海特別陸戦隊員トシテ活躍以来海南島攻略戦ニ或ハ海上作戦ニ常ニ第」一線部隊ニ属シ偉功ヲ樹ツ其ノ功ニ依リ昭和十五年勲八等白色桐葉章ヲ授

與セラル昭」和十七年潜水学校ニ入校同年五月潜水艦イ一〇号ニ乗組大東亜戦ニ参加赫々タル武勲」ヲ樹テ昭和十九年七月二日南洋群島方面海域ニ於テ艦ト運命ヲ共ニセリ行年廿九才

⑦

［正面］

木村傳次郎君碑　　野田基資題

我第五師團歩兵第十二聯隊補充大隊豫備陸軍軍歩兵上等兵木村傳次郎君歿」於廣島陸軍病院君吾贄屋島□山下之人明治二十二年十二月齢適於徴兵入丸」亀歩兵第十二豫隊兵営恪勤服役武技大進二十五年十月帰休二十七年征清」之軍起君以豫備兵従軍戦於朝鮮牙山遂進平壌而罹病於開州之道九月入仁」川兵站病院十月歸廣嶋陸軍病院治方備至而終不起實其十七日矣官賜賻葬之君父曰大西彦次郎年十四為木村半平所子養為人況實温厚能勤於事夙得」郷曲之誉及訃至郷人嘆惜不措相謀ト地於檀浦佐藤嗣信之碑側典君遺物而」祭之縣丞郡長学校教員遠近老幼会者如雲二十八年三月官賜恤典其父半平」半平感泣曰吾生幸遭逢隆治之聖代典大平草木釣浴清明之雨露嚮日西征之」役我國威赫赫宣於八宏吾子従軍死有餘栄況乎　天恩之至大優渥何以報」之将使吾子孫永以弗諼而知其所當務焉乃就其祭地埋君之遺物建碑其上而」索余文以余在教職不辭而記之

明治三十一年二月

香川縣尋常中学校教諭　植田　竹次郎撰

池田　穀種書

和泉　宗松鑀

⑧

［正面］ 雄忠勇　陸軍歩

兵一等卒　大高晴治之碑

［背面］ 君姓大高舊高松之藩士父曰彌一郎母曰勢晴治者其四」男也適齢合格入歩兵第十二聯隊第十二中隊明治卅七」八年来日露之役起應呼宦命香港出帆雙項之以戦為治」轉戦於先釜山大孤山等之地東鶏冠山及盤龍山之以戦」最為激隊為敵九員傷善通寺於病院薬石無功道逝焉嗚」呼哀哉雖然仝卅八年一月六日依戦役之功賜于功七級」□□□章年金百圓及勲八等白色桐葉章乖効奕世君亦」正可瞑也法諡曰智徳院忠節晴勇居士實享年二十有四」銘曰　嗚呼勇士斃而後已」金鵄之章効亦偉矣　明治四十年五月建之　久保常存撰并書

⑨

［正面］ 南無阿弥陀佛

［背面］ 亡父久吉三男卯太郎

明治卅九年三月吉日

實母キヌ　　建之

［右側面］ 陸軍□藤岡卯太郎霊

［左側面］ 明治卅七八年戦役之際卅八年七月廿一日補充召集」ニ應ジ輜重兵第十一大隊補充隊ニ編入仝卅日第廿一」補助輸卒隊へ轉入仝年八月五日多度津湊乗船仝」九日大連上陸十九日金家屯着仝年十月三日脚気」病ニ襲ワレ鐵嶺兵站病院ニ入院仝月十四日死去ス

⑩
［正面］ 藤岡清君碑
［背面］ 君者大正七年十二月一日入丸亀聯隊為秋季演習」出發屯營出張岡山廣島両縣下自十一月十日亘十」四日参加兵庫縣及大坂府下之特別大演習翌十一月」二十一日歸營同年十一月二十七日累進一等卒上」等兵大正九年一月一日被命伍長勤務同年一日二」十六日罹一等症病歿於丸亀衛戍病院享年二十三
法諡曰眞良信士
大正十三年一月
宮宇地五峰書
父善太郎建之

⑪
［正面］ 故陸軍歩兵木邨喜三郎墓
［右側面］ 陸軍歩兵在現役征清平壤先」丹臺中戦闘右睨脈部受銃創野戦病」院入後凱旋褒賞以休暇歸郷発病疔」明治丙申十月二十有八日歿従友安」歩兵第十二聯隊長有贈賞云
［左側面］ 法名釋聞證信士

⑫
［正面］ 寄附者
壇之浦
木村忠三
昭和八年
四月吉日

⑬ ※碑文なし

石造物⑦

石造物⑧

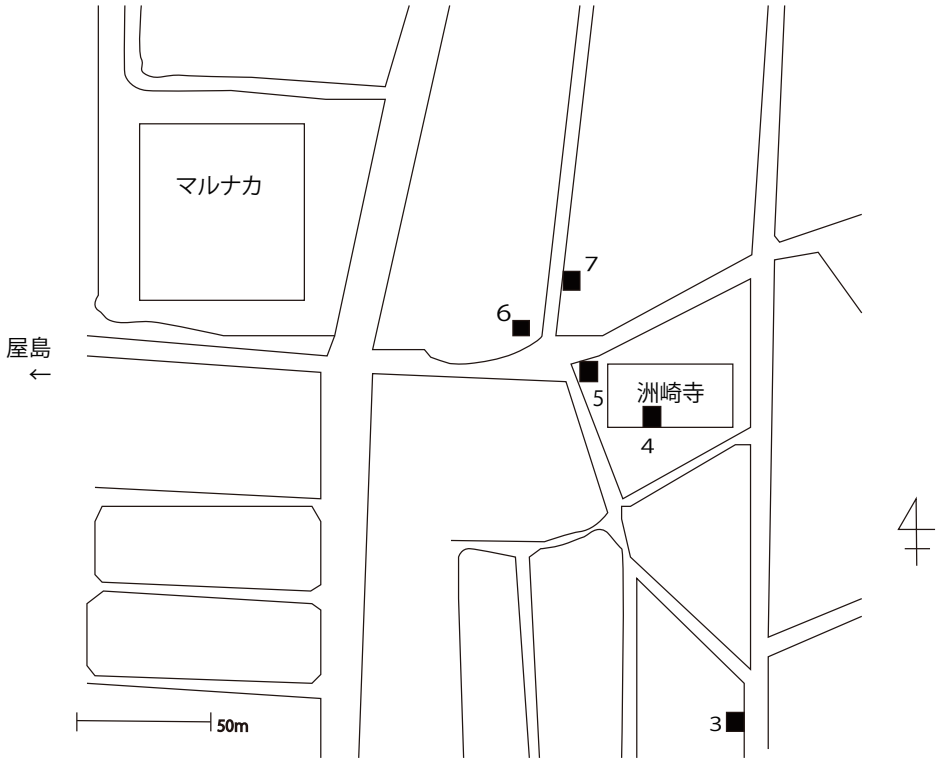
道標

概要

屋島の周辺には、遍路道沿いに多くの道標が残されている。このような道標は 17 世紀末以降から昭和にかけて建立され続けてきたが、戦後になるとその建立は激減した。また、道路の拡幅や建物の建築により所在が不明となったものもある。ここでは、調査範囲において確認できた道標（道路沿いに建っているもの）を紹介する。社寺境内に移転したものについては、個別の項目を参照していただきたい。（担当：上中理帆）

配置と碑文

※道標 1・2、および 8 ～ 13 の場所については、本章冒頭の調査地一覧を参照していただきたい。
ここでは道標3～ 7 の場所を示す。



道標 1
［正面］源平合戦史跡
義経弓流し跡　三〇〇米
洲崎寺　四〇〇米

［左側面］源平屋島合戦八〇〇年祭
準備実行委員会
昭和五六年三月建立

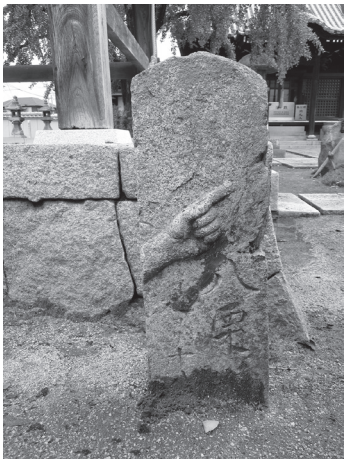
［右側面］源平合戦史跡
射落畠　八〇米

道標 1

道標２-a（左）・b（右）

道標 2–a
［正面］（上部）
　是ヨリ
　　八栗　十八丁
　本堂へ
［正面］（下部）
　　發起人
　　高松市西通町髙橋寛蔵
　　髙松市二番町村川織三郎
［右側面］昭和二年三月十七日

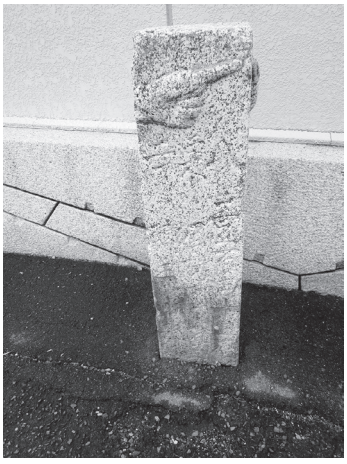
道標 2–b
［正面］右やくり道
［右側面］　余悟内亥ノ年男
　　世話人　私□世津女
　　七十九才
［左側面］明治五壬申年
　　九月建之



道標 4

道標 3
［正面］源平合戦史跡
　　義経弓流し跡　四〇米
［左側面］源平屋島合戦八〇〇年祭
　　準備実行委員会
　　昭和五十六年三月建立
［右側面］源平合戦史跡
　　祈り岩　五〇〇米
　　駒立岩　五〇〇米

道標 4
［正面］八栗□
　　是ヨリ十八□
　※一部が地面に埋まっており解読不能



道標 5

道標 5
［正面］八栗寺
　　壹百四十三度
　　周防国大島□
　　施主中務［　　］
［右側面］屋島寺
　　為藤井氏［　　］
　　大阪東區［　　］
　　施主藤井［　　］
［背面］明治廿八年五月
　※正面と右側面の一部は地面に埋まっており解読不能

道標 6
［正面］ 八栗道十八［　　］
［右側面］ 是ヨリ三丁南
　　佐藤次信墓
［左側面］ 明治五年　石工泉［　　］
　　壬申四月吉辰

道標 6

道標 7
［正面］ おくのいん
　　八十五番　庵治観世音六十丁
　　木田郡奥鹿村字鹿［　　］
　　世話人高濱茂［　　］
※一部が地面に埋まっていて解読不能

道標 8
［正面］ 船隠し　二・八粁
　　源平合戦史跡
　　祈り岩・景清の錣引　すぐそこ
［右側面］ 源平屋島合戦八百年祭準備実行
　　委員会
　　昭和五十七年三月吉日
［左側面］ 源平合戦史跡
　　駒立岩　八〇米

道標 7

道標 9
［正面］ 源平合戦史跡
　　菊王丸の墓　六〇〇米
　　安徳天皇社　一、〇〇〇米

［背面］ 源平屋島合戦八〇〇年祭
　　準備実行委員会
　　昭和五十五年三月建之

［右側面］ 源平合戦史跡
　　洲崎寺三〇〇米
　　祈り岩七〇〇米

道標 10
［正面］ 八十四番屋島寺七・六 Km
［背面］ 昭和六十年六月吉日建立
　　香川県
［左側面］ 四国のみち
［右側面］ 八十五番八栗寺二七 Km

道標 11
［正面］（梵字）右やくり

道標 8

道標 10

道標 12-a（右）・b（左）

道標 11

道標 13

三十丁

道標 12-a
［正面］源平合戦史跡
　　安徳天皇社　四〇〇米
　　佐藤継信の墓　六〇〇米
［背面］源平屋島合戦八〇〇年祭
　　準備実行委員会
　　昭和五十五年三月建立

道標 12-b
［右側面］□□益田吾［　　］
［左側面］へんろ道

道標 13
［正面］八栗寺
　　神戸市元町　二丁目　施主　畑藤吉
　　仝市福原町　　吉田熊太郎
［右側面］屋島寺
　　壹百四十九度目為供養
　　周防国大島郡椋野村
　　施主中務茂兵衛義教
［左側面］明治二十九年四月吉日
※下部が地面に埋まっていて解読不能

資料編１　歴史資料一覧

今回の屋島の名勝的価値の調査において収集した歴史資料をジャンル別に分けて掲げておくことにしたい。紙幅の都合もあり、報告書の本文ではすべての資料に言及することができなかった。よって、各資料における屋島の記載内容については、本一覧内に簡潔に記すことにした。また、報告書の各章のなかで資料が引用される場合、本資料編のなかで付したIDを記載している。

本資料編によって、屋島像を形成するのに寄与したと思われる資料が、中世以来、きわめて豊富に作成されてきたことが理解されるだろう。また多様な資料に登場していること自体が、屋島の名勝的価値の多面性を物語る一つの要素となる。

収集に当たっては、文献収集（資料編２）の過程で得られた情報から資料にあたったほか、高松市歴史資料館、香川県立ミュージアムをはじめとする香川県内の資料館・図書館、および瀬戸内海沿岸の府県ならびに主要都市の施設を中心に、資料調査をおこなった。また近代資料については香川県立図書館や国立国会図書館のデジタルアーカイブなども利用した。

ジャンルについては、次のように分類をした。資料によっては複合的な特徴を持つものもあるが、そのような資料はいずれか一方のみに掲載した。

Ａ：前近代文芸	Ｂ：前近代絵画
Ｃ：近世紀行文・日記	Ｄ：近世地誌・名所案内記
Ｅ：近世地図	Ｆ：近世行政
Ｇ：近現代文芸	Ｈ：近現代絵画
Ｉ：写真・絵葉書	Ｊ：ガイドブック
Ｋ：リーフレット	Ｌ：近現代地図
Ｍ：調査・学術	Ｎ：来日紀行文
Ｏ：その他	

掲載する情報は次の点である。

ID　　：本調査で収集した資料に対して付した番号。
資料名　：基本的に所蔵館の名称に従ったが、通称名などを利用した場合もある。
作者・出版社：作成に関わる人物や板元名。
時代　　：次のように記号で示した。
　　１：中世、２：近世前期、３：近世中期、４：近世後期、
　　５：近世全般、６：近代、７：現代
寸法（形状）：現物についての情報を得られなかった場合は「未調査」とした。
コメント：資料の性格や屋島に関する情報について調査員が記載した。
所蔵館　：複数存在する資料についても、一つの館で代表させた。

なお、本一覧はあくまでも屋島の名勝的価値に関する調査の中で確認できたものであり、たとえば、屋島の史跡や天然記念物としての価値、またその他の文化・社会・自然的な側面といった点をとらえるものではない。また、網羅的な悉皆調査によるものではないため、重要な資料などについても、まだ見落としがある可能性がある。その意味で、未完の一覧であることをご容赦・ご了解いただければ幸いである。

（調査員：稲穂将士・井上真美・上杉和央・川口成人・川崎雄一郎・島本多敬・橘セツ・東昇・
宮下遥・棟田成紹・百瀬ちどり・山﨑祐紀子）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A001	屋島寺縁起	性純編（伝）	1021 年 3 月 9 日	1	未調査	鑑真による屋島寺の創建、空海による寺域の変更など、屋島寺の成り立ちを伝える。ほかに、それ以降の堂宇の創建や屋島寺のまつわる伝承あり。	屋島寺
A002	吉記（『日本史史料叢刊 3 新訂吉記』所収）	藤原経房	1166 ～ 1198	1	未調査	寿永 2 年（1183）11 月 4 日条に平家が屋島に所在する記事あり。	京都府立大学附属図書館
A003	玉葉（『玉葉』所収）	九条兼実	1164 ～ 1203	1	未調査	寿永 3 年（1184）2 月 19 日条・元暦 2 年（1185）3 月 4 日条に屋島合戦記事あり	京都府立大学附属図書館
A004	吾妻鑑（『新訂増補国史大系 吾妻鏡』所収）	—	鎌倉時代後期	1	未調査	元暦元年（1184）9 月 19 日条・元暦 2 年（1185）2 月 16 日条・18 日条・19 日条・22 日条・3 月 8 日条に、屋島合戦記事あり。	京都府立大学附属図書館
A005	讃岐千光寺鐘願文（『鎌倉遺文古文書編補遺 2 巻』所収 補 835）	勧進聖人蓮阿弥陀仏 鋳師散位	1223	1	未調査	国指定重要文化財の屋島寺の梵鐘の銘文。貞応 2 年（1223）鋳造、大永 4 年（1524）追刻。	京都府立大学附属図書館
A006	延慶本平家物語（『校訂　延慶本平家物語』所収）	—	1309 ～ 1310 祖本、1419 ～ 1420 書写	1	未調査	読み本系「平家物語」。	京都府立大学附属図書館
A007	覚一本平家物語（『日本古典文学大系　平家物語』所収）	—	1371 書写	1	未調査	語り本系「平家物語」。	京都府立大学附属図書館
A008	長門本平家物語（『長門本平家物語』所収）	—	室町時代ヵ	1	未調査	読み本系「平家物語」。	京都府立大学附属図書館
A009	四部合戦状本平家物語（『訓読四部合戦状本平家物語』所収）	—	1323 ～ 1324 以前、1446 奥書	1	未調査	読み本系「平家物語」	京都府立図書館
A010	屋代本平家物語（『屋代本平家物語』所収）	—	室町時代	1	未調査	語り本系「平家物語」。	京都府立大学附属図書館

A：前近代文芸（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A011	源平盛衰記（『中世の文学　源平盛衰記』所収）	—	南北朝時代後期	1	未調査	読み本系「平家物語」。	京都府立大学附属図書館
A012	『高野春秋編年輯録』（日野西眞定『新校　高野春秋編年輯録　増訂版』所収）	懐英	1688～1704	1	未調査	高野山の編年史。元暦2年（1185）3月15日条に屋島を出奔した平維盛に関する記事がみえる。	京都府立大学附属図書館
A013	太平記（『日本古典文学大系　太平記』所収）	—	南北朝時代	1	未調査	文和4年（1355）の記事に、那須与一子孫の那須五郎が、母より祖先の与一ゆかりの品物を送られる場面あり。	京都府立大学附属図書館
A014	屋島軍断簡（武久堅「合戦譚伝承の一系譜―屋島軍の場合―」『平家物語成立過程考』所収）	—	南北朝時代ヵ	1	未調査	「嗣信最期」・「那須与一」を含む。	京都府立大学附属図書館
A015	西大寺末寺帳（松尾剛次『破戒と勧進の中世史』所収）	—	1391	1	未調査	明徳2年（1391）の西大寺末寺帳。「屋島普賢寺」という記述あり。	京都府立大学附属図書館
A016	看聞日記（『図書寮叢刊　看聞日記』所収）	貞成親王	1416～1448	1	未調査	嘉吉元年（1441）4月15日条に屋島合戦の絵巻に関する記述あり。	京都府立大学附属図書館
A017	兵庫北関入船納帳（林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』所収）	—	1445～1446	1	未調査	文安2年（1445）に兵庫北関を通過した船舶の船籍・積載品・関料・納入日・船頭・船主を記載。方本（潟元）の塩が積荷としてみえる。	京都府立大学附属図書館
A018	糺河原勧進猿楽日記（『群書類従　第19輯　管絃部　蹴鞠部　鷹部　遊戯部　飲食部』所収）	伊勢宗悟	1548書写	1	未調査	寛正5年（1464）4月4日条に能「八嶋」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A019	親元日記（『増補続史料大成』所収）	蜷川親元	1465～1487	1	未調査	寛正6年（1465）2月28日に「やしま」、文明15年（1483）3月12日に「摂待」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A020	蔭涼軒日録（『増補続史料大成　蔭涼軒日録』所収）	季瓊真蘂ら	1435～1493	1	未調査	寛正6年（1465）9月25日条に「クマンキリ」（熊手切）の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館
A021	飯尾宅御成記（『群書類従　第22輯　武家部』所収）	神山数連	1466	1	未調査	文正元年（1466）に「景清」の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A022	大乗院寺社雑事記（『増補続史料大成　大乗院寺社雑事記』所収）	尋尊	1450 ～ 1508	1	未調査	延徳 3 年（1491）9 月晦日条に「八嶋合戦絵三巻」の絵注文あり。	京都府立大学附属図書館
A023	鹿苑日録（辻善之助編『鹿苑日録』所収）	景徐周麟ら	1487 ～ 1561	1	未調査	明応 7 年（1498）2 月 29 日条に「奥州佐藤兄弟」の上演記録があり、「摂待」の上演とみられる。	京都府立大学附属図書館
A024	実隆公記（高橋隆三編『実隆公記』所収）	三条西実隆	1474 ～ 1536	1	未調査	文亀 3 年（1503）9 月 19 日条に「八島判官」の上演記録あり。永正 6 年（1509）閏 8 月 12 日条に、「平家物語八嶋絵詞」を読んだとある。	京都府立大学附属図書館
A025	祇園会山鉾事（河内将芳『中世京都の都市と宗教』所収）	原本：松田頼亮 書写：松田頼隆	1507 成立ヵ 1560 書写	1	未調査	応仁・文明の乱以前の祇園祭の山鉾の中に、「なすの与一山」がみえる。	京都府立大学附属図書館
A026	粟田口猿楽記（『群書類従　第 19 輯　管絃部　蹴鞠部　鷹部　遊戯部　飲食部』所収）	尊応	1505	1	未調査	永正 2 年（1505）4 月 16 日条に「八島」の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館
A027	梅花無尽蔵（市木武雄『梅花無尽蔵注釈』所収）	万里集九	1485 ～ 1502	1	未調査	「取弓判官畫画賛二十韻」と題した画賛が収録され、屋島合戦のエピソードとして弓流、継信の戦死、扇の的などが詠まれている。	京都府立大学附属図書館
A028	禅鳳申楽談儀（能勢朝次『能楽源流考』所収）	金春禅鳳	1512 ～ 1513	1	未調査	永正 11 年（1514）1 月条に「八嶋」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A029	二水記（『大日本古記録　二水記』所収）	鷲尾隆康	1504 ～ 1533	1	未調査	永正 16 年(1519)1 月 26 日条に能「八嶋」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A030	中臣祐金記（能勢朝次『能楽源流考』所収）	中臣祐金	1536 ～ 1584	1	未調査	天文 5 年(1536)2 月 14 日条に能「八嶋」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A031	親俊日記(『増補続史料大成』所収)	蜷川親俊	1538 ～ 1552	1	未調査	天文 8 年(1539)11 月 13 日条に能「八嶋」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A032	証如上人日記（『石山本願寺日記』所収）	証如	1536 ～ 1554	1	未調査	天文 9 年（1540 年）1 月 15 日条などに能「八嶋」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A033	多聞院日記（『増補続史料大成』所収）	多聞院英俊ら	1478 ～ 1618	1	未調査	天文 10 年（1541）11 月 28 日条などに「八島」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A034	言継卿記（『言継卿記』所収）	山科言継	1527 ～ 1576	1	未調査	天文 14 年（1545）3 月 21 日条に「八嶋」の上演記事あり。	京都府立大学附属図書館
A035	中臣裕磯日記（能勢朝次『能楽源流考』所収）	中臣祐磯	1544 ～ 1575	1	未調査	天文 18 年（1549）2 月 13 日条に「八嶋」の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館
A036	三好筑前守義長朝臣亭江御成之記（『群書類従　第 22 輯　武家部』所収）	—	戦国時代	1	未調査	永禄 4 年（1561）3 月 30 日条に「八嶋」の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館
A037	さぬきの道者一円日記（田中健二・藤井洋一「冠纓神社所蔵永禄八年 ： さぬきの道者一円日記」（ 写本 ）について」『香川大学教育学部研究報告第 1 部』97 所収）	岡田大夫	1565	1	未調査	永禄 8 年（1565）に讃岐を訪れた伊勢御師による初穂料の徴収を記録。かた本（潟元）・西かたもと（潟元）についての記録あり。方本では屋島寺が檀那寺としてみえる。	京都府立大学附属図書館
A038	安土日記（能勢朝次『能楽源流考』所収）	太田牛一	桃山時代	1	未調査	永禄 11（1568）10 月 11 日条に「八嶋」の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館
A039	能之留帳（『下間少進集』所収）	下間仲孝	1588 ～ 1615	1	未調査	天正 16 年（1588）2 月 25 日条などに「八嶋」の上演記録あり。	京都府立総合資料館
A040	駒井日記（ 藤田恒春編校訂『駒井日記』所収）	駒井重勝	1593 ～ 1595	1	未調査	文禄 3 年 4 月 20 日条に「八島」の上演記録あり。	京都府立大学附属図書館
A041	佐藤継信・忠信之旗由緒書（『京都浄土宗寺院文書』所収「 浄福寺文書 」2 号）	源義信	1532 ヵ	1	未調査	佐藤継信・忠信の旗の由緒書。天文元年（1532）とあるが、改元月日以前であり、年号については疑問が残る。	京都府立大学附属図書館
A042	策彦和尚詩集（『続群書類従第 13 輯下　文筆部　消息部』所収）	策彦周良	戦国時代	1	未調査	「八島戦場」と題し、佐藤継信の戦死を詠んだ漢詩が収録される。	京都府立大学附属図書館
A043	月庵酔醒記（服部幸造・美濃部重克・弓削繁編『月庵酔醒記』所収）	一色直朝	1573 ～ 1603 頃	1	未調査	石屋真梁が佐藤継信の墓を訪れて、継信と歌を交わした逸話、万里集九による「八島合戦之絵」の賛を収録。	京都府立大学附属図書館
A044	私心記（『石山本願寺日記』所収）	実従	1532 ～ 1561	1	未調査	永禄 2 年（1559）3 月 4 日条に、「曲舞之本八島一番」が詠まれており、舞の本として使われていたことを示す。	京都府立大学附属図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A045	梅渓集（『続群書類従第 13 輯下　文筆部　消息部』所収）	雪嶺永瑾	戦国時代	1	未調査	「扇面執弓判官」と題した漢詩を収録する。	京都府立大学附属図書館
A046	八島（屋島）（『日本古典文学大系　謡曲集』所収）	世阿弥	室町時代	1	未調査	屋島を舞台とし「嗣信最期」「那須与一」「弓流」を題材とした能。	京都府立大学附属図書館
A047	景清（『日本古典集成　謡曲集』所収）	—	1466 以前	1	未調査	屋島合戦、景清の鍛曳を題材とした能。	京都府立大学附属図書館
A048	熊手判官（『未刊謡曲集　続 3』所収）	金剛大夫ヵ	1465 ヵ	1	未調査	「八島判官」「弓流」「熊手切」とも。屋島を舞台とし、「嗣信最期」「弓流」を題材とした能。	京都市右京中央図書館
A049	摂待（『日本古典全書　謡曲集』所収）	—	室町時代	1	未調査	屋島合戦、佐藤継信の最期を題材とした能。	京都府立大学附属図書館
A050	継信（『番外謡曲　続』所収）	—	室町時代	1	未調査	「嗣信最期」を題材とした能。	京都市右京中央図書館
A051	延年那須与一（『未刊謡曲集 2』所収）	—	1470 以前	1	未調査	「那須与一」を題材とした能。	京都市右京中央図書館
A052	源氏屋島に下る（『申楽談義』所収）	秦元能ヵ	室町時代	1	未調査	散逸曲。	京都府立大学附属図書館
A053	那須与一（『新日本古典文学大系　狂言記』所収）	—	室町時代	1	未調査	「那須与一」を題材とした狂言。	京都府立大学附属図書館
A054	八島（屋島軍）（『新日本古典文学大系　舞の本』所収）	—	室町時代ヵ	1	未調査	「嗣信最期」を題材とした幸若舞曲。	京都府立大学附属図書館
A055	那須与一（『新日本古典文学大系　舞の本』所収）	—	室町時代	1	未調査	「那須与一」を題材とした幸若舞曲。	京都府立大学附属図書館
A056	岡山（『新日本古典文学大系　舞の本』所収）	—	未詳	1	未調査	「嗣信最期」を題材とした幸若舞曲。	京都府立大学附属図書館
A057	天狗の内裏（『日本古典文学大系　御伽草子』所収）	—	室町時代ヵ	1	未調査	「嗣信最期」の内容を含む御伽草子。	京都府立大学附属図書館
A058	義経記（『日本古典文学大系　義経記』所収）	—	室町時代	1	未調査	義経の生涯を描いた物語。	京都府立大学附属図書館

A：前近代文芸（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A059	源平屋島檀浦合戦縁起	—	江戸時代前期	2	二巻	源平盛衰記の内容を基本とした合戦縁起。	屋島寺
A060	屋島寺龍厳勧進帳（『香川層序第 1』所収）	龍厳	1611 年 10 月 3 日	2	未調査	鑑真による屋島寺の創建から空海による堂宇の建立、その後の伽藍の荒廃の様子を伝える。	高松市中央図書館
A061	松雲本平家物語（「大東急記念文庫蔵松雲本平家物語巻十一（翻刻）」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』47-1 所収）	—	1612 書写	2	未調査	異種本文取り合わせ本系「平家物語」、奥書に八島を題材とした漢詩を載せる。	京都府立大学附属図書館
A062	翰林五鳳集（『大日本仏教全書　翰林五鳳集』所収）	以心崇伝	1623	2	未調査	天隠龍沢の漢詩として「源九郎落弓図」が収録されている。	京都府立大学附属図書館
A063	麓塵集（『新編 香川叢書 文藝編』所収）	松平頼重	1642	2	未調査	「讃岐国亀山八景之歌」に「屋島秋月」の和歌、寛永 19 年（1642）、高松初代藩主松平頼重による。	高松市中央図書館
A064	屋島寺（『未刊謡曲集 7』所収）	—	江戸時代前期	2	未調査	佐藤継信の墓を舞台に、その最期が語られる能。	京都市右京中央図書館
A065	やしま（『古浄瑠璃正本集 1』所収）	六字南無右衛門	1639	2	未調査	義経が登場する浄瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A066	下り八嶋（『古浄瑠璃正本集 10』所収）	—	江戸時代前期	2	未調査	義経が登場する浄瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A067	源平兵者揃（『土佐浄瑠璃正本集 1』所収）	土佐少掾	江戸時代前期	2	未調査	一の谷・屋島合戦を扱った浄瑠璃。	京都府立図書館
A068	登八嶋（『土佐浄瑠璃正本集 3』所収）	土佐少掾	江戸時代前期	2	未調査	屋島合戦を扱った浄瑠璃。	京都府立図書館
A069	津戸三郎（門出八島）（『近松全集 1』所収）	近松門左衛門	1689	2	未調査	「嗣信最期」を題材とする浄瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A070	凱陣八島（『定本西鶴全集 14』所収）	井原西鶴	1685	2	未調査	「嗣信最期」を題材とする浄瑠璃。	京都府立大学附属図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A071	尼公物語（八嶋合戦）（『御国浄瑠璃集』所収）	—	桃山時代～江戸時代前期	2	未調査	「嗣信最期」を題材とした浄瑠璃。	近代デジタルライブラリー
A072	四国徧禮功徳記（『四国遍路記集』伊予史談会双書所収）	真念	1689 年 12 月	2	未調査	四国遍路における霊験談、功徳談。	愛媛県立図書館
A073	義経千本桜（『新日本古典文学大系　竹田出雲・並木宗輔浄瑠璃集』所収）	竹田出雲・三好松洛・並木宗輔	1745	3	未調査	義経の登場する浄瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A074	那須与一西海硯（『豊竹座浄瑠璃集 2』所収）	並木宗助・並木丈輔	1734	3	未調査	「那須与一」を題材とした浄瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A075	嬢景清八嶋日記	若竹笛躬・黒蔵主・中邑阿契	1764	3	未調査	景清の登場する浄瑠璃。	—
A076	壇浦兜軍記（『日本古典文学全集　浄瑠璃集』所収）	文耕堂・長谷川千四	1732	3	未調査	「鍛引」を題材とした浄瑠璃。	京都府立大学附属図書館
A077	世界綱目（『狂言作者資料集 1』所収）	—	1791 以前	3	未調査	歌舞伎狂言作者の手控え本。「源判官義経」「佐藤三郎次信」「那須与一宗高」ら、屋島合戦に関係した人物が役名として載せられている。	京都府立総合資料館
A078	山家鳥虫歌	天中原長常南山編	1772	3	未調査	屋島を謡う俚謡が２つあり。近世民謡集。	京都府立大学
A079	屋島檀浦源平合戦之縁起	—	—	3	26.7 × 21.5	屋島の合戦における那須与一が扇を射ち落とす場面の記述あり。	高松市歴史資料館
A080	方言修行金草鞋第十四編緒詞（『十返舎一九全集』3 所収）	—	1821	4	未調査	屋島寺参詣、解説、八島の和歌・狂歌あり。	京都府立大学
A081	林谷詩鈔（『新編 香川叢書 文藝編』所収）	細川林谷	1848	4	未調査	七言律詩「舟中望屋島」、嘉永元年序あり。作者の細川林谷は讃岐の生まれであり、篆刻家・漢詩人であった。	高松市中央図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
A082	扶桑名所名物集　讃岐国上下	選者桧園梅明　画工一猛斎芳虎、春友帝蔵版	1859	4	未調査	「狂歌扶桑名所名物集」は江戸の桧園梅明が画を挿入しながら讃岐の名所にちなんだ狂歌を集めたもの。屋島と女体山の間に舟が浮かぶ檀ノ浦が描かれる。塩田開発前に架かっていた橋や浜東・浜東のようすがわかる。	香川県立文書館
A083	源平屋島檀浦合戦縁起	内原政八（花押）	—	4	27.5 × 19.8	A079 とほぼ同内容。屋島の合戦における那須与一が扇を射ち落とす場面や佐藤継信に関する記述あり。	高松市歴史資料館
A084	松山藩『御船歌』（写）（『松山市史 2』所収）	—	—	5	未調査	「八嶋」は源平合戦の様子を描写。宝暦頃ヵ。慶応 3 年のもの。	愛媛県立図書館（個人）
A085	浅野家文書 1（八嶋軍物語全）	—	—	5	未調査	屋島の合戦についての記述があり、屋島そのものについての記述はない。ページを示すためか、62 から 75 まで、印字でアラビア数字の通し番号が振られている。通し番号 68 から、継信の最期が描かれている。	香川県立文書館
A086	浅野家文書 1（八嶋物語）	—	—	5	未調査	屋島の合戦についての記述があり、屋島そのものについての記述はない。ページを示すためか、76 から 101 まで、印字でアラビア数字の通し番号が振られている。通し番号 83 から、継信の最期が描かれている。	香川県立文書館
A087	京極家御船歌（『新編 香川叢書 文藝編』所収）	—	—	5	未調査	「八嶋」は源平合戦の様子を描写、「かい揃」は「八嶋の外も静かにて箱に納むる兜具」とあり。	高松市中央図書館
A088	六代君物語（「資料紹介・翻刻『六代君物語』」（『軍記と語り物』24 所収））	—	不明	2 ヵ	—	屋島での平家一門の生活が内容に含まれる御伽草子。	京都府立大学附属図書館
A089	常光寺文書 30（屋嶋合戦）	—	1789 頃	3 ヵ	未調査	P. 40 ～屋嶋合戦の様子が描かれる。那須与一が扇をうちおとす。	香川県立文書館
A090	屋島合戦実記	—	—	5 ヵ	未調査	屋島の合戦における那須与一が扇を射ち落とす場面の記述あり。	高松市歴史資料館
A091	西浦田楽やしまだんのうら（早川孝太郎『花祭』所収）	—	—	—	—	「嗣信最期」「鍛引」を含む民俗芸能。	京都府立大学附属図書館

B：前近代絵画（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B001	安徳天皇縁起絵図	伝土佐光信筆	室町時代	1	八幅（もと襖）	安徳天皇の生涯を 8 枚に収めたなかの 1 枚。屋島の内裏を大きく描く。山の表現はなし。	赤間神宮
B002	平家物語図	—	桃山時代	2	二曲一隻	扇面 12 枚。「平家物語」以外の場面もある。	大倉集古館
B003	継信・忠信物語絵巻	—	桃山時代	2	二巻	幸若舞の「八島」に基づいた絵巻物。	大和文化館
B004	源平合戦図屏風	—	桃山～江戸	2	二曲一隻	嗣信の場面が大きく描かれる。	個人蔵
B005	一の谷・屋島合戦図屏風	—	慶長後半～元和	2	六曲一双	一の谷合戦図は智積院本とよく似る。屋島合戦図屏風としては最も古い形を残すとされる。屋島の山容は表現されず。伊藤（2014）分類【1】。	天真寺
B006	高松城下図屏風	—	1640 年代	2	八曲一隻	高松城下を描く。絵図的要素も豊富。画面左端に屋島が描かれる。高松城下の表現に不可欠な要素として入れ込まれた可能性がある。	香川県立ミュージアム
B007	屋島合戦図	—	17 世紀	2	一幅	他の合戦図屏風とは大きく異なる。屋島や五剣山の描写から、現地を知った者が描いたことが明らか。讃岐の絵師によるものと表されている。屋島寺縁起絵と対。また源平屋島檀浦合戦縁起との関連が説かれている。	屋島寺
B008	那須与一扇射図絵馬	—	1663	2	一点	「扇の的」を描いた奉納絵馬。	白山神社
B009	やしま	—	1670	2	二冊	「屋島」をもとにした版本。	石水博物館
B010	義経図（牟礼高松図）	狩野探幽	江戸時代前期	2	一幅	義経のエピソードに取材。馬に乗る義経と背後に一本の松のみ。山の表現はなし。義経は左向き。	茨城県立歴史館
B011	義経弓流し図	狩野探幽	江戸時代前期	2	一幅	義経弓流を描く。	香川県立ミュージアム
B012	佐藤継信戦死の図	土佐光起筆	江戸時代前期	2	六曲一双	継信の最期を描く。	屋島寺
B013	源平合戦図屏風	伝土佐光起筆	江戸時代前期	2	六曲一双	構図は天真寺本と同じ系統。伊藤（2014）分類【3】。	今治市河野美術館

Ｂ：前近代絵画（２）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B014	一の谷・屋島合戦図屏風	狩野興甫筆	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。屋島の山容は表現されず。伊藤（2014）分類【1】。	宇和島伊達文化保存会
B015	一の谷・屋島合戦図屏風	狩野甚丞筆ヵ	江戸時代前期	2	六曲一双	岩山は描かれない。第六扇上は休息する源氏軍の場面。第三・四扇上は屋島館を攻める場面と思われる。陸と海はおよそ上下で分割。伊藤（2014）分類【6】。	個人蔵
B016	狩野常信筆牟礼高松図	狩野常信	江戸時代前期	2	一幅	牟礼高松図。背景にマツと海がある。義経は左向き。	高松市歴史資料館
B017	義経画像	狩野常信	江戸時代前期	2	一幅	大夫黒に跨る義経。	石川県立美術館
B018	源平合戦図屏風	狩野氏信筆	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻に敦盛最期、左隻に扇の的が取り上げられる。	滋賀県立琵琶湖文化館
B019	一の谷・屋島合戦図屏風	海北友雪	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。フリア美術館本系統に含まれる。伊藤（2014）分類の【4】になるか。	富士美術館
B020	源義経弓流し図	狩野探信	江戸時代前期	2	一幅	弓流を描く。	馬の博物館
B021	源平合戦図屏風　一の谷・屋島合戦図	伝狩野吉信筆	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。画面の左上が陸地、右下が海。伊藤（2014）分類【8】。	神戸市立博物館
B022	源平合戦図屏風	伝狩野元信筆	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。フリア美術館本系に似る内容を持つ。伊藤（2014）分類の【4】となるか。	八雲本陣記念財団
B023	直実敦盛・那須与一扇の的図屏風	伝狩野元信	江戸時代前期	2	八曲一双	場面を大きく描く。左隻に那須与一。	個人蔵
B024	一の谷・屋島合戦図屏風	伝狩野元信	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島。各場面を金雲で区切って描く。全体として左上＝陸（屋島）／右下＝海の構図だが、山の表現は乏しい。伊藤（2014）分類【8】。	赤間神宮

B：前近代絵画（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
B025	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。通例の構図とは大きく異なり、左上から中央にかけて海があり、その他の上・右・下・左は陸地が取り囲む。東を上にした構図と言える。場面としては右から左に展開する。	ケルン東洋美術館
B026	平家物語図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	橋合戦の隻と屋島合戦の隻。屋島合戦は那須与一の扇の的の場面の実を描く。与一は右側から射る。海は手前から中央。奥に山容があり、右側に陸地が続く（松林）。	サンフランシスコ・アジア美術館
B027	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。左下の岩山が第五扇に表現し、第六扇下には在家。勝浦上陸が第六扇上に描かれる。第五扇上の館は火をつける場面なので屋島館。全体に場面が金雲や松、山で区切られる。伊藤（2014）分類【6】。	ジェノバ東洋美術館
B028	屋島合戦図	—	江戸時代前期	2	六曲一隻	屋島東岸の汀が広く描かれる一方で館は描かれない（山の上の館がそれにあたるか）。第六扇下に岩山があるのが特徴。継信最期と扇の場面を松で象徴的に区切る。伊藤（2014）分類【4】。	フリア美術館
B029	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	天真寺本と同系統。土佐派。伊藤（2014）分類【1】。	メトロポリタン美術館
B030	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	大坂越え、浅瀬渡りに始まり、内裏、継信、扇の的、錣引、弓流とほぼすべてが描かれる。岩山あり。伊藤(2014)分類【10】。	リンデン民族学博物館
B031	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島。フリア美術館本と似るが、第六扇中の松原に源氏軍がいるなど相違点あり。底部に金雲が漂う。伊藤（2014）分類【4】。	永青文庫
B032	八島物語絵巻	—	江戸時代前期	2	一巻	幸若舞の「八島」に基づいた絵巻物。	屋島寺
B033	屋島寺縁起絵	—	江戸時代前期	2	一幅	屋島寺の縁起を表したもの。屋島合戦図と対になる。	屋島寺

Ｂ：前近代絵画（４）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B034	奈良絵本　源平盛衰記	—	江戸時代前期	2	五十冊	「源平盛衰記」の絵本。「弓流し」を含む。	海の見える杜美術館
B035	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	大きくは下３分の１が海、上が陸地で全体としてクローズアップして描かれている。日本屏風絵集成５（115/116）。伊藤（2014）分類【8】に相当か。	個人蔵
B036	源平合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	二曲一隻	本作品に屋島合戦の内容は含まない。	香川県立ミュージアム
B037	源平合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一隻	フリア美術館本などに類似する。伊藤（2014）分類【4】。	香川県立ミュージアム
B038	源平合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	各場面が金雲などで比較的明瞭に分かれる。伊藤(2014)分類【10】。	香川県立ミュージアム
B039	源平合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島合戦。勝浦上陸（第六扇上）、高松民家炎上（第六扇下）、源氏の休息（第四扇上）などが特徴的。第三扇に汀線が走り、陸地の割合が多い。おおよそ北を上とした構図となっている。伊藤（2014）分類【5】。	高松市歴史資料館
B040	奈良絵本　八島	—	江戸時代前期	2	二冊	幸若舞の「八島」を題材とした奈良絵本。	高松市歴史資料館
B041	一の谷屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	フリア美術館本と似るが、区切りの松の本数などが違う。伊藤（2014）分類【4】。	埼玉県立歴史と民俗の博物館
B042	源平合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	左隻・一の谷合戦。右隻・屋島合戦。景清、扇の的、継信最期。伊藤（2014）分類【4】。	山梨県立博物館
B043	大坂夏の陣・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	大坂夏の陣図との組合せ。屋島合戦図では海岸付近の攻防がクローズアップされている。山容はまったく表現されず。	出光美術館
B044	大坂夏の陣・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	大坂夏の陣図との組合せ。屋島合戦図では海岸付近の攻防がクローズアップされている。山容はまったく表現されず。	出光美術館

Ｂ：前近代絵画（５）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B045	源平合戦図屏風　屋島合戦図	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻に錣引の様子、左隻に扇の的の様子を描いた部分図。	神戸市立博物館
B046	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	天真寺本系のように画面右側（２～３扇分）が海、左側（３～４扇分）が陸地だが、左下の岩山があるなど、異なる特徴も持つ。	誓願寺
B047	平家物語図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻・敦盛直実図。左隻・那須与一、景清錣引図。	仙台市立博物館
B048	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	天真寺本とよく似る。人物に付箋がつけられる。伊藤（2014）分類【2】。	大英博物館
B049	屋島・壇の浦合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻屋島合戦。左隻壇ノ浦合戦。屋島合戦は、右上に大坂越があり、その後、右から左に嗣信最期、与一、錣引と進む。他の作品とは左右が逆の構図として興味深い。伊藤（2014）分類【12】。	東京国立博物館
B050	平家物語図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。高松市歴史資料館本と類似した表現だが、汀線が第四扇にあり、海陸の割り当てが異なる。伊藤（2014）分類【5】。	馬の博物館
B051	屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一隻	弓流と錣引に焦点を当てたもの。第六扇上に水田表現。屋島の表現はなし。	馬の博物館
B052	義経図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一隻	義経記に依拠して作られた名場面集。那須与一の場面がある。	馬の博物館
B053	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代前期	2	六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島。フリア美術館本と似るが、第六扇上の水田等の表現、区切りの松の本数などが違う。伊藤（2014）分類【4】。	麻布美術工芸館（寄託）
B054	平家物語図絵巻	—	江戸時代前期	2	三十六巻	「平家物語」の絵巻。「屋島」では「扇の的」が描かれる。	林原美術館
B055	牟礼高松図鐔	利寿	江戸時代中期	3	一枚	鐔に牟礼高松図の意匠が採用されている。	永青文庫

Ｂ：前近代絵画（６）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B056	那須与一扇の的図	初代狩野休圓筆	江戸時代中期	3	一幅	宝永６年（1709）作。海に入って矢を射る与一、船とひらひらと舞う扇（赤）が描かれる。	高松市歴史資料館
B057	牟礼高松図	土佐光祐筆	江戸時代中期	3	一幅	海岸線と松という地に太夫黒に乗った義経が遠方を見ている様子が描かれる。義経は左向き。	高松市歴史資料館
B058	義経弓流の図	狩野典信	江戸時代中期	3	一幅	弓流の図。	高松市歴史資料館
B059	那須与一射扇図屏風	狩野興信筆	江戸時代中期	3	二曲一隻	左扇下に那須与一、右扇の上に船と扇が描かれる。背景はなし。	個人蔵
B060	那須与一　扇の的	鳥居清満	江戸時代中期	3	一幅	扇の的の場面を描く。	東京国立博物館
B061	平家絵扇面貼交屏風	—	江戸時代中期	3	六曲一双	継信最期・弓流が含まれる。	シアトル・ゼマコレクション
B062	島津家本　平家物語	—	江戸時代中期	3	三十冊	「平家物語」12巻の内容と灌頂巻の内容を三十冊の絵巻として描いたもの。挿絵のなかに「弓流し」も含む。	個人蔵
B063	源平合戦図屏風	—	江戸時代中期	3	二曲一双	二曲一双で各隻の左扇は一の谷合戦が、右扇には屋島合戦の場面が描かれる。屋島合戦は錣引と菊王丸（継信討死）の場面である。上部に山が描かれるが、背景として描かれるのみである。	高松市歴史資料館
B064	弓流し図扇面	—	江戸時代中期	3	一幅	扇面。真ん中に弓を拾う義経、左に源氏、右に平氏という構図。	高松市歴史資料館
B065	源平合戦図屏風	—	江戸時代中期	3	六曲一隻	大英博物館本と同じ系統に属する。伊藤（2014）にはないが、【2】に該当する。	高松市歴史資料館
B066	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代中期	3	八曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。横に長い構図。大坂越え、浅瀬渡り、内裏炎上、継信、扇の的、錣引、弓流あり。伊藤（2014）分類【2】。	城端別院・善徳寺

B：前近代絵画（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B067	源平合戦の図	—	江戸時代中期	3	一二幅（額装）当初は六曲一双	「源平盛衰記」の各場面を描いた押絵貼り屏風の各場面を額装している。屋島合戦では弓流しと継信最期。	信濃長谷寺
B068	能狂言絵巻	—	江戸時代中期	3	一巻	能・狂言の曲目を図絵化したもの。「八島」が含まれる。	神戸女子大学図書館
B069	奈良絵本　平家物語	—	江戸時代中期	3	一二巻二四冊	「平家物語」12 巻を、各巻 2 冊に書写。「継信最期」や「扇の的」、「弓流し」が描かれる。	神奈川県立歴史博物館
B070	奈良絵巻　やしま	—	江戸時代中期	3	三巻	幸若舞の「八島」に基づいた絵巻物。	大阪青山歴史文学博物館
B071	源平合戦図屏風	—	江戸時代中期	3	六曲一双	一の谷・屋島・壇の浦が描かれる。那須与一や嗣信、錣引、弓流が描かれる。伊藤（2014）分類【13】。	長野県立歴史館
B072	源氏二十二将	勝川春英	1815 ～ 1819	4	一枚	義経を中心に、佐藤継信ら 22 人の忠臣を描く。	高松市歴史資料館
B073	山水図・七絶詩	谷文晁	江戸時代後期	4	一幅	山水画。高松城下側（西方寺付近か）からとらえられた構図としては初めての作品に位置づけられる。賛は菊池五山。	高松市歴史資料館
B074	日本名山図会	谷文晁	江戸時代後期	4	3 冊	日本名山図譜（1804）の改版。真景図による日本中の名山の画集。屋島と五剣山が載る。	京都府立大学
B075	八嶋大合戦	歌川国芳	1805 ～ 1842	4	三枚続	「八嶋大合戦」というタイトルだが、内容は壇の浦合戦である。	高松市歴史資料館
B076	源平八嶋大合戦	歌川国芳	1805 ～ 1842	4	三枚続	「源平八嶋大合戦」というタイトルだが、内容は壇の浦合戦である。	神戸市立博物館
B077	美盾八競　八嶋夕照	歌川国芳	1843 ～ 1847	4	三枚続	那須与一の扇の的の場面。画面手前が陸地、奥が海で、陸地に義経がいることから、手前が屋島だと分かる。マツが一本画面左から上にかかる。	高松市歴史資料館
B078	八嶋大合戦図	歌川国芳	1847 ～ 1852	4	三枚続	「八嶋大合戦図」というタイトルだが、内容は壇の浦合戦である。	高松市歴史資料館

Ｂ：前近代絵画（８）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B079	義経弓流之図	歌川国芳筆	1847～1852	4	36.7×74.4	弓流の場面を中心に描かれている。全体に海が描かれ、両軍が入り乱れている。右の背後に山が描かれるが、方角は不明。	高松市歴史資料館
B080	源平大合戦	歌川国芳	1856	4	三枚続	弓流の場面を中心に描かれている。全体に海が描かれ、右の背後に山が描かれるが、方角は不明。	高松市歴史資料館
B081	讃州屋嶋源平大合戦之図	歌川芳虎	1847～1852	4	三枚続	手前に陸地、奥に海という構図。陸地は屋島に相当。マツは一本。屋島合戦だけでなく、壇の浦合戦の内容も描かれている。	高松市歴史資料館
B082	源平八嶋檀浦大合戦遠矢之図	歌川芳虎	江戸時代後期	4	三枚続	合戦の主人公たちが一艘の船に乗って紹介される。	高松市歴史資料館
B083	源義経牟礼高松の陣に軍配の図	三代歌川豊国（国貞）	1843～1847	4	37.2×75.5	右側に陸地、左側に海が基本。陸には源氏がいる。	高松市歴史資料館
B084	源義経牟礼高松の陣に軍配の図	歌川国貞	江戸時代後期	4	三枚	屋島・壇の浦を一図に収める。牟礼高松の陣を構える義経が描かれる。	岩手県立博物館
B085	源平合戦図屏風	狩野一信筆	1853	4	六曲一双	右隻:一の谷、左隻:屋島。場面を大きく取り扱う。継信、扇の的、錣引。山が描かれるが、屋島の山容ではない。	板橋区立美術館
B086	八嶋檀浦海底之図	歌川芳艶	1858	4	三枚続	安政５年（1858）改印。「八嶋檀浦海底之図」とあるが、壇の浦合戦の状況である。	高松市歴史資料館
B087	八嶋檀之浦源平大合戦之図	歌川芳員	1862	4	三枚続	文久２年（1862）改印。海上での戦い。八艘跳びなど、壇の浦合戦が描かれる。	高松市歴史資料館
B088	義経八島之名誉	月岡芳年	1866	4	三枚続	弓流の場面。右に源氏、左に平氏の構図。右奥に山が描かれ、地理的には屋島となるが、山容は異なる。奥（画面上部）は開けており、海が続いている印象を受ける。	神戸市立博物館
B089	源平八嶋大合戦	落合芳幾	江戸時代後期	4	三枚続	弓流の場面が中心にある。両軍の勢いを表現することに主眼。画面はすべて海。	高松市歴史資料館
B090	源平合戦図屏風	守峰	江戸時代後期	4	六曲一隻	画面の左上が陸地、右下が海の構図。扇の的がクローズアップされている。伊藤（2014）分類【8】。	香川県立ミュージアム

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm (形態)	コメント	所蔵館
B091	義経公牟礼高松之図	清原貞輝	江戸時代後期	4	一幅	義経のエピソードに取材した図。後ろに松と海が描かれる。義経は右向き。	香川県立ミュージアム
B092	那須与一図	浮田一蕙筆	江戸時代後期	4	一幅	掛け軸。画面下に与一、上に舞う扇（赤）が描かれる。	高松市歴史資料館
B093	牟礼高松図	□山	江戸時代後期	4	一幅	牟礼高松図。背景に松と海と山がある。義経は左向き。	高松市歴史資料館
B094	牟礼高松図	森泉敬	江戸時代後期	4	一幅	牟礼高松図。背景に松と海がある。義経は左向き。	高松市歴史資料館
B095	牟礼高松図	田安斉匡筆	江戸時代後期	4	一幅	義経のエピソードに取材した図。後ろに松が描かれる。義経は左向き。	徳川記念財団
B096	源平合戦図屏風	—	江戸時代後期	4	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。押絵貼りのため、各扇の画面は連続しない。錣引、継信最期、弓流、扇の的などが確認される。	ウィーン国立工芸美術館
B097	源平合戦図屏風	—	江戸時代後期	4	六曲一双	右隻に一の谷合戦、左隻に屋島合戦と壇ノ浦合戦を描く。屋島合戦としては扇の的の場面のみか。	高松市歴史資料館
B098	源平合戦図扇面貼交屏風	—	江戸時代後期	4	二曲一隻	12 枚の扇面が貼られた屏風。屋島関係は継信最期の場面がある。	高松市歴史資料館
B099	弓流し図屏風	—	江戸時代後期	4	八曲一隻	弓流しの場面のみを一隻に大きく描いたもの。周辺は金雲で覆われ、背景は描かれない。	高松市歴史資料館
B100	源平合戦図屏風	—	江戸時代後期	4	六曲一双	構図はケルン東洋美術館本に似ており、左上から中央にかけて海があり、その周囲の上・右・下・左を陸地が囲む東を上とした構図となっている。ただし、内容はケルン東洋美術館本とは大きく異なり、系譜関係は認めにくい。継信最期、扇の的、錣引。屋島の山容についての表現はなし。	高松市歴史資料館
B101	源平盛衰記絵巻	—	江戸時代後期	4	三巻	「源平盛衰記」をもとにした絵巻。	斎宮歴史博物館
B102	宇治川先陣図・弓流図屏風	—	江戸時代後期	4	六曲一双	根本幽峨筆。宇治川先陣、弓流の場面。	渡辺美術館

B：前近代絵画（10）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B103	一の谷・屋島・壇ノ浦合戦図屏風	—	江戸時代後期	4	六曲一双	右隻一の谷、左隻屋島・壇ノ浦合戦。画面構成に物語性はなく、有名な場所をはめ込んでいる。第四扇上に大きな山が描かれているが、山容は屋島とは異なる（休息場面？）。伊藤（2014）分類【9】。	霊松寺
B104	源平合戦図屏風	—	江戸時代後期	4	六曲一双	右隻：橋合戦と一の谷合戦。左隻：屋島合戦と壇の浦合戦。壇の浦合戦は右下に描かれる。	和歌山県立博物館
B105	八島合戦金屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	フリア美術館本と似る。伊藤（2014）分類【4】。『旧江州水口藩・旧遠州横須賀売立目録』にあり。	—
B106	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	『日本書古書目録』81（2002）にあり。未見。	—
B107	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	未見。伊藤（2014）分類【10】。	ベルン歴史博物館
B108	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	「安清」印。左隻:一の谷合戦、右隻:屋島合戦。伊藤(2014)分類【6】。	久留米・有馬記念館
B109	平家物語図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。画面左が陸地（ただし、左上に勝浦上陸の場面あり）、右が海上という構図。屋島の山容は描かれず。	個人蔵
B110	扇面色紙貼交物語図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	「平家物語」以外も含む貼交図屏風。屋島合戦関連では継信最期、弓流、錣引。	個人蔵
B111	平家物語図屏風	—	江戸時代	5	六曲一隻	左隻のみ。屋島合戦を描く。富士美術館本、埼玉県立歴史と民俗の博物館本と近い。	個人蔵
B112	能絵百番	—	江戸時代	5	二十冊	能楽を演じる舞台を図示した冊子。百番の中に「八嶋」も含まれる。	個人蔵
B113	源平合戦図画帖	—	江戸時代	5	一冊	源平合戦に関する図画帖。全 12 図。	高松市歴史資料館
B114	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一隻	継信の場面が描かれる（二扇分）。	高松市歴史資料館

B：前近代絵画（11）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
B115	屋島合戦図屏風	—	江戸時代	5	八曲一隻	未見。伊藤（2014）分類【9】。	埼玉県立歴史と民俗の博物館
B116	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	八曲一双	一の谷・屋島の両合戦の隻と壇ノ浦合戦の隻。一の谷・屋島隻は一の谷が右側、屋島が左側となる。伊藤（2014）分類【11】。	出光美術館
B117	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	右隻一の谷合戦。左隻屋島合戦。左上に内裏に火をつける様子、左下に岩山あり。全体として場面ごとに描き分けれられている。	松岡美術館
B118	鵯越図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	右隻に鵯越。左隻に「那須与一」「能登殿最期」「八艘跳び」	松阪市
B119	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	右隻に一の谷合戦、左隻に屋島合戦と壇の浦合戦を配置する。伊藤（2014）分類【11】。	神奈川県立歴史博物館
B120	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	平家物語の名場面集といった構成。一扇に一場面が描かれる。屋島合戦関連では継信最期・那須与一が取り上げられる。	大阪市立美術館
B121	一の谷・屋島合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	敦盛最期・継信最期のみ。	長楽寺
B122	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	八曲一双	宇治川～壇ノ浦まで。那須与一や継信、弓流が描かれる。伊藤（2014）分類【13】。	長野県立歴史館蔵
B123	屋島合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一隻	北方文化博物館本と似る。伊藤（2014）分類【7】。	徳川美術館
B124	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	平家物語の名場面集。12 の場面。佐藤継信・那須与一・義経弓流・屋島敗軍の場面が採用される。	兵庫県立歴史博物館
B125	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	構図はフリア美術館本などと同じだが、八艘飛びなどの場面が描かれる。伊藤（2014）分類【7】。	北方文化博物館
B126	弓流し図	—	江戸時代	5	一枚	弓流の図。	高松市歴史資料館
B127	源平合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	未見。	山種美術館
B128	一の谷・屋島・壇ノ浦合戦図屏風	—	江戸時代	5	六曲一双	未見。	東京国立博物館

C：近世紀行文・日記（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
C001	扶桑録（『牛窓町史史料編』所収）	海行総載	1617	2	未調査	8月15日分下津井を出発し、南に塩田島（塩飽島ヵ）・大豆島（大槌島ヵ）・八島（屋島ヵ）と記述。	岡山県記録資料館
C002	讃岐下り（「四国道の記」）（『新編 香川叢書 文藝編』所収）	岩手宗也	1635	2	未調査	屋島の和歌、「洲崎の堂の跡はかなき、次信かしるしの石」の記述あり。寛永12年頃のもので、作者は元生駒家臣で連歌師の岩手宗也。	高松市中央図書館
C003	空性法親王四国霊場巡行記（賢明）（『四国遍路記集』伊予史談会双書 所収）	賢明、伊予史談会蔵写本	1638	2	未調査	屋島寺から八栗寺への行程、駒立石などの記述、大覚寺空性法親王に随行した太宝寺権少僧正賢明作。	愛媛県立図書館
C004	四国遍路日記（澄禅）（『四国遍路記集』伊予史談会双書 所収）	澄禅、宮城県塩釜神社写本	1653	2	未調査	屋島寺、安徳天皇ノ内裏跡、佐藤次信ノ石塔、洲崎ノ堂跡、相引、惣門、駒立石の記述あり。作者は肥後国球磨郡生まれで、新義真言宗本山都智積院の僧である澄禅。	愛媛県立図書館
C005	小豆島紀行（『新編 香川叢書 文藝編』所収）	松山玖也	1667	2	未調査	屋島寺へ参詣、「洲崎堂の跡、内裏屋敷、奈須与一扇射ける所、継信石塔」等の記述が詳細である。	高松市中央図書館
C006	壬午紀行（『新編 香川叢書 文藝編』所収）	桃居翁二柳	1762	3	未調査	人の見送りに屋島付近まで行く。「佐藤次信の塚、馬塚」などの記述あり。作者の俳人桃居翁二柳は加賀山中出身。	高松市中央図書館
C007	続未曾有記（『近世紀行集成』所収）	遠山景晋	1805	4		文化2年（1805）2月14日牛窓出航、屋島、源平の記述あり。	京都府立大学
C008	海陸道順達日記（『海陸道順達日記 ： 佐渡廻船商人の西国見聞記』所収）	—	1813	4	未調査	文化10年（1813）7月20日屋島付近を通過の時、八島の歌を詠む。佐渡廻船商人の西国見聞記。	京都府立大学
C009	海瀬舟行日記全	—	1823	4	未調査	屋島を東から描く。図には「屋島山、与一駒立、次信、東浦」とあり、血の池、屋島寺、遠見番所、総門の渚、佐藤継信最期などの解説あり、寛文7年（1667）巡見使関係か。	九州大学附属図書館（九州文化史）

C：近世紀行文・日記（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
C010	撫川の記	忠直	1827	4	24	讃岐から備前への船から見た景色「東の方をミわたせハ、八栗・八嶋なと、かのもかのもにミへわたる」。文政 10 年（1827）阿波国の忠直が、主人木下氏の使で備中国撫川を訪ねた時の紀行。	岡山県立図書館
C011	川渡甚太夫一代記（『川渡甚太夫一代記』所収）	—	1850	4	未調査	嘉永 3 年（1850）5 月 27 日屋島に船を掛ける、屋島の歌 2 首詠む、若狭生の船頭日記「南海瀬戸日記」355 頁。	京都府立大学
C012	海陸返り咲こと葉の手拍子（『内藤充眞院道中記』所収）	内藤充真院	1865	4	未調査	元治 2 年（1865）4 月 6 日「八島だんの浦を遠くに見」、延岡藩主室内藤充真院が延岡から江戸へ帰府したときの紀行文。	京都府立大学
C013	新増日本道中行程記大成	—	—	5	未調査	小判型に屋島を描く。表記は「八島。他に明和 3 年本あり。	九州大学附属図書館（九州文化史）

D：近世地誌・名所案内記（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
D001	讃州歴覧志（『香川県史第15巻資料編　藝文』所収）	江村宗珉	1653	2	未調査	讃岐国内の名所記。江村宗珉は江村専斎の子で京都の人。青山幸成に仕え、寛永17年（1640）年生駒氏改易時の高松城請取に同行した際の見分に基づく。 屋島（「山形似屋故名之。或号南面山」とあり。鑑真堂宇建立、空海の十一面観音奉納、血池、「寺僧持山図二軸口説古事。有源平交兵記不足見矣。」と記述）。安徳帝行宮。佐藤継信墓。檀ノ浦。相引潮。宇竜ガ岡。高松ノ里之記述あり。	高松市中央図書館
D002	玉藻集（『香川叢書　巻三』所収）	小西可春	1677	2	未調査	讃岐の名所古跡を詠んだ和歌を集め、社寺の由緒・旧跡・伝説・物産等を記し、さらに偉人の伝記・家記・戦記を加えて七巻本としたもの。本資料は延宝5年（1677）成立の七巻本。 承久三年土御門院土佐配流時に「讃岐の屋しま」を見て「安徳天皇の御事」を思い出すとの記事。志度浦合戦での屋島の平氏敗退。「屋嶋」の項で「大江ノ忠名」が讃岐配流時に詠んだ和歌の考証。屋島城築城。屋島合戦について詳述。「屋嶋之城ヲ見渡セハ、嶋ノ廻広、海漫々トシテ巌石聳雲、無左右源氏ノ軍兵可渡様ナシ」と記述する。 名木として鐘（鞍）掛松、名石として獅子の霊巌、宝石・宝池、那須与一駒立石・同祈リ石を立項、塚に関して馬塚（太夫黒の墓）を取り上げる。名産に屋嶋蝉を挙げる。偉人において幣無太夫について記述。寺院において南面山屋嶋寺千手（光）院の項目あり、鑑真・空海の伝承に触れる。源平合戦時に源氏方へ寝返った「讃岐国御家人」について記述。	高松市中央図書館

D：近世地誌・名所案内記（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
D003	四国遍路道指南（真念）（『四国遍路記集』伊予史談会双書 所収）	真念	1687	2	未調査	真念作、高野聖。八十四番札所屋島寺への行程、屋島寺、継信墓（空信次信墓参含む）、内裏跡、壇の浦、あひ引、奈須の与市駒立岩、すさきの堂、惣門、大夫黒馬の墓の記述あり。	愛媛県立図書館
D004	四国遍礼霊場記（寂本）（『四国遍路記集』伊予史談会双書 所収）	寂本	1689	2	未調査	屋島寺、次信墓、壇の浦、駒立岩、祈岩、洲崎の堂の記述あり。寂本は山城国深草の人。	愛媛県立図書館
D005	讃岐国大日記（『香川叢書 巻二』所収）	友安盛員	1651～	2	未調査	上代から慶安4年（1651）までの讃岐国の編年史。作者友安盛員は高松石清尾八幡宮の祀官。日本書紀より引用の屋島城築城記事。鑑真の千光院建立記事。貞元2年（977）官使屋島登山記事。寿永2年（1183）安徳天皇屋島行宮記事。源平合戦の概況記事（教経の武功、継信伝承、錣引、与一伝承、義盛伝承に触れる）。寛永20年（1643）5月松平頼重佐藤継信新碑建立記事、継信碑銘文を掲出する。正保4年（1647）頼重による生駒時代の相引川堤防破却の記事（「古来之名跡ヲ謂テ」）。	高松市中央図書館
D006	讃岐府志上・下（『香川叢書 巻二』所収）	七条宗貞	—	2	未調査	讃岐国の地誌。延宝・天和頃に高松藩儒臣七条宗貞により著される。上の「讃吉国」の項目で、天智天皇期の屋島城築城に言及。山川附浦池の部に「屋嶋」の項目、「高キコト数丈。絶頂平易ニシテ、而望之如堂屋。故ニ名屋嶋。海潮四ニ繞リ、危峯側植テリ」とあり。鑑真伝承、安徳天皇内裏、源平合戦、佐藤嗣信墓の墳と寛永の高松藩主碑建立、万治4年（1661）の千体仏建立等について記述。廟社附陵墓の部に「継信墓」の項目、高松藩主松平頼重の建碑記事。下の仏観の部に「屋嶋寺」の項目、鑑真堂宇建立、弘仁元年（810）空海による整備、天暦年中僧明達による「禅宇」建立・四天王像奉納、安和年中の清原孝章祈祷の記事あり。	高松市中央図書館

D：近世地誌・名所案内記（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
D007	翁嫗夜話巻之四	菊池武賢	1745	3	未調査	巻之四デジタルライブラリー NO.33-42。 佐藤次信墓／太夫黒墓／太夫黒碑銘／至徳元年信空墓参の記事／次信間諜者説の記事／射落畠／洲崎寺／立駒石／祈石／大砂子（＝錣引）／惣門／源氏ヶ峰／瓜生山。 牟礼側の源平史跡の説明あり。	香川県立図書館（香川県立図書館デジタルライブラリー）
D008	翁嫗夜話巻之四、五	菊池武賢	1745	3	未調査	巻之四、五デジタルライブラリー NO.111-122。『翁嫗夜話』巻之四・巻之五の模写本か。巻之四の記載は D007 と同じ。但し立駒石・祈石の記述箇所は異なる。 巻之五の記載。屋島寺：「山型類屋故得名焉先時山南有交綏」／不食之梨／阿吽二字・南無阿弥陀仏刻銘／二王門／二天門／櫻樹／大悲閣／獅子霊巌／屋島城／鑑真屋島寺建立の伝承／屋島寺塔頭と英公寺領寄進の記事／「屋島記」（奥村景武）／佐藤次信碑文／貞元２年官使屋島登山の伝承／宝永７年巡見使檀ノ浦来訪の記事／享保２年巡見使次信墓望見の記事／「屋島懐古二首」（桂山鶴汀）／黄牛崎／屋島浦海参名品の記事／平家蟹／長崎鼻／瞽女崎／「遊瞽女崎三首」（深井興祖）	香川県立図書館（香川県立図書館デジタルライブラリー）
D009	金毘羅参詣海陸記	今村美景謹書、大坂書林吉文字屋市兵衛・柏原屋与左衛門・堺屋忠兵衛	1778	3	未調査	「讃州之名所八栗屋嶋等見物乃望あらバ大坂にて乗船之節船宿相対して讃州高松へ船をつけさせ道筋所々見物してすぐに金毘羅へ参詣すべし」とあり。 丸亀・多度津までの航路図は本州側沿岸が詳細。屋島は饅頭型に描画され「ヤシマ」と地名表記、東隣の海面は「ダンノ浦」と記載される。 金毘羅以外の名所として、屋島寺（内裏跡＝壇の浦、那須与市駒立石・祈り石、相引の汐、空信墓参）を挙げる。	西尾市岩瀬文庫（国文学研究資料館マイクロ／デジタル資料より）

D：近世地誌・名所案内記（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
D010	続讃岐国大日記（『香川叢書 巻二』所収）	伝矢野理助継雄・伊八郎	1721～	3	未調査	承応2年（1653）から享保6年（1721）までの讃岐国の編年史。作者は高松藩士矢野理助継雄と弟伊八郎と伝えられる（『香川叢書　巻二』）。 万治4年（1661）高松藩主松平頼重による屋島寺の千体仏・十一面千手観音像造立、寺領・仏餉料寄付等についての記事。寛文13年（1673）頼重による屋島寺等10か寺への愛染明王・五代虚空蔵図像の寄付と毎年の五穀成就祈願、屋島寺観音堂等5か所への仏餉料新田5石寄進についての記事あり。	高松市中央図書館
D011	四国遍礼名所図会（『四國遍禮名所圖會并近代の御影・霊場写真』所収）	河内屋武兵衛	1800	4	未調査	阿波国阿南河内屋武兵衛作。 屋島寺への行程、屋島寺、矢倉谷、檀浦、佐藤継信墓・佐藤次信石碑、内裏屋敷、安徳天皇社、赤牛崎、大墓、義経鞍掛松、宇龍岡、駒立石、相引汐、須崎観音堂の記述あり。	愛媛県立図書館（個人）
D012	四国偏礼道指南　増補大成	宥弁（真念）､佐々井治郎右衛門刊	1815	4	16	屋島寺、佐藤継信の墓、須崎の堂（観音）、瓜生山（源氏の本陣所）の記述あり。	香川県立図書館（香川県立図書館デジタルライブラリー）
D013	金毘羅参詣名所図会 巻之六	暁鐘成	1847	4	未調査	金毘羅参詣の道中の名所、および讃岐の主要な名所を記述。暁鐘成は大坂の著作家。屋島に関する記載が豊富。「源平盛衰記」の引用が多い。 高松鎮城（島嶼・山地とともに「八島」が眺望できる「風景の勝地国中第一の繁華なり」）、南面山千光院屋島寺（獅子の嶺巌（「此地より八ヶ国を眺望して至つて絶景なり」）､屋島山（「遠方より眺む時ハ恰も家屋の如し」）之記述あり。	香川県立文書館
D014	讃岐国名勝図会巻之四下 山田郡	梶原藍渠・藍水	1854	4	26.1×19.2	D016『讃岐国名勝図会巻之四　山田郡』の後摺版で、上下巻に分かれる。内容は同じ。	高松市歴史資料館

D：近世地誌・名所案内記（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
D015	讃岐国名勝図会巻之三　三木郡	梶原藍渠・藍水	1854	4	26.1 × 19.1	巻之三は三木郡。屋島・八栗一帯は源平合戦と長宗我部氏讃岐侵攻に関する記事が中心。「源平盛衰記」の引用あり。	高松市歴史資料館
D016	讃岐国名勝図会巻之四　山田郡	梶原藍渠・藍水	1854	4	26.1 × 19.1	巻之四は山田郡。土産の項目に「海参〈屋島浦〉」「鬼面蟹〈又平家蟹とも云檀浦〉」あり。 屋島北嶺の記述で、瀬戸内海の島々・本州への眺めについて言及。「嶺巌眺望」（獅子の霊巌から２人の人物が高松城下町を含む西側の海を望む）、「檀之浦　皇居跡　次信碑　菊王丸墓　洲崎寺　駒立石　祈石」（牟礼側から屋島東麓を望む、手前に駒立石・祈石・洲崎寺、奥に菊王丸墓・皇居跡・次信碑と屋島山容を描く）などの挿絵あり。	高松市歴史資料館
D017	続々讃岐国大日記（『香川叢書　巻二』所収）	中山城山	1837 ～	4	未調査	享保元年（1716）から天保８年（1837）までの讃岐国の編年史。 文化元年（1804）屋島南辺に東照宮（現屋島神社）建立開始の記事。「井原荘司盛兼伝」の記事において、「井原荘司盛兼者冢」より霊が現われ、「雨夜則有火、自屋島来」と記述される。	高松市中央図書館
D018	標註訓点全讃史巻之九・十	中山城山	原著 1828、活字本 1890	4	未調査	文政 11 年（1828）成立の中山城山『全讃史』の活字本。九巻・十巻の合冊。十巻は名山志。 巻之十デジタルライブラリー NO.83 は名山志「屋島山」。「源平争鹿之所。名迹甚多。古伝曰。有仙人曰馬蘇〔原文返り点略〕」之記述あり。	香川県立図書館（香川県立図書館デジタルライブラリー）

D：近世地誌・名所案内記（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
D019	標註訓点全讃史巻之十一・十二	中山城山	原著 1828、活字本 1890	4	未調査	文政 11 年（1828）成立の中山城山『全讃史』の活字本。十一巻・十二巻の合冊。十一巻は名勝志上、十二巻は名勝志下。 瓜生山／土肥／土屋／湛増／源氏が峰／菜切地蔵／惣門／射落畠／大砂子／屋島（「山の形。屋宇の如し。因て号す。」屋島城築城、安徳帝内裏の記事。「古跡多し」）／血池／名号石・阿吽石／獅子霊岩／忠名屋敷／騂牛崎／鐘掛松／鞍掛松／祈石／駒立石／相引／檀浦の海鼠が記述される。	香川県立図書館（香川県立図書館デジタルライブラリー）
D020	讃岐名所略記　完	—	—	5	未調査	屋島寺の項に、鑑真堂宇建立、供鉢聖人伝承、安徳帝内裏（惣門）、屋島合戦（継信戦死、駒立石与一伝承）、継信墳墓（頼重建立の碑銘文含む）についての記述あり。	香川県立文書館
D021	讃岐志　巻之三	梶原藍渠	—	5	未調査	梶原藍渠（1762-1834）は高松の豪商。 巻之三は三木郡。陵墓の部に「佐藤次信墓」。継信伝承と合戦の動向は「源平盛衰記」を引用。「行宮」では、「源平盛衰記」のほか史書を用いて考証。	高松市立図書館
D022	讃岐志　巻之四（『大日本輿地通志』所収）	梶原藍渠	—	5	未調査	巻之四は山田郡。 仏刹の部に屋島寺（「讃岐国屋嶋千光院縁起」の引用含む）之記述あり。 文苑の部。鶴汀桂山義樹三郎左衛門「屋島懐古」、藍渠平景惇「屋嶋懐古」、佐藤次信碑文、宝剣記の本文、源襄公「屋嶋懐古」、高尾養「屋山懐古」、「登屋島」、中村文輔「屋嶋懐古」、勝苟●【草かんむりに間】「巖賦所見」がある。	高松市立図書館

E：近世地図（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
E001	海瀕舟行図下巻	—	1680	2	28.9 × 18.2	台形の島、石碑や樹木、駒立石を描く、「佐藤次信、那須与一駒立石、タンノ浦･アカハザキ･アイヒキ･惣門ノナキサ・長サキノ岬、平家ノ首実見血洗此山上ニアリ磯ゟ十八丁」。衣斐蓋子作、写図、彩色、5舗。	神戸市立中央図書館（貴重資料デジタルアーカイブズ）
E002	讃岐国絵図	—	原本1633、1936模写	2	未調査	屋島が縦に描かれており、完全に独立した島のように描かれている。山に木は描かれていないが、南嶺側に屋島寺が描かれている。左下に「鎌田共済会調査部写」とあり。鎌田共済会収集資料は現在「鎌田共済会郷土博物館」が所蔵している。	高松市歴史資料館
E003	讃岐国絵図	—	—	2	84.5 × 220.0	E002と同じヵ。島の南部に屋島寺が、北部に点線が描かれている（屋島城の石垣ヵ）。屋島の東側に「洲崎堂」とあり。木は描かれていない。	高松市歴史資料館
E004	讃岐国絵図	—	—	2	未調査	屋島が縦に描かれており、完全に独立した島のように描かれている。山に木は描かれていないが、南嶺側に屋島寺が描かれ、東側の麓には洲崎堂が描かれている。	高松市歴史資料館
E005	改正日本輿地路程全図	—	1775	3	未調査	屋島を小判型に描く。「△八シマ」と記述あり。彩色。	九州大学附属図書館（九州文化史）
E006	海瀕舟路図	—	1704 ～	3	未調査	5分冊の航路図。 1：「海瀕舟路図上之巻　乾」（摂津国大坂～肥前国平尾）。2：「海瀕舟路図上之巻　坤」（肥前国河内浦～佐賀）。3：「海瀕舟路図中之巻　全」（豊前国邉崎～筑後国小俣）。4:「海瀕舟路図下之巻　呂」(淡路国岩屋崎～伊予国串浦）。5：「海瀕舟路図下之巻　律」（伊予国伊方～脇本）。 3に屋島の描画。北嶺と南嶺を区別し山地様に描くが、北嶺は峰が2つあるよう表現されている。与一伝承、継信墓、血の池の平家首実検伝承を注記。	高松市歴史資料館

E：近世地図（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
E007	日本橋より長崎迄道中記	—	—	3	54.8 × 1816.2	江戸から長崎に至る航路を描いた画巻。享保 19 年（1734）頃の景観を表すと推定される。屋島は北西方向に突き出す岬のように表現され、「八嶌」と地名が記されている。	香川県立ミュージアム（館蔵品データベース）
E008	〔瀬戸内海航路図〕	—	1864	4	未調査	屋島の形のみ陸続きに描く。元治元年（1864）6 月浦田一郎右衛門作。大正 15 年（1926）厳原町浦田家所蔵。	九州大学附属図書館（九州文化史）
E009	讃岐絵図	—	—	4	未調査	屋島の北嶺と南嶺の高低差が描かれており、完全な台形ではない。屋島は川だけで区切られている（半島のよう）。木が描かれている。	高松市歴史資料館
E010	高松藩領絵図	—	—	4	177.5 × 74.4	屋島は川だけで区切られている。屋島寺への登山ルートが描かれている。塩田や村の石高などが詳細に描かれている。他の山とは違い、山の形が俯瞰的な視点で描かれている。「名所旧跡」「古戦場」などの記述の凡例があるものの、源平合戦関係の古戦場や名所旧跡の記述はない。	高松市歴史資料館
E011	文政七年高松藩藩領絵図（写）	—	—	4	（軸幅）82.0	屋島は川だけで区切られている。「長崎のはな」「船番所」「壇ノ浦」、山田郡の石高などの記述あり。屋島寺は描かれていない。半島のような描写。その他赤線で郡境、黄線で道、一里塚などが描かれている。	高松市歴史資料館
E012	讃岐国絵図	—	原本近世、1925 模写	5	未調査	屋島寺のようなものが描かれている。台形で、独立した島になっている。山の中腹あたりは緑色に塗られているが、山頂の方は色が塗られていない。石高が記載されているなど、E014 より詳細な記述。	高松市歴史資料館
E013	讃岐国絵図	—	原本近世、1938 模写	5	未調査	台形で、独立した島になっている。山の下側から中腹までが薄い緑、中腹より頂上までが濃い緑で塗られている。山頂にはなにも描かれていない。	高松市歴史資料館

E：近世地図（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
E014	松平讃岐守海岸線絵図の内東讃海岸絵図	―	原本近世、1938 模写	5	未調査	塩田と山のみが描かれている。「遠見在所」「長崎のはな」とあり。南嶺の頂上が平面のように描かれている。山の尾根が濃い緑で塗られ、中腹にかけて色が薄くなっている。	高松市歴史資料館
E015	讃州屋島山并ニ八栗山源平古跡図	馬嶺画	昭和復刻	5	36.0 × 78.5	屋島を陸側（高松城下側？）から鳥瞰して描いている。台形状の形で描かれている。屋島寺への参詣ルートなど、川や道などが詳細に描かれている。北嶺が見切れている。「内裏アト」「ツギノブ」「菊王丸□（墓ヵ）」「クラカケ松」「相引橋」「弓ナガレ」など、屋島の合戦の古跡を紹介している。そのために北嶺側は必要でないため、描かれていないと考えられる。	高松市歴史資料館
E016	大阪ヨリ丸亀名勝付讃州金毘羅出船所道中絵図	大坂大和屋弥三郎	昭和復刻	5	33.0 × 46.1	E017「大阪ヨリ播磨名所讃州金毘羅迄海陸絵図」とほぼ同じ。右下に「讃州　金毘羅出舩所并ニ御宿仕候　〈京都伏見早舩／諸方のり合舩〉毎日出し申候」とあり。	高松市歴史資料館
E017	大阪ヨリ播磨名所讃州金毘羅迄海陸絵図	大坂道頓堀日本橋北詰東御走宿岸沢屋	昭和復刻	5	36.2 × 54.4	絵図の左端に「やしま」とある。平面に木と建物（屋島寺か）が描かれており、屋島は台形として描かれていない。屋島の上に「讃岐富士」、左側に「象頭山金毘羅」、右側に「五けん山」が描かれており、これらの地形は山として描かれている。右下に「大阪道頓堀日本橋北詰東　御定宿岸沢屋弥吉」とあり。	高松市歴史資料館
E018	中国四国名所旧跡図（『愛媛県歴史文化博物館資料目録第 17 集 絵画資料目録』所収）	西丈	―	5	未調査	八島寺獅々之窟岸図、八島獅々カン𠮟見図（高松城下・塩田・海に浮かぶ船を描く、右上に和歌）、八島山𠮟見図（高松城、江島の図）、大和国田原本（奈良県田原本町）の仏絵師西丈が中国・四国地方の名所旧跡を描いたもの、彩色。	愛媛県歴史文化博物館

E：近世地図（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
E019	〔塩飽近海図〕（『池田家文庫総目録』(1970 年) 所収）	—	—	5	59.2 × 266.4	八島、タンノウラの地名あり。島に描く。彩色。	岡山大学池田家文庫（デジタル岡山）
E020	船路之図（『池田家文庫総目録』（1970 年）所収）	—	—	5	59.2 × 266.4	矢嶋、相引の地名あり。陸続きに描く。	岡山大学池田家文庫（デジタル岡山）
E021	備前近辺海上浦辺図（『池田家文庫総目録』(1970年)所収）	—	—	5	81.4 × 122.4	八嶋、ウロ、タテウラ、アイヒキの地名あり。島に描く。	岡山大学池田家文庫（デジタル岡山）
E022	〔瀬戸内海図〕	—	—	5	未調査	陸続き、海からみた山影を描く。「八島、壇ノ浦」、彩色。	九州大学附属図書館（九州文化史）
E023	四国北岸絵図	—	—	5	未調査	台形の島、石碑や樹木、駒立石を描く。「那スノ与一駒立石・佐藤次信・次信碑・サス堂、壇ノ浦・アメハサキ・合引・惣門ノナキサ・ソウ門アトアリ・長サキノ岬」と記述される。	九州大学附属図書館（九州文化史）
E024	讃岐国松平領海岸絵図（『歴史収蔵資料目録 十八讃岐国松平讃岐守領内諸家文書目録（三）』所収）	瀬戸内海歴史民俗資料館	—	5	屋島東手（18 × 79）屋島長崎之鼻（107 × 118）	高松藩の海岸を描いた地図。	高松市中央図書館
E025	讃岐国古絵図	—	—	5	78.6 × 119.5	相引川が大きく描かれており、島のようになっている。北嶺と南嶺だけでなく、中央が盛り上がってる 3 つの山から成っているように見え、中央部分に「レイガン」とあり（「獅子の霊巌」のことヵ）。南側には「塩濱」とあり。北端に「遠見番所」「長崎ノ鼻」「コセガハナ」とあり。	高松市歴史資料館

E：近世地図（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
E026	四国寺社名所八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.1）	板本青々堂	—	5	35.6 × 47.8	北西から見た台形状の屋島。頂上に建物（屋島寺か）。	香川県立ミュージアム
E027	四国八十八箇所順拝略図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.2）	—	—	5	38.2 × 53.5	屋島図像なく「八十四やしま寺」と記載。	香川県立ミュージアム
E028	象頭山参詣道四国寺社名勝八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.3）	金毘羅小坂美玉堂	—	5	35.6 × 47.8	屋島図像なく「八十四やしまじ」と記載。東の海岸に「だんの浦」と表記。	香川県立ミュージアム
E029	四国徧礼［地図］（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収 No.4）	—	—	5	38.2 × 53.5	「八十四やしまじ」と記載。山地と思しき緑色表現があるが不明。	香川県立ミュージアム
E030	四国徧礼［地図］（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.5）	大坂書林柏原屋清右衛門・仝与市版	—	5	40.6 × 53.4	台形の屋島（東海上から見た形か）。「八十四や嶋寺」と記載。	香川県立ミュージアム
E031	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.6）	—	—	5	35.0 × 50.2	屋島図像なく「八十四八嶋寺」と記載。「つぎのぶ」と記された五輪塔の表現あり。	香川県立ミュージアム
E032	四国徧礼絵図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.7）	大坂書林佐々井治郎右衛門刊	—	5	63.4 × 99.0	南北に長い小判形の島としての屋島。樹木の表現あり。史跡の存在や地名は画像が粗く判読できない。	香川県立ミュージアム
E033	四国八拾八ヶ所道案内記百万遍開元（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.8）	板所谷一	—	5	52.9 × 48.9	屋島は頂部がやや尖った扁平な山地として表現。「八十四や嶋寺」と記載。	香川県立ミュージアム
E034	四国寺社名勝八十八番（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.9）	板本峯右衛門	—	5	36.0 × 67.0	台形の屋島（北西海上から見た形か）。「八十四や嶋寺」と記載。E030 の類板か。	香川県立ミュージアム

E：近世地図（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
E035	丸亀ヨリ象頭山四国八十八番寺社名勝（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.10）	板元作壽堂	—	5	35.8 × 47.9	屋島図像なく「八十四やしまじ」と記載。東の海岸に「だんの浦」と表記。E028 の類板か。	香川県立ミュージアム
E036	南海道四国八十八ヶ所順拝図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.11）	—	—	5	34.5 × 47.2	屋島図像なく「八十四（ヵ）　やしま寺」と記載。	香川県立ミュージアム
E037	四国八十八箇所順拝略図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.12）	—	—	5	33.5 × 47.0	屋島図像なく「八十四　やしま寺」と記載。E036 の類板か。	香川県立ミュージアム
E038	四国八十八箇所偏礼絵図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.13）	—	—	5	35.3 × 52.2	樹木の生えた丘陵のような屋島表現。「八十四八嶋寺」と記載。	香川県立ミュージアム
E039	四国順拝御土産絵図（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.14）	—	—	5	36.4 × 48.2	屋島は頂部がやや尖った扁平な山地として表現。「八十四や嶋寺」と記載。E033 の類板か。	香川県立ミュージアム
E040	四国偏礼［地図］（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.15）	明石寺茶堂	—	5	42.8 × 53.8	屋島は頂部がやや尖った扁平な山地として表現。「八十四や嶋寺」と記載。E033・E039 の類板か。	香川県立ミュージアム
E041	四国偏礼［地図］（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.16）	虎屋喜代助版	—	5	40.0 × 53.0	屋島は扁平な岩山状に描かれる。「八十四や嶋寺」と記載。E033・E039・E040 の類板か。	香川県立ミュージアム
E042	四国偏礼［地図］（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.17）	—	—	5	38.0 × 53.0	屋島は扁平な丘陵として描かれる。「八十四や嶋寺」と記載。E033・E039・E040・E041 の類板か。	香川県立ミュージアム

E：近世地図（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
E043	四国徧礼［地図］（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.18）	—	—	5	42.7 × 53.9	屋島は台状の丘陵として描かれる。「八十四や嶋寺」と記載。E033・E039・E040・E041・E042 の類板か。	香川県立ミュージアム
E044	四国徧礼［地図］（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.19）	—	—	5	42.2 × 53.8	屋島図像なく「八十四や嶋じ」と記載。E030 の類板か。	香川県立ミュージアム
E045	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No20）	明石寺茶堂	—	5	33.4 × 43.7	屋島図像なく「八十四八嶋寺」と記載。	香川県立ミュージアム
E046	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.21）	四十三番札所ヵ	—	5	36.8 × 48.3	屋島は扁平な丘陵として表現される。「八十四や嶋寺」と記載。E033・E039・E040・E041・E042・E043 の類板か。	香川県立ミュージアム
E047	〔四国八十八箇所地図〕（岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.22）	—	—	5	37.8 × 48.5	屋島は台状の丘陵として描かれる。八栗山の裾が海岸線として屋島につながっているため、東に向かって屋島・八栗を眺望した際の様子にも見える。「八十四や嶋寺」と記載。E033・E039・E040・E041・E042・E043・E046 の類板か。	香川県立ミュージアム
E048	四国八十八箇所順拝略図（讃岐金毘羅沽哉堂刊「金毘羅案内記」口絵、岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.23）	讃岐金毘羅沽哉堂刊	1812	4	19.5 × 27.7	屋島図像なく「八十四　やしま寺」と記載。	香川県立ミュージアム
E049	四国徧礼略図（十返舎一九「四国徧路独案内」挿絵、岩村武勇編『四国遍路の古地図』所収、No.24）	十返舎一九	1821	4	18.4 × 12.7	遍路ルートの概略図。屋島図像なく「八しま（ヵ）」と記載。	香川県立ミュージアム

Ｆ：近世行政

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
F001	生駒一正寺領安堵判物（『新編 香川叢書 史料編 2』所収）	屋島寺	1601	2	未調査	「屋島寺文書」生駒讃岐守一正から屋島寺。寺領 25 石。	高松市中央図書館
F002	論義興行寺院廻状（『新編 香川叢書 史料編 2』所収）	善通寺	1611	2	未調査	「善通寺文書」弘憲寺・誕生院が屋島寺等に廻状。	高松市中央図書館
F003	生駒高俊制札（『新編 香川叢書 史料編 2』所収）	屋島寺	1627	2	未調査	「屋島寺文書」寛永 4 年（1627）1 月 14 日、三野四郎左衛門榮政・疋田右近から屋島寺。屋島山伐採禁止。	高松市中央図書館
F004	請取申御合力米之事（『新編 香川叢書 史料編 2』所収）	—	1667	2	未調査	「生駒家宝簡集坤」。矢島御蔵米。	高松市中央図書館
F005	生駒一正寄進状（『新編 香川叢書 史料編 2』所収）	屋島寺	—	2	未調査	「屋島寺文書」3 月 4 日、讃岐一正から佐藤掃部。屋島寺堂の建立に際しての寄進。	高松市中央図書館
F006	高屋某書状（『新編 香川叢書 史料編 2』所収）	屋島寺	—	2	未調査	「屋島寺文書」11 月 13 日、高屋掃から屋島寺宛。屋島寺領荒起分赦免。	高松市中央図書館
F007	多度津公御領分寺社縁起（『新編 香川叢書 史料編 1』所収）	—	—	5	未調査	文治元年（1185）10 月去年の事として義経が、八嶋より西海へ渡るとき神前において願状を書すという記述。	高松市中央図書館
F008	御領分中宮由来・同寺々由来（『新編 香川叢書 史料編 1』所収）	—	—	5	未調査	片本村氏宮八幡に檀ノ浦の記述。海蔵院、屋島寺の由緒と末寺の記述。	高松市中央図書館
F009	寺社記（『新編 香川叢書 史料編 1』所収）	—	—	5	未調査	屋島寺の寺領などの記述。	高松市中央図書館
F010	英公日暦	—	—	5	未調査	全六冊からなる。讃岐高松藩が松平頼重の日常生活を記録した日帳をもとに、江戸時代後期に整理編集したもの。	香川県立図書館

G：近現代文芸（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
G001	讃岐名勝地誌	廣井鏡涯、高松宮脇仲次郎	1899	6	未調査	郡別記述。山田郡の部「屋島山」の項目には、「其形屋状を為す、故に名を得たり」「此山たるや形状の奇異と、風光の曠濶と、歴史上の故蹟とを兼有するを以て、讃州に遊ふ者必らす登覧を為し、日本勝区の一として世人の熟知せるところなり」と記す。 古記引用の箇所、奥村影武「屋島記」（延享２年９月28日、原漢文）には源平合戦史蹟めぐりの様子を記し、「山嶽の神秀にして南国の壮観なり」「其状や遠く之を望めは則ち彷彿として比屋の如し、故に名つく」との記述などがある。賀崔庵梅晴「屋島八景」を掲げる（6つのみ）。 巻頭に「高松市街ヨリ屋島遠望」と題した、市街西側からほぼ真東を眺めた屋島の写真あり。	高松市中央図書館
G002	讃岐史要 完	黒木安雄著、宮脇開益堂	1900	6	22.5×15.2	日本書紀の記事を引用した屋島城の記述。「寿永の役」の項目における屋島合戦の記述あり。那須与一の記述あり。	香川県立ミュージアム
G003	讃岐風景論及讃岐人性論	長尾藻城、讃岐開益堂	1902	6	未調査	讃岐長尾藻城著「讃岐風景論」に「東に源平古戦場あれば…」とあり。「安徳天皇と屋島　寿永の役」の一節あり。「讃岐」を日本三景と対比、「讃岐を以て日本の公園なりと評せん」。「屋島と八栗、不幸にも其源平の古戦場たると、空海上人開基の霊場たるとにより、端なく歴史上の古跡として世人の為に知られ、風景上よりしての名天下に現はれざるものは余の大いに遺憾とせるところなり、世の所謂名勝古蹟なるもの一たび其境を過ぎれば転た声誉の大に驚かずんばあらず、然るに我八島と八栗に於て其感を異にするなり」 「屋島山上風景最も絶佳なる所、曰く獅子霊巌、曰く談古嶺」とし、獅子の霊巌については「三備の連峯」「阿讃の山脈」「白峯山と紫雲山」「玉藻城」「人煙稠密たる高松市街新港附近の光景」「眼に余る大海原…大小の島嶼…黒煙吐く蒸気船、白旗挙ぐ北前船、木の葉	高松市中央図書館

G：近現代文芸（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						に似たる漁舟、碁盤に似たる塩田」を眺望として掲げる。談古嶺については、平氏敗北に思いを馳せつつ、「水天彷彿たる播州洋、雲か山か淡路の島、模糊一帯の濃抹は或は是れ舞子の浜ならずやは」と評する。 讃岐漆谷山人著「獅子霊巌」に、談古嶺からの源平古戦場の風景に関する記述。讃岐赤松椋園著「屋山懐古」に、源平合戦古蹟の紹介とともに那須与一伝説が記される。	
G004	讃岐名勝栞	矢原理平	1907	6	未調査	郡毎に名所・伝承を記述。 三木郡の頁に墓表文を含む佐藤継信の記事あり。 山田郡の部に「八島山懐古」の項目あり。「八島山者讃之霊区也」とし、天智天皇による屋島城の事績を踏まえ、「天然之為金城鉄壁足禦百万強兵可謂神勝之地理也、因以元暦中平氏奉安徳帝於茲建禁殿玉階之鳳闕謂八島御所」と記す。	高松市中央図書館
G005	屋島と壇の浦	市原隆作、文成社	1911	6	未調査	写真に屋島山及屋島神社あり。 第九節「戦局屋島に移る　逆櫓の事」に、「屋島は高松の北にある菱状形の半島にして、長径五十町程」とあり。 「史蹟めぐり三　屋島」の章に屋島の形状を「屋棟形、カマボコ形、とに角行儀の好い島だ、美しい山容島影、向かって右の端に絶壁が見える。岩層に生えてる矮松の風致は絵画のやう」と記述。「要するに、屋島台は史蹟として観るべきものが稀だ。求むるならば旗亭可祝の眺望と、談古嶺から五剣山、壇の浦を見晴らしたところである。史蹟でなくて風景だ」「形からいへば……女性らしい屋島と、男性らしい五剣と」。	高松市中央図書館
G006	綾歌郡史	福家惣衛	1923	6	未調査	P.83 ～ 86 に屋島合戦の記述。奥付に「昭和三十一年八月　高松市図書館筆写」とあり。	高松市中央図書館

G：近現代文芸（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
G007	花袋行脚 ： 史蹟名勝	田山花袋	1924	6	19	「大里から屋島へ」「屋島と白鳥陵」に源平合戦の史跡紀行。	国立国会図書館近代デジタルライブラリー
G008	讃岐通史	—	1926	6	19.2 × 13.0	「第三章　屋島及び城山の築城」に屋島城、「第十二章　源平の二氏」に屋島合戦の考察あり。「引用書」を末尾に記載している。「讃岐歴史地図」の折込図がある。	香川県立ミュージアム
G009	八嶋内十一ノ二	廿四世観世二滋	1926	6	22.5 × 16.9	芸能の曲について。 図像資料なし。	高松市歴史資料館
G010	海の国立公園点描	野口文治編、高松瀬戸内海国立公園新聞社	1933	6	未調査	高松湾と北嶺・南嶺を鳥瞰。「瀬戸のベニス」の見出しのもと、高松音頭の歌詞があり、国立公園指定を前に、昂揚した気分がうかがえる。	高松市中央図書館
G011	讃岐文芸読本	香川県女子師範学校郷土研究室	1933	6	未調査	屋島に関する能、狂言、舞、随筆、浄瑠璃、俚謡、川柳が集められる。	香川大学図書館
G012	現代展望 郷土史	池澤蓼谷	1934	6	未調査	「現代展望木田郡」に 1934 年の屋島町の町勢、屋島登山鉄道、名勝旧蹟を記述。	香川大学図書館
G013	讃岐郷土読本	讃岐郷土研究会	1934	6	未調査	屋島に関する文芸作品・新聞・記録、鶴駕行啓（香川新報、明治 36 年 10 月 10 日大正天皇）／王城他和歌／朝の海、吉田鉉二郎（戦前の小説家、「煙れる田園」感想集 新潮社 1933）／讃岐の天然記念物（香川県史蹟名勝天然紀念物調査報告）／屋島の月、藤井高尚（江戸後期の国学者、「松屋文後集」）／与謝野晶子・与謝野寛和歌／山荘雑記、荻原井泉水／四国遍路、近松門左衛門（嵯峨天皇甘露雨）／同行二人碧眼巡礼、グレン・ショウ（大阪朝日新聞、グレン・W・ショー、1886 米国生、1916 年に来日。山口高等商業学校などで英語教師、日本文学の翻訳紹介）／尾上柴舟和歌／お国自慢、椎名六郎（1932 年 8 月 15 日朝日グラフ、昭和時代の図書館学者、1943 年香川県立図書館長）	香川大学図書館

G：近現代文芸（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
G014	讃岐名勝俳句	四國民報社	1934	6	未調査	写真あり。東から手前に庵治の港、奥に屋島北嶺を配置。 海の国立公園編入にともない、四国民報社が二十景を選定し「俳句と共に永遠に顕彰したい目的」で俳人の句を選び選集とする（選者村尾公羽氏）。巻末に「祝発刊 屋島保勝會」とあり。	高松市中央図書館
G015	屋島史 第３集	岡田唯吉、坂出鎌田共済会調査部	1941	6	未調査	写真に「屋島ノ南麓黄牛崎」あり。 「瀬戸内海に於ける備讃海峡の要地として交通上軍事上等に最も多く利用せられた為、古今の史蹟に富んで居る」「山上は、瀬戸内海東半の眺望佳絶で彼日本三景の一たる松島に比して景か頗る雄大で所謂大松島ともいふべき処で、且つ其山形が甚だ奇しく、美しい所から」。 「屋島山の成因」の節、鎌田共済会主事岡田唯吉の執筆「屋島山の基礎は花崗岩で、畳石〈古銅安山岩〉が載つて居る」「板状節理」「山頂の雪庭は凝灰岩といひ火山岩の凝固したもので屋島山がまだ水底にあつた時に堆積したもの」、北峯の北端は花崗岩上に角礫凝灰岩、その上に古銅安山岩が載っている三層構造と説明（同節末尾に「杉原鶴吉氏調」と記載）。	高松市中央図書館
G016	香西家文書１（屋嶋檀浦合戦縁起）	―	1888 模写	6	未調査	G034 屋島のあゆみに収録されている「屋嶋檀浦合戦縁記　全」とほぼ同一。90 に「屋嶋之城を見渡セハ嶋廻り廣海」。那須与一が扇を射抜く場面、継信最期の場面、義経弓流しの場面□（「勇」ヵ）々として厳石雲に無」。	香川県立文書館
G017	東海紀行	正岡子規	1883	6	未調査	子規が上京する船の中から、屋島を眺め漢詩を詠む。	国立国会図書館デジタルコレクション
G018	讃州府志	増田休意輯述、梶原竹軒増補	1915	6	未調査	『翁嫗夜話』の増補訂版、可小桜、仰之碑、談古嶺、屋島焼など増補。香川新報社。	香川大学図書館
G019	讃岐伝説風土記１	荒井とみ三	1952	7		牟礼村、六万寺、・・・、193-211 頁／庵治村、平家の船隠し、俚謡思ひだより、218-221 頁。	香川大学図書館

G：近現代文芸（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
G020	讃岐の歴史	堀川碧星、琴平町植松書房	1953	7	未調査	イラスト入りで屋島を紹介。源平合戦、扇の的の記述あり。イラストは西側から見た屋島で手前に帆船が描かれる。	高松市中央図書館
G021	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7	未調査	学術・技芸・趣味、亀山八景の読み下し。445-447 頁。	香川大学図書館
G022	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7	未調査	附録年表、佐藤次信の碑、屋島相引川の堤防。612-615 頁。	香川大学図書館
G023	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7	未調査	神仏の崇敬、屋島寺。314 頁。	香川大学図書館
G024	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7	未調査	藩政、相引川の復旧、寛永 10 年（1633）高松付近地図。188-193 頁。	香川大学図書館
G025	高松藩祖松平頼重伝	松平公益会	1964	7	未調査	逝去とその後、屋島神社へ合祀、529-530 頁	香川大学図書館
G026	讃岐の史話民話	福家惣衛、高松上田書店	1968	7	未調査	「阿波に伝わる屋島の禿狸」の伝承を紹介する。この伝承は、かつて屋島住み、源平の合戦を見たとされる禿狸の話である。	高松市中央図書館
G027	古高松郷土誌	古高松郷土誌編集委員会編	1977	7	未調査	屋島合戦の記録（『六万寺記』『讃陽綱目』「平家造屋島皇居記」『南海通記』『通考』）、鞍掛松、継信の墓、菊王丸墓、祈り岩、駒立石、鋏引、大砂子、弓流、古高松小学校、屋島中学校等の校歌歌詞に屋島、屋島神社、名勝・旧跡（鞍掛松、相引川、赤牛崎）、加藤飯山漢詩「屋嶺」あり。	高松市中央図書館
G028	栄光ある転進 −屋島の塩田・蘇生の記録−	高松市屋島土地区画整理組合	1980	7	未調査	「屋島城跡の調査も進む」、「観光屋島をＰＲする源平まつり」の写真が挿入されている。	高松市中央図書館
G029	栗林郷土誌	栗林郷土誌編集委員会	1996	7	未調査	源平合戦にゆかりの矢止松神社。	高松市中央図書館
G030	平家物語	水上勉・梶原正昭、学習研究社	1998	7	未調査	平家物語の現代語訳と、合戦図屏風などの絵画の解説、平家物語に関連する現地のガイドなどがある。現在の屋島の写真と共に、アクセスの方法などの記述もある。	香川県立図書館

G：近現代文芸（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
G031	秋風遍路、四国路の与謝野寛・晶子	菊池寛記念館編	2007	7	30	与謝野寛・晶子の屋島関連歌、昭和 6 年（1931）10 月 29 日屋島来訪時。	香川大学図書館
G032	源平盛衰記絵本をよむ　源氏と平家合戦の物語	石川透・星瑞穂、三弥井書店	2013	7	未調査	挿絵のなかに、屋島での合戦を描いたものあり。うち「扇の的」を題材にした絵あり。	香川県立図書館
G033	源平合戦とその時代	香川県歴史博物館	—	7	未調査	「屋島合戦にいたる源平両軍の軍略」にて源平合戦に関する記述あり。源平合戦を題材とした絵画資料を多数掲載。「扇の的」「弓流し」を題材にした絵画有り。屋島寺所蔵の「屋島合戦図」に東側から見た南嶺が描かれる。	高松市中央図書館
G034	讃岐観光俳句集	讃岐観光俳句委員会、四国民芸社	1950	7	未調査	讃岐の諸地域を読んだ俳句集。屋島の項のとびらにイラスト、近景にマツ、遠景に東側からみた屋島北嶺。俳句の文言:景観イメージに関しては「(朝) 霧」「(春) 霞」「雲」「時雨」「雨」「月の屋島のおぼろなる」「煙 [塩田に由来]」「(屋島) 山」「落葉」「(屋島) 駕籠」「茶屋」「土器投げ」「遍路」などの表現が多い。源平合戦関連では、「平家墓 (塚)」+ 虫類表現、「古城 (城のありし)」などの表現。形状に関しては「鳥わたる屋島の尾根のくぼむ上」「村の上の屋島二峰」などの表現。	高松市中央図書館
G035	屋島のあゆみ	大石一句編、高松大石一句	1980	7	未調査	「屋嶋檀浦合戦記全」全文。「屋島檀浦合戦縁起解説」あり。 「屋島」の項。屋島の語源に「屋島は初め、八尋島（平安時代）といっていたが後に（徳川時代）に八島となり、さらに山容が屋根の形をしていることから屋島となった」との説を掲げる。地質学に基づく形状の説明。 「屋島と檀の浦」の項。「屋根の形をした熔岩台地」「昔の源平合戦の史蹟で全国に知られ、海上からみても陸上からみても形のめずらしい山として観光客の目を楽しませる」。屋島合戦の経緯は事実を中心に記す。屋島城の項目あり。	高松市中央図書館

G：近現代文芸（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
G036	古城跡を訪ねて	秋山忠、高松歴史民族協会、高松文化財保存協会	1982	7	未調査	「峰山から屋島を望む」と題した、南西からの屋島全景写真。 項目名「屋島城跡～備讃瀬戸をにらむ古代の朝鮮式山城～」。地形学、考古学的記述を交えた復原考証。 「景勝地屋島は、華々しい戦乱絵巻をくり広げた源平の古戦場としてよく知られている。しかし、そのひと昔前にもう一つの歴史があったことを知る人は少ない」。「屋島は、その名のとおり、古くは内海に浮かんだ屋根形の島であった」。「多くの人は平家物語の舞台となった源平の古戦場の方に心ひかれるらしい。天智朝の昔は、もう遠い歴史の彼方へ押しやられてしまったのだろうか」。	高松市中央図書館
G037	新版 香川の歴史ものがたり	「香川の歴史ものがたり」刊行委員会、日本標準	1988	7	未調査	目次に、西から見た屋島北嶺（南嶺の一部含む）と佐藤継信の墓の写真。讃岐国の平易な絵入り通史。 中世の項目を「戦いにあけくれる讃岐国」と題し、扉に源平合戦絵図の写真を掲載する。 「1　屋島のたたかい」では那須与一伝承を大きく取り上げ、騎射の場面の挿絵に屋島と思しき島影を描く（ただし形状は不明瞭）。同項目末尾に総門跡・いのり岩の写真を掲げる。	高松市中央図書館
G038	さぬきの民踊	島田雅行、四国民踊研究会	1990	7	未調査	114 ～ 145 頁に「嗚呼・南海の古戦場」(1)、116 ～ 118 頁に「春の夢の賦」(2)、119 頁に「源平音頭」(3)、120 ～ 121 頁に「源平ながし」(「香川県観光協会・高松市観光協会推せん」と添える) (4)、122 ～ 123 頁「源平ながし唄」(屋島八〇〇年祭実行委員会・高松観光協会・香川県観光協会・四国共同キャンペーン委員会推せん」と添える) (5)、124 ～ 125 頁に「新屋島音頭」(6) を収録し、それぞれ歌詞と写真入りの振り付けを掲載。(1) は談古嶺や「弓流し」の文言をもって古戦場が唄われる。(2) は平氏敗戦の悲哀を主題とする。(3) は	高松市中央図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						源平合戦関連の人物・エピソードを踏まえた恋模様の歌。(4) は継信の最後・那須与一騎射・景清の錣引・弓流の各伝承を歌詞に織り込む（与一伝承に歌詞の多くを割く）。(5) は (4) の一部改編版（錣引・弓流を欠く）。(6) は与一騎射伝承・屋島寺の狸・食わずの梨・八栗五剱山・弓流し伝承になぞらえた恋模様の歌。	
G039	さぬき古寺を訪ねて	四国新聞社編、高松　四国新聞社	1960 ～	7	未調査	新聞の 1 コーナー、屋島寺を取り上げる。「眼の下には謡曲「屋島」に謡われた史跡檀〔ママ〕ノ浦が展開する」とし、「屋島」の一節を引用。 現代の文体である上「さる三十二年から解体、三年間かけて大修理」とあり、昭和 35 年（1960）以降と推定される。PDF では文章が一部欠損、ただし原資料の状態に由来するか。	高松市中央図書館
G040	屋島を訪ねて（A First Visit to Yashima）	エドマンド・ブランデン	1949	7	英文：25.5 × 19.6 和訳：11.5 × 19.6	休憩所らしきイラストを除き図像なし。獅子の霊巌からの風景描写ヵ。	高松市歴史資料館
G041	屋島の浮草浪枕	—	—	7	24.0 × 16.8	艶本の類ヵ。屋島そのものに関する記述はなし。壇ノ浦の合戦に関する記述。	高松市歴史資料館
G042	高松藩緒達留	—	ー	7	未調査	『香川県史資料編第九巻　近世資料Ⅰ』所収。松平頼恕治世下の史跡保護の触が掲載される。	高松市中央図書館
G043	讃岐景勝詩歌	—	—	5	未調査	『香川県史別編Ⅰ資料編　第十五巻　芸文』所収。松平頼重・岡部拙斎・三千舎桃源・中村三蕉の屋島に関する詩歌が掲載される。	高松市中央図書館

H：近現代絵画（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
H001	第百十四銀行盛業之図	三井淳生	1887 頃	6	未調査	明治 14 年に設立された国立百十四銀行の後ろに屋島が描かれてる。	高松市歴史資料館
H002	源平矢嶋大合戦之図	月岡芳年	1889	6	三枚続	「源平矢嶋大合戦之図」というタイトルだが、内容は壇の浦合戦である。	神戸市立博物館
H003	八嶋壇ノ浦合戦義経八艘飛之図	月岡芳年	明治時代	6	三枚続	八艘跳びをメインとした図か。	高松市歴史資料館
H004	悪七兵衛景清　三保谷四郎国俊　錣曳の図	楊齋延一	1893	6	三枚続	手前の陸地に錣引の場面が描かれる。マツが一本。奥に海があり、その向こうに山が表現されるが、五剣山等の山容ではない。	神戸市立博物館
H005	屋島之役	橋本周延	1898	6	三枚続	継信最期の場面が大きく描かれる。	高松市歴史資料館
H006	錦絵讃岐名所	宮脇忠次郎	1901	6	28.2 × 19.4	讃岐の名所の錦絵が全 12 枚セットになっている。袋の表には飯山と玉藻城が描かれる。 屋島に関係する錦絵は以下の 1 枚。 〔讃岐名所［屋嶋・五劔山八栗寺・獅子霊巌］〕：メインの絵は屋嶋と題され、屋島寺の本堂が描かれる。本堂前には参拝客が多数描かれ、巡礼している人も描かれる。右上には別枠で五劔山と八栗寺が描かれる。左下にも別枠で獅子霊巌と展望台が描かれる。	京都府立大学
H007	錦絵讃岐名所	—	1901	6	未調査	香川県の名所 12 箇所を描いた錦絵。屋島寺と五剣山を組み合わせた 1 葉がある。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
H008	那須与一	中村岳陵	1906	6	一幅	扇の的へ向かって進む那須与一を描く。	個人蔵
H009	平景清	中村岳陵	1906	6	一幅	景清を描く。	個人蔵
H010	源平八嶋大激戦之図	国臣	明治時代	6	三枚続	「源平八嶋大激戦之図」とあるが､壇の浦合戦の状況（八艘跳び）である。	高松市歴史資料館
H011	屋島合戦画帖	邨田丹陵	明治時代	6	一帖	屋島合戦を主題とした画帖。扇の的、錣引、弓流、継信最期、屋島遠景などが収められる。	高松松平家歴史資料

H：近現代絵画（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
H012	源平盛衰記（玉虫前と与一）	橋本周延筆	明治時代	6	35.8 × 23.6	全3点。屋島に関連するのは以下の1点。枝番1：与一が左奥、玉虫前が手前右に描かれ、屋島は描かれていない。	高松市歴史資料館
H013	平家物語図屏風	—	明治時代	6	六曲一双	橋合戦・一谷合戦の隻と屋島・壇ノ浦合戦の隻。扇の的が描かれる。	サンフランシスコ・アジア美術館
H014	源平合戦図絵巻	—	明治時代	6	一巻	源平合戦のエピソードを描く。「扇の的」ほか11の場面が含まれている。	高松市歴史資料館
H015	屋島合戦の図	村田丹陵筆	近代	6	一幅	左（平家方源氏軍の急襲に驚き応戦の準備の図）、右（源氏の軍勢旗鼓堂々屋島へ進攻の図）。	屋島寺
H016	元暦元年三月屋島壇浦源平合戦図	—	—	6	118.8 × 77.5	もとは屋島寺所蔵の宝物の一つ。「右図ハ土佐家ノ筆ニシテ当寺宝物ノ随一ナリ爰ニ謄写シ印刷シテ左ニ凡例ヲ掲ケ以テ其概略ヲ指ス委ハ縁起（古筆ニ藝アリ）ニアリ」とある。凡例には絵に登場する人物や旧跡の解説がある。屋島は台形に描かれており、南嶺と屋島寺のみが描かれている。	高松市歴史資料館
H017	那須与市扇の的	—	—	6	一幅	扇のほまれ、船の舳に立てるは平家方の女房玉虫の前、日の丸の扇を射るは源氏方の弓の名手那須與市宗高。左（那須与市）、右（日の丸の扇）。	屋島寺
H018	図説日本の古典9 平家物語	永積安明、集英社	1979	7	未調査	「源平合戦図屏風」「平家物語　一の谷・屋島・壇の浦合戦図屏風」。屋島自体と分かる描写なし。	香川県立図書館
H019	〔讃岐図会〕	—	—	7	39.5 × 66.6	全てイラスト。近景に高松城・市街、遠景に屋島、五剣山の背後に檀の浦、塩田のある海と矢を射る那須与一、屋島寺のカットが描かれる。	香川県立ミュージアム

Ⅰ：写真・絵葉書（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I001	讃岐名勝真景	編輯兼発行者安藤貞吉	1898	6	39.5 × 48.2	明治 31 年（1898）4 月 12 日発行の風景写真集（一枚もの）。獅子の霊巌からの眺望写真。「高松市全景」の写真右奥（北東方向）に屋島が写る。	香川県立ミュージアム
I002	［絵葉書］御大典奉祝屋島山上五重大塔　建設記念屋島宝物絵葉書	岡部茂太郎	1915	6	9.2 × 15.5	2 枚（説明書きあり）表紙裏面に「御即位大禮記念塔建設會々則」とあり。 1：土佐光信「源平屋島合戦之図」右上に屋島のような台形の記述あり。	高松市歴史資料館
I003	新桟橋写真帳	寄贈品	1922	6	未調査	大正 11 年から始まった高松築港工事を記録した写真帳。それぞれにこの工事に関係したと思われる人物についてペン書きの説明があり、資料性が高い。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
I004	源平古戦場讃岐屋嶋名所全景	前川清太郎	1925	6	未調査	冊子になった絵はがき。屋島内の名所。	香川県立図書館
I005	全国産業博覧会絵葉書	—	1928	6	未調査	博覧会場の後ろに屋島が描かれる。	高松市歴史資料館
I006	讃岐源平古戦場 屋島名所絵はがき	—	1918 ～ 1929	6	9.2 × 14.2	8 枚。 袋には屋島全景のイラストあり。 絵葉書自体は屋島内の名所中心で、屋島全景のものはない。	高松市歴史資料館
I007	［絵葉書］屋島	—	1918 ～ 1929	6	（絵葉書）9.0 × 13.8（パノラマ）8.9 × 28.5	8 枚。絵葉書 2 枚が繋がったものが 4 点ある。 枝番 1 は屋島全景が写っており、「Sanuki YashiMa MEisho.　讃岐屋島名所　東面セル屋島ノ勝景」とタイトルがつけられている。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I008	［絵葉書］讃岐源平古戦場屋島名所絵葉書	—	1918～1929	6	9.3×14.1	8枚。袋には高松城と屋島のイラストが描かれている。着色あり。屋島内の名所中心。枝番5は屋島全景で「GuidE of YashiMa thE BattlE fiEld of GEnji and HEikE.　（讃岐）源平古戦場　屋嶋山の曙」というタイトルがつけられている。	高松市歴史資料館
I009	［絵葉書］源平古戦場説明入 讃岐屋島名所全景	—	1918～1933	6	14.5×9.0	13枚（内1枚熊野本宮）。表紙は弁慶が長刀で井戸を掘った故実の図像。平家物語などで登場するシーンの場所の写真。源平合戦のなかでの叙述が大半で、風景を中心とするものは枝番13の長崎の鼻のみ見受けられる。	高松市歴史資料館
I010	［讃岐屋嶋名所はがき］	—	1918～1933	6	9.0×14.0	12枚。屋島内の名所の写真。屋島全景を捉えたものはない。	高松市歴史資料館
I011	陸軍特別大演習記念絵はがき	—	1922～	6	14.1×9.1	「屋島山遠景 大本営披雲閣」と印刷がある。 帆船、灯台の島、屋島を組み合わせた構図。屋島は北嶺と南嶺が写る。披雲閣が陸軍特別大演習の大本営となったのは大正11年（1922）のことである。	香川県立ミュージアム
I012	［絵葉書］（讃岐高松）屋島公園	—	1922ヵ	6	9.0×14.0	9枚。屋島から見える風景の写真と、高松港および屋島東（庵治ヵ）側からの屋島全景の写真。枝番5と9が屋島全景をとらえたもので、5は庵治側から撮影されたとみられる。船、釣り人、風景を眺める人物が映り込んでいる。右上に「屋嶋登山紀念 11.11.21　談古嶺」というスタンプが押されている。このスタンプの上部には屋島の台形が表現されており、下部には駕籠で登頂する様子が描かれている。枝番9は高松港から撮影されたもので、他の絵はがきに比べ屋島の南端近い部分まで写り	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						込んでいる。手前には風景を眺める人物がひとり配置されている。右上に同様のスタンプが押されている。 年代はスタンプにより推定。	
I013	［絵葉書］讃岐　高松　屋島公園　七景	小倉屋發行	1923 ヵ	6	14.1 × 9.0	6 枚。屋島内の名勝中心、屋島全景の絵葉書なし。 年代はスタンプにより推定。	高松市歴史資料館
I014	［絵葉書］屋島	—	1927 ヵ	6	9.0 × 13.8	12 枚。3 種混在か。屋島内の名所中心で、屋島全景の絵葉書なし。 年代はスタンプにより推定。	高松市歴史資料館
I015	［絵葉書］〔屋島名所〕	—	1929 ～ 1933	6	9.2 × 14.0	16 枚。屋島内の名所中心。 枝番 11 は「屋島古戦場平家蟹」で、平家蟹と風景が共存。 枝番 12 が屋島全景で、屋島の手前には松、船、岩が写っている。	高松市歴史資料館
I016	［絵葉書］讃岐屋島名所	—	1930 ヵ	6	9.0 × 14.0	8 枚。屋島内の名所の写真。 枝番 8 は屋島寺境内に積雪した時の写真。 年代はスタンプにより推定。	高松市歴史資料館
I017	〔屋嶋記念はがき〕	—	1930 ヵ	6	8.8 × 13.9	8 枚。 高松港からの屋島全景とケーブルカー、屋島山上からの風景の写真。枝番 1 が高松港から見た屋島全景。「屋嶋ヲ高松湊ヨリ望ム屋嶋ハ昔八ひろ嶋ト云ヒ中古ニハ八嶋ト傳フ山容ハ屋根ニ似タルヲ以テ屋嶋ト書く」というキャプションが左上にある。遠景を撮影したものが 8 枚中 6 枚と多い。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I018	［絵葉書］屋島名勝二十五景	—	1933～1934	6	（絵葉書）8.7×13.5（パノラマ）8.7×27.3	25枚。屋島内の名勝中心。 枝番3は高松港より見た屋島全景で、「高松港ヨリ見タル屋島ノ絶景ナリ屋島山ハ古銅石富士岩ヨリ成ルル熔岩臺地デ其ノ形ガ屋ノ字ニ似テ居ルカラ其ノ名ガアル中央ノ稍低キ所ハ櫓ヶ丘ト称シ天智天皇ノ御代ノ古城跡ガアル」と書かれている。 枝番26は談古嶺からの眺望で、絵葉書2枚が繋がったものである。	高松市歴史資料館
I019	［絵葉書］屋島名勝二十五景	—	1933～1934	6	（絵葉書）8.7×13.5（パノラマ）8.7×27.3	24枚。I018と同一。	高松市歴史資料館
I020	［絵葉書］讃岐屋島山上ヨリ	—	1933～1945	6	9.0×14.0	10枚。 屋島山上からの写真。着色あり。枝番2が屋島を南側から撮影したもので、「THE VIEW OF YASHIMA 讃岐屋島山南面ケーブルカー」とタイトルがつけられている。海でなく、陸地が屋島の前面にある構図である。	高松市歴史資料館
I021	国立公園屋島の勝景	—	1934～	6	未調査	表紙に西側から北嶺を眺め、近景にヨットを配置したスケッチ風のイラストを掲げる。 「（屋島名勝）高松市の遠景」と題した、屋島西縁部を含む西方の眺望の写真あり。	香川県立図書館
I022	国立公園屋島名勝	—	1934～	6	未調査	表紙に兜のイラストをあしらう。 「（讃岐）屋島獅子の霊巌より高松港を望む」と題した、屋島西縁部を含む西方の眺望の写真あり。 屋島寺のスタンプ押印。	香川県立図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						夕暮れ時の屋島を西側から眺め、近景に海に浮かぶ3隻の船を配置した写真あり。「風光絵の如き霊巌の夕照　……遠浅にひと三五人遅日かな……遠からず又近からず眺むれば入日さやけき男木の島山……」とのキャプションを添える。「源平古戦場　屋島寺」のスタンプ押印。	
I023	屋島の風光	—	1934～	6	未調査	表紙に「瀬戸内海国立公園」「史蹟名勝　風光の屋島　写真と説明の絵はがき」と記載。東から眺めた屋島北嶺のイラストが描かれる。 談古嶺から女性2人が五剣山側を眺める写真あり。その眺望について、望むことが出来る史蹟の名前を挙げつつ、「山麓檀の浦より吹き上げてくる松風は遠い昔の陣鉦、太鼓、法螺の音、果てはワーッという鬨の声とも響く、正に一幅の絵巻物である」と表現する。 はがき裏面に「屋島山上一般の観光順路」として、ケーブル駅より山上の主要史蹟をめぐる簡単なルート図を添える。	香川県立図書館
I024	［絵葉書］国立公園 屋島名勝 YashiMa	—	1934～1944	6	（絵葉書）8.8×13.9（パノラマ）8.8×41.9	11枚。うち1枚が3枚繋がりのパノラマ。 2色刷り。屋島内の名所中心、枝番3は屋島全景。「屋島は海上大公園としての瀬戸内海の景勝を一望に眺めるには最好の展望地なり海抜二百五十五米にして山容自から屋根の姿をなし山上瞰下の風景又雄大なり」というキャプションがついている。庵治側から写したものと思われ、屋島の手前側には松と岩が写っている。 枝番10は鳥瞰図で、屋島山頂が平たいことがはっきりとわかるように描かれている。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I025	［絵葉書］国立公園 屋島の絶勝	—	1934～1945	6	8.8×42.1	2枚（いずれも3枚繋がりのパノラマ）。 屋島山上から撮影した写真。東側と西側の風景。袋に台形の屋島がはっきりと描かれる。「飛沫厳壁に溶け潮音孕む悠久の声源平の戦跡」とタイトルの上に銘打たれている。袋の裏側には「屋島保勝会　屋島遊覧記念」と書かれたハンコが押されており、屋島の形を模している。中の絵葉書は屋島山上からの風景。	高松市歴史資料館
I026	［絵葉書］国立公園 屋島の印象	—	1934～1945	6	9.0×14.0	7枚。 屋島から見える風景の写真と、屋島東側からの屋島遠景の写真。	高松市歴史資料館
I027	［絵葉書］国立公園 屋島の景観	—	1934～1945	6	8.8×14.0	7枚。袋に高松城と屋島のイラスト。絵はがきは2色刷り。 屋島内の名所中心、枝番5は屋島全景で、屋島の手前には松と岩が写っている。	高松市歴史資料館
I028	観光の屋島	—	1942頃	6	未調査	表紙は、屋島の展望台から瀬戸内海を眺める図、「遊覧記念」と記す円形のスタンプ風イラストにはヘイケガニを近景に、西側からみた屋島北嶺が描かれる。 絵はがき本体には、「瞰蹟亭の風光」と題した写真。キャプションに「紺碧の海白砂青松に映えて点々たる島影亭々たる翠松、峨々たる奇岩怪石―こゝ瞰蹟亭の風光は天下の絶勝内海の美を一望に納めることが出来る」とあり。 「三越（この部分押印）　昭和17年10月16日　¥240」と裏面に記載。購入年月日か。	香川県立図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I029	〔屋島公園絵葉書〕	—	大正末～昭和初期	6	9.1 × 14.2	《瀬戸内海国立公園》指定前に発行された８枚組の絵葉書。写真下に「屋島公園」「park」と印刷され、屋島の風景をさまざまな角度から写している。「屋島古戦場跡」として相引川高橋が含まれる。それぞれに「讃岐源平古戦場屋島 登山記念」のスタンプあり。 1：（讃岐高松）屋島公園 長鼻ヶ崎の勝景 2：（讃岐高松）屋島公園 高松港より見たる屋島の全景 3：（讃岐高松）屋島公園 屋島談古嶺より瀬戸内海の勝景 4：（讃岐高松）屋島公園 屋島山上より高松市を望む 5：（讃岐高松）屋島公園 屋島古戦場跡 6：（讃岐高松）屋島公園 屋島の全景 7：（讃岐高松）屋島公園より八栗五剣山を望む 8：（讃岐高松）屋島公園 屋島寺	香川県立ミュージアム
I030	高松名勝絵葉書	—	不明	6	未調査	「源平古戦場屋島山全景」とする西側海上から見た屋島。	高松市中央図書館
I031	国立公園屋島百二十五景	—	—	6	14.9 × 10.0	袋に栗林公園、高松、琴平、多度津、観音寺、寒霞渓と記載されており、帆船と屋島が描かれている。袋に破損あり。 屋島に関連する絵はがきは下記の通り。 1:「屋島寺」、「屋島五重塔」、「屋島寺境内雪の庭」、「屋島山上亀井如雪俳碑」、「屋島血の池 2：「屋島山上談古嶺より小豆島方面を望む」、「霊巌展望台より鬼ヶ島及男木島を望む」、「屋島長崎の鼻」、「屋島登山道畳石」、「屋島北嶺遊鶴亭の大観」、「屋島山上南談古嶺展望台」 3：「屋島全景」	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						4：「源平古戦場　壇の浦全景」 5:「獅子の霊巌より瀬戸のベニス高松市街を望む」、「瀬戸内海の夕照」、「屋島獅子の霊巌」、「獅子の霊巌の美麗」 6:「平家船隠」、「相引川義経弓流」、「庵治の海岸」、「玉取姫の伝説地志度浦」、「義経鞍掛松」 7:「屋島ケーブル全景」、「屋島ケーブルカー」、「屋島ケーブル南嶺駅」	
I032	屋島名所絵葉書	—	—	6	10.2 × 15.4	屋島を背景に、波上の旗にタイトルあり。屋島に関連する絵はがきは下記の通り。 1：〔(讃岐) 源平古戦場　屋島寺雪庭〕 2：〔(讃岐) 源平古戦場　屋島〕 3：〔(讃岐) 源平古戦場　屋嶋山獅子之霊岩〕 4：〔(讃岐) 源平古戦場　屋嶋山畳石〕 5：〔(讃岐) 源平古戦場　壇之浦五剣山〕 6：〔(讃岐) 源平古戦場　屋島寺〕 7：〔(讃岐) 源平古戦場　獅子之霊岩展望台 8：〔(讃岐) 源平古戦場　屋島寺御成門	京都府立大学
I033	讃岐屋島名所	—	—	6	14.8 × 9.9	1:〔相引川(義経弓流)〕、2:〔八島神社〕、3:〔屋島寺〕、4：〔屋島と五剣山〕、5：〔洲崎寺、喜岡城跡（喜岡寺)〕、6:〔可正松〕、7:〔仰之碑、大典記念塔〕、8:〔瑠璃寶池（一名血の池)〕、9：〔壇の浦と平家蟹〕、10：〔北嶺（遊鶴亭)〕、11：〔今上天皇陛下御登臨記念碑、屋島寺古鐘〕、12:〔畳石と登山籠〕、13:〔屋島寺（雪庭)〕、14:〔屋島獅子霊巌展望台〕、15:〔獅子霊巌〕、16：〔屋島（屋島富士)〕、17：〔源平合戦総門碑〕、18：〔屋島寺御成門、屋島寺（四天門)〕、19：〔屋島談古嶺より五剣山を望む〕	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I034	源平古戦場屋島名勝	屋島寺事務所	—	6	14.4 × 9.8	屋島に関連する絵はがきは以下の通り。 1：〔屋島登山ケイブルカー隧道入口〕 2：〔(讃岐屋島名所) 獅子の霊巌〕 3：〔(讃岐屋島名所) 談古嶺展望台より源平古戦場舟隠を望む〕 4：〔(讃岐屋島名所) 屋島古戦場平家蟹〕 5：〔(讃岐屋島名所) 長崎鼻絶景〕 6：〔(讃岐屋島名所) (源平古戦場) 屋島全景 7：〔(讃岐屋島名所) 相びき川義経弓流 8：〔(讃岐屋島名所) 屋島寺本堂 (仰之碑)〕 9：〔(讃岐屋島名所) 屋島獅子霊巌より高松港を望む〕 10：〔(讃岐屋島名所) 獅子霊巌展望台〕 11：〔(讃岐屋島名所) 瑠璃寶池 (一名血の池)〕 12：〔(讃岐屋島名所) 屋島寺雪の園〕 13：〔(讃岐屋島名所) 屋島談古嶺ヨリ源平古戦場壇之浦五剣山・雪景・源氏峰及志度湾遠望その 1〕 14：〔(讃岐屋島名所) 屋島談古嶺ヨリ源平古戦場壇之浦五剣山・雪景・源氏峰及志度湾遠望その 2〕	京都府立大学
I035	[絵はがき] (讃岐) 屋嶋寺宝物源氏白旗幷屋嶋懐古之詩那須与市資流之裔那須芝山資明寄附ほか 4 点 (仮)	—	—	6	14.2 × 9.2	1：〔(讃岐) 屋嶋寺宝物源氏白旗幷屋嶋懐古之詩那須与市資流之裔那須芝山資明寄附〕 2：〔(讃岐) 屋島寺所蔵 (平家陣営之図) 村田丹陵の筆其二〕 3：〔(讃岐) 屋島寺宝物 (徳川家康公遺物源頼重公寄附) 刀身四尺二寸八分葵下酒の鍛〕 4：〔(讃岐) 屋嶋寺 (梵鐘)〕 5：〔(讃岐) 屋島寺宝物 (源氏勝臼)〕	京都府立大学
I036	[絵はがき] 遊仙亭眺望ほか 6 点 (仮)	絵画研究会	—	6	9.9 × 15.3	屋島に関連する絵はがきは以下の通り。 1:〔遊仙亭眺望〕、2:〔蒼翠の杜・屋島神社〕、3:〔獅子の霊岩の展望〕、4：〔相引川を渡りて五剣に〕、	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						5：〔高松岸壁より屋島を望む、6：〔登山ケーブルカー〕、7：〔四国八十四番の屋島寺〕	
I037	讃岐屋島風景	屋島寺発行	—	6	9.5 × 15.0	全10枚。封筒に高松港側から見た屋島のイラスト。海には帆船が7隻浮かんでいるのが見える。 1:〔(讃岐屋島名所）屋島寺本堂（仰之碑)〕、2:〔(讃岐屋島名所）屋島寺雪の庭〕、3：〔讃岐高松港ヨリ屋島全景ヲ望ム〕、4：〔(讃岐屋島名所）瑠璃寶池(一名血の池)〕、5：〔(讃岐屋島風景）談古嶺展望台ヨリ源平古戦場舟隠ヲ望ム〕、6：〔屋嶋北嶺遊鶴亭ヨリ瀬戸内海　左ヨリ大島・小兜・大兜・稲木嶋・及小豆島遠望〕、7：〔(讃岐屋島名所）屋島南嶺ヨリ（源平古戦場）相引川及高松村方面ヲ望ム〕、8:〔(讃岐屋島名所）獅子之霊厳〕、9:〔(讃岐屋島絶景）屋島談古嶺獅子霊厳ヨリ見タル右ヨリ男木島・女木島・中央大槌・小槌左高松方面ヲ望ム〕、10:〔(讃岐屋島名所）屋島談古嶺ヨリ（源平古戦場）壇之浦五剣山・雪景・源氏峯及志度湾遠望〕（2枚を合わせて1枚とする)。	京都府立大学
I038	源平古戦場瀬戸内海屋島風景	—	—	6	14.6 × 9.7	封筒には高松港側から見た屋島北嶺の一部のイラスト、その左横にタイトルあり。遠くに帆船が2隻浮かぶ。 1：〔瀬戸内海風景〕、2：〔讃岐屋島公園獅子ノ霊厳ヨリ大槌、小槌広島県ヲ望ム〕、3：〔讃岐屋島公園獅子ノ霊厳ヨリ男木・女木島岡山県ヲ望ム〕、4:〔讃岐屋島公園獅子ノ霊厳ヨリ高松、琴平ノ絶景ヲ望ム〕、5：〔讃岐屋島ヨリ五剣山及壇ノ浦源平古戦場ヲ望ム〕、6：〔讃岐屋島ヨリ五剣山及壇ノ浦源平古	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						戦場ヲ望ム〕、7：〔(讃岐屋島名所) 瑠璃寶池（一名血の池)〕、8:〔(讃岐屋島名所) 屋島風景〕、9:〔(讃岐屋島名所) 屋島富士〕、10：〔(讃岐屋島名所) 源平古戦場　弁慶長刀泉〕、11：〔(讃岐屋島名所) 長崎鼻絶景〕	
I039	讃岐屋島名所	—	—	6	未調査	封筒あり。イラストは手前に松並木、奥に海上の複数の島々。 1：〔(讃岐屋島名所) 談古嶺ヨリ〔源平古戦場〕壇之浦五剣山源氏峯及志度湾遠望〕、2：〔(讃岐屋島名所) 屋島北嶺遊鶴亭ヨリ望ム（前）庵治湾（源平古戦場）舟隠〕、3：〔(讃岐屋島名所) 屋島北嶺遊鶴亭ヨリ瀬戸内海〔左ヨリ〕女木島・男木島・豊島ヲ望ム〕、4：〔(讃岐屋島名所) 屋島ト五剣山、屋島ヨリ高松港方面ヲ望ム〕	京都府立大学
I040	国立公園屋島の絶勝	絵画研究会工芸社印刷	—	6	9.7 × 14.9	封筒になっており、裏面に「国立公園屋島遊覧記念」のスタンプがある。 1：〔屋島遠望〕 2：〔屋島山上遊鶴亭〕 3：〔屋島山上より西側パノラマ〕 4：〔屋島山上より東側パノラマ〕	京都府立大学
I041	讃岐源平古戦場屋島二十景絵葉書	—	—	6	9.1 × 15.2	１：「源平古戦場屋島登山記念遊覧籠」、２：「源平古戦場屋島山全景」、３：「屋島山上畳石」、４：「屋島寺本堂」、５：「屋島寺雪庭」、６：「屋島山上仰之碑」、７：「屋島山上御大典記念五重石塔」、８：「源平古戦場屋島山上血の池」、９：「源平古戦場屋島山上獅子之霊巌」、10：「屋島山上談古嶺より庵治湾展望」、11：「屋島山上談古嶺より五剣山源氏ガ峰を望む」、12：「屋島山上獅子之霊巌より瀬戸内海を望む」、13:「源平古戦場　東照宮前より屋島南峰経塚を望む」、14：「源平古戦場屋島壇の浦	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						全景」、15：「古戦場屋島壇の浦より五剣山源氏が峰を望む」、16：「古戦場屋島壇の浦　安徳天皇」、17:「古戦場屋島壇の浦　那須之與一祈岩」、18:「古戦場屋島壇の浦　源義経鞍懸松」、19：「古戦場屋島壇の浦　弁慶采切地蔵」、20：「古戦場屋島壇の浦　弁慶長刀井戸」の 20 点の絵葉書が一綴りにされている。	
I042	讃岐名勝屋島高松栗林公園琴平六十景	—	—	6	14.6 × 9.6	屋島北嶺と海に浮かぶ弓、カモメが 2 羽のイラスト。 屋島に関連する絵はがきは以下の通り。 1：〔屋島寺宝物・平家カニ〕、2：〔屋島談古嶺展望台より船隠しを望む〕、3：〔屋島長崎鼻〕：屋島長崎鼻と瀬戸内海風景。「屋島北嶺山麓に、4：〔（屋島ケーブルカー）下り進行中の綱牽〕、5:〔船隠し〕、6：〔小豆島から見た屋島〕、7：〔讃岐屋島全景〕、8：〔屋島神社〕、9:〔屋島獅子霊巌より高松港を望む〕、10:〔獅子霊巌〕、11:〔屋島獅子霊巌展望台〕、12:〔瑠璃宝池（一名血の池）〕、13：〔屋島寺〕、14：〔鋸引と那須与一〕（鋸引と那須与一の絵が葉書縦上下半分ずつあり）、15：〔屋島山上ヨリ見タル瀬戸内海ノ夕陽〕、16：〔讃岐屋島談古嶺より五剣山を望む〕	京都府立大学
I043	国立公園屋島百三十景	—	—	6	14.5 × 10.4	表紙のイラストは高松市側から見た屋島が描かれ、源平合戦の文字が入る。裏面に絵画研究会のマークがプリントされている。 屋島に関係する絵はがきは以下の通り。 1:〔名所古跡と風光美！屋島の印象（百三十景）［遊鶴亭］〕、2:〔名所古跡と風光美！屋島の印象（百三十景）［屋島全景と獅子の霊巌］〕、3：〔名所古跡と風	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						光美　屋島の印象（百三十景）［ケーブルカー・屋島富士］］、4：〔名所古跡と風光美　屋島の印象（百三十景）［屋島寺］］、5：〔名所古跡と風光美屋島の印象（百三十景）［屋島周辺の名所］、6:〔名所古跡と風光美　屋島の印象(百三十景)［談古嶺］］7：〔名所古跡と風光美　屋島の印象（百三十景）［屋島神社］］、8：〔名所古跡と風光美　屋島の印象（百三十景）［談古嶺］］、9：〔名所古跡と風光美！屋島の印象（百三十景）［遊鶴亭］］、10：〔名所古跡と風光美　屋島の印象（百三十景）［屋島周辺］］、11:〔名所古跡と風光美　屋島の印象(百三十景)［談古嶺の眺望］］、12：〔名所古跡と風光美　屋島の印象（百三十景）［ 獅子の霊巌・高松港 ］］、13：〔名所古跡と風光美　屋島の印象（百三十景）［ 屋島全景 ］］、14：〔名所古跡と風光美　屋島の印象（百三十景）［ 長崎の鼻・女木島 ］］、15：〔名所古跡と風光美！屋島の印象（百三十景）［ 屋島及び屋島周辺 ］］	
I044	屋島風景	—	—	6	10.0 × 14.5（9：10.0 × 29.0）	1：〔(讃岐)〔源平古戦場〕庵治海岸ヨリ見タル屋島ノ東岸〕 2：〔(讃岐)〔源平古戦場〕屋島寺〕 3：〔(讃岐)〔源平古戦場〕壇ノ浦ノ一望（其ノ 1)〕 4：〔(讃岐)〔源平古戦場〕壇ノ浦ノ一望（其ノ 2)〕 5：〔(讃岐)〔源平古戦場〕屋島談古嶺〕 6：〔(讃岐)〔源平古戦場〕屋島北端〕 7：〔(讃岐)〔源平古戦場〕屋島驛前ノ東照宮馬場〕 8：〔(讃岐)〔源平古戦場〕獅子ノ霊巌展望臺〕 9:〔(讃岐)〔源平古戦場〕壇の浦五剣山全景(其の 1)(其の 2)〕	京都府立大学

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I045	讃岐屋嶋名所	—	—	6	14.7 × 9.8	袋には、扇の的を狙う那須与一が描かれる。その背景には屋島が描かれる。与一は屋島の東側におり、屋島側にある扇の的に向かって弓を引いている。全ての絵はがきの表側には「讃岐屋島古戦場血ノ池・登山記念」と「讃岐屋島古戦場血池登山記念」のスタンプがそれぞれ押される。スタンプの日付は 4．6．21 で昭和 4 年のものと思われる。1:〔(讃岐屋島名所) 屋島神社〕、2:〔(讃岐屋島名所)〔屋島古戦場〕 壇ノ浦と平家蟹〕、3：〔(讃岐屋島名所) 安徳天皇社〔屋島古戦場〕〕、4:〔(讃岐屋島名所) 大夫黒馬墓　佐藤継信の墓〕、5：〔(讃岐屋島名所) 祈岩・駒立岩〕、6:〔(讃岐屋島名所) 祈岩・駒立岩〕、8：〔(讃岐名所) 古戦場源氏峯〕、9：〔(讃岐屋島名所) 牛塚社〕、10：〔(讃岐屋島名所) 源平古戦場義経鞍掛松〕	京都府立大学
I046	［絵葉書］	—	—	6	9.0 × 14.3	「讃岐屋島（源平古戦場)」と印刷がある。舳先を大胆にトリミングした帆船と、屋島の組み合わせ。遠景の山容は小豆島か。	香川県立ミュージアム
I047	英国皇太子殿下行啓記念	—	—	6	18.0 × 10.3	「屋島山遠景　御召艦レナウン号」、「栗林公園 松平伯別邸披雲閣」他の写真が調製される。 レナウン号はスコットランドで建造。1921 ～ 1922 年にかけてエドワード皇太子の巡行に使われ、オーストラリア・アメリカ・日本などを訪れた。	香川県立ミュージアム
I048	［絵葉書］	—	—	6	14.3 × 9.0	「(讃岐) 屋島（源平古戦場)」の印刷がある。I075 と同一絵葉書	香川県立ミュージアム
I049	［絵葉書］	—	—	6	14.2 × 9.2	「(讃岐)屋島(源平古戦場)」。彩色が施されている。	香川県立ミュージアム

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I050	屋島寺 宝物絵葉書	屋島寺発行	—	6	14.0 × 9.0	屋島寺発行。村田丹陵画「源平合戦之図」、土佐光信画「源平屋島合戦之図」、土佐光起画「佐藤継信戦死之図」含む寺宝の絵はがき。「源平屋島合戦之図」では屋島と思しき、半島が描かれる。	香川県立ミュージアム
I051	絵本源平盛衰記 全	—	—	6	19.0 × 13.5	「義経暴風解纜渡四国」の場面、「大将義経暴風を凌で屋島につたふ」の挿絵。「屋島合戦」の場面、「那須与一扇の的を射る」の挿絵。「源平遠矢」の場面、「安徳帝を始め平将多く入水」の挿絵。いづれも屋島そのものは描かれていない。	香川県立ミュージアム
I052	高松名勝絵はがき	讃岐岡内千金丹本舗	—	6	14.1 × 9.0	「高松市街全景」の画面奥に微かに屋島全景が見える。「源平古戦場屋島壇の浦全景」の絵はがきあり。「高松市街全景」は屋島の西側、「源平古戦場屋島壇の浦全景」は東側から撮影。写真は全てモノクロ。	香川県立ミュージアム
I053	屋嶋の景勝	—	—	6	14.0 × 9.0	正式名称「瀬戸内海の眺望絶佳　屋島の景勝」。袋裏面に「霊巌茶屋」のスタンプ。談古嶺から古戦場船隠及び瀬戸内の島々。屋島山上から高松市街・金刀比羅宮。長崎の鼻。庵治から眺望する屋島。屋島北嶺遊鶴亭からの瀬戸内海眺望。山上の霊巌展望台より男木島・女木島眺望。見開きの鳥瞰図「讃岐屋島源平古戦場全景」付属、裏面に「7.5.30 霊巌茶屋」のスタンプあり。スタンプの一つに帆船と屋島をモチーフにしたものあり。	香川県立ミュージアム
I054	庵治絵葉書	—	—	6	14.2 × 9.0	表紙に屋島遠景のイラストがデザインされる。「源平古戦場船隠」の場所から屋島が遠景として写る。庵治は檀ノ浦を挟んで「屋島長崎の鼻」と向き合う。遠景ながら距離が近いので、台形の屋島の山容に迫力がある。	香川県立ミュージアム

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I055	〔高松港より屋島望遠絵葉書〕	—	—	6	14.0 × 9.0	右下に「百景／ 100VIEWS」と記載。帆船 2 隻と遠景に霞んだ屋島。「MADE　IN　WAKAYAMA」と記載。帆船のクローズアップと屋島の遠景の構図をとる。	香川県立ミュージアム
I056	［絵葉書］屋島 鬼ヶ島 栗林公園他	—	—	6	14.0 × 9.1	1：屋島の形をコラージュした瀬戸内海国立公園の鳥瞰図。屋島が台形に描かれている。 6：「高松市と屋島」高松市全景と屋島遠景の写真。「（前略）源平の昔を偲ぶ屋島半島が大きく突き出てゐる」と説明あり。	高松市歴史資料館
I057	［絵葉書］源平古戦場 屋島百廿景	讃岐屋島山上 談古亭	—	6	9.0 × 14.0	29 枚。屋島の名所だけでなく金刀比羅宮など他所の写真もある。主に屋島寺など屋島の史蹟や、屋島からみた風景の写真が多い。 1：封筒。裏面に談古嶺の印と玉虫の印あり。談古嶺の印は那須与一の的を射るシーンが描かれており、背景には屋島が台形で描かれている。	高松市歴史資料館
I058	［絵葉書］屋島宝物絵葉書	—	—	6	9.2 × 14.0	10 枚。内 4 枚は源平合戦図。 1：裏面に印あり。内側に「後小松天皇宸筆・源氏白旗及ビ勝臼・平景清守本尊千手観音・後陽成天皇宸筆・平重盛奉納燈籠・其外数点ヲ収ム」とあり。 6：土佐光信「源平屋島合戦之図」右上に屋島のような台形の描写あり。実際の位置関係とは逆ではないか。 7：土佐光信「佐藤継信戦死之図」 10・11：村田丹陵「源平合戦之図」	高松市歴史資料館
I059	［絵葉書］栗林公園 屋島	—	—	6	9.1 × 14.0	5 枚（4 枚は栗林公園）。屋島に関する 1 枚は「屋嶋 東宮殿下仰之碑」のみ。	高松市歴史資料館
I060	［絵葉書］讃岐名所	高松岡部製	—	6	9.0 × 14.2	屋島に関するものは「志度瓊の浦より源平古戦場五剣山及ひ屋嶋山を望ム」のみ。五剣山の裏手に屋島が見えている構図。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I061	［絵葉書］	高松岡部製	—	6	9.1 × 14.1	24 点。「源平古戦場」に関するものが中心。「那須与一」や「佐藤次信墓」「安徳神社」など。屋島全景もあり	高松市歴史資料館
I062	［絵葉書］国立公園屋島百景	—	1934 ～	6 ヵ	9.1 × 14.2	2:源平合戦総門碑、平家蟹、祈り岩、駒立石など、源平合戦にまつわるものが一枚に収められている。6：平家船隠、相引川義経弓流、義経鞍掛松など、源平合戦にかかわる場所が一枚に収められている。	高松市歴史資料館
I063	［絵葉書］瀬戸内海に於ける源平の合戦	画 長谷川小信	—	6 ヵ	9.1 × 14.1	袋絵　平教経 1：〔佐々木盛綱、藤戸先陣〕 2：〔那須与市扇を射る〕 3：〔景清のしころ曳き〕 4：〔義経、弓を流す〕 5：〔義経の八艘飛〕 6：〔能登守教経、最後〕 7：〔安徳帝御最後〕 8：〔壇の浦平氏の最後〕	高松市歴史資料館
I064	屋島関係絵はがき（『歴史収蔵資料目録 十三　松浦正一文庫目録』所収）	瀬戸内海歴史民俗資料館	—	6 ヵ	未調査	162：屋島寺の内明治 8　屋島南嶺頂上平面図　屋島、 168：屋島史跡名勝地図、 187：屋島（案内書など 19 枚）、 190：屋島絵はがき 2	高松市中央図書館
I065	［絵葉書］讃岐名勝 屋島 高松 栗林公園 琴平 六十景	嶺巌茶屋謹製	—	6 ヵ	8.8 × 13.6	53 枚。ケーブルカーあり。昭和 4 年以降。 枝番 1（袋）は屋島（台形）をバックに海に弓が浮かんでいる絵で、義経弓流を表現していると思われる。 枝番 9 は庵治から見た屋島。枝番 10 は高松港から見た屋島全景。 屋島・讃岐の名所を網羅。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I066	［絵葉書］（讃岐）源平古戦場　東照宮前ヨリ屋島南峰経塚ヲ望ム	—	—	6ヵ	9.1 × 14.2	1枚。「古戦場・屋島寺登山紀念」のスタンプあり、但し日付なし。着色あり。 東照宮前より屋島南嶺。	高松市歴史資料館
I067	［絵葉書］源平古戦場屋島絵端書	岩佐コロタイプ部製版	—	6ヵ	9.0 × 14.1	B.0671-1 から B.0671-12 袋一括。 枝番 1〔(讃岐）源平古戦場　屋島山淡古嶺展望台〕 枝番 2〔(讃岐）源平古戦場　屋島山獅子之霊巌〕 枝番 3〔(讃岐）源平古戦場　屋島山畳石〕 枝番 4〔(讃岐）源平古戦場　屋島壇之浦源氏総門〕 枝番 5〔(讃岐）源平古戦場　獅子之霊巌展望台〕 枝番 6〔(讃岐）源平古戦場　屋島寺雪庭〕 枝番 7〔(讃岐）源平古戦場　屋島〕 枝番 8〔(讃岐）源平古戦場　屋島寺御成門 枝番 9〔(讃岐）源平古戦場　屋島寺〕 枝番 10〔(讃岐）源平古戦場　屋島南峰屋島神社〕 枝番 11〔(讃岐）源平古戦場　相引川〕 枝番 12〔(讃岐）源平古戦場　壇之浦五剣山〕	高松市歴史資料館
I068	［絵葉書］（讃岐屋島名所）安徳天皇社［源平古戦場］	—	—	6ヵ	9.0 × 14.0	1枚。左側に安徳天皇社が写り、その前には畑がみえる。右後方には海が広がっている。	高松市歴史資料館
I069	［絵葉書］讃岐　栗林公園南庭　南湖全景　屋島源平史蹟　総門の趾	—	—	6ヵ	9.2 × 14.0	「屋島源平史蹟で名高い総門の趾」。背景に五剣山がみえる。	高松市歴史資料館
I070	［絵葉書］特選　讃岐景勝	香川新報社発行	—	6ヵ	13.9 × 9.0	5枚組。讃岐名勝中心。屋島に関連する絵はがきは以下の1枚。 枝番 2〔特選　庵治村から観たる午后の讃岐屋島〕は庵治村から午後に撮影した屋島。海には帆船が浮かんでいる。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I071	［絵葉書］名勝募集当選讃岐五景五勝	香川新報社発行	—	6ヵ	13.9 × 8.9	10枚組。讃岐名勝中心。 枝番10〔讃岐五勝　石清尾八幡山から屋島を望む〕は石清尾八幡宮から撮影した屋島。	高松市歴史資料館
I072	［絵葉書］源平古戦場屋島絵葉書　（讃岐）源平古戦場　屋島山淡古嶺展望台	岩佐コロタイプ部製版	—	6ヵ	未調査	B.0671-1 から B.0671-12 袋一括。 袋に高松城と屋島と海に浮かぶ帆船のイラスト。 淡古嶺展望台で景色を眺める人々が写る。	高松市歴史資料館
I073	［絵葉書］やしま	高松観光協会	1950 ～ 2004	7	9.0 × 14.0	8枚。屋島から見える風景の写真と、屋島東側からの屋島遠景の写真。着色あり。袋に屋島全景、日の丸の扇子、観光客であろう女性のイラストが大きく描かれている。屋島は、北嶺と南嶺に分かれているのが判別できるように描かれている。絵はがきはすべて彩色した絵はがきとみられ、枝番3が屋島全景を庵治側から写したものである。	高松市歴史資料館
I074	［絵葉書］史蹟の屋島　ViEws of YashiMa 談古嶺　（瀬戸内海国立公園）	UEROKU OSAKA	—	7	1：10.6 × 28.5 2・3・4：10.7 × 14.3 5・6・7：10.6 × 14.3	7枚組、一括の封筒有り。所蔵機関により昭和40年代と推定。屋島に関する記述は宛名面にあり。 1：談古嶺。（一）と（二）の2枚を接続している。 2：屋島観光バス。 3：屋島ドライブウエー。 4：屋島寺。 5：屋島ケーブル。 6：遊鶴亭。 7：獅子霊嶺。	高松市歴史資料館
I075	（写真）石清尾山（稲荷山）より見た高松市街	—	—	7	未調査	所蔵機関により昭和30年代と推定されている。 プリント写真4枚を繋ぎ合わせた高松市街のパノラマ写真。2 ～ 3枚目にかけて、遠景に屋島。	香川県立ミュージアム
I076	［絵葉書］	—	—	7	14.8 × 10.1	「四国の旅／屋島壇ノ浦　香川県」 談古嶺から東方、五剣山と檀ノ浦を望む。カラー絵葉書であるため、檀ノ浦と塩田が美しい。	香川県立ミュージアム

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I077	［絵葉書］讃岐の風光　寒霞渓・鬼ヶ島・栗林公園・屋島・琴平	—	—	7	13.9 × 9.0	13 枚（もと 16 枚組）。カバー付き。 屋島全景の絵葉書なし。袋表面「讃岐の風光」というタイトルの背景が扇（源平合戦の那須与一の扇か）で、裏面の「さぬき遊覧図」の屋島（陸続き）の箇所に史跡・名勝・天然記念物と古戦場の地図記号あり。 枝番 7 と 11 が屋島に関わる。	高松市歴史資料館
I078	［絵葉書］屋島名勝	—	—	7 ヵ	（絵葉書）8.5 × 5.0（パノラマ）8.7 × 27.3	着色カラー。屋島からみた眺望が中心。 1：獅子の霊巌亭から見た眺望。 2：古戦場全景。 3：高松市街の図。 4：屋島長崎の鼻。 5：屋島寺。 6：屋島全景。 7：屋島ケーブルカー。	高松市歴史資料館
I079	［絵葉書］瀬戸内海国立公園 屋島パーク	—	—	7 ヵ	（葉書）13.8 × 8.9（葉書の内 1 枚）8.9 × 27.7（封筒）19.2 × 15.5	袋は上空からみた屋島の全景。「最新決定版」以下 4 点にはそれぞれ裏面に説明があり。 1：〔国立公園　屋島ケーブルカー〕 2：〔高松市街の全景〕 3：〔国立公園　四国八十四番屋島寺〕 4：〔国立公園　屋島獅子の霊巌より鬼が島を眺む〕 5：〔談古嶺　檀之浦〕	高松市歴史資料館
I080	［絵葉書］讃岐巡り十六景　鬼ヶ島風景　向いは屋島　鬼ヶ島の洞窟	—	—	7 ヵ	8.8 × 13.8	現存は 5 枚。屋島に関連する絵はがきは以下の通り。 枝番 2〔鬼ヶ島風景　向いは屋島　鬼ヶ島の洞窟〕は鬼が島の風景の左奥に屋島。 枝番 5〔屋島　談古嶺　獅子の霊巌より展望〕は談古嶺より檀ノ浦を望む。	高松市歴史資料館

Ⅰ：写真・絵葉書（21）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
I081	［高松市遠景］	—	—	8	7.7 × 11.0	区画整理前の高松市街から屋島を望む。工場の煙突から立ち上る煙がみえる。高松港の向こうに、屋島北嶺、矢岳島、小豆島の山並みが、折り重なるように霞む。	香川県立ミュージアム
I082	［屋島寺本堂］	—	—	8	6.8 × 8.8	参詣者で賑わう屋島寺の本堂前。右端に幡のようなものが写っている。	香川県立ミュージアム

J：ガイドブック（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
J001	A Handbook for Travellers in Japan, 3rd Edition	Chamberlain, B.H. and Mason, W.B.（英）、John Murray, London and Kelly & Walsh, Yokohama	1891	6	未調査	日本研究者チェンバレンとメイソンによるマレー社の英文日本ガイドブック。3版にして初めて瀬戸内海と四国がRoute 50 The Inland Sea and the Chief Towns on or Near its Shoresとして紹介される。(p.358) 瀬戸内海の変化に富むピクチャレスクな風景の記述：for the traveller the smoothness of the water and the continuously varying and picturesque scenery are an unfailing source of pleasure and comfort throughout its entire length.	
J002	屋島名勝手引草　全	編纂人屋島保勝会代表者中村事、香川新報社印刷部	1898	6	19.8 × 12.8	獅子の霊岩、談古嶺からの眺望の図あり（どちらにも帆船が多数浮かぶ）。屋島寺、古城跡、獅子の霊厳、談古嶺のほか、駒立岩など源平合戦に関わる事績を中心に紹介。錣引、弓流しの遺跡については「現今其所詳らかならず」としながらも、源平盛衰記を引用。 香川県立図書館 K2931/Y1/2、高松市中央図書館 T2931/ヤシもこれに同じ。	京都府立大学
J003	屋島名勝手引草 全	編集 中村事／跋文 山田尚★（梅村の二男）	1898	6	19.8 × 12.6	名所案内記。 獅子の霊巌、談古嶺からみた風景のイラスト有り。	高松市歴史資料館
J004	讃岐案内	香川縣内務部第四課	1902	6	21.7 × 14.5	第八回関西府県連合共進会の開設に際し、本県現在の情勢を紹介するため編纂。郡別の名所記述に「屋島山」あり。屋島の由来、源平合戦に関する記述有り。屋島に関する史料紹介有り。	香川県立ミュージアム
J005	八栗屋島	真鍋俊明	1903	6	未調査	屋島の各名所についての解説あり。形状について、「其状屋字に似たり故に屋島の称あり」との記述。	香川県立図書館
J006	屋嶋めぐり	池畑惣吉編、宮脇開益堂	1913	6	15.3 × 9.5	池畑惣吉と森田惣吉は同一人物ヵ。J006とほぼ同内容。「高松及高松名産一覧」と「屋島及高松市ノ主ナル旅館」の一覧と写真2点が追加であり。	京都府立大学

J：ガイドブック（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
J007	屋嶋めぐり	森田惣吉編、宮脇開益堂	1913	6	14.9 × 9.5	表紙は屋島前景と兜で、「GUIDE OF YASHIMA THE BATTLE FIELD OF GENJI AND HEIKE」とあり。裏表紙は源氏の竜胆紋（金色）・平家の家紋（赤）、平家蟹、海に沈む扇が描かれている。緒言「世界海上の一大公園なりと外人を賛美せる瀬戸内海の風景をして一層絶景ならしむるものは屋島なりとす」。屋島の風光と地理的趣味と歴史的事実を紹介。屋島寺・獅子の霊巌・源平合戦にまつわる佐藤継信墓・義経弓流し・祈岩及駒立岩のほか、高松市・高松城・高松港についても稿を設ける。「屋島山上展望地図・屋島付近名勝旧跡地図」付属。屋島や屋島寺の写真あり。裏表紙から１枚めくった箇所に、談古嶺登山記念のスタンプあり。	京都府立大学
J008	屋島めぐり	森田惣吉編	1915	6	15.2 × 9.3	森田惣吉編、大正２年３月発行、大正４年４月 10 日訂正再版発行。大正６年の訂正版と冒頭部分の構成が異なる。本文の内容に関しても若干の修正がみられる。表紙に西から見た屋島全景のイラスト。「名勝と旧跡との別なく時代の前後に関せず」登山行程順に記載。末尾に屋島・高松市街の旅館の広告。	香川県立ミュージアム
J009	源平古戦場 屋島めぐり	森田惣吉編	1917	6	15.0 × 10.0	森田惣吉編、大正２年３月発行、大正６年４月 20 日訂正３版発行。大正４年版と比べ、冒頭のページ構成が異なる。本文に関しても若干の修正が見られる。表紙に西から見た屋島全景のイラスト。「名勝と旧跡との別なく時代の前後に関せず」登山行程順に記載。緒言に屋島の名の由来を「昔時離島にして其形屋宇に似たるを以て其の名を得たり」と記述。本文中に「屋島山」、「屋島山と五剣山」と題された写真あり。また談古嶺から撮影された写真あり。本文中にて五剣山が「風貌獰猛にして武人の出陣に於けるが如し」と形容されるのに対し、屋島は「山容優美にして婦人の茶室に坐するが如く」と形容される。源平合戦、またはその関連施設に関する記述あり。	香川県立ミュージアム

J：ガイドブック（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
J010	屋嶋めぐり	著作兼発行者 森田惣吉／発行所 宮脇開益堂	1921	6	14.8 × 9.2	表紙に兜と屋島のイラスト。 2頁目の「屋島山」の写真に屋島と、ヨットが写っている。緒言には「地質概ね火山岩にして山石重疊して奇観を呈す全山青松を以て包まれ山上瞰下の風景實に雄大にして壯観たり」とあり、それ以下には瀬戸内海に関する著作を出した人物や宮内省の人物の屋島評（屋島の風景を絶賛するもの）を挙げている。その後に、「屋島は勝地として名高きのみあらず壽永の昔源平二氏の運命を賭して戦へる地なれば當時を追懐し悲壯史蹟の探るべきもの鮮からざれば人の感興を動すこと最も切なり…」と述べられ、源平合戦とのかかわりも強調されている。これ以降のページでは、各スポットごとの案内となっている。	高松市歴史資料館
J011	最新屋島　附・栗林公園 神懸山　金刀比羅宮	岡田唯吉、高松 宮脇開益堂	1924	6	未調査	表紙に西側から見た屋島北嶺（南嶺の一部含む）のイラストあり。 目次：「屋島山の成因」「瀬戸内海に於ける屋島の位置」「屋島の沿革」「源平屋島戦」「源平戦蹟及其他の史蹟名勝」 「瀬戸内海に於ける備讃海峡の要地として交通上軍事上等に最も多く利用せられ」「随って各時代に渉つての歴史が最も多く演ぜられた為古今の史蹟に富んで居る」 「山上は瀬戸内海東半の眺望絶佳で彼日本三景の一たる松島に比して景か頗る雄大で所謂大松島ともいふべき処」。	高松市中央図書館
J012	古今讃岐名勝図会	梶原藍水、梶原猪之松補訂	1930	6	未調査	嘉永６年『讃岐国名所図会』の増補訂版、屋島村に屋島神社、屋島の史跡（安徳天皇社・菊王丸墓など）、屋島寺等の他、談古嶺、屋島登山鉄道など近代の記述もあり	香川大学図書館
J013	讃岐　風光と産業	香川県	1930	6	未調査	表紙に西側から見た屋島北嶺（南嶺の一部含む）のイラスト、近景に松と塩竈を描く。 香川県交通図掲載。 談古嶺から瀬戸内海方面眺望の写真にキャプション、	高松市中央図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						「談古嶺ハ源平古戦場壇ノ浦付近を眼下に見下ス勝景ノ地位ニアリ」。北嶺の岸壁付近の写真にキャプション、「屋島ハ全山剰ス所ナク緑樹ヲ以テ掩ハレ屋根ニ似タル雄姿ヲ海上ニ横タエタル景趣、眞ニ海内無双ト称セラル、殊ニ北嶺ハ其ノ先端ニ当リ眺望雄大ナルコト全山随一ナリ」。大正12年久邇宮登攀の記述。	
J014	讃岐	桑島安太郎	1932	6	未調査	表紙に屋島の図像あり。香川県内の史跡名称。産業などの解説が書かれている。屋島に関しては「世界海上の一大公園なりと外人の賛美せる瀬戸内海の風光を、一層絶景ならしむる展望台の屋島は、又寿永のその昔、源平二氏が白旗、赤旗をひるがえしつゝ、運命を賭して戦へる地として、当時を追懐し悲壮史蹟を探る事のいと多い所である。風光史蹟兼備の地として、然も交通便利なること天下に其の比を見ないのである。」とあり。	高松市中央図書館
J015	The Lure of Japan	Akimoto Shunkichi（秋元俊吉か）、Boad of Tourist Industry Japanese Government Railways	1934	6	未調査	瀬戸内海国立公園が制定された昭和9年（1934）に刊行された、西欧人のまなざしを意識したうえで、西欧人旅行者に日本の魅力を伝えるために日本側から発信した英文の日本ガイドブック。作者はAkimoto Shunkichi秋元俊吉（刊行元は日本鉄道省Boad of Tourist Industry Japanese Government Railways）。Inland Seaについては、日本の地中海It is rightly called the Mediterranean of Japanと紹介。急速に近代化する日本のなかでも伝統的な日本の生活がみられる場所として瀬戸内海が紹介される。ガイドブックでは四国は瀬戸内海に面していて、風景が美しく国立公園に含まれることが強調されている。そのなかで、とくに屋島については、12世紀の源平古戦場であったという歴史的側面が紹介されている。ただし、屋島の地形の特徴は何も記述されていない。	

J：ガイドブック（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
J016	最新版高松市街地図附讃岐名所案内	発売高松百貨店書籍部	1935	6	18.5 × 8.3	高松市街地の一万分の一の地図と讃岐名所案内が折り込まれる。地図中に屋島は描かれないが、讃岐名所案内の中の「付近の名所舊蹟」の一項目として屋島が紹介されている。本文中では「源平の古戦場として有名であり、天下の絶勝として今や屋島の名は海外に謳われてゐる」と記述される。また屋島山上からの眺望を高く評価している。周辺の名所の写真も多数掲載され、西側から撮影した屋島と壇ノ浦の写真が含まれる。表紙には西側から見た屋島と高松城と松のイラストが描かれる。	京都府立大学
J017	四国案内	社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本旅行協会）発行	1935	6	18.3 × 11.7	社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本旅行協会）発行。鉄道沿線に沿って名所解説。冒頭見開きに「瀬戸内海国立公園遊覧図」、獅子の霊巌からの眺望写真掲載。本文中に屋島の項目があり、詳細詳細な記述有り。	香川県立ミュージアム
J018	観光の高松創刊号	高松観光協会	1937	6	未調査	高松観光協会が年に 1 回発行した観光案内書。国立公園指定直後の動きがわかる。昭和 14 年までの 3 冊が確認される。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
J019	史蹟名称天然記念物四国扁	広島鉄道局発行	1938	6	19.0 × 13.0	広島鉄道局発行。巻頭写真に「高松市より屋島を望む」と題した遠景写真あり。高徳線沿線の史蹟及び天然記念物として、屋島の解説・交通・運賃を記す。解説文のイラストは西側から見た屋島と帆船。「四国に於ける史蹟名勝天然記念物分布図」あり。裏表紙に「国民精神総動員」「昭和十三年四月版」と記載。	香川県立ミュージアム
J020	総合郷土研究香川県	香川県師範学校・女子師範学校	1939	6	未調査	「文化」の「安徳天皇」に源平合戦の記述。	香川大学図書館
J021	屋島めぐり	著作兼発行 森田惣吉	(A) 1915 ／ (B) 1935	6	15.0 × 9.3	枝番 A は C010（高松市歴史資料館 C0825）と同じ。 枝番 B は表紙に「大屋島」とあり、中表紙に国立公園の表記有り。 枝番 B は鳥瞰図ほか地図が充実。また枝番 B は、A と同じデザインの表紙ながら「大屋島」と銘打たれてお	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						り、総説は「大屋島！秀麗な屋島！霊山屋島！…その特色とするところは　一大自然の雄大で絶佳なる風光地　一情緒に富み、感興深き史蹟の地　一價値多き、天然記念物の好個の見学地　一信仰上、霊顕あらたなる修行の地　であつて、これ等の特色が相綜合して大屋島を築き上げたのである。…」と始まり、後に詳細に説明している部分では、風光の部分に紙幅が多めに割かれている。2頁目には「高松より見たる屋島」の写真があり、手前にヨットが写っている。21頁目には「源平合戦図」が載っており、合戦の画面奥に屋島山がはっきりと描かれている。	
J022	屋島合戦物語及旧跡案内	岡田唯吉著	—	6	21.5 × 15.0	佐藤嗣信戦死・扇の的・しころ引きの挿絵あり。	高松市歴史資料館
J023	屋島関係パンフレット（『歴史収蔵資料目録 十七　草薙金四郎文庫』所収）	瀬戸内海歴史民俗資料館	—	6ヵ	未調査	96-97 屋島関係 21 件	高松市中央図書館
J024	観光香川	香川県	1962	7	未調査	県の写真集。庵治からみた屋島の写真が載る。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
J025	香川縣の国立公園と縣立公園	香川県土木部計画観光課	1950ヵ	7	未調査	写真「女木島海濱と屋島台」「屋島台より壇の浦、五剣山を見る」「屋島寺寸景」「屋島談古嶺」など。「女木島海賓と屋島台」の写真は、J027 と同一写真。	高松市中央図書館
J026	観光のさぬき	—	1956ヵ	7	未調査	高松市と坂出市にある向進印刷所が、讃岐の名所再版写真をまとめて解説を付したもの。対岸の浜辺の松をフレームにして、屋島北嶺を写す。談古嶺より五剣山を望んだカットには、壇ノ浦の塩田が写る。	香川県立ミュージアム
J027	民間信仰（『新編 香川叢書 民俗編』所収）	—	—	7	未調査	源平合戦に関する伝承、いとより姫、カレイ、義経足洗石、血洗池	高松市中央図書館

J：ガイドブック（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
J028	俯瞰　さぬき	—	1949	7	17.2 × 18.4	袋表に屋島と思しきイラストあり。序に「挿入写真は日本交通公社、四国鉄道局等の提供によるもの」とあり。「自然と風光」の項目に屋島の記述あり。「さぬきの土産物」に屋島せんべいが挙げられている。	香川県立ミュージアム
J029	香川の観光ガイド	—	1965 頃	7	25.2 × 16.8	本文中に「昭和 39 年度」(讃岐の特産の項) とあり、また、東海道新幹線（昭和 40 年開通）の記述あり。 高松タクシー組合の観光コースに屋島が含まれている。高松市街の俯瞰写真は南西から北東を望み、遠景に屋島が写る。山地西側とみられる道路から宅地を眼下に望む写真が添えられた屋島は「観光香川の代表的観光地」と評される。カラー写真なので、海の青とのコントラストが美しい。	香川県立ミュージアム

K：リーフレット（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
K001	［リーフレット］讃岐名勝案内	—	1907	6	8.6 × 37.3	表紙に玉藻城と屋島のイラスト。 「源平古戦場屋嶋」というタイトルのつけられた写真におぼろげながら屋島の台形が見られる。 金比羅宮の拝観券付。	高松市歴史資料館
K002	［リーフレット］屋島案内	著作兼発行者 森田惣吉	1927	6	18.5 × 70.3	表紙裏に屋島山の写真と平家蟹が描かれる。那須与一の絵画あり。 屋島の地図。地図の左隣には「屋島の大観」とタイトルのつけられた説明書きがあり。	高松市歴史資料館
K003	香川県名所交通屋島史蹟鳥瞰図	吉田初三郎、木村誉扇堂	1930	6	19.0 × 11.8	吉田初三郎の手による「源平古戦場屋島壇の浦を中心とせる香川県名所鳥瞰図」が折りこまれる。「瀬戸内海の一隅に屹立する一千尺の大ビルディングの屋上庭園といふことが出来る」。屋島寺、獅子の霊厳、談古嶺、遊鶴亭などを紹介。表紙は義経弓流しの図。	京都府立大学
K004	源平古戦場 屋島壇の浦を中心とせる香川県名所俯瞰図	著作権所有者吉田初三郎	1930	6	17.6 × 73.6	昭和５年２月１日発行。表面は吉田初三郎の鳥瞰図。屋島は台地上に描かれる。裏面に「史蹟屋島」と題した観光案内を載せる。また「屋島史蹟名勝地圖」が記載される。談古嶺、長崎の鼻、獅子之霊巌の写真あり。	香川県立ミュージアム
K005	讃岐遊覧案内	大阪商船発行	1934	6	17.6 × 65.1	昭和６年10月大阪商船発行。「航路」「電車」「鉄道」「ケーブル」路線を描いた鳥瞰図と名所案内。鳥瞰図では屋島はなだらかな丘陵のように描かれる。裏面の名所案内の一項目として屋島の解説がなされる。屋島は源平合戦の古戦場として紹介され、合戦の経緯の記述有り。下段の写真は屋島の全景写真と屋島山上からの景観が含まれる。	香川県立ミュージアム
K006	讃岐あんない	大阪商船発行	1936	6	26.2 × 37.9	昭和11年３月大阪商船発行。当時、大阪多度津航路と大阪別府航路の二つが高松に寄港し、神戸高松間が６時間半という記述あり。遊覧地案内の項目の中に屋島あり。源平の合戦に関する記述有り。「屋島遠望」と題された、船上から撮った写真が掲載される。	香川県立ミュージアム

K：リーフレット（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
K007	観光の屋島	屋島町役場発行	～1939	6	18.1 × 61.7	屋島町役場発行。表紙に「屋島保勝会／昭和14.10　29／屋島遊覧記念」スタンプ押印。表紙イラストは西側から見た屋島と帆船。本文では、屋島の地勢や自然環境を説明、各名所や土産物、交通手段を紹介する。 写真は、屋島全景・山上から瀬戸内眺望・北嶺遊鶴亭・談古嶺から壇の浦眺望・夕暮れ時の西方から東へ屋島眺望・獅子の霊巌・山上から高松遠望の各種。屋島の略史を裏面に記載。	香川県立ミュージアム
K008	屋島案内	森田惣吉編、著作兼発行者森田惣吉	1925年発行、1927年訂正発行	6	19.0 × 9.3	屋島の観光案内のリーフレット。表紙と裏表紙には源氏と平氏の家紋、海に浮かぶ扇、平家蟹と西側から見た屋島北嶺が描かれる。表紙裏には邨田丹陵による「那須與市の扇の的射」が掲載される。本編には屋島史蹟名勝地図と屋島山上展望地図が掲載。本文中では「屋島の大観」「屋島の略史」「登山者のしをり」として屋島の概要、歴史、観光スポット及び交通案内についての記述がなされる。	京都府立大学
K009	讃岐遊覧案内	大阪商船株式會社	1929～	6	18.5 × 35.5	表紙の大阪―神戸―高松―多度津航路イラスト中央に屋島記載。屋島は扁平な台形状で表現される。内容の「讃岐巡リ」には一日コースの案内（多度津―琴平―栗林公園―屋島）、内容の半分程度を屋島案内に割く。文中では屋島山頂からの景色を称賛、また源平合戦関連のスポットを紹介する。下段に高松市と屋島の写真、及び屋島山頂からの風景写真有り。裏面に南西の方角からの屋島を含む鳥瞰図。ケーブルカーが描かれる。	香川県立ミュージアム
K010	［リーフレット］屋嶋ケーブルカー御案内	屋島登山鉄道株式会社	1929～1944	6	15.5 × 22.2	屋島の山上が平たくなっており、そこに屋島寺や談古嶺、レイガンなどの観光地がそれぞれ簡単な絵と文字で描かれている。「高松　池田清美堂石印」とあり、2色刷である。	高松市歴史資料館
K011	讃岐めぐり	―	1934～	6	37.1 × 52.2	「大屋島の風光」との項目として、瀬戸内海国立公園の眺望を中心に解説。指定史蹟天然記念物、国立公園とし山自体が天然記念物であると記載。また「古戦場として有名」と記載。裏面に瀬戸内海国立公園を中心に置いた	香川県立ミュージアム

K：リーフレット（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						香川県観光案内略図があり、「高松屋島附近略図」と題した部分図を掲載。	
K012	讃岐案内	香川県観光課・香川県観光協会	1934 ～	6	17.5 × 38.0	香川県観光課・香川県観光協会によるパンフレット。表紙では高松市側から見た海岸線のシルエットが描かれ、中央奥に屋島、湾内に帆船が配置される。瀬戸内海国立公園の解説を筆頭に、屋島を含む各所の解説。屋島の写真は談古嶺から北東方向への眺望。解説文中では、屋島ケーブル、源平合戦の遺跡、屋島寺が紹介される。また屋島を瀬戸内海国立公園の主座と記述する。	香川県立ミュージアム
K013	屋島遊覧　電車御案内	四国水力電気株式会社発行	1939 ～ 1942	6	16.1 × 5.3	四国水力電気株式会社発行。表紙に屋島遠景のイラスト、手前に高松城と松林が描かれる。電車沿線の駅と名所を描く鳥瞰図あり。裏面沿線名所舊蹟御案内の一項目として屋島あり。屋島内の名所が羅列される。運賃表あり。	香川県立ミュージアム
K014	史蹟要覧高松屋島琴平御案内	吉田初三郎、大正名所図会社（発行、高松市玉藻町頼富庄蔵）	—	6	18.2 × 10.7	屋島、琴平に関する観光案内のリーフレット。表紙と裏表紙には高松城と屋島の風景と那須与一と思われる武者が描かれ、中には吉田初三郎による高松屋島琴平名所図絵と題された絵地図と高松市街地図が折り込まれている。絵地図において屋島は台形状の半島として描かれる。本文中には屋島に関する記述があり、源平の古戦場であること、また屋島からの眺望について強調される。	京都府立大学
K015	〔タマモホテル リーフレット〕	タマモホテル勝地紹介係	—	6	14.0 × 35.2	ホテル平面図の一角に「讃岐名勝」を列挙。「名山屋島」と記載。	香川県立ミュージアム
K016	讃岐遊覧御案内	頼富庄藏発行	—	6	17.6 × 65.1	表紙に屋島全景イラスト。内側に談古嶺から眺めた屋島古戦場と西側から撮影した「屋島遠望」の写真あり。「沿線の主要名所」の一項目として屋島。「南嶺東崖上の談古嶺から壇の浦を隔てゝ五剣山を望めば、これぞ寿永の昔源平鎬を削って戦へる古戦場絵巻物の如く俯瞰され附近の安徳院祠を始め継信、菊王丸の墓等の遺蹟、殊に那須与市〔ママ〕が誉を残した駒立岩祈岩はそゞろ往時を偲ばしめるかの如くであります」表側の地図では西側から俯瞰した讃岐地方の図が描かれる。	香川県立ミュージアム

K：リーフレット（4）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
K017	観光さぬき	—	—	6	未調査	大川自動車が発行した案内リーフレット。栗林公園と屋島からの写真が載る。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
K018	屋島史蹟名勝地図	福家惣衛考	—	6	27.0 × 38.8	屋島周辺の全景と、屋島山上の図が描かれている。「鞍掛松」「城塞跡」（屋島城のことヵ）「台場跡」「継信墓」「安徳社」「菊王丸墓」などとあり。標高の記述有り。屋島ケーブルの記載もあり。源平合戦の両軍の進路や退路が描かれている。裏面に福家惣衛が著した「屋島合戦講話要領」がある。「1. 緒論」のところに「昔時ハ離島デアッタガ今ハ半島トナル。其ノ形屋字ニ似テヰル」とあり。	高松市歴史資料館
K019	四月号関西交通遊覧案内絵図	—	—	6	39.8 × 53.4	表紙は「屋島ヨリ鬼ヶ島ヲ望ム」という題の絵葉書が真ん中にレイアウトされている。タマモホテルや「西郷さんの説明を聞かざれば屋島見物の価値半減」というううたい文句の源平館の広告がある。	高松市歴史資料館
K020	〔パンフレット〕瀬戸内海図絵	大阪商船株式会社	—	6	18.6 × 12.4	表紙は、どこかの山上からの眺望の絵であるが、場所は不明（寺などが山上にあるため、屋島ヵ）。屋島の歴史や屋島からの眺望についての解説有り。運賃表やアクセスについての記載あり。	高松市歴史資料館
K021	［リーフレット］国立公園屋島讃岐遊覧案内	—	1929 ～ 1944	6	19.0 × 75.6	表紙はイラストで、弓を構える那須与一の背景に屋島がある。鳥瞰図で描かれたカラーの「源平古戦場讃岐名所図会」において屋島は、山上が平らで、北嶺と南嶺にわけて書かれている。「屋島山上遊覧道順」では「1 屋島寺 2 血の池（屋島寺の境内にあり）3 霊厳 4 談古嶺」とある。表紙に「源平古戦場遊覧記念」スタンプあり。鳥瞰図の裏側には「史蹟屋島」とタイトルのついた史蹟案内。「屋島は…往時”八島”と称し居りたり八島の形状屋根に似たる處より屋島と言ひ傳へ現今に及べり。…屋島遊覧は…即ち印象深きものは全山翠緑滴る松樹を以て包まれ山嶺程と平坦地なる事。この山上より瞰下風景は千變萬化雄大且つ其壮観處女美實に天下絶勝の一語に盡	高松市歴史資料館

K：リーフレット（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
						きる。又今を去る七百五十年前山麓にて源平の勇士が雌雄を決した源平古戦場を追想し埋められたる史蹟を探究するも可。…」。	
K022	瀬戸内海国立公園と讃岐路	—	1934 〜	6 ヵ	13.0 × 35.9	国立公園指定後に、「高松駅宇高航路連絡船内高塚松涛堂」が発行した観光リーフレット。表はカラー鳥瞰図で、瀬戸内海国立公園の全体を鳥瞰する。屋島の「獅子の霊巌」・「談古嶺」・「遊鶴亭」の眺望ポイントや航路が描かれ、屋島のつけ根に広がる塩田も風景の要素として描かれる。裏面には、写真入りで観光地の見どころを紹介。	香川県立ミュージアム
K023	［リーフレット］屋島	—	1949 頃	7	18.5 × 54.7	表紙は弓を構える那須与一と、扇を掲げた船の背景に屋島が半分くらい。「瀬戸内海国立公園讃岐名勝地図」においては、山上が平たく、屋島寺、血の池、レイガンなどが絵と文字で描かれている。裏面には「屋島の風光」、「史蹟」や「源平屋島の合戦」、「讃岐の外観」などの説明と写真で「連絡船より屋島を望む」「遊鶴亭より北を望む」「談古嶺より壇の浦と五剣山を望む」「獅子の霊巌より高松市を望む」写真。説明部分は、屋島の風景美についてと源平についての記述が分かれてなされている。	高松市歴史資料館
K024	国立公園屋島　讃岐名所史蹟鳥瞰図	—	1950 頃	7	未調査	表紙は「義経弓流しの図」。「観光都市高松港全景」「談古嶺より源平古戦場檀の浦全景」の写真。鳥瞰図は南東方向から俯瞰された屋島とその周辺、瀬戸内海島嶼や遠景を描く。「史蹟屋島」と題した名所案内には、風景美と源平合戦が記載される。	香川県立図書館
K025	［リーフレット］屋島	—	1958 〜 1988	7	53.3 × 37.8	表紙は観光案内の女性の背景に屋島。「四国観光案内図」において屋島は北嶺と南嶺の山上がそれぞれ丸い形で描かれており、ところどころにピンクの花のようなものが描かれている。屋島寺と屋島山上駅が絵と文字で、遊鶴亭が絵のみで描かれている。裏は「四国観光案内図」「屋島源平合戦記」など。	高松市歴史資料館
K026	バカンスは夢の国四国へ	高松バス	戦後（瀬戸大橋架橋前）	7	未調査	高松バスが発行した四国一周の案内リーフレット。バスガイドと観光客の後ろに屋島が写る表紙。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館

K：リーフレット（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
K027	新観光地図 四国	—	—	7	42.6 × 61.0	屋島の拡大観光図が掲載される。裏面日本交通公社発行（昭和 29 年）の四国全図。交通公社のパンフレットらしく旅館や四国霊場めぐりの案内が入っている。屋島はアメリカ映画の西部劇ではおなじみ」のメサ地形の説明ののち、眺望、板状節理と獅子霊岩を記述し、古戦場について触れる。「電車とケーブルで 30 分」と交通の利便性を記す。	香川県立ミュージアム
K028	［リーフレット］屋島 登山電車・屋島ケーブル	—	—	7	9.1 × 25.9	表紙は屋島ケーブルの写真。 屋島の図像なし。「只今では屋島が地理的・歴史的にも、学校教育の生きた教材と迄云われ…」、「美しい師弟愛の想ひ出にも、皆様方の屋島観光コースをお薦め致します」	高松市歴史資料館
K029	［リーフレット］瀬戸内海国立公園”屋島”ご案内	屋島ドライブウエイ株式会社	—	7	19.6 × 26.6	表紙に屋島ドライブウェイのイラスト。「瀬戸内海随一の眺望と、史情豊かな源平古戦場……屋島」の見出しのもと、屋島の鳥瞰図が描かれている。平らな山上に、屋島寺・談古嶺・獅子の霊厳などがある。そのほか、「那須与一駒立岩」と「的場」・「佐藤継信戦死」・「弓流し」が武将のイラストで描かれている。	高松市歴史資料館
K030	［リーフレット］四国 屋島案内	—	—	7	42.9 × 30.3	表紙は四国における屋島を強調（人々が屋島を指差すイラスト）。「源平合戦屋島檀ノ裏の巻」と題された図には、高松から屋島への交通略図の右下に、源平合戦の図（源氏と平家の陣の間に扇の的）。屋島全景の写真なし。 地図付・写真付観光リーフレット。	高松市歴史資料館
K031	［リーフレット］屋島・栗林公園・琴平 定期観光バス	高松琴平電鉄	—	7	19.0 × 26.4	高松琴平電鉄発行。 屋島の図像なし。 観光案内中に屋島の説明有り。「観光都市高松、名勝栗林公園と共に全国に誇る景勝地」とあり。	高松市歴史資料館
K032	国際観光都市高松	高松市役所	—	7	未調査	高松市を中心とした観光地を案内するリーフレット。高層ビル群の向こうに屋島を描く珍しい表紙。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館

L：近現代地図（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
L001	香川県管内全図	著作者後藤常太郎、発行者中村芳松	1900	6	39.0 × 55.0	地図裏面に郡毎の地誌的記述あり、木田郡の項目に屋島の源平合戦ゆかりの名所に関する記載あり。「元暦中平氏據りたる有名なる屋島あり」との記述あり。	香川県立ミュージアム
L002	大日本管轄分地図 香川県管内地図 改正新市町村名	著作者後藤常太郎、発行者中村由松・福岡元次郎	1906	6	39.5 × 54.6	明治39年版。地図裏面に郡毎の地誌的記述あり、木田郡の項目に旧蹟として、源平合戦ゆかりの屋島各名所に関する記載あり。屋島は「天下の一大勝區にして、歴史上吾人の感慨深からしむる處なり」との記述有り。	香川県立ミュージアム
L003	大日本管轄分地図 香川県管内地図 改正新市町村名	著作者後藤常太郎、発行者中村由松・福岡元次郎	1908	6	39.1 × 53.8	明治41年版。地図裏面に郡毎の地誌的記述あり、木田郡の項目に旧蹟として、源平合戦ゆかりの屋島各名所記載あり。屋島は「天下の一大勝區にして、歴史上吾人の感慨深からしむる處なり」との記述有り（同名図明治39年版から文言変更無し）。	香川県立ミュージアム
L004	香川県全図	著作印刷兼発行者日下伊兵衛、発行所和楽路屋、売捌元又間精華堂	1913	6	39.4 × 54.1	大正2年7月25日発行、大阪で刊行された香川県の地図。裏面の「香川郡地誌」のうち山岳の項に屋島の記述有り。「源平の戰場として名高い」と記載。木田郡の項目にも屋島の各名所が記載される。	香川県立ミュージアム
L005	全日本最新名勝名物地図	大阪毎日新聞社発行	1932	6	26.0 × 108.0	大阪毎日新聞社発行。日本二十五勝？の一つとして掲載。古戦場のマーク有り。裏面の全日本名物案内に記載あるか。	香川県立ミュージアム
L006	〔山田郡絵図〕	—	原本明治、1937模写	6	未調査	E010「高松藩領絵図（山田郡）」とほぼ同じであるが、凡例はない。登山道などが描かれているが、画像が不鮮明なため、判読不能。	高松市歴史資料館
L007	屋島村塩田之図	—	原本明治、昭和模写	6	未調査	塩田の広さなどの詳細についての記述有り。屋島山は描かれていない。「一此村塩田ハ北方海に扰（ママ）三面ハ皆ナ川ナリ（此ノ川を相引川ト唱ウ）西方ハ皆ナ山（此ノ山ハ則屋嶋山ナリ）然シテ山ノ巨利ハ壱丁乃至弐丁ナリ」とあり。	高松市歴史資料館

Ｌ：近現代地図（２）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
L008	屋島・五剣山	香川県発行	—	6	27.2 × 39.3	香川県発行。屋島の歴史として、屋島城築造、屋島寺開基、源平合戦、秀吉四国征伐、文久三年砲台設置について記す。「源平屋島合戦年表」「両軍将士の年齢」など記載あり。図中に、「源軍ノ進路」「源平合戦当時ノ海岸想像線を表現。	香川県立ミュージアム
L009	香川県史跡名勝天然記念物分布図	—	—	6	37.6 × 53.2	史跡名勝天然記念物のうち著名なものを記載し、「県民をして郷土を理解せし」め、「県内□訪の人士に対しては案内書たらしめんとする」図。屋島の項目には溶岩台地・天智天皇期古城・源平合戦所・山上の風光明媚さについて記述。	香川県立ミュージアム
L010	［讃岐瀬戸内 阪出屋島漁場絵図］	—	—	6	104.0 × 142.0	半島のような描かれ方をしている。塩田のようなものや、漁場の範囲について描かれている。	高松市歴史資料館
L011	高松市屋島地區全圖	—	—	6	118.5 × 76.5	5 千分の 1 の縮尺の地図。談古嶺、獅子嶺巌などの記載もあり。現在の都市計画図のような地図。	高松市歴史資料館
L012	愛媛県管内図	愛媛県蔵版、水口臥龍館銅版	1884	6	52 × 109	25 万 3 千 8 百分の 1 の銅版地形図。屋島山、長崎の鼻の記述。	愛媛県立図書館
L013	愛媛県管内漁区全図	愛媛県庶務課編輯	1881	6	53 × 109	「愛媛県管内全図」に漁区を追記した図。内題に「海面／漁区」と後筆。25 万 3 千 8 百分の 1 の銅版地形図。屋島、壇ノ浦、長崎の鼻の記述。	愛媛県立図書館
L014	屋島山上図屏風	高松市	1950	7	未調査	高松市経済観光課が観光宣伝用に吉田初三郎の弟子寺本左近に依頼して作成した鳥瞰図。	高松市歴史資料館
L015	沿線案内	高松琴平電鉄	1934 ～	7	26.8 × 38.0	国立公園以後。高松琴平電鉄発行。琴電の路線図と、屋島周辺地図有り。観光案内。	高松市歴史資料館
L016	備讃瀬戸及び備後灘海路図	—	—	7	75.8 × 108.0	庵治沖から屋島・壇の浦を望む。 屋島とその周辺の地形と航路を示している。	香川県立ミュージアム
L017	高松市屋島地区全図	—	—	8	119.0 × 77.0	縮尺五千分の一の屋島地図。	高松市歴史資料館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
M001	讃岐名所記及同附録國史略	—	不明	5	未調査	「綾歌郡川津村土屋徳太郎氏蔵書ニ拠リ大正十五年二月十七日鎌田共済会調査部写之」とある。屋島について現状（相引の浦、今堤塘）と由緒（此山古は海中にありし故屋島といへり）を記す。清和天皇御宇ニ大江忠名屋島にてよめるとして「時鳥鳴く声聞けば別れにし故郷さへそ恋しかりける」の和歌を引く。ただし古今和歌集では読み人知らずとして扱われている。	香川県立文書館
M002	演説書	—	1876	6	未調査	「明治９年県政事務引継書」所収、民有塩田　山田郡西潟元村ノ製塩相場	愛媛県立図書館
M003	官林調査手続書	—	1876	6	未調査	「明治９年県政事務引継書」所収、屋島山ノ内壇ノ浦　五十間浦生当表藤目官林、従前ハ屋島山ノ字無之、現山ハ屋島山ヲ分裂シタル官林ニ付此字ノ上江屋島山ノ内ノ五字ヲ冠シ候積・・・	愛媛県立図書館
M004	地理科収入金仕訳書	—	1876	6	未調査	「明治９年県政事務引継書」所収、山田郡西潟元村屋島村官林土石落葉下草代	愛媛県立図書館
M005	旧香川県地理関係之事務引継書類綴込	—	1876	6	未調査	「明治９年県政事務引継書」所収、第 42 号山田郡屋島村農松岡唯八同村字壇ノ浦官林立木盗伐之件　盗木預証書、裁判所へ、入札処分、第４号　潟元村官有塩田関係書類	愛媛県立図書館
M006	行政資料「雑集」	愛媛県立図書館	1877	6	未調査	明治 10 年 10 月 15 日「屋島神社創建御届」第２大区７小区小区長安西惟精→愛媛県令岩村高俊、香川県合併時代の文書類	愛媛県立図書館
M007	明治拾壱年指令本書	—	1878	6	未調査	第１号内務　山田郡屋島村屋島寺境内樹木伐採ノ儀上申、40 号内務　山田郡屋島村猿田彦神社境内樹木木枝打ノ義伺	愛媛県立図書館
M008	明治拾四年指令本書	—	1881	6	未調査	124 号内務　山田郡屋島村海面寄洲埋立地所反別之儀ニ付上申	愛媛県立図書館
M009	明治十五年指令本書	—	1882	6	未調査	116 号山田郡屋島村官林内黒石堀採開坑願之義ニ付副申	愛媛県立図書館
M010	明治十六年指令本書	—	1883	6		147 号山田郡屋島官林仝上（下草刈採）伺、６号山田郡東潟元村屋島神社へ官有社地無代下渡伺、11 号山田郡西潟元村塩田税金額訂正上申、69 号山田郡西潟元村塩田払下伺	愛媛県立図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
M011	明治拾七年指令本書	—	1884	6	未調査	51 号山田郡屋島村官林内黒石堀取年継伺、54 号山田郡屋島村官林内黒石堀採年継伺、94 号山田郡屋島村石場総代落葉採取伺、126 号山田郡西潟元村総代下草払下願ニ付伺、156 号山田郡西潟元村官有塩田税金伺、163 号山田郡屋島村字藤目下草払下伺、6 号山田郡西潟元村屋島官林赤土堀採伺、76 号山田郡東潟元村下草払下伺、127 号山田郡屋島村外ニヶ村官林落葉採取伺	愛媛県立図書館
M012	〔屋島官林内黒石払願〕	—	1892	6	未調査	屋島内の黒石払下げを許可する行政文書。図像資料無し。	高松市歴史資料館
M013	屋島官林借地願	佐野松太郎（印）	1894	6	24.7 × 16.7	屋島内官林の借地についての行政文書。割印有り。図像資料無し。	高松市歴史資料館
M014	〔屋島国有林内貸地願一軒〕	—	1907	6	1：24.1 × 16.5 2：24.1 × 16.4	2 点。 屋島の貸地願いに関する行政文書。図像資料無し。	高松市歴史資料館
M015	史蹟名勝天然記念物調査報告 1	香川県史跡名勝天然記念物調査会、香川県	1922	6	未調査	第一篇史蹟名勝の部、第三（目次第四）で屋島を取り上げる。「古今にわたる史蹟に富み且つ天下の絶景地と嘆賞せらるる」と記述。屋島城､源平合戦に関する記述あり。屋島寺など、屋島内の名所の説明と写真あり。	香川県立図書館
M016	屋島 小豆島を中心とする海上公園	著作兼発行人 高松市役所観業課内 三次欣期／発行者 水尾與一	1930	6	27.0 × 38.0	表紙に屋島のイラスト。手前には帆船が描かれている。地誌と写真帖。 屋島山（一）と屋島山（二）があり、前者はおそらく庵治側から、後者は高松港からの写真である。「…屋島、小豆島を中心とする海上公園は…国民性の訓練、地理、歴史、信仰、国民保健上よりみて我国民は勿論、外客を誘致して優に我国風光の粋を誇るに足るべき諸条件を具備せるに近いと信ずるのである」と述べられている。	高松市歴史資料館
M017	屋嶋町勢一班	屋島町役場	1936	6	27.0 × 39.3	昭和 11 年 10 月発行の屋島町全図。大字の範囲を記載。地勢の欄に屋島の地形、由来の記載有り。「山上瞰下風景甚ダ佳ク雄大ノ展望二富ミ」と山上からの風景を評価。「源平合戦古跡各所ニ散在ス」の記述有り。諸団体の欄に屋島保勝会がある。	香川県立ミュージアム

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
M018	香川県神社誌上	香川県神職会	1938	6	未調査	屋島神社、屋島神社・八幡神社、180-181 頁	香川大学図書館
M019	昭和七−十四年 香川県文書類纂 永年保存 観光 国立公園 公園 史蹟 名勝 天然記念物 観光 雑輯	公園課	1939	6	未調査	1938 年 3 月に、「体力局施設課長」から香川県知事に照会のあった「国立公園内徒歩旅行地」選定に関する回答文書。「旅行地」とは徒歩旅行地（聖跡、史跡、神社、仏閣、天然記念物優秀なる風景地を連絡するハイキングコース）で各コースごとに図面で示し、徒歩距離・所要時間・費用概算が付されている。回答にあげられたコースは、A屋島・八栗・御殿山コース、B屋島・八栗・志度コースほかが 8 コースである。	香川県立文書館
M020	香川県勢要覧	香川縣總務部統計課	1940	6	9.9 × 16.3	香川県総務部統計課発行。表紙に高松市街北東方向の屋島全景イラスト。「公園」の項目の一つに屋島公園有り。「香川県名勝」の項目に、「瀬戸内海国立公園」が筆頭に記載され、屋島も記述される。眺望・源平合戦・屋島寺・瀬戸内海国立公園の「王座」との記述有り。	香川県立ミュージアム
M021	木田郡誌	香川県教育会木田郡部会郡誌編纂部編（代表山田弥三吉）、木田郡教育部会	1940	6	未調査	屋島に関する源平合戦、皇族の行啓などの歴史、名所や行事、俚謡・川柳などの文芸・民俗に関する記述あり。香川大学図書館 090/82 もこれに同じ。	高松市中央図書館
M022	香川縣文書類纂 観光・公園 永年保存　昭和八年屋島山上盛土工事施工に関する件	公園課	1934 ヵ	6	未調査	屋島の記述あり。「瀬戸内海火山脈特有の溶岩で、世界的に稀有なる古銅安山岩より成れる屋根型の溶岩台地である。頂上は風光頗る明媚で、瀬戸内海の景勝を一眸に収め、殊に東方五剣山に対する一帯の地は寿永年間（約七六〇年前）安徳天皇を擁して源平両氏の合戦ありたる所で、古戦場として世に知られゐる。」そのほか屋島保勝會の予算案書や昭和 8 年の屋島山盛土工事に関する記述あり。マイクロフィルム。	香川県立文書館
M023	各郡町村名取調書	—		6		屋島・東潟元村・西潟元村	愛媛県立図書館
M024	新修高松市史 I	高松市史編修室	1964	7		屋島と壇ノ浦、94-99 頁／源平屋島のいくさ、合戦の文芸化、やしま詞花集、247-300 頁／歴代藩主、屋島神社創建、426-429 頁／木田郡七ヶ町村のこと、屋島町、632-637 頁	香川大学図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
M025	新修高松市史Ⅱ	高松市史編修室	1966	7		神社、屋島神社、261-262 頁／寺院、屋島寺、294-295 頁／電気、屋島遊覧電車、屋島ケーブル、510-512 頁／高松国体昭和 28、昭和天皇の和歌、580-584 頁／水道、屋島町の水道、610-611 頁	香川大学図書館
M026	新修高松市史Ⅲ	高松市史編修室	1969	7		年表、屋島山の遊覧籠、屋島たぬき祭り、580 頁	香川大学図書館
M027	牟礼町史	牟礼町史編纂委員会	1972	7		源平合戦記、57-84 頁／南海通記、長曽我部、100-104 頁／陸上の交通、道標、140-143 頁／伊能忠敬の海岸測量、屋島前相引川北堤測量、174-175 頁／眉間山白毫院六万寺、547-555 頁／名所・旧跡、594-629 頁／金石、佐藤次信、634-643 頁／附録、安徳天皇、672-673 頁／附録、郷土俚謡、679 頁／秋風遍路、与謝野寛「冬柏」、296-297 頁／川柳、壇ノ浦、那須与一、玉虫、佐藤継信、弓流し、屋島落、平家蟹、鋸引、326-327 頁	香川大学図書館
M028	へんろ道（六六番雲辺寺～八八番大窪寺）調査報告書（一）	瀬戸内海歴史民俗資料館	1991	7	未調査	一宮寺～屋島寺～八乗寺のへんろ道について。	香川県立文書館
M029	平家物語・美への旅	カタログ編集委員会、NHK	1992	7	未調査	展覧会図録。	京都府立大学附属図書館
M030	牟礼塩業組合・屋島塩業組合沿革史	日本たばこ産業高松塩業センター	1994	7	未調査	「降って宝暦の頃讃岐国高松城の東約 4km の処に瀬戸内海へ向って半島状の耕地極めて少ない淋しい一寒村がありました。じゅえいの昔此処で源平の戦が行はれた屋島であります。此地に時代の先覚者梶原景正は時の藩主松平頼恭公の命を受け塩田を築く、これ屋島の塩田の始にして淋しい一寒村に過ぎなかった地に塩業なるものが出来今日の如き屋島が出来てきたのである」と記述。高松藩主の支援を受けた梶原景正による 18 世紀後半の塩田開発と、それによる屋島（潟元村）の繁栄を顕彰している。	香川県立図書館
M031	源平物語絵セレクション−神戸市立博物館−	神戸市立博物館、財団法人 神戸市スポーツ教育公社	1997	7	未調査	展覧会図録。	京都府立大学附属図書館
M032	鎌倉の武士と馬	馬事文化財団馬の博物館、馬事文化財団	1998	7	未調査	「平家物語図屏風」と、その解説。屋島の形は見受けられない。	香川県立図書館

M：調査・学術（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
M033	第二十回特別展 源平合戦図絵の世界	高松市歴史資料館	1999	7	未調査	展覧会図録。	京都府立大学附属図書館
M034	源平の美学−『平家物語』の時代	サントリー美術館	2002	7	未調査	「一の谷・屋島合戦図屏風」など。	京都府立大学附属図書館
M035	源平合戦を馬が行く	馬事文化財団	2005	7	未調査	源平合戦を題材とした絵画の中から、馬が描かれているものを中心に解説がおこなわれている。江戸時代の「平家物語図屏風」や歌川芳員の「源平矢島合戦之図」、狩野探信の「源義経弓流し図」などが掲載されている。	香川県立図書館
M036	庵治町史	高松市編	2007	7	未調査	庵治八景に「屋島の晴嵐」、江戸時代の「阿字八景記」より俳句を掲載、庵治舟唄・庵治小学校校歌の歌詞の屋島の記述	高松市中央図書館
M037	空海の足音 四国へんろ展 香川編	香川県立ミュージアム	2014	7	未調査	「屋島寺縁起絵」。	京都府立大学附属図書館
M038	高松市屋島地区社会実態調査報告	高松市教育委員会・高松市立屋島小学校・香川県教育研究所共編、高松高松教育研究所	1951	7	未調査	屋島地区の実態調査。「概要」に、「元八島と書いていたが山の形が屋宇に似ているので屋島と称するようになった」「その後（明治 22 年合併により潟元村成立のこと―解説者註）展望の雄大と源平の史蹟とを誇る絶景屋島山の名天下に喧伝せられ」とあり。 各官庁資料に基づく第一次実態調査の「自然的条件」では、「岩石は重畳して奇観を呈し」「全山緑の松で覆われ、中央から西に突出して凸字形をしているので却って山巓部に平坦な土地を作っている」とあり。うち「地質」の項目で、畳石と獅子の霊巌を指して「どちらも科学上より見て興味のある事象である」とする。「歴史的条件」では、先史時代から明治末期前後までの通史を適宜時代毎に区分し記述。源平合戦については「源平合戦が屋島の東部に於いて行われたことは現存する旧跡によつても想像出来る」とあるのみ。	高松市中央図書館
M039	ふるさと香川の歴史	香川県、四国新聞社	1992	7	未調査	香川県史別編Ⅲ普及版。 表紙絵に、武士が浜辺を馬で走り、左手に南東からみた屋島、右手に南西からみた八栗山と推定されるイラストを描く。85 〜 88 頁に屋島合戦の前後についての歴史学的叙述。	高松市中央図書館

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
M040	新修 高松市史資料 高松市史 第一巻 通年 高松の生いたち 屋島合戦	高松市史編修室／執筆者 近藤末義	—	7	25.5 × 18.0	市史執筆資料。昭和 37 年 3 月 31 日造本。通史編の手書き原稿が掲載される。屋島合戦に関わる文学・芸能作品・旧蹟・地名の紹介。源平合戦に関しての記述も多い。	高松市歴史資料館
M041	屋島古墳調査記	—	—	7	未調査	市史執筆資料。屋島所在の古墳につき、「所在地」「地形」「方向」「現状」「実測図」が収録。 ほか「屋島地区古墳一覧表」付属。 各古墳ごとに説明書きがある。	高松市歴史資料館
M042	わたしたちの郷土香川県	—	—	7	21.0 × 14.9	「地図の見方とその利用」の項目に、溶岩台地である屋島が取り上げられる。源平合戦に由来する「赤牛崎」の地名と、堆積作用による地形変化との関係が説明される。「かわらけ投げ」の場所についても記述。「めぐまれた観光地」の項目で源平古戦場屋島として取り上げられる。	香川県立ミュージアム
M043	新修 高松市史資料 古高松 香西 屋島 多肥地区年表	高松市史編修室／執筆者 小竹一郎・福田専一	—	7	25.7 × 18.2	市史執筆資料。「古高松・屋島地區年表」（神代～昭和 33 年まで）、「村誌」（『古高松村誌』ヵ）、「屋島合戦と當村」「屋島神社」「古掛松」「相引川」の項あり。	高松市歴史資料館
M044	新修 高松市史資料 屋島 太田 古高松 木太 鶴尾	高松市史編修室／執筆者 小西弥五郎・小林	—	7	25.4 × 18.0	市史執筆資料。屋島の地勢・旧蹟などの紹介。塩田の箇所では地図あり。	高松市歴史資料館
M045	新修 高松市史資料 塩業史 航空	—	—	7	25.7 × 18.2	市史執筆資料。塩業の記述。	高松市歴史資料館
M046	史蹟名勝天然記念物関係書類	—	—	8	未調査	1931 ～ 1951 年にかけて、指定前後の調査などに関する屋島町・高松市・香川市のやりとりが中心。史蹟名勝天然紀念物の標識設計図や屋島城趾の石碑の図・屋島地図・石碑写真あり。 複数の書類を綴じたもの。1951 年の私信あり。	高松市歴史資料館

N：来日紀行文（1）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
N001	『東洋文庫 341・日本風俗備考 2』(庄司三男･沼田次郎訳、平凡社、1978)	フィッセル，J.（蘭）	1833	4	未調査	1820 年から 1829 年まで日本に滞在、1822 年に江戸参府紀行のときに瀬戸内海航行。 1822 年 2 月 24 日「早朝、家室の近くにあり、そしてサイコク島（四国島）の美しい景色を眺めたが、その島の山頂の頂は全て雪に覆われていた。」	—
N002	'No. V. Nagasaki, August 22, 1860'、in 22 Dec. 1860 p.1126 'From the Mr.J.G.Veitch's Letters.' The Gardener's Chronicle and Agricultural Gazette.	J.G.Veitch	1860	4	未調査	英国の園芸商で 1860 年に来日した John Gould Veitch が、英国の園芸雑誌 The Gardener's Chronicle and Agricultural Gazette に 1860 年から 1862 年にわたって連載した書簡形式の紀行文。1860 年 8 月 22 日付けで、長崎から神奈川への行程で瀬戸内海を通過する記述がある。瀬戸内海については the so-called Inland Sea と記述される。航行を許された 4 番目の船 the Berenice に乗船。美については The few who have made it describe the scenery as beautiful beyond description.	Lindley Library, Royal Horticultural Society, London
N003	Yedo and Peking; A Narrative of A Journey to the Capitals of Japan and China. (『幕末日本探訪記：江戸と北京』(三宅馨訳、講談社、1997))	フォーチュン，R.（英）、John Murray. London.	1863	4	未調査	1860 年 12 月 17 日横浜を出港→ 12 月 21 日周防灘。汽船イングランド号。 R フォーチュンは英国のプラントコレクター。瀬戸内海については、播磨灘で「…このあたりの海の風光は、船が進むに連れて絶えず移り変わる」とパノラマの風景を記述する。植生や地質の科学的な記述とともに「…農地としては豊沃でなくても、眺望の主眼は、奇異で空想的な丘や谷間、峨々たる岩石など、それらの人工を加えない野生のままの自然の風景にある。…この美しい「内海」の海岸に日向ぼこでもしながらこの海辺に住み、そし「林間の隠者」となって、そのような風景の中で余生を送りたいと、口をそろえて言う」とピクチャレスクな審美眼により瀬戸内海を記述。	—

N：来日紀行文（2）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
N004	The Capital of Tycoon.（『大君の都：幕末日本滞在記・中』（山口光朔訳、岩波書店、1962))	オールコック、R.（英)、Longman. London.	1863	4	未調査	オールコックは、初代英国公使。1861年6月11日（文久元年5月3日）下関発6月14日（文久元年5月6日）→兵庫沖に正午に到着、英国艦リングダヴ号（H.M.S.Ringdove） 屋島と呼称していないが、地形記述から考えて屋島であると推測できる記述がある：「兵庫に近づくと、大変奇妙な山が見えてくる。その山は、1200フィートほどのたかさで、平たいテーブル状をなしていて、そこから急に四方へ向けて山が低くなっている」。挿絵もあり。	—
N005	A Lady's Visit to Manilla and Japan	D'Aguilar, Anna、Hurst and Blackett Publishers	1863	4	未調査	1862年6月下関→横浜、蒸気船セントルイス号。 1862年に来日した女性旅行家Anna D'Aguilar。地理的には周防灘から東が内海だと理解している。穏やかな海を船で航行しながら内海を「すてきな湖の連なり」と捉えている。	—
N006	『絵で見る幕末日本』（茂森唯士訳、講談社学術文庫、2004)	アンベール，エメェ（瑞西）	1863来日、1870	4	未調査	アンベールは、スイスの外交団として来日。瀬戸内海に１章をあてて説明する。1863年４月下関から神奈川へ向けて内海を航行する：「右、左に間断なく現れてくる大小さまざまの島の風景を嘆賞した。これらの島は、裸島もあれば、よく茂った島もあり、無人島もあれば、人の住んでいる島もあって、内海の航行に大きな魅力を与えていた。」	—
N007	The Illustrated London News	—	1861・1868	4	未調査	1861年８月10日号では、特派員（チャールズ・ワーグマン）が行程５日間で５月１日長崎を出発して瀬戸内海を航行して神奈川へ向かう記述がある。1868年３月14日号にはThe Inland Sea of Japanと題する記事がある。同記事には瀬戸内海沿岸を船からの視点でみた５枚の挿絵が掲載されているが、屋島は描写されていない。	—

N：来日紀行文（3）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
N008	『オーストリア外交官の明治維新・世界周遊記・日本編』（市川慎一・松本雅弘訳、新人物往来社、1988）	ヒューブナー，A.（墺）	1873	6	未調査	1871年、オーストリア・ハンガリー帝国の外交官だったヒューブナーの世界一周旅行の旅行記。兵庫→長崎。1873年初版。 「自然の忠実な再現にすぎないのだ」と、ピクチャレスクなまなざしでみる瀬戸内海が記述される。	—
N009	『支那旅行日記』（海老原正雄訳、慶應出版社、1943）	リヒトホーフェン，F.（独）	1877	6	未調査	ドイツの地理学者リヒトホーフェンは、中国旅行に日本経由で出発する。1868年8月31日神戸出発、9月1日瀬戸内海、2日下関。「内海の航行は素敵」と記す。さらに、内海について、このように広い地域にわたって幸福と繁栄の見られる優美な風景は世界的にもあまりなく「世界で最も魅力のある場所の一つとして高い評判をかち得」ると評価し、「この状態が今後も長く続かん事を私は祈る」と結ぶ。	—
N010	『グラント将軍日本訪問記』（宮永孝訳、雄松堂書店、1983）	ヤング，J.R.（米）	1879	6	未調査	アメリカ南北戦争で活躍したグラント将軍の随行員JRヤングが記述した記録。1879年6月に長崎に到着し、そこから神戸へ向かうが、コレラ蔓延のため上陸せず。「どこに目を向けても古の絵や絵のように美しい文明に取り囲まれながら、その美景とロマンスで有名な内海を航行したのである。」（p. 58）	—
N011	Sketches of Life in Japan	Knollys, H.（英）、Chapman and Hall, London	1887	6	未調査	長崎から神戸へ向かう。内海の名声について far-famed, land-locked expanse of waters called the Inland Sea と述べる。絶えず変化する自然の美を視覚的に捉えて記述する。	—
N012	Jinrikisha Days in Japan（『シドモア日本紀行：明治の人力車ツアー』（外崎克久訳、講談社、2002)）	Scidmore, E.R.（米）、Harper & Brothers, New York	1891	6	未調査	初来日は1884年。「私が初めてこの魅惑的内海を航行したのは、9月の祝日［明治17年菊の節句（9月9日）、シドモア女史初来日の時期］で、ぼんやりした水平線と紫の光が秋の到来を告げていました。…陸地に囲まれた瀬戸内海は、長さ200マイル［320キロ］に及ぶ広	—

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
						大な湖となり、島々を豊富に浮かべ不均等な海岸線に守られています。鮮やかな緑に包まれた鋸状の山脈は、夢のような無風状態を乱すに足る野性味を帯びています。青々とした島がグループとなり、水路はどこも広く平らで、人間の営みと開墾達成の印がどの風景の中にもあります。」	—
N013	Japan We Saw It	Bickersteth, M.（英）、Sampson Low, Marston & Company, London	1893	6	未調査	ベッカースティス一家は、キリスト教英国聖公会の司祭の一家。一家の娘メアリーが本書の著者。日本旅行を 1891 年に行う。11 月に神戸から瀬戸内海を経由して九州へ出かける。瀬戸内海では美しい景色を愛でるために一日中甲板で過ごした。数百の島を通り過ぎ、数分ごとに変化する島の見え方，多数の小舟の様子を楽しむ。	—
N014	On Short Leave to Japan	Younghusband, G.J.（英）、Sampson Low, Marston & Company, London	1894	6	未調査	ヤングハズバンドは軍人。休暇で 1891 年日本旅行。下関→神戸へと船で瀬戸内海航行。内海は大きな湖 a huge lake のようと記述される。イタリアやスイスの湖水と比較される。	—
N015	『ジャポンスコ：ボヘミア人旅行家が見た1893年の日本』（鈴木文彦訳、朝日新聞社、2001）	コジェンスキー, J.（チェコ）	1895	6	未調査	コジェンスキーは、ボヘミアの教育総監であり、世界一周旅行（1893-94）で日本訪問した。1893 年 10 月神戸から瀬戸内海を通り、上海までの船旅であった。	—
N016	Rambles in Japan, the Land of Rising Sun	Tristram, H.B.（英）、The Religious Tract Society, London	1895	6	未調査	瀬戸内海を 4 回航行（2 回神戸→下関、1 回下関→神戸、1 回大阪→四国）したと序文に記す。トリストラムはキリスト教英国聖公会の司祭（Canon of Durham）。瀬戸内海について美しさと素敵さにおいて匹敵するものは世界にないと述べる。海岸風景において世界的に名声のある場所の要素が瀬戸内海に備わっていると説明する。	—

N：来日紀行文（5）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法　cm（形態）	コメント	所蔵館
N017	『日本　第2巻』（中井晶夫・斎藤信訳、雄松堂書店、1978）、『東洋文庫87・江戸参府紀行』（斎藤信訳、平凡社、1967）	シーボルト，P.（独）	1897	6	未調査	オランダ商館付医官として1823年来日、1828年帰国。在任中、1826年の江戸参府紀行の往路3月2日下関から3月8日室まで瀬戸内海路で後は陸路；帰途6月19日兵庫から28日に下関到着。ポイントごとで経度の観測を行う。花崗岩の地質、植生について記述、耕作の記述あり。特に塩飽島あたりの海域の特徴を多島海と捉えて温和な気候について記述。	—
N018	From Sea to Sea	Kipling, R.（英）、Bernhard Tauchnitz, Leipzig	1900	6	未調査	キプリングは英国人の作家。長崎から神戸まで、the P. and O. Steamerに乗船する。自然の美しさに満ちた瀬戸内海のルートを通るために、キプリングはクック旅行社に100ルピーの追加料金を支払ったと記述する。どのような空のもとでも、紫、アンバー、グレー、緑、黒と多様に移りゆく島々の美しさを見るためには、支払った値段の5倍は価値があったと評価する。甲板には、ツーリストたちがこの景色を眺めるために出てきていて、かれらの感嘆の声が絶えないと観察した記述もある。	—
N019	『ベルギー公使夫人の明治日記』（長岡祥三訳、中央公論社、1992）	ダヌタン，E.M.（ベルギー）	1905	6	未調査	外交官夫人として14年来日滞在。 尾道から宮島に船で行楽「美しい春の天気に恵まれて、瀬戸内海の魅惑的な景色の中で一日を過した者でなければ、私たちに微笑み語りかけてくる大自然のあくまで落ち着いた安らかさを、本当に実感できないに違いない。こうして過した時間のすばらしさは筆舌につくし難く、決して忘れることができないほどであった。」p366	—
N020	『東洋文庫・日本その日その日』（石川欣一訳、平凡社、1970-1971）	モース，E.（米）	1917	6	未調査	モースは博物学者。東京帝国大学の動物学の教授のお雇い外国人。神戸を出発して長崎まで、瀬戸内海を夜に航行した。その名声について記述している「ここは世界で最も美しい航路の一とされている。」	—

N：来日紀行文（6）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
N021	The Prince of Wales' Eastern Book: A Pictorial Record of the Voyages of H.M.S. "Renown" 1921-1922	Sir Percival Phillips、St Dunstan's Hodder and Stoughton, London.	1922	6	未調査	英国皇太子エドワード一行のレナウン号による東方歴訪 1921-1922 の記録。神戸を 1922 年 5 月 6 日に出発して瀬戸内海航行。高松では松平卿の接待をうけ、栗林公園と屋島を訪れる。屋島村訪問時の The Prince walking into the village of Jashima と題される写真が掲載される。写真には屋島の山のシルエットを背景にして、日英の国旗を降る人々に歓迎されるエドワード皇太子一行が写されている。写真の撮影場所は、屋島小学校の前辺りの道。松平氏はこの半日の歓迎のために、道路整備などに合計 10,000 ポンド以上使用したとの記述がある。続いて一行は屋島寺を訪れ、源平合戦の遺物を見学して説明を受ける。	—
N022	A Wayfarer in Unfamiliar Japan（『ウェストンの明治見聞記　知られざる日本を旅して』（長岡祥三訳、新人物往来社、1987)）	ウェストン，W.（英)、Methuen & co. London	1925	6	未調査	ウェストンは、1888 年に来日したキリスト教英国聖公会の神戸教区の牧師（1895 年まで日本滞在）。本書では瀬戸内海について 1 章を費やしてその魅力を語る。「瀬戸内海の魅力は、そこに住んでいる日本人よりも、西洋人の旅行者を一層惹きつけるようだ。不思議なことに日本の文学に瀬戸内海の魅力を賛美したものが全く見られないばかりでなく、実際に世間の人々はここに名前をつけなかったのだ。」(p.116) （西田 1999)（橘爪 , 2014）も指摘するが、本書の記述は Chamberlain, B.H. and Mason, W.B. による 1891 年刊行のマレー社の A Handbook for Travellers in Japan, 3rd Edition の記述と重複する。ウェストンは、この Handbook 第 3 版の情報提供者、執筆者のうちの一人でもある。	—
N023	『ウィル船長回想録』（杉野目康子訳、北海道新聞社、1989)	ウィル，J.（英）	1872 頃	6	未調査	ジョン・バクスター・ウィルはスコットランド出身で、明治初期の日本やアジア各地で活躍した船乗りである。引退した後は函館で余生を過ごし自分史 Lookin Back（手稿）を記した。本書は、瀬戸内海で活躍した西欧人船乗りの視点から見た瀬戸内海記述として貴重である。	—

N：来日紀行文（7）

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法 cm（形態）	コメント	所蔵館
N024	A Diplomat's Wife in Japan（『英国公使夫人の見た明治日本』（横山俊夫訳、淡交社、1988））	フレイザー,M、コータッツィ編、Weatherhill, New York	1889～1894 執筆、1982 刊行	6	未調査	1889 年 4 月長崎→東京、ヴェロナ号。メアリー・フレーザーは、東京に英国公使として赴任する夫とともに来日。瀬戸内は日本の初印象をつくる「今はもう瀬戸内にきております。私はすでにこの国の革新にふれたようです。その美しさや遠さの本質そのものをみたようです。…一刻一刻の眺めがあまりうつくしいものですから、直前まで見ていた景色が遠ざかっても、悔やむのを忘れてしまうのです。私はいろいろなものを見てきましたが、松の木に縁取られた日本の山々ほど、ひとつひとつがこの世ならぬ美しさをたたえているものはありません。」（p. 31）	—
N025	「日本の追憶」『定本モラエス全集 I』（花野富蔵訳、集英社、1969）	モラエス（ポルトガル）	1899～1929 日本滞在	6	未調査	ポルトガル人の外交官・ジャーナリスト・作家で、1899-1929 年日本滞在、徳島にて没。1902 年から 1913 年までポルトガルの新聞に日本の印象記を執筆。「瀬戸内海、インランド・シイ、これだけで、充分、日の出の帝国を定義できるだろう」p105 と幻想的な美しい日本の風景が瀬戸内海の描写に凝縮。「イギリス人がインランド・シイと呼んでいる瀬戸内海―楽園にも似た風景に驚嘆するあまり、歩行する陸地そっくりの幻想をおこすあの比類のない内海―」（p. 102）	—

O：その他

ID	資料名	作者・出版社	作成年・出版年	時代	寸法（形態）	コメント	所蔵館
0001	黒田家譜 1	—	1688	2	未調査	豊臣秀吉の四国平定の際に、黒田官兵衛が屋島城を攻める記述	福岡県立図書館
0002	弘化録（『新編 香川叢書 史料編 1』所収）	神恵院光遍	1844	4	未調査	鑑真と屋島、源平合戦に関する記述、神恵院光遍作	高松市中央図書館
0003	小神野夜話（『新編 香川叢書 史料編 1』所収）	小神野與兵衛	—	5	未調査	英公（松平頼重）が五十目鉄炮打を船に乗せ、屋島の北の鼻を目当に打たせた話、高松藩士小神野與兵衛作	高松市中央図書館
0004	屋島遊覧電車運賃表	四国水力電気株式会社	1923	6	24.1 × 27.1	屋島の図像なし。	高松市歴史資料館
0005	輝く南海	城戸暁風編	1924	6	未調査	大正 11 年陸軍特別大演習の記録、摂政宮（昭和天皇）が屋島を行幸し源平史跡を巡見、「屋島」、日章会本部刊行	国立国会図書館近代デジタルライブラリー
0006	全国産業博覧会ポスター	—	1928	6	未調査	那須与一の背景に、屋島・高松城天守・洋風建物が描かれる。	高松市歴史資料館
0007	モダン讃岐　8 月号	—	1936	6	26.7 × 19.3	高松市西瓦町にあった南海新報社発行の娯楽雑誌。当時の世相や風俗とともに、屋島観光のようすがわかる。	香川県立ミュージアム
0008	教育歴史画　那須与一扇を射る図	—	—	6	34.4 × 71.3	「扇の的」の場面。島は描かれているが、白旗が掲げられた軍勢（＝源氏）とともに描かれており、屋島は描かれていない。	高松市歴史資料館
0009	〔真宗派寺院明細帳〕	—	—	6	未調査	古高松村妙覚寺	愛媛県立図書館
0010	観光高松大博覧会ポスター	香川県 高松市	1949	7	未調査	那須与一の背景に、屋島・洋風建物が描かれる。	香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館
0011	観光回顧三十年	森裕壱、高松森観光事業研究所	1968	7	未調査	日本新八景に屋島の入選を目指した高松市・屋島讃勝会らによる運動の回顧録。著者の大坂毎日新聞との折衝などの記録あり。	高松市中央図書館

資料編２　文献一覧

今回の屋島の名勝的価値の調査において収集した文献を掲げる。収集に当たっては、高松市立図書館、香川県立図書館に所蔵される郷土資料調査を実施したほか、学術論文の検索サイト（CiNii）等によって屋島の景勝や歴史に関すると思われる論考・書籍および図録類を、可能な限り広く収集することにした。ただし、タイトル等で内容を予測しつつ確認していく方法とならざるを得ないため、内容的には重要であっても収集できていないものが多数あると思われる。あくまでも、本一覧は調査員が目を通せたものに限られている点、ご了解いただけると幸いである。

文献については初出年の順番に並べてある。このような表記によって、屋島に対する学術的まなざしの変遷について、おおよその流れを理解できるだろう。

（調査員：稲穂将士・井上真美・上杉和央・川口成人・川崎雄一郎・島本多敬・東昇・棟田成紹・百瀬ちどり・山﨑祐紀子）

屋島関連文献一覧（１）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
1	後藤丹治	「屋島合戦縁起に就いて」	黒田彰・岡田美穂編『軍記物語研究論文集』	クレス出版	1924	2005
2	飯田豊	「勝修羅〝八島〟に於ける屋島合戦の取扱方に就て」	『国語と国文学』2-5		1925	
3	梶原武軒監修	『復刻讃岐叢書　改訂増補讃岐人名辞書』		藤田書店	1928	1973
4	柳田國男	「目一つ五郎考」	『定本柳田國男集　第5巻』	筑摩書房	1927	1962
5	早川孝太郎	『花祭　後篇』		岡書店	1930	
6	能勢朝次	「演能曲目考」	『能楽源流考』	岩波書店	1938	
7	折口信夫	「「八島」語りの研究」	『折口信夫全集第17巻　芸能史篇』	中央公論社	1939	1956
8	森修	「『凱陣八島』は西鶴作なり」	『近松と浄瑠璃』	塙書房	1953	1990
9	信多純一	「浄瑠璃史から見た『凱陣八島』作者の問題」	『近松の世界』	平凡社	1957	1991
10	信多純一	「『出世景清』の成立について」	『近松の世界』	平凡社	1959	1991
11	信多純一	「『津多三郎』と『門出八島』」	『近松の世界』	平凡社	1959	1991
12	森修	「『凱陣八島』の諸版について」	『近松と浄瑠璃』	塙書房	1964	1990
13	池田廣司	「作品研究『屋島（八島）』」	『観世』35-5		1968	
14	北川忠彦	「景清像の成立」	『軍記物論考』	三弥井書店	1968	1989

屋島関連文献一覧（2）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
15	池田弥三郎	「芸能史の基底―「八島語りの研究」」に沿うて―」	『池田弥三郎著作集第１巻　古代および古代学』	角川書店	1973	1979
16	笠栄治	「平家物語「那須与一」をめぐって」	『解釈』21-6		1975	
17	大森亮尚	「芸能「八島」序論―民俗芸能からのアプローチ―」	『芸能』17-7		1975	
18	徳江元正	『謡曲五番』		桜楓社	1976	
19	武久堅	「合戦譚伝承の一系譜―「屋島軍」の場合―」	『平家物語成立過程考』	桜楓社	1976	1986
20	島津忠夫	「八島の語りと平家・猿楽・舞」	『島津忠夫著作集第11巻　芸能史』	和泉書院	1978	2007
21	天野文雄	「「摂待」考」			1978	
22	北川忠彦	「八嶋合戦の語りべ」	『軍記物論考』	三弥井書店	1978	1989
23	天野文雄	「能における語り物の摂取―直接体験者の語りをめぐって―」	『芸能史研究』66		1979	
24	梶原正昭	「いくさ物語のパターン―「那須与一」の読みを通して考える―」	『日本文学』28-10		1979	
25	永積安明ほか編	『図説日本の古典九　平家物語』		集英社	1979	
26	松原秀明編	『日本名所風俗図会14　四国の巻』		角川書店	1981	
27	麻原美子	「諸伝本にみる合戦記・合戦譚」	『平家物語世界の創成』	勉誠出版	1981	2014
28	山下宏明	「『平家物語』の生成―「抜書」ということ―」	山下宏明編『平家物語の生成』	明治書院	1982	1984
29	川本桂子	「『平家物語』に取材した合戦屏風の諸相とその成立について」	『日本屏風絵集成第5巻』	講談社	1984	
30	笠栄治	「『平家物語』「那須与一」の主題とその展開」	笹渕友一編『物語と小説―平安朝から近代まで―』	明治書院	1984	
31	麻原美子	「在外「舞の本」をめぐって」	『日本女子大学紀要』33		1984	
32	麻原美子	「『平家物語』屋島合戦譚とその芸能空間をめぐって」	『平家物語世界の創成』	勉誠出版	1984	2014
33	徳江元正	「那須与一の風流」	『室町芸能史論攷』	三弥井書店	1984	
34	麻原美子	「シンポジウム『平家物語』を読む」	『国文学　言語と文芸』97		1985	

屋島関連文献一覧（3）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
35	池田誠	「「那須与一」における『平家物語』の構成と表現」	『論輯』14		1986	
36	池田誠	「「那須与一」の源流と流動」	『論輯』15		1987	
37	平田俊春	屋島合戦の日時の再検討―吾妻鏡の記事の批判を中心として―」	『日本歴史』474		1987	
38	岩崎雅彦	「番外謡曲「屋島寺」の周辺」	『能楽演出の歴史的研究』	三弥井書店	1987	2009
39	伊藤正義	「解題　八島」	『新潮日本古典集成謡曲集下』		1988	
40	小山泰弘	「地誌・郷土史」	『香川県史第4巻　通史編　近世Ⅱ』	香川県	1989	
41	島津忠夫	「三道にいわゆる平家の物語―能作者の庖厨にはどんな平家物語があったか―」	『島津忠夫著作集第11巻　芸能史』	和泉書院	1991	2007
42	島津忠夫	「一谷・屋島・壇浦合戦をめぐって」	『島津忠夫著作集第11巻　芸能史』	和泉書院	1997	2007
43	相沢浩通	「屋島合戦譚に菊王丸の矢所を追う―『平家物語』語り本を起点として―」	『古典遺産』41		1991	
44	砂川博	「「壇の浦」と「柳が浦」」	『軍記物語新考』	おうふう	1991	2011
45	栃木県立博物館	『那須与一の歴史・民俗的調査研究』		栃木県立博物館	1991	
46	砂川博	「番外謡曲「屋島寺」の成立」	『平家物語の形成と琵琶法師』	おうふう	1991	2001
47	馬の博物館	『絵画にみる平家物語』		馬事文化財団	1991	
48	佐伯真一	「「いくさがたり」論の展望」	村上学編『平家物語と語り』	三弥井書店	1992	
49	田沢裕賀	「平家物語　一の谷・屋島合戦屏風の諸相と展開』	『秘蔵日本美術大観1大英博物館1』	講談社	1992	
50	藤田成子	「『平家物語』「那須与一扇の的」考―『源平盛衰記』を中心に―』	『伝承文学論「ジャンルをこえて」』	東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻中世文学ゼミ	1992	
51	安村敏信	「絵画にみる『平家物語』―中世から江戸まで―」	カタログ編集委員会編『平家物語・美への旅』	日本放送協会	1992	
52	カタログ編集委員会	『平家物語・美への旅』		日本放送協会	1992	

屋島関連文献一覧（4）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
53	三宅晶子	「宇宙を感じる―〈八島〉の戦語り―」	『新日本古典文学大系月報』48		1993	
54	ＮＨＫ松山放送局	『平家物語の世界展』		ＮＨＫ松山放送局	1993	
55	森下友子	「鎌田共済会郷土博物館所蔵の讃岐国絵図」	『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』2		1994	
56	染谷智幸	「分水嶺としての浄瑠璃競作―貞享二年の西鶴と近松―」	『シオン短期大学研究紀要』36		1996	
57	森下友子	「高松城下絵図と城下の変遷」	『香川県埋蔵文化財調査センター紀要』4		1996	
58	田中健二・藤井洋一	「冠纓神社所蔵永禄八年『さぬきの道者一円日記』（写本）について」	『香川大学教育学部研究報告　第1部』97		1996	
59	川鶴進一	「長門本『平家物語』の屋嶋合戦譚―構成面からの検討―」	『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第3分冊』42		1997	
60	秋本鈴史	「『出世景清』再考」	『芸術学フォーラム7　文芸・演劇の諸相』	勁草書房	1997	
61	神戸市立博物館	『源平物語絵セレクション』		神戸市スポーツ教育公社	1997	
62	佐伯真一	「「屋島合戦」と八島語りについて覚書」	青山学院大学総合研究所人文学系研究センター『研究叢書』12		1998	
63	宮田敬三	「元暦西海合戦試論―「範頼苦戦と義経出陣」論の再検討―」	『立命館文学』554		1998	
64	深澤邦弘	「教材研究　那須与一―「平家物語」巻第十一―」	『武蔵野女子大学紀要』33		1998	
65	大橋正叔	「浄瑠璃史における貞享二年」	近松研究所十周年記念論文集編集委員会編『近松の三百年』	和泉書院	1999	
66	信多純一	「大橋正叔氏「浄瑠璃史における貞享二年」批判」	近松研究所十周年記念論文集編集委員会編『近松の三百年』	和泉書院	1999	
67	信多純一	「『出世景清』責め場の形成をめぐって―『牛若千人切り』作者考に学ぶ―」	近松研究所十周年記念論文集編集委員会編『近松の三百年』	和泉書院	1999	
68	高松市歴史資料館編	『源平合戦図絵の世界』		高松市歴史資料館	1999	
69	岩崎雅彦	「『安宅』と浄瑠璃『凱陣八島』『出世景清』」	『能楽演出の歴史的研究』	三弥井書店	2000	2009

屋島関連文献一覧（5）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
70	田淵句美子	「1300年前後―伏見院の時代―」	『国文学　解釈と教材の研究』45-7		2000	
71	日下力	「1350年前後―覚一本平家物語と太平記―」	『国文学　解釈と教材の研究』45-7		2000	
72	岡田三津子	「1400年前後―応永・永享期の軍記物語―」	『国文学　解釈と教材の研究』45-7		2000	
73	村上美登志	「1500年前後―戦国時代―」	『国文学　解釈と教材の研究』45-7		2000	
74	榊原千鶴	「1600年前後―軍記物語と扇面画―五山禅僧による軍記物語享受の一端―」	『国文学　解釈と教材の研究』45-7		2000	
75	兵藤裕巳	「芸能の威力と拘束―将軍家の芸能―」	『国文学　解釈と教材の研究』45-7		2000	
76	胡光	「「水戸学」と高松松平家」	香川県歴史博物館編『徳川御三家展』	香川県歴史博物館	2000	
77	御厨義道	「高松松平家の成立と徳川御三家」	香川県歴史博物館編『徳川御三家展』	香川県歴史博物館	2000	
78	頼富本宏・白木利幸	『日文研叢書23　四国遍路の研究』		国際日本文化研究センター	2001	
79	大橋直義	「金仙寺観音講説話の系譜」	『転形期の歴史叙述―縁起巡礼、その空間と物語―』	慶應義塾大学出版会	2001	2010
80	大橋直義	「珠取説話の伝承圏―志度寺縁起の構造と南都・律―」	『転形期の歴史叙述―縁起巡礼、その空間と物語―』	慶應義塾大学出版会	2001	2010
81	木原溥幸・丹羽佑一・田中健二・和田仁	『香川県の歴史』		山川出版社	2001	
82	大橋直義	「「平家物語」の内と外―「異説」をめぐる考察―」	『転形期の歴史叙述―縁起巡礼、その空間と物語―』	慶應義塾大学出版会	2001・2007・2008	2010
83	麻原美子	「歴史語りの『平家物語』をめぐって」	サントリー美術館編『源平の美学―『平家物語』の時代』	サントリー美術館	2002	
84	酒巻智子	「源平の美学―『平家物語』の時代―」	サントリー美術館編『源平の美学―『平家物語』の時代』	サントリー美術館	2002	
85	サントリー美術館編	『源平の美学―『平家物語』の時代』		サントリー美術館	2002	
86	出口久徳	「屋島合戦図断簡」	『チェスタービーティーライブラリィ絵巻絵本解題目録』	勉誠出版	2002	

屋島関連文献一覧（6）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
87	出口久徳	「絵画―挿絵・近代絵画―」	『国文学　解釈と教材の研究』47-12		2002	
88	橋村愛子	「近世における『平家物語』の絵画化とその享受について」	『国文学　解釈と教材の研究』47-12		2002	
89	二本松康宏	「DB: 平家伝説と遺跡 100」	『国文学　解釈と教材の研究』47-12		2002	
90	武久堅	「作品研究〈屋島〉―上―」	『観世』70-8		2003	
91	武久堅	「作品研究〈屋島〉―下―」	『観世』70-9		2003	
92	横道萬里雄	「能演出の広がり　八島(屋島)」	『観世』70-10		2003	
93	薦田治子	「能〈八島〉と平家琵琶」	『観世』70-10		2003	
94	野村万作	「那須与市語について語る」	『観世』70-11		2003	
95	片山慶次郎	「インタビュー〈屋島〉をめぐって」	『観世』70-12		2003	
96	高橋正俊	「日本の国立公園の法的制度―瀬戸内海国立公園を例にして―」	歴史環境を考える会編『歴史環境を考える―人間・生活・地域―』	美巧社	2003	
97	武重雅文	「都市景観の変容―地図に表れた高松の変化から学ぶこと―」	歴史環境を考える会編『歴史環境を考える―人間・生活・地域―』	美巧社	2003	
98	安原眞琴	「扇文化の一断面―扇伝承と平家の女性たち―」	小峯和明編『『平家物語』の転生と再生』	笠間書院	2003	
99	出口久徳	「屋島合戦図屏風の世界」	小峯和明編『『平家物語』の転生と再生』	笠間書院	2003	
100	出口久徳	「平家物語絵画資料・参考文献一覧」	小峯和明編『『平家物語』の転生と再生』	笠間書院	2003	
101	高松市教育委員会編	『史跡天然記念物屋島』		高松市教育委員会	2003	
102	野中寛文	「天正 10・11 年長宗我部氏讃岐国香川郡侵攻の記録史料」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	
103	橋詰茂	「戦国期における香川氏の動向―『南海通記』の検証―」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	
104	唐木裕志	「戦国期の借船と臨戦態勢＆香川民部少輔の虚実」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	
105	田中健二	「長宗我部元親の東讃侵攻と諸城主の動向」	『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』		2003	

屋島関連文献一覧（7）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
106	田中健二	「屋島合戦にいたる源平合戦の軍略」	香川県歴史博物館編『源平合戦とその時代』		2003	
107	香川県歴史博物館	『源平合戦とその時代』		香川県歴史博物館	2003	
108	宮田敬三	「12 世紀末の内乱と軍制―兵糧米問題を中心として―」	『日本史研究』501		2004	
109	日下力・鈴木彰・出口久徳	『平家物語を知る事典』		東京堂出版	2005	
110	瀬田勝哉	「伏見即成院の中世―歴史と縁起―」	『武蔵大学人文学会雑誌』36-3		2005	
111	泉万里	「幸若舞曲「八島」とその絵画」	『大和文華』113		2005	
112	御厨義道	「高松藩主の「舟遊」について」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』1		2005	
113	伊藤りさ	「人形浄瑠璃における平家物語受容のあり方を巡って　付・『仏御前扇車』論」	『演劇研究センター紀要Ⅴ 早稲田大学 21 世紀 COE プログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』		2005	
114	香川県歴史博物館	『時をつなぐ写真』		香川県歴史博物館	2005	
115	NHK プロモーション編	『義経―源氏・平氏・藤原氏の至宝』		ＮＨＮプロモーション	2005	
116	石川県立歴史博物館	『源平合戦と北陸』		石川県立歴史博物館	2005	
117	河内将芳	「戦国期祇園会の再興と「祇園会山鉾事」」	『中世京都の都市と宗教』	思文閣出版	2006	
118	大山真充	「近世における神櫛王墓」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』2		2006	
119	野村美紀・佐藤竜馬	「明治十五年の高松―ケンブリッジ大学図書館所蔵の高松城・城下の写真について―」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』2		2006	
120	山下宏明	「屋島いくさの義経―〈八島〉―」	『琵琶法師の『平家物語』と能』	塙書房	2006	
121	胡光	「「高松城下図屏風」の歴史的前提」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
122	野村美紀	「「高松城下図屏風」の基礎的考察」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	

屋島関連文献一覧（8）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
123	佐藤竜馬	「考古学の視点から見た「高松城下図屏風」―一六四〇～一六五〇年代の高松―」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
124	松岡明子	「美術史の視点から見た「高松城下図屏風」」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
125	大川真充	「「高松城下図屏風」に描かれた製塩」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』3		2007	
126	出口久徳	「中世から近世への平家物語絵の展開」	『ヒーロー伝説　描き継がれる義経』	斎宮歴史博物館	2007	
127	松田珠美	「斎宮歴史博物館蔵『源平盛衰記画巻』について」	『ヒーロー伝説　描き継がれる義経』	斎宮歴史博物館	2007	
128	鈴木彰	「明治期の〈義経〉」	『ヒーロー伝説　描き継がれる義経』	斎宮歴史博物館	2007	
129	小林保治編	『平家物語ハンドブック』		三省堂出版	2007	
130	原田敦史	「屋島合戦譚本文考」	『平家物語の文学史』	東京大学出版会	2007	2012
131	市村高男	「中世讃岐の港町と瀬戸内海海運―近世都市高松を生み出した条件―」	『海に開かれた都市―高松－港湾都市900年のあゆみ―』	香川県歴史博物館	2007	
132	香川県歴史博物館編	『海に開かれた都市―高松－港湾都市900年のあゆみ―』		香川県歴史博物館	2007	
133	山元敏裕	「古代山城屋嶋城について」	地方史研究協議会編『歴史に見る四国―その内と外と―』	雄山閣	2008	
134	上野進・佐藤竜馬	「中世港町・野原について」	地方史研究協議会編『歴史に見る四国―その内と外と―』	雄山閣	2008	
135	上野進	「海に開かれた中世寺院―讃岐国道隆寺を中心として―」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』4		2008	
136	御厨義道	「高松城における海辺利用の変遷について」	『(香川県歴史博物館)調査研究報告』4		2008	
137	田中健二	「生駒時代・高松城下周辺の地形について」	『香川県立文書館紀要』12		2008	
138	川合康	「平家物語とその時代」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
139	川合康	「内乱の展開と「平家物語史観」」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
140	志立正知	「平家物語の成立」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
141	大橋直義	「平家物語と在地伝承―平家物語の内と外―」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	

屋島関連文献一覧（9）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
142	宮田敬三	「屋島・壇ノ浦合戦と源義経」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
143	清水眞澄	「平家物語と芸能」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
144	出口久徳	「源平合戦屏風の世界―一の谷・屋島合戦図屏風を中心に―」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
145	須田牧子	「朝鮮通信使と安徳天皇」	川合康編『平家物語を読む』	吉川弘文館	2008	
146	香川県立ミュージアム編	『近くてなつかしい昭和展―夢・希望・未来を見つめた日々―』		香川県立ミュージアム	2009	
147	三宅秀和	「土佐光吉宛平家絵制作関連書状の再検討―狩野光信研究の視点から―」	『国華』114-9		2009	
148	片桐孝浩	「序―中世港町・野原を明らかにするために―」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
149	松本和彦	「野原の景観と地域構造」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
150	上野進	「野原をめぐる寺社と領主」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
151	乗松真也	「中世港町の漁携集団」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
152	渋谷啓一	「古・高松湾と瀬戸内世界」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
153	松田朝由	「中世石造物の流通から見た讃岐の地域性と野原」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
154	北山健一郎	「 中世港町の地形と空間構成 」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
155	萩野憲司	「中世讃岐における引田の位置と景観」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
156	松本和彦	「中世宇多津・平山の景観」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
157	市村高男	「中世港町仁尾の実像と瀬戸内海海運」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
158	佐藤竜馬	「初期高松城下町の在地的要素」	市村高男ほか編『中世の讃岐と瀬戸内世界―港町の原像 上―』	岩田書院	2009	
159	高松市教育委員会	『史跡高松城跡整備報告書 第4冊　高松城史料調査報告書』		高松市・高松市教育委員会	2009	
160	田中健二	「続　生駒時代・高松城下周辺の地形について」	『香川県立文書館紀要』14		2010	
161	大津雄一ほか編	『平家物語大事典』		東京書籍	2010	
162	屋島風土記編纂委員会編	『屋島風土記』		屋島文化協会	2010	
163	那須与一伝承館編	『那須家の芸術と学問』		那須与一伝承館	2010	
164	松尾葦江	「屋島合戦記事の形成」	千明守編『平家物語の多角的研究―屋代本を拠点として―』	ひつじ書房	2011	
165	胡光	「四国の大名」	四国地域史研究連絡協議会編『四国の大名―近世大名の交流と文化―』	岩田書院	2011	
166	根津寿夫	「阿波蜂須賀家の交際―彦根井伊家・高松松平家を中心に―」	四国地域史研究連絡協議会編『四国の大名―近世大名の交流と文化―』	岩田書院	2011	
167	御厨義道	「高松松平家における大名間交流―儀礼をめぐる彦根井伊家との関係―」	四国地域史研究連絡協議会編『四国の大名―近世大名の交流と文化―』	岩田書院	2011	
168	元木泰雄	「延慶本『平家物語』にみる源義経」	佐伯真一編『中世の軍記物語と歴史叙述』	竹林舎	2011	

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
169	鈴木彰	『平家物語』における合戦叙述の類型―屋島合戦の位置と〈壇ノ浦合戦〉の創出―」	佐伯真一編『中世の軍記物語と歴史叙述』	竹林舎	2011	
170	田中健二	「生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿―海岸線と国境の峠通を中心に―」	『香川県立文書館紀要』16		2012	
171	山本隆志	「那須与一と扇の的―平家物語の叙述と構想―」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
172	山本隆志	「源平内乱のなかの那須家」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
173	山本隆志	「那須野狩りと御家人那須家」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
174	山本隆志	「那須氏の館」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
175	山本隆志	「国家・社会の分裂・統合と那須家」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
176	山本隆志	「戦国期の那須家と与一伝承の再生」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
177	近藤好和	「与一所用と伝える太刀と矢」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
178	近藤好和	「那須家伝来の甲冑」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
179	新井敦史	「芭蕉の訪ねる那須家の史跡」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	
180	阿部能久	「「那須与一」の復活」	山本隆志編著『那須与一伝承の誕生―歴史と伝説をめぐる相剋―』	ミネルヴァ書房	2012	

屋島関連文献一覧（12）

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
181	金田章裕・上杉和央	『日本地図史』		吉川弘文館	2012	
182	田中健二	「続・生駒時代の国絵図に見る讃岐の姿―道と川の変遷を中心に―」	『香川県立文書館紀要』17		2013	
183	出口久徳	「屋島合戦図屏風を読む―「御堂」イメージを中心に―」	石川透編『中世の物語と絵画』	竹林舎	2013	
184	星瑞穂	「『通航一覧』に見る「贈朝屏風」の画題と外交―「碁盤忠信」を中心に―」	石川透編『中世の物語と絵画』	竹林舎	2013	
185	松尾剛次	「中世叡尊教団と泉涌寺末寺の筑後国への展開―新発見の中世西大寺末寺帳に触れつつ―」	『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』10		2013	
186	溝渕利博	「藩政成立期における藩主の「鵜鷹逍遥」的行為の政治文化史的意義―初代讃岐高松藩主松平頼重の藩政における「遊猟」「舟遊」等の位置づけ―」	『（高松大学・高松短期大学）研究紀要』58・59		2013	
187	今井正之助	「「扇の的」考―「とし五十ばかりなる男」の射殺をめぐって―」	『日本文学』63-5		2014	
188	高松市・香川大学天然記念物屋島調査団編	『天然記念物屋島調査報告書』		高松市	2014	
189	伊藤悦子	「「源平合戦図屏風」の一考察―いわゆる「一の谷・屋島合戦図屏風」の分類方法について―」	『軍記と語り物』50		2014	
190	木原溥幸	「讃岐白峯寺にみる高松藩と地域社会」	『香川大学教育学部研究報告　第1部』141		2014	
191	柳澤恵理子	「平家物語図屏風」	『国華』120-2		2014	
192	麻原美子	『平家物語世界の創成』		勉誠出版	2014	
193	小松勝記	「四國遍礼名所圖會解題考察」	『四國遍礼名所圖會并近代の御影・霊場写真』	金剛頂寺	2014	
194	橋爪紳也	『瀬戸内海モダニズム周遊』		芸術新聞社	2014	
195	田井静明	「香川県の保勝会の国立公園指定運動と瀬戸内観光の特徴」	香川県立東山魁夷せとうち美術館編『美しき日本　瀬戸内の風景』	香川県立東山魁夷せとうち美術館	2014	

	著者	論考名・書名	掲載媒体	出版社	初出	再録
196	香川県立ミュージアム	『空海の足音　四国へんろ展　香川編』		香川県立ミュージアム	2014	
197	松尾葦江	「源平盛衰記の三百年」	松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』	笠間書院	2015	
198	伊藤慎吾	「『源平軍物語』の基礎的考察」	松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』	笠間書院	2015	
199	出口久徳	「寛文・延宝期の源平合戦イメージをめぐって―延宝五年版『平家物語』の挿絵を中心に―」	松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』	笠間書院	2015	
200	平藤幸	「与一射扇受諾本文の諸相」	松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』	笠間書院	2015	
201	石川透・山本岳史・伊藤慎吾・伊藤悦子・松尾葦江	「［調査報告］平家物語・源平盛衰記関連絵画資料」	松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』	笠間書院	2015	
202	伊藤悦子・大谷貞徳	「フランス国立図書館蔵「源平盛衰記画帖」場面同定表」	松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』	笠間書院	2015	
203	佐々木英理子	「図版 源平合戦図屏風」	『国華』120-7		2015	
204	宮崎もも	「忠信次信物語絵巻（八島絵巻）」	『国華』120-9		2015	
205	真念（稲田道彦注）	『四国徧禮道指南』		講談社	2015	

報　告　書　抄　録

ふりがな	やしまめいしょうちょうさほうこくしょ
書名	屋島名勝調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高松市・京都府公立大学法人
編集機関	高松市・京都府公立大学法人
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2016年3月31日

所収文化財名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村						
屋島（やしま）	香川県（かがわけん） 高松市（たかまつし） 屋島東町（やしまひがしまち） 屋島中町（やしまなかまち） 屋島西町（やしまにしまち） 高松町（たかまつちょう）	37201	－	34° 21′ 12″	134° 06′ 14″	2014.5.26 ～ 2016.3.31	－	学術調査

要約	屋島は昭和9年に国の史跡及び天然記念物に指定されている。しかし、屋島の指定については、昭和2年頃から準備が進められており、当初は名勝としての指定が検討されていた。その後、史跡及び名勝としての指定が検討されていたが、昭和9年に屋島を含む備讃瀬戸が日本初の国立公園として指定されたことにより、名勝的価値はそちらに委ねられた。同年の史跡及び天然記念物指定時に名勝としても指定すべきであった屋島を、現代的な手法によって名勝の観点から調査した報告書である。

屋島名勝調査報告書

平成28年3月31日

編集／発行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
京都府公立大学法人
京都市上京区河原町通広小路上る梶井町465

印　　刷　有限会社 中央ファイリング
高松市伏石町2157番地7